(財) 岐阜市教育文化振興事業団報告書第3集

城之内遺跡

－北町堀田線・宮口町高見線街路事業に伴う緊急発掘調査－

1999

(財) 岐阜市教育文化振興事業団

ＳＤ６出土金銅製銚子

例　言

1　本書は城之内遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、北町堀田線及び宮口町高見線街路事業に伴う緊急調査として、業務委託契約及び協定書に基づき、委託者・岐阜市（都市計画部道路建設課）の調査経費負担により、受託者・岐阜市遺跡調査会（平成７年度）及び（財）岐阜市教育文化振興事業団（平成８～10年度）が実施した。

3　調査は下記各年度にわたって行った。

平成７年度　平成７年７月10日～平成８年３月31日（現地調査・整理作業）

平成８年度　平成８年５月１日～平成９年３月31日（現地調査・整理作業）

平成９年度　平成９年４月７日～平成10年３月31日（現地調査・整理作業）

平成10年度　平成10年４月１日～平成11年３月31日（整理・報告書刊行）

4　調査面積は2,130㎡である。

5　調査組織は下記のとおりである。

調査主体者

岐阜市遺跡調査会理事長　後藤左右吉（平成７年度・岐阜市教育長）

（財）岐阜市教育文化振興事業団理事長　後藤左右吉（平成８～10年度・同）

事務局

岐阜市遺跡調査会事務局長　北川雅弘（平成７年度・岐阜市教育委員会文化課長）

（財）岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所長

安田五朗（平成８～９年度・事業団事務局長）

戸田好美（平成10年度・　同　）

調査担当　内堀信雄（岐阜市教育委員会文化課（平成７年度）・社会教育課（平成８～10年度））

橋詰佳治（岐阜市遺跡調査会主任調査員（平成７年度）・（財）岐阜市教育文化振興事業団常勤嘱託員（平成８～10年度））

主任調査員　井川祥子（（財）岐阜市教育文化振興事業団）

調査員　池田和江・沢田伊一郎

調査補助員　棚橋英子・森　和子・和田啓子・辻　啓子

作業員　牧野利治・臼井郷弘・立川　力・福田基二・田保国男・八木伝二・山本正雄

汲田俊一・鷲見善治・安田忠夫・苅谷克己・山田定一・鷲見竜雄・中野久美子

渡辺笑子・江崎栄子・林やす子・山田雅子・早坂冨司子・安田金一・田垣ふさ子

6　現地調査及び図面の合成・遺物の洗い・接合等基礎的な整理作業は内堀の指導のもと橋詰が行った。遺物実測作業は内堀の指導のもと池田が主に行い沢田がこれを補佐した。

7　遺構図版の作成は橋詰が、遺物図版の作成及び遺物観察表の作成は井川が行った。図版のトレースは倉持が行った。

8　遺物の写真撮影は佐藤右文氏に依頼して行った。

9　本書の編集は内堀が担当した。

10　本書は第１・２・４章を内堀が、第３章を内堀の指導のもと橋詰が執筆した。第５章は新山雅弘・植田弥生・藤根久・古橋美智子（(株）パレオ・ラボ）が執筆した。付章は藤根久・井川祥子が執筆　した。

11　出土遺物に関して下記の各氏に御教示を頂いた。

縄文晩期～弥生中期土器	藤田英博（(財）岐阜県文化財保護センター）
須恵器	渡辺博人（各務原市埋蔵文化財センター）
灰釉陶器・中国	尾野善裕（京都国立博物館）
山茶碗・古瀬戸・大窯	藤澤良祐（(財）瀬戸市埋蔵文化財センター）
常滑	青木　修（(財）瀬戸市埋蔵文化財センター）
中世～近世土師器煮炊具	金子健一（(財）瀬戸市埋蔵文化財センター）
近世～近現代瀬戸美濃	田口昭二
墨書かわらけ	筧　真理子（岐阜市歴史博物館）
金銅製銚子	久保智康（京都国立博物館）
石器全般	西村勝弘（各務原市教育委員会）

12　現地調査及び整理作業の過程で下記の方々及び機関に御指導・御協力を賜った。

八賀　晋・三輪晃三・千藤克彦・藤岡比呂志・小野木学・山田哲也・越前慎子・中井　均
久保智康・尾野善裕・鈴木　元・横幕大祐・大平愛子・横田　宏・近藤昭二・長良高等学校
（財）岐阜県文化財保護センター・多治見市文化財保護センター・（株）パレオ・ラボ

13　調査記録及び出土品は（財）岐阜市教育文化振興事業団で保管している。

凡　　例

1　出土遺物の実測図縮尺は、土器は1/3を原則とし、石器・石製品は1/2あるいは1/4、金属製品は1/3である。

2　回転ヘラ削りの範囲は実線で記し、施釉範囲は一点鎖線で記した。

3　かわらけの横ナデ調整の範囲は実線で記し、断面のみの図では引き出し線で位置を示した。

4　遺物の図中、スクリーントーンの部分は赤彩の範囲を示す。

5　石器実測図中の破線部は磨面の範囲を示し、実線は敲打面の範囲を示す。

6　遺構の略号は下記のとおり用いた。

ＳＢ…住居跡、ＳＤ…溝、ＳＫ…土坑、Ｐ…ピット、ＳＸ…土砂採掘跡・埋立て整地面・倒木痕・性格不明遺構、Ｓ…集石、ＳＲ…集石状遺構（必ずしも人為的とは確定できない礫群を便宜的に集石　遺構と区別した名称として用いる）、Ｈ…畑、ＳＶ…石垣、ＳＥ…井戸

7　遺構の挿図は1/50を基本とし、別添図は1/100とした。

8　遺構の方位は真北を示し、座標は国家座標第Ⅶ座標系に準拠する。

目　　次

第１章　発掘調査の経過
　第１節　発掘調査に至る経過 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1

第２章　長良川扇状地に立地する遺跡について …… 3

第３章　層序と遺構
　第１節　層序 …… 8
　第２節　遺構 …… 10

第４章　遺物
　第１節　遺物の分類 …… 49
　第２節　遺物 …… 50
　第３節　金銅製銚子（桐丸紋散長柄銚子） …… 85

第５章　自然科学的分析
　第１節　城之内遺跡の火葬墓ＳＸ18から出土した炭化材の樹種 …… 107
　第２節　城之内遺跡出土の銚子の柄の樹種同定 …… 113
　第３節　城之内遺跡Ｈ１、ＳＸ13・13W出土の種実花粉分析 …… 114
　第４節　城之内遺跡ＳＤ２、ＳＫ１出土の花粉化石群集 …… 120
　第５節　城之内遺跡出土甕の胎土材料 …… 127

付章
　第１節　土器胎土材料とその見方 …… 154
　第２節　城之内遺跡試掘調査出土遺物 …… 159

挿図目次

第１図　長良川扇状地上の遺跡分布図 …… 4
第２図　土層柱状模式図と城之内遺跡発掘調査位置 …… 9
第３図　９区西壁土層、ＳＸ21ｃ、ＳＫ１・２、８区東壁土層実測図 ……11
第４図　８区西壁土層、ＳＢ１・２他実測図 ……13
第５図　ＳＢ３・４、ＳＫ２、石組４、ＳＸ20実測図 ……15
第６図　ＳＤ２断面実測図 ……17
第７図　３区土層実測図（下層調査）……21
第８図　６区ＡＢ遺構実測図 ……22
第９図　ＳＫ12・46実測図 ……23
第10図　６区ＨＩ遺構実測図 ……24
第11図　ＳＸ６・27・26ａ～ｃ、ＳＫ32・47他実測図 ……25
第12図　ＳＲ６・７・９・12・13実測図 ……27
第13図　ＳＤ１・６他実測図 ……29
第14図　ＳＤ４実測図 ……30
第15図　ＳＤ７、ＳＸ18、ＳＲ８他実測図 ……31
第16図　ＳＤ７・11遺物出土実測図 ……33
第17図　１区北壁土層、ＳＸ１実測図 ……35
第18図　ＳＸ19土層実測・遺構変遷図 …37・38
第19図　石組１・２・５、Ｓ１～４実測図 …39
第20図　ＳＲ１・２・４・５、Ｐ97・190実測図 ……41
第21図　ＳＲ10・11、ＳＫ１実測図 ……43
第22図　ＳＸ13・13Ｗ・23実測図 ……45
第23図　ＳＶ１、ＳＥ１実測図 ……47
第24～53図　遺物実測図(1)～(30) ……55～84
第54図　長柄銚子模式図 ……85
第55～56図　銚子実測図(1)・(2) ……86・87
第57図　長柄銚子製作工程推定図 ……88
第58図　火葬墓ＳＸ18の炭化材採取位置と樹種……110
第59図　ＳＸ13の花粉化石分布図……116
第60図　溝ＳＤ２の断面図……120
第61図　ＳＫ１の花粉化石分布図……121
第62図　甕胎土および粘土塊中の粒子組成図 ……147
第63図　伊勢湾－三河湾周辺の地層分布図 ……148
第64～65図　胎土材料検討遺物実測図(1)～(2) ……152～153
第66図　試掘調査出土遺物実測図……159

別添図目次

別添１～３図　遺構全体図(1)～(3)

表 目 次

第１表　作業工程表 …… 2
第２表　長良川扇状地上の調査地点一覧 …… 5
第３表　地区・層位変換表 ……10
第４表　遺物時期区分 ……50
第５表　遺構一覧表 ……90～92
第６表　遺物観察表……93～106
第７表　火葬墓ＳＸ18の炭化材樹種同定結果 …110
第８表　ＳＸ13・13W出土花粉化石一覧表
……115
第９表　ＳＤ２、ＳＫ１産出花粉化石一覧表
……122
第10表　材料の検討を行った甕および粘土塊
……141
第11表　甕胎土および粘土塊の粒子計数結果
一覧表 ……142～143
第12表　伊勢－三河湾周辺現河川砂の概略組成
……144
第13表　各器種･分類ごとの粘土種類と砂粒組成
……144
第14表　甕胎土および粘土塊中の粘土起源およ
び砂粒等の特徴 ……145～146

写真図版目次（1）

図版１　火葬墓ＳＸ18から出土した炭化材の電子顕微鏡写真(1)
図版２　火葬墓ＳＸ18から出土した炭化材の電子顕微鏡写真(2)
図版３　銚子の柄の樹種同定
図版４　Ｈ１から出土した大型植物化石
図版５　ＳＸ13から産出した花粉化石(1)
図版６　ＳＸ13から産出した花粉化石(2)
図版７　ＳＫ１から産出した花粉化石(1)
図版８　ＳＫ１から産出した花粉化石(2)
図版９　ＳＫ１から産出した花粉化石(3)
図版10　土器胎土中の粘土顕微鏡写真(1)
図版11　土器胎土中の粘土顕微鏡写真(2)
図版12　土器胎土中の粘土顕微鏡写真(3)
図版13　起源の異なる粘土を用いた胎土断面および表面の実体顕微鏡写真
図版14　１～３区発掘前風景（東から）
４区発掘前風景（東から）
５～６区発掘前風景（東から）
９～８区発掘前風景（北から）
図版15　１区上層発掘後全景（空撮）
１区下層発掘後全景（空撮）
２区上層発掘後全景（空撮）
２区下層発掘後全景（東から）
図版16　２区Ｊ・３区Ａ～Ｇ上層発掘後全景（東から）
３区Ｅ～Ｎ上下層発掘後全景（空撮）
４区Ａ～Ｇ発掘後全景（東から）
４区Ｈ～Ｋ発掘後全景（東から）
図版17　５区Ａ～Ｈ発掘後全景（東から）
５区Ｊ～Ｎ発掘後全景（東から）
５区Ｍ～Ｐ発掘後全景（東から）
６区Ａ～Ｎ発掘後全景（東から）
図版18　８区Ｂ～Ｌ発掘後全景（北から）
９区Ａ～Ｆ発掘後全景（南から）
７区試掘風景（南から）
１区矢板打ち込み作業（西から）
岐阜師範学校記念樹（つぶら椎）移植（西から）
図版19　ＳＫ２半截（西から）
９区西壁土層（西から）
９区Ⅱ層遺物出土状況（西から）
ＳＢ１完掘（北から）
ＳＢ２完掘（南から）
ＳＢ３完掘（南から）
ＳＢ２西壁埋土中の遺物出土状況（東から）
図版20　ＳＢ３南側盛土中の土器出土状況（東から）
ＳＢ３遺物出土状況
ＳＢ４焼土面の断面（東から）
Ｐ２０半截途中（東から）
Ｐ２１半截状況（南から）
ＳＸ２０検出状況
ＳＢ３に伴う石組４検出状況（西から）
ＳＤ２・ＳＸ６（２区Ｆ～Ｈ）完掘（西から）
図版21　ＳＤ２断面（東から）
ＳＤ２遺物出土状況（短刀）
２区Ｍ～Ｆ下層発掘後全景（西から）
ＳＸ２５付近の遺構完掘（西から）
６区Ａ発掘後全景（西から）
ＳＫ４６礫検出状況
ＳＲ３検出状況（南から）

写真図版目次（2）

ＳＤ１完掘（南から）
図版22　ＳＤ４（４区Ｍ～Ｐ）完掘（東から）
ＳＤ４断面
ＳＤ６西端部分（東から）
ＳＤ６（４区Ａ）断面（西から）
ＳＤ６溝底より金銅製銚子出土状況（近景）
ＳＤ６溝底より金銅製銚子出土状況（西から）
ＳＤ７下層遺物出土状況
ＳＤ７下層遺物出土状況（西から）
図版23　ＳＤ７下層遺物出土状況
ＳＤ７上層遺物出土状況（完形かわらけに墨書）
ＳＤ７下層遺物出土状況
ＳＤ１０完掘（ＳＤ７に切られる）（東から）
ＳＤ１１完掘
ＳＸ１礫の検出状況（北から）
ＳＸ１付近の完掘（東から）
ＳＸ１８・ＳＲ８検出状況（南から）
図版24　ＳＸ18火葬墓第２次検出状況（南から）
ＳＸ18火葬墓内の大腿骨？出土状況
ＳＸ18火葬墓第３次検出状況(南から)
ＳＸ18火葬墓の炭化材サンプル採取（西から）
ＳＸ19遺物出土状況（東から）
図版25　ＳＸ19南北トレンチ（断ち割り土層）（東から）
ＳＸ19（石組４の北側）遺物出土状況（南から）
ＳＸ28検出状況（中央をＳＤ４が貫く）（西から）
石組１検出状況
石組２検出状況
石組５検出状況（南から）
Ｓ１検出状況
Ｓ２検出状況
図版26　Ｓ３検出状況（西から）
Ｓ３半截状況（北東から）
Ｓ４検出状況（南から）
ＳＲ１（１次）検出状況（南から）
ＳＲ１（２次）検出状況（西から）
ＳＲ８検出状況（南から）
ＳＸ13完掘（東から）
ＳＸ13Ｗ完掘（西から）
図版27　ＳＸ13Ｗ遺物出土状況（東から）
Ｈ１耕作面（西から）
Ｈ２南側耕作面（東から）
Ｈ２北側耕作面（東から）
ＳＶ１検出状況（東から）
ＳＥ１検出状況（平成７年度）（西から）
ＳＥ１半截状況（平成７年度）（北から）
ＳＥ１発掘途中（平成８年度）（西から）
図版28～34　遺物図版(1)～(7)

第１章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経過

平成６年度、岐阜市都市計画部都市整備課（当時）から岐阜市教育委員会文化課（当時）へ岐阜市長良の宮口町高見線及び北町堀田線街路事業（道路の拡幅等）に関連して埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。市教育委員会では、当該地は周知の城之内遺跡の一部であることから、文化財保護法上の手続きと本調査前の試掘調査について説明した。平成６年10月11～12日の２日間、道路拡幅予定地内の８ヶ所に1.5×３ｍ前後のテストピットを掘削し、土層の状態等を検討した。その結果、この一帯に戦国期あるいはそれ以前の遺構、遺物が存在することが判明した。試掘調査の結果を受けて、平成７年度以降に発掘調査（調査主体は岐阜市遺跡調査会）を実施することとした。平成７年６月16日付けで文化財保護法第57条の３の発掘通知が岐阜市長から文化庁長官あてに提出された。これに対し平成７年６月27日付けで県教育長から岐阜市長あてに、事前に発掘調査を実施し記録保存を行う旨の指示があった。平成７年６月19日付けで岐阜市遺跡調査会理事長（市教育長）から文化庁長官あてに文化財保護法第57条の届出を行った。

第２節　発掘調査の経過

平成７年度　８月３日、道路拡幅予定地の最も東側の１区から発掘調査を開始した。調査方法は、重機によりアスファルト舗装などの表土部分を除去し、その下から手掘りでおこなった。この方式は他の調査区においても踏襲した。調査区が最大でも幅５ｍと狭い上、南側を道路、北側を公園に挟まれており土砂の移動等に困難を伴った。９月下旬までに、戦国期の遺構面が確認出来た。この上層調査の過程で、数ヶ所で深掘りを行ったところ現地表下約３ｍに中世の遺物包含層が存在することがわかった。この下層については、平成６年度の試掘調査で見つけられなかったものであり、取り扱いについて道路建設課と協議を行った。その結果、道路工事と連動して架設を設置して発掘調査を行うことで合意に達した。10月23日、１区上層の空中写真測量を実施。10月25日から２区の調査を開始した。２区上層の調査と並行して１区下層調査のための架設工事・発掘調査を実施した。１区下層では中世の溝や階段、石組遺構などが、２区上層では近世の土取り穴と考えられるものなどが見つかった。１区下層の調査は12月下旬までに完了した。２区上層は平成８年１月末までに完了した。

平成８年度　５月10日より９区の調査を開始した。この地区は１・２区と土層の様相が全く異なっており、過去の発掘調査でみられた扇状地微高地を形成する黒色シルトや黄色シルト層が認められた。６月中旬には９区の調査が完了し、８区の調査を始めた。８区の調査では弥生時代終末期～古墳時代初頭の竪穴式住居と考えられるものや段丘崖と考えられる落ち込みが見つかった。この地区の調査は８月中旬で完了した。７区については、３ヶ所ほど２ｍ角のテストピットによる試掘調査を行った結果、著しい攪乱と谷地形の内部と見られる洪水堆積砂が認められた。この結果を踏まえ、この地区で

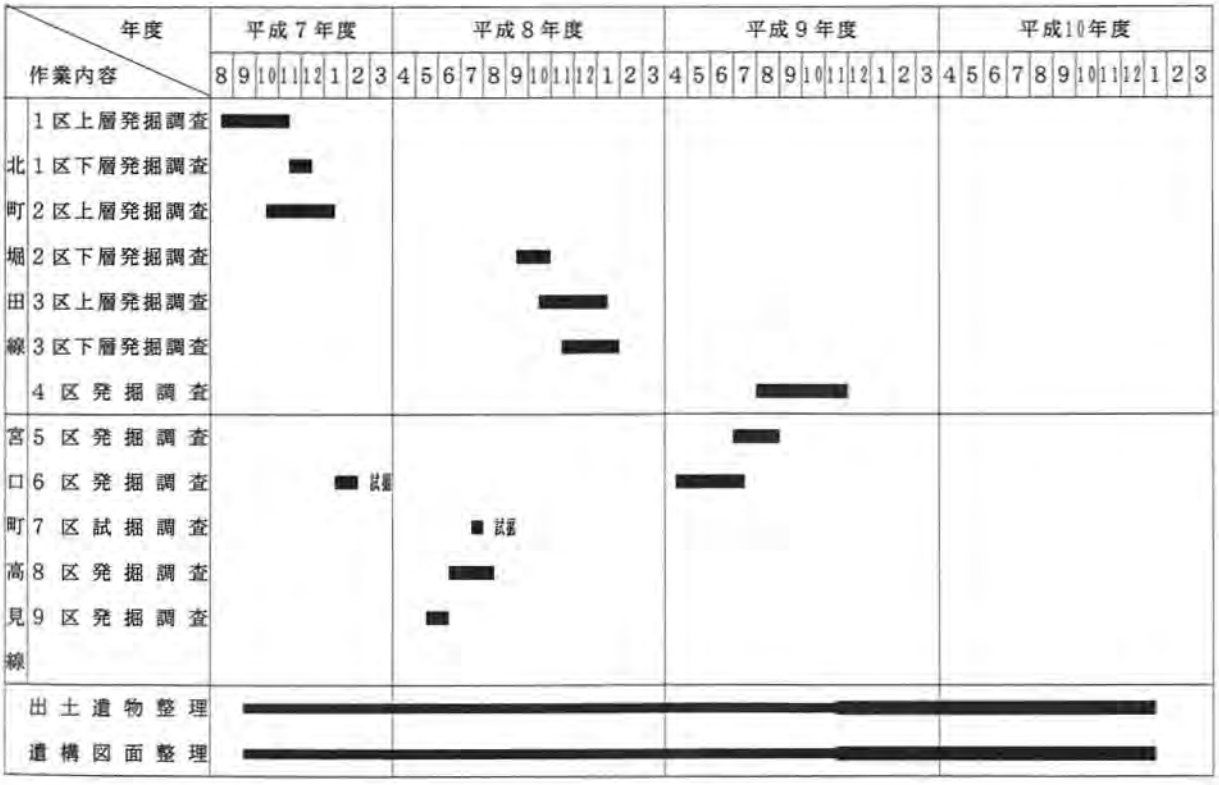
の調査幅が約2.5ｍと極端に狭いため、砂層を深く掘り下げることが困難かつ危険であるとの判断から、７区の発掘調査は試掘調査のみとすることとした。

８月下旬から２区下層の架設工事を始め、９月10日に発掘調査に着手した。２区下層では１区下層から連続する中世の溝などが見つかり、10月末までにほぼ調査を完了した。３区に関しては、１・２区とは異なり、架設を設置した後上層・下層の調査を行うこととし、11月下旬～12月初めに架設工事を実施し、12月４日に３区上層の調査を開始した。調査の過程で、洪水で埋まった近世の畑や溝状遺構が見つかった。１月上旬には３区下層遺構確認のためのトレンチ調査を開始したが、西端で戦国期の区画溝の一部が認められた以外、各トレンチとも自然堆積による砂層や砂礫層が認められたのみであった。３区の調査は平成９年１月末までに完了した。

平成９年度　４月７日より６区の調査を開始し、７月初めに完了した。６区では中世の遺構群や戦国期の区画溝・火葬墓などが見つかった。５区の調査は６月30日に着手し、９月初めに完了した。５区では戦国期の区画溝が２単位東西に並列して見つかった。

９月中旬から４区の調査に着手し、11月末に完了した。６・５区から連続する区画溝の他に性格不明の窪地状遺構などが見つかった。11月25日、区画溝の調査中に溝底から金銅製の銙子が１点ほぼ完形の状態で出土した。

整理作業　平成７年度から平成９年度まで、現地調査の合間を利用して、遺構図面整理、出土遺物の整理作業を鋭意実施した。平成10年度には報告書刊行のための作業を行った。



第２章　長良川扇状地に立地する遺跡について

岐阜扇状地（長良川扇状地）は半径約６km、扇頂部と扇端部の高度差約15ｍの緩扇状地である。扇状地の形成は、扇状地礫層上面に弥生時代の遺跡が所在することなどから少なくとも縄文時代以前と推定されている(注1)。現岐阜市街地の大半がこの扇状地上に乗っており、岐阜市の今後の発展を展望する上で、扇状地上での先人達の営みを明らかにすることは不可欠である。ここでは、これまでに行ってきた発掘調査・試掘調査・立会調査などの結果からみて長良川扇状地上に遺跡がどのように形成されてきたかを考えてみたい。

１長良川右岸地域

城之内遺跡、福光花ノ木町遺跡、鷺山蝉遺跡、正明寺城之前遺跡、鷺山市場遺跡で発掘調査・試掘調査が行われている。城之内遺跡では過去９回の発掘調査と６回の試掘調査によって遺跡の立地に関する地理的状況がある程度わかってきた。この付近には古代以前、長良高校のグランド南側から長良公園の南端を結ぶ線を北岸とする旧河道が存在していた。この旧河道は中世を通じて洪水性の砂質土によって埋積が進み、戦国前半までにはほぼ完全に埋まりきったようである。旧河道より北側は砂礫層やその上部を覆う黄色シルト層、黒色シルト層（黒ボク）が安定して存在する微高地をなす。この微高地上に縄文晩期以来の生活の痕跡が連続して認められる。試掘12・15地点では旧河道上に埋積した砂質土層が認められた。試掘13・14地点は扇状地の北端付近と推定されていたところであるが、発掘地点で確認された黒ボク層と連続すると考えられる黒色シルト層が認められた。福光花ノ木町遺跡では２回の試掘調査が行われている。この内17地点では地山と考えられる黄褐色シルト質の層が認められた。遺構・遺物は確認出来なかったが付近に遺物が大量に散布しており、一帯が遺跡の一部である可能性は高い。このシルト層は城之内遺跡で見られた黄色シルト層などと似た成因によるものであろうか。鷺山蝉遺跡では２回の試掘調査が行われた。18地点では洪水性の黄茶色砂質土が見られ、古瀬戸や山茶碗が少量混入していた。城之内の旧河道を埋めた砂質土などと似たものか。18地点では暗茶褐色砂質土・黄茶色砂質土を基盤として９世紀前葉頃の竪穴式住居２軒が建てられていた。出土遺物の中には多量の須恵器とともに二彩、緑釉等が見られる。正明寺城之前遺跡は土地条件図では扇状地北端から後背湿地にかけて位置するが、現地の状況は東西に延びる微高地状を呈する。これまでに３回の試掘調査が実施された（20～22地点）。いずれも地山は砂質土で、中世の遺構や古代・中世の遺物包含層が認められた。鷺山市場遺跡も２回試掘調査が実施された。23地点では砂質土層・礫層を基盤とする戦国期の溝（おそらく区画溝）が見つかった。24地点では砂質土層を基盤とする８世紀初頭頃の竪穴式住居が見つかった。なお、城之内遺跡から鷺山市場遺跡にかけての長良川右岸遺跡群（長良古々川以北）においては、遺跡詳細分布調査の成果によれば古代から戦国期にかけての濃密な遺物散布が認められる。

２長良川左岸

発掘・試掘地区が扇頂部付近に集中している。金華山西麓に立地する千畳敷遺跡では３回の発掘調査により古墳時代から戦国時代の遺構・遺物が見つかっている。３次調査は最下段で実施されこの遺

A：城之内遺跡、B：長良天神遺跡、C：福光東A遺跡、D：太田遺跡、E：福光花ノ木町遺跡、F：鷺山次郎丸遺跡、G：鷺山蟬遺跡、H：鷺山仙道遺跡、I：正明寺城之前遺跡、J：鷺山市場遺跡、K：鷺山古墳群、L：東島寺屋敷遺跡、M：岐阜城下町遺跡、N：岐阜城千畳敷遺跡、O：岐阜奉行所跡、P：岐阜城跡、Q：美殿町遺跡、R：殿町遺跡、S：溝旗町遺跡、T：大宝廃寺、U：鍵屋古墳、V：鍵屋廃寺遺跡、W：加納城跡、X：水主町遺跡

※●は発掘、▲は試堀地点を示す。破線は扇状地のおよその範囲を示す。

※扇状地に含まれない遺跡の名称は省略した。

第1図　長良川扇状地上の遺跡分布図

（この地図は5万分の1地形図（岐阜・大垣）を使用したものである。）

調査地点	遺跡名	区別	調査年	文献
1	城之内遺跡	発掘 市教委1次	S61年度	1
2	〃	発掘 県教委	S63～H1年度	2
3	〃	発掘 県ｾﾝﾀｰ1次	H3年度	3
4	〃	発掘 市教委2次	H4年度	4
5	〃	発掘 市調査会	H5～H6年度	5
6	〃	発掘 県ｾﾝﾀｰ2次	H6～H7年度	6
7	〃	発掘 市事業団1次	H7年度	7
8	〃	発掘 市事業団2次	H7～H9年度	8
9	〃	発掘 市教委3次	H9年度	9
10	〃	試掘	H8/1/29～2/7	10
11	〃	試掘	H8/3/4	8※
12	〃	試掘	H8/8/2	11
13	〃	試掘	H9/5/26	12
14	〃	試掘	H9/5/26	12
15	〃	試掘	H10/2/2	9
16	福光花ノ木町遺跡	試掘	H9/9/9	12
17	〃	試掘	H11/1/27	未報告
18	鷺山蝉遺跡	試掘	H10/1/12	9
19	〃	試掘	H10/2/15	9
20	正明寺城之前遺跡	試掘	H10/12/8～12/25	未報告
21	〃	試掘	〃	未報告
22	〃	試掘	〃	未報告
23	鷺山市場遺跡	試掘	H11/1/2～1/27	未報告
24	〃	試掘	H11/2/1～2/10	未報告
25	岐阜城千畳敷遺跡	発掘 1次	S59～62年度	13
26	〃	発掘 2次	S63～H1年度	14
27	〃	発掘 3次	H9～H11年度	未報告
28	〃	試掘	H8/9/17～9/18	11
29	岐阜城下町遺跡	試掘	H9/12/15	12
30	〃	立会	H1/3/20～3/22	14
31	〃	立会	H7/12/15	15
32	〃	工事中採集	H9年度	12
33	岐阜奉行所跡	試掘	H8～9年度	12
34	加納城三の丸跡	試掘	H7/12/4～12/8	10※※
35	加納城三の丸跡	試掘	H8/7/22～8/26	11

※試掘結果は未報告であるが、出土遺物の紹介を本書で行った。

※※加納城本丸跡試掘調査は省略した。

第2表 長良川扇状地上の調査地点一覧

跡の形成にかかわる多くのデータが得られた（25～27地点）。岐阜城下町遺跡の立会調査を実施した31地点では現地表下２ｍに戦国期の遺構面が確認され、その上下に整地層が認められた。地表下３ｍで青灰色シルト層になるが、ここからは有機物や戦国前半期の遺物が見つかっている。32地点では、工事中の採集遺物で出土状況・土層は不明であるが、戦国前半期の遺物がまとまって見つかっている。30地点では立会調査で灰色砂質土・円礫層を基盤とする16世紀後半頃の遺構面が確認されている。岐阜奉行所跡の試掘調査（33地点）では地山と考えられる砂質土層および礫層が見つかった。砂質土層直上には少量の戦国期の遺物を包む層が広がっているが、遺構は確認されていない。このことから岐阜奉行所跡付近では戦国期以前の生活の痕跡は希薄であったと推定できる。加納城跡は長良川扇状地の南東縁辺部に立地している。過去７回の試掘調査が実施されており（本丸５回、三の丸２回）、三の丸跡の２回目の調査（34地点）では砂礫層あるいは砂質土層からなる地山が確認された。地山上には古代の遺物を包含する砂質土層が広がり、その上面に戦国期の区画溝が築かれる。さらに17世紀代には大規模な盛土造成がなされ、近世加納城が築かれた。

３まとめ

長良川右岸・左岸に分けて、これまでの発掘・試掘調査でわかったことを述べた。左岸の大半の部分についてデータが全く無いなど不十分な点は多いが、右岸の概要と左岸扇頂部についてはある程度見通しが立ちそうである。まず、城之内遺跡をはじめとする右岸の上流部に位置する遺跡群において黄色シルトや黒ボクからなる微高地が見られることがあげられる。この微高地上に北半分が立地する城之内遺跡では縄文晩期以来の生活の痕跡がたどれる。過去の採集資料であるが、この遺跡群に含まれる長良天神・太田・福光東Ｂ遺跡などでは弥生式土器、石器などが採集されている。次に、分布調査の成果などからみて、古代以降の右岸扇状地上では少なくとも長良古々川より北側では全域が生活空間になっていた可能性が高い。城之内遺跡の調査から推定するなら７世紀後葉～８世紀初頭頃以降に遺跡が増大した可能性を考えたい。長良廃寺の建立、東山道の創設などが背景にあったのではないか。中世は遺構の状況は不鮮明であるが、遺物の広範な散布から古代と同様生活の場が広がっていたものと思われる。戦国前半期には、守護大名土岐氏の本拠地が革手から長良川右岸の福光に移ったことが文献から知られている。事実、この時期に長良川右岸には枝広館推定地、蝉封彊（せみどて）城館跡、鷺山城跡など規模の大きな城館が東西に並列して築かれている。城之内遺跡の発掘では館の周囲に展開する規則的な区画溝が多数見つかっており、同じ可能性のある溝が鷺山市場遺跡でも見つかった。遺物散布は前代にも増して高密度である。この状況は「中島両以記文」に活写された「鷺山より堀田迄之内侍屋敷・百姓屋敷入交り散々に有由」(注2)という当時の繁栄の様を裏付けている。しかし、長良川右岸では16世紀後半頃の遺物散布は極めて希薄になる。この状況はおそらく左岸で16世紀後半代以降千畳敷を中心とする城下町が顕在化することと一連の現象であると考えられる。

一方長良川左岸の状況であるが、過去に殿町遺跡、金園遺跡、溝旗町遺跡などでは弥生時代～古墳時代頃の遺物が採集されている。瓦の散布などからは大宝廃寺や鍵屋廃寺、厚見寺などの古代寺院の存在が推定されている。大宝廃寺では工事中に塔心礎が出土している。これらの遺跡は左岸扇状地のほぼ中央部の東西に広がっている。しかし、この扇状地中央部に関しては発掘・試掘のデータがこれまでのところ全く存在していない。この地域は市街地の中でも都心部と重複しており、遺物採集など

は困難であるが、色々な形で遺跡の存在、土層の状況の確認を早急に進める必要がある。左岸扇頂部については、千畳敷遺跡で金華山西麓部から後期古墳が発掘されているのが最も古い遺構となる。その後も古代・中世を通じて遺構・遺物が見られるのは千畳敷遺跡の山麓部分のみであり、扇状地面が生活の場に使われた形跡は見つかっていない。戦国前半期になると遺物が認められる地点があり、16世紀後半以降はさらに面的に拡大したものと考えられる。17世紀代以降の状況は考古資料からは断片的にしかわからないが、岐阜町として繁栄してきた。明治維新以降もこの地域は岐阜市の中枢部として発展してきたが、明治24（1891）には濃尾大震災によって全域が焼失するという被害を受けた。濃尾震災によって焼失した岐阜尋常小学校などの瓦類を捨てたと考えられる廃棄土坑が岐阜奉行所跡の発掘調査によって見つかっている（33地点）。

注

1　井関弘太郎　1980「岐阜市の地形および地質」『岐阜市史 通史編 原始・古代・中世』岐阜市

2　岐阜市　1976『岐阜市史 史料編 近世１』

文献

1　岐阜市教育委員会 1990『城之内遺跡－東長良中学校建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査－』

2　岐阜県教育委員会 1990『城之内遺跡 長良高等学校体育館建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査報告書』

3　㈶岐阜県文化財保護ｾﾝﾀｰ 1991『城之内遺跡Ⅱ』

4　岐阜市教育委員会 1999『城之内遺跡－長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査－』（第１分冊）

5　岐阜市遺跡調査会 1996『堀田・城之内 －岐阜市堀田土地区画整理事業にともなう発掘調査－』

6　㈶岐阜県文化財保護ｾﾝﾀｰ　1997　『堀田城之内遺跡 岐阜環状線建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』

7　㈶岐阜市教育文化振興事業団　1997　『堀田・城之内Ⅱ』

8　㈶岐阜市教育文化振興事業団　1999　『城之内遺跡－北町堀田線・宮口町高見線街路事業に伴う緊急発掘調査－』（本書）

9　岐阜市教育委員会　1999　『平成９・10年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』

10　岐阜市教育委員会　1996　『平成７年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』

11　岐阜市教育委員会　1997　『平成８年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』

12　岐阜市教育委員会　1998　『平成９年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』

13　岐阜市教育委員会　1990　『千畳敷－織田信長居館伝承地の発掘調査と史跡整備－』

14　岐阜市教育委員会　1991　『千畳敷Ⅱ－財団法人加藤栄三・東一記念館建設に係る緊急発掘調査の記録－』

15　岐阜市教育委員会　1996　『平成５～７年度岐阜市埋蔵文化財調査報告書』

16　岐阜市教育委員会　1996　『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』

第３章　層序と遺構

第１節　層序（第２図）

１～６区の土層

長良公園（１～４区・北町堀田線）及び県立長良高校南側（５～６区・宮口町高見線）の道路拡幅工事に伴う発掘調査区は、戦国時代の居館（枝広館推定地）の所在する台地の南側縁辺部にあたり、中世～戦国時代にかけて遺構、遺物が多く発見された。付近一帯には、幾度かの長良川の洪水による堆積と考えられる砂質土が厚く全面に覆っていた。

Ⅰ層（表土）　発掘着手前は、北町堀田線の北側に隣接する土地は歩道・未来博の臨時駐車場（1988年７～９月）として使用されていたため、地表面がアスファルト、砕石・硬化処理剤で厚く覆われていた。４区より西は、砕石が敷かれている状態で、５・６区では地表から15～30cmで学校の整地面の黄褐色土（花崗岩のマサ化した土質）があり整地面の下は、暗灰～黄灰色砂質土が40～50cmほどの厚さを測り、近代洪水堆積と見られる。学校建設以前は、付近が桑畑等に利用されていたらしく、畑かどうか確実でないが断面に畝状の起伏が確認された。３区では、灰白色砂層を除去したところ畑の耕作面が良好な状態で検出された。

Ⅱ層　褐色砂粘質土～黄灰色細粒砂質土で、戦国時代の洪水堆積。１区Ｊ～Ｎ、２区Ａで大量の礫と共に灰白色砂粘質土を突き固めた整地面と考えられる低い盛土遺構を検出した。標高は18ｍ弱。４～５区では、区画溝、土坑等の遺構がⅢ層上面から検出された。検出面の標高は、およそ18.5～18.9ｍ付近である。２～３区では戦国時代の遺構面が削り込まれて大部分失われたものとみられる。遺構の削り込みの主な原因は畑の耕作や学校建設によるが、岐阜大学移転後の廃材が埋め込まれたゴミ穴らしいものも部分的に散在する。

Ⅲ層　黄茶褐色砂質土を主体として、部分的に砂粒、１～３cm大の円礫を少量含む。また、灰白色シルト質斑文がみられる。標高16.5～17.5ｍのレベルが褐色砂粘質土を主体とする中世の洪水堆積層で、部分的に砂や礫を含む。遺物も洪水時に紛れ込んだものとみられ、Ⅲ層中から山茶碗、かわらけ等が少量出土。

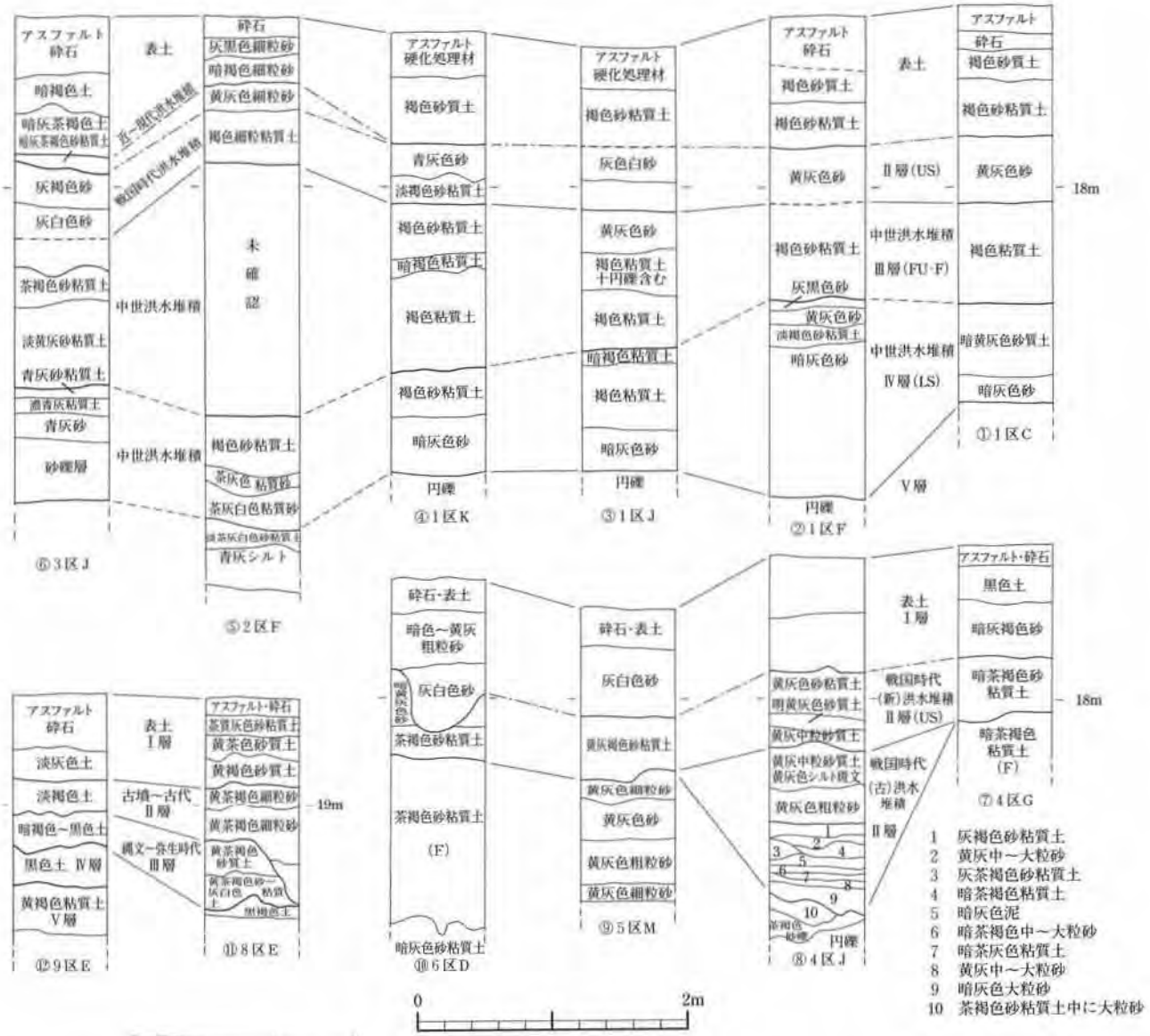
Ⅳ層　暗灰～灰白色のやや粗い砂粒を主体とする洪水堆積層。鎌倉時代の山茶碗、常滑焼が出土。

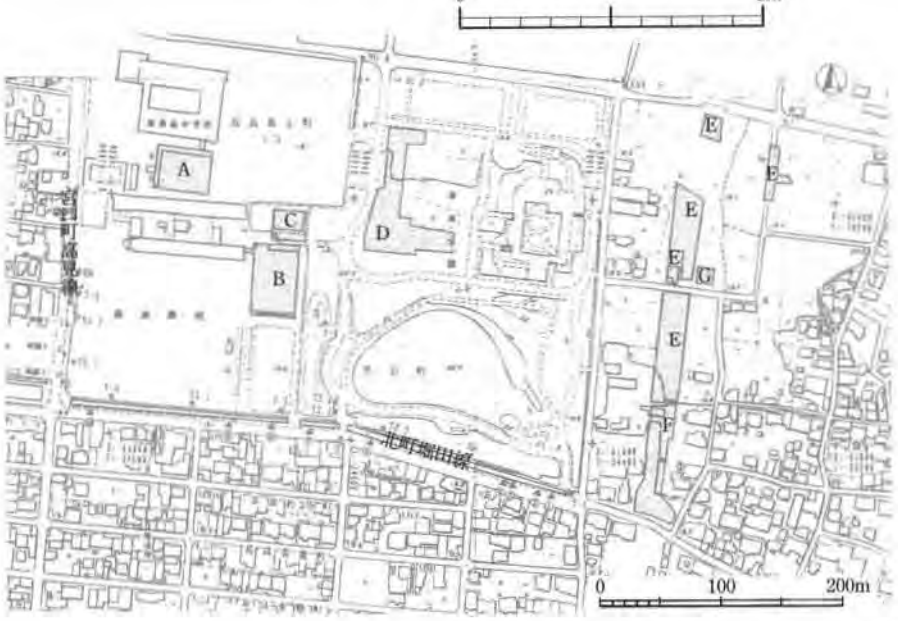
Ⅴ層　河床部を思わせる礫層で、上部は鉄錆の沈殿層が１～３cmくらいの厚みがありやや固い。その下は、鉄錆の沈殿、砂粒は殆どみられず５cm前後の礫が主体となり締まりが弱い。本層位に対比される３区下層発掘、ＳＸ19、ＳＫ46断ち割りトレンチでは調査範囲が狭く限られるが遺物の出土は認められなかった。

７～９区の土層

県立長良高校西側の宮口町高見線拡幅工事に伴う７～９区の発掘調査では、旧河道の北側段丘面と段丘下の谷地形が認められた。

Ⅰ層（表土）　地表部分は、歩道でありアスファルト、砕石が覆う。下部は、褐色砂質土で学校以前





城之内遺跡の発掘調査歴

A 1990年 岐阜市教育委員会調査
B 1990年 岐阜県教育委員会調査
C 1991年 岐阜県文化財保護センター調査
D 1992年 岐阜市教育委員会調査
E 1993年 岐阜市遺跡調査会調査
F 1994年 岐阜県文化財保護センター調査
G 1997年 岐阜市教育委員会調査

杭番号	X 軸	Y 軸
F54	−61506.626	−34374.160
T−1	−61840.379	−34416.459
T−2	−61798.643	−34609.909
T−3	−61776.236	−34657.656
T−4	−61767.249	−34799.748
T−5	−61682.509	−34828.736
T−6	−61750.178	−34620.438
No.9	−61486.393	−34592.542
T2.1	−61776.018	−34614.395
T2.2	−61768.107	−34613.273
T2.3	−61790.056	−34573.171
T3.1	−61771.507	−34732.785
T5.1	−61739.134	−34831.558
T5.2	−61701.439	−34830.231

第2図　土層柱状模式図と城之内遺跡発掘調査位置

の耕作土であろう。しかし、この耕作土は学校建設や解体工事が行われるうちに大部分が失われ９区では、遺構面まで掘削の影響を広く及ぼしている。

Ⅱ層　黄褐色細粒砂質土。９区では、撹乱の影響が強くはっきりと確認出来ない。８区Ａ～Ｅに比較的よく残っていた。上部は、畑の耕作土と区別が難しい。本層は、洪水堆積とみられる砂質土で古墳時代の遺物を包含する。遺構の検出面が、標高18.9m付近であるが実際の遺構面は19.3m位のレベルと思われる。

Ⅲ層　暗褐色土～黒褐色土。層厚は、平均的に30～40cmを測るが最大で60cmに達する。遺物の出土は少ないが、縄文～弥生時代の遺物包含層と考えられる。

Ⅳ層　黒色土～漆黒色土層。層厚は、平均的に20～30cmを測るが最大で40cmに達する。遺物の出土、遺構は認められない。

Ⅴ層　黄褐色粘質土。遺物の出土は認められない。

地　区		層　位	
注記名	報告書名	注記名	報告書名
ＤＳ	１・２区	ＵＳ・ＦＵ	Ⅱ層
２ＤＳ	３区	Ｆ	Ⅲ層
３ＤＳ	４区	ＬＳ	Ⅳ層
２ＭＴ	５・６区		
ＭＴ	７～９区		

第３表　地区・層位変換表

なお、第３表に地区・層位の名称の注記名と報告書名の変換表を掲載した。

第２節　遺構

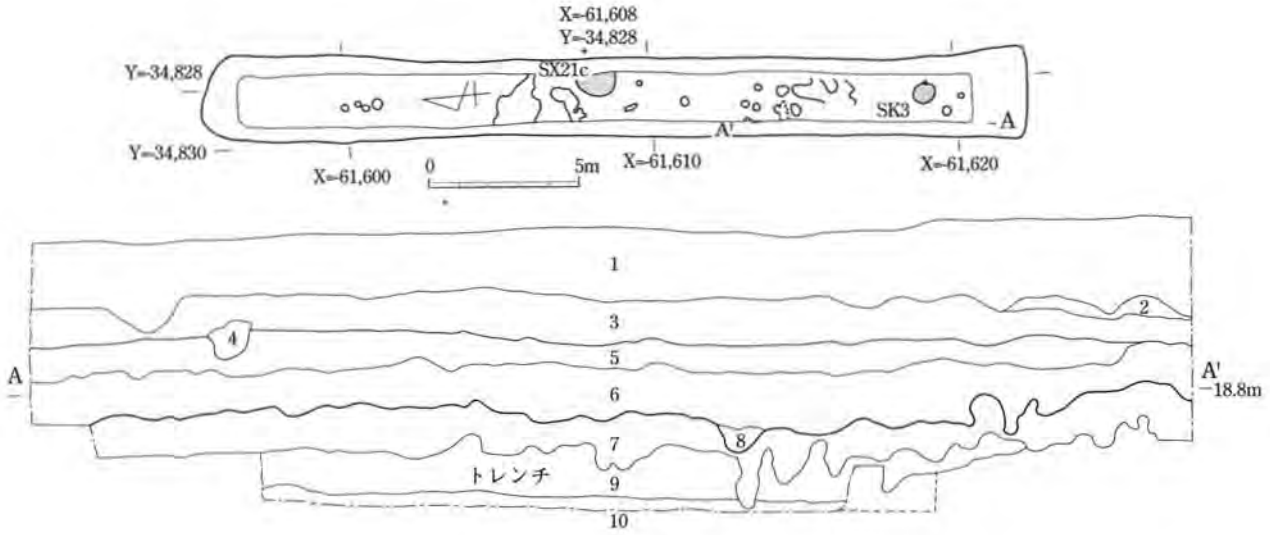
（１）縄文～弥生時代

縄文時代あるいは弥生時代の遺物を伴う確実な遺構は発見されていないが、８・９区で確認されたＳＫ２・ＳＫ３・ＳＸ21が埋土や遺構の切り合い関係により縄文～弥生時代の遺構と考えられる。なお、黒褐色土上層中（Ⅲ層）から僅かに縄文土器片や石器類が出土している。

ＳＫ２（第３図）

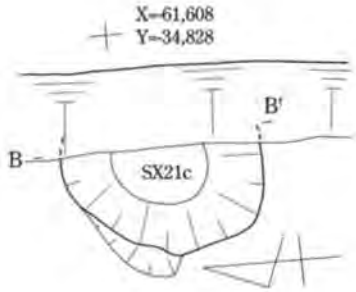
８区Ｄ、ＳＢ３北側周堤（住居の外周をめぐる堤防上の盛り土）の下部で、検出した土坑。不整楕円形状のプランを呈するものと考えられるが、東側半分が発掘区域外で本来の形状を詳しく知ることは出来ない。南北径1.1m強、深さは北側で25cm、南側で30cm。埋土は、黄褐色砂粘質土～暗褐色砂粘質土。埋土中に遺物は出土しなかったため時期を確定することは難しい。

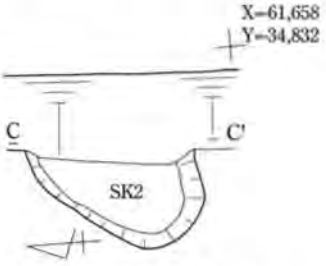
ＳＫ３（第３図）

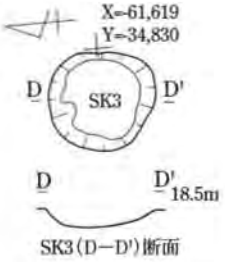


9区西壁土層(A—A')

1 アスファルト・砕石
2 淡灰褐色砂質土
3 淡灰褐色土
4 黄灰色砂質土
5 淡褐色土
6 暗褐色～黒褐色土
7 黒色土
8 灰黒色土
9 黄褐色粘質土（やや赤味を帯びる）
10 黄褐色粘質土（やや白味を帯びる）

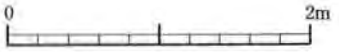




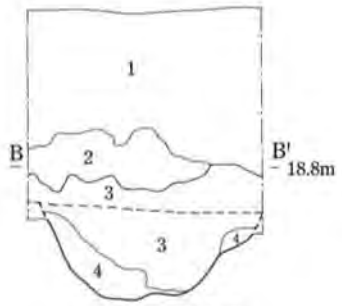


SK3(D—D')断面

SK2(C—C')断面

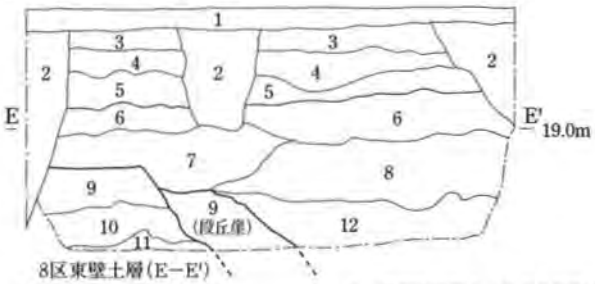


1 黄褐色砂粘質土
2 淡黄色砂粘質土
3 暗黄色細粒砂
4 暗褐色粘質土
5 暗褐色砂粘質土
6 暗茶褐色土
7 黄灰色細粒砂、灰白色球状斑文

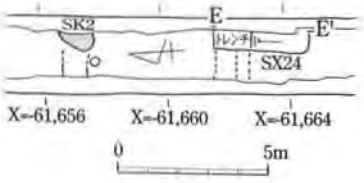


SX21c(B—B')断面

1 攪乱
2 淡褐色土
3 黒色土
4 淡褐色土と黒色土の斑文



8区東壁土層(E—E')



1 アスファルト・砕石
2 攪乱
3 表土：黄茶灰色砂粘質土
4 黄茶色砂質土
5 黄褐色砂質土
6 黄褐色砂質土（5より砂粒子粗い）
7 黄茶褐色細粒砂質＋木炭粒少量含む
8 黄褐色砂質土（6より砂粒子粗い＋木炭粒少量）
9 黄茶褐色砂質土
10 黄褐色砂～灰白色弱粘質土
11 暗黒褐色土＋木炭粒
12 黄褐色砂～灰白粘質土（洪水堆積）

第3図　9区西壁土層・ＳＸ21ｃ、ＳＫ１・２、８区東壁土層実測図

9区E、不整円形状プランを呈する。漆黒色土地山から掘り込まれた土坑と考えられるが、埋土は黒色土で、黄褐色粘質土地山まで削り込みを行わないとプランの検出が出来ない。南北径70cm、東西径55cm、深さ10cm。埋土中に遺物は出土しなかったが、付近で縄文土器片が少量出土していること等から、縄文時代に帰属する遺構の可能性が高い。

ＳＸ21ｃ（第３図）

9区Cの中央、東壁側に半円形のプランを検出した。東側プランは発掘区域外で形状を知り得ないため、はっきりとした結論を出せないが円形状プランになる可能性が考えられる。しかし、西側埋土を除去した結果、必ずしも人工的な落ち込み（土坑）とは言えないと判断し、西に近接するＳＸ31ａ、ＳＸ31ｂと関連する倒木による落ち込みの一部と考えた。埋土は黒色土で、出土遺物無し。

ＳＢ１（第４図）

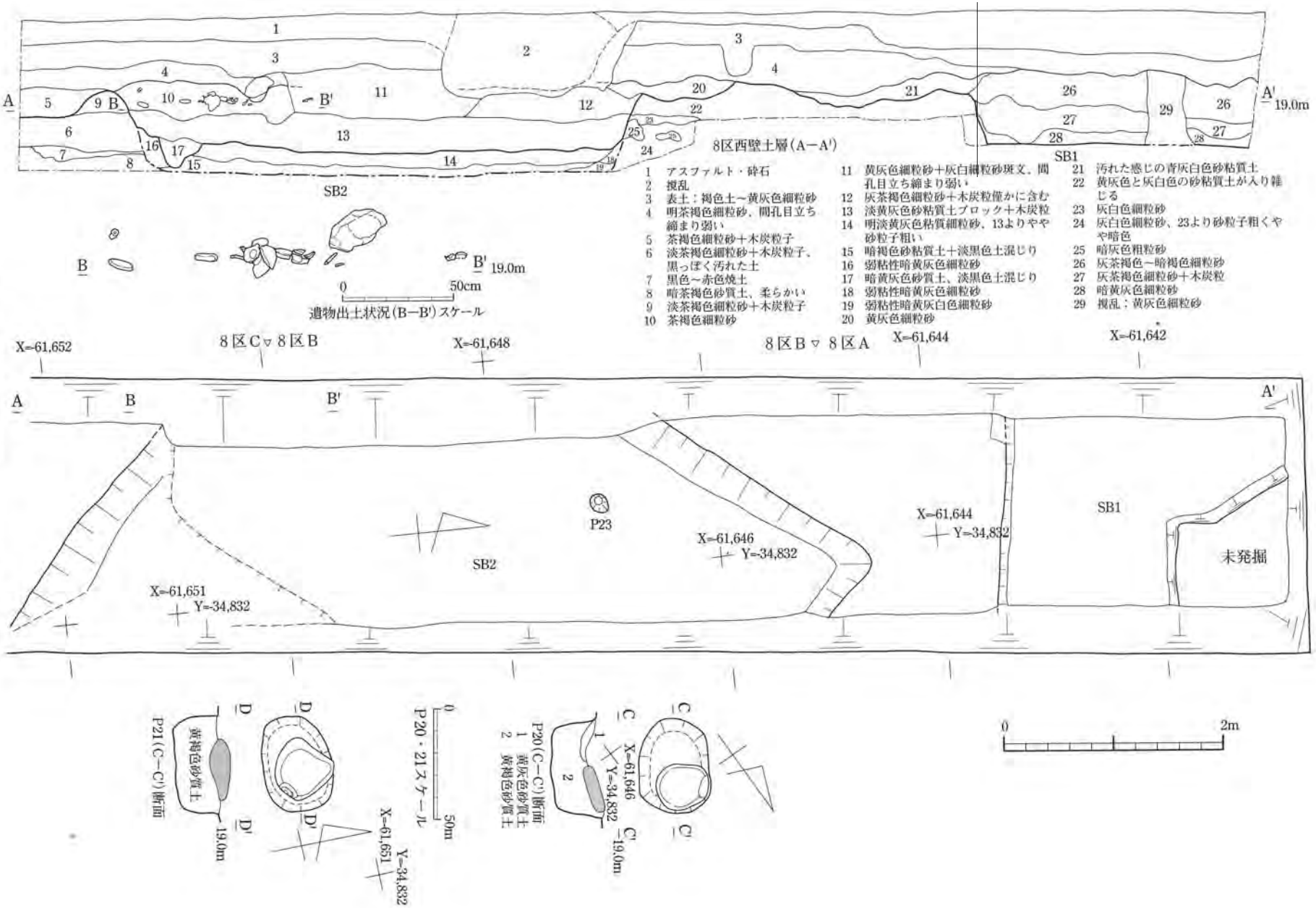
8区Aの北半に位置する。方形プランを呈する住居と考えられる。南半部床面と南側壁の立ち上がり部分を確認した。南壁は、東西方向の直線で東、北、西壁と四隅部分は発掘区域外のため、規模及び細部の構造は不明。床面からの立ち上がりは、西壁の土層観察によれば傾斜角が70度で、高低差が45cm程である。床面については、少なくとも発掘範囲内で焼土や貼床構造は確認されない。埋土中から弥生時代終末期の遺物が出土している。

（２）古墳時代

古墳時代の遺物（須恵器、土師器）は、量の多少はあるものの今回の発掘調査区域の全体で出土している。しかし、該期遺構の検出については８区Ａ～Ｅの範囲にのみ限られる。古墳時代の主要な遺構は、住居跡３棟、ピット６基、性格不明遺構１基、石組遺構１基である。

ＳＢ２（第４図）

8区Ａ～Ｃに跨った位置にある。方形プランを呈する住居と考えられる。８区Ａの南東位置で、北側コーナー部を検出しており、平面屈折角が80度前後でやや鋭角な感じを受ける。他のコーナー部分は、発掘区域外で未確認。南北軸方位は、北から東へ約40度振れ、長さ6.3ｍを測る。東西方向については、発掘区域外で規模を確認出来ないが、東壁では表土からの大きな撹乱が床面を破っているため、住居の東壁部分は完全に破壊されていると判断される。西壁の土層観察によると、南側に高さ25cm内外の蒲鉾状の断面を有する周堤らしき盛り土の痕跡があり、その頂点から床面までの高低差は60cm近くになる。掘り方は、さらに20～30cm深く、暗褐色砂粘質土が10～15cmとその上に、明淡黄灰色粘質細粒砂が12～18cmの厚さで重なっている。この２枚の層は、埋土中の遺物出土状況と比較して、土師器細片が僅かに混じる程度で、遺物の出土が殆ど無く貼床して突き固めたものと考えられる。また、南側の立ち上がりに近い位置に径40cm、深さ25cm程の落ち込み断面をみるが周溝では無くピットと推定される。住居の北側床面には、長径19cm、短径16cm、深さ８cmのピット（Ｐ23）がある。なお、北側の立ち上がり部分では周堤状の隆起が認められず、住居埋土の上に北から南に向かって、長さ約



第４図　８区西壁土層、ＳＢ１・２他実測図

1.2m、厚さ5～20cmの不整レンズ状に黄灰色細粒砂が立ち上がり部分を切って上に被さっていること等から周堤部が後に削平された可能性が考えられる。また、床面南東に住居の南北方位とほぼ同じでかなり凹凸の目立つ浅い落ち込みをみるが、人為的なものと言うより水の浸食か何かの自然現象により生じた段差のようにも感じられる。

ＳＢ３（第５図）

８区ＤＥに跨った位置にあり、方形プランを呈する住居と考えられる。南北方向の復元方位は北から東へ５度振れている。南北に台形状の盛り土の痕跡があり、住居の周堤と推定される。しかし、周堤とみられる盛り土は北側の西壁に接した東西40cmほどの長さを検出することが出来たにすぎない。周堤部は、元々東側半分近くが表土からの攪乱で破壊されていたが発掘範囲が東西幅1.5mと狭いうえベルトコンベアーを現場内に設置していたため、特に南側周堤部の検出が間に合わなかったことからどの程度遺構が残っていたか良くわからない。床面から周堤の上面までの高さは、南北とも35cm程度で西壁土層観察により南側周堤は僅かに上面が削平されているのが判る。住居内において、北壁付近に黒色を帯びた焼土面がやや南に張り出した帯状に検出され、焼土を破って径28cm、深さ５cm内外の円形ピット（Ｐ25）１基がある。また、北側周堤下の東壁側に古い土坑（ＳＫ２）があるが、竈の痕跡は認められない。南側周堤付近では、東壁側に攪乱があったため調査の開始にあたって、試掘トレンチを入れたがその直ぐ北位置の床面に石組４があり、さらに20cm北に離れた位置で土師器甕が潰れた状態で出土した。しかし、石組と土師器甕は表土からの攪乱によって上部がすでに削り取られており完全な出土状態ではなかった。また南側周堤の基底面の高さと等しいレベルで土師器片や長さ35cm、幅20cmもある大きな川原石が盛り土中に埋め込まれた状態で出土した。

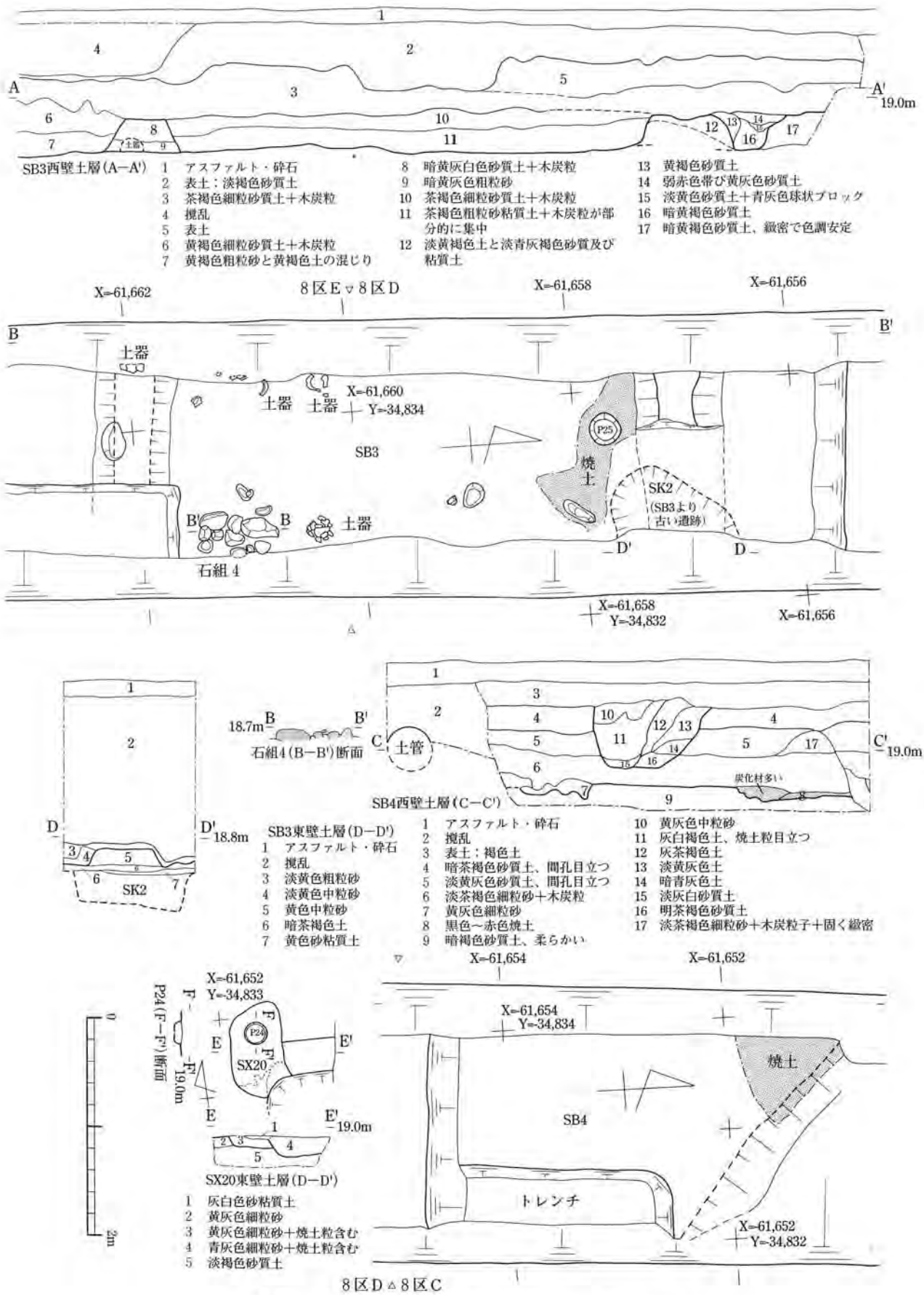
ＳＢ４（第５図）

８区Ｃに位置する。北側はＳＢ４に切られ残存していなかった。南側はコンクリート製の配水管（直径45cm）が埋設され、発掘調査が出来なかった。限られた調査区内では、掘り方部分の検出に至らず焼土面の一部を検出した程度である。出土遺物も極めて少ない。焼土面は、北側のＳＢ２に接した辺りに広がっており、厚さが３cm程度で赤色を帯びる。南端付近では黒っぽい焼土に変化して厚さが15cm程度となる。埋土の上面には、ＳＸ32とピット（Ｐ22・Ｐ24）があるが、いずれも浅くて住居の床面には達していない。また、東壁側に表土からの攪乱があり発掘当初、南北1.9m、東西60cmの試掘トレンチを入れたが攪乱の影響もあって床面は確認出来なかった。今回検出した住居としては最も情報が少ない。

Ｐ20（第４図）

８区Ｂの中央北寄りの位置にある。長径44cm、短径33cm、深さ28cmの楕円形状のプランを持ち、遺構検出レベルで平板状の川原石１個が出土した。出土遺物は無かった。

Ｐ21（第４図）



第5図　ＳＢ３・４、ＳＫ２、石組４、ＳＸ20実測図

８区Ｃの中央北寄りの位置（Ｐ20の南、約５ｍ離れた所）にある。Ｐ20と同様の構造で、長径44cm、短径32cm、深さ37cmの楕円形プランを持ち、遺構検出レベルで平板状の川原石１個が出土した。出土遺物は無かった。

Ｐ20・Ｐ21は何らかの建築物の対になる柱穴と思われる。遺物がないので時期は明らかでないが、該期遺構に含めた。礎石状の石を配するピットで、やや特異な構造となるので、あるいは古代まで降るかもしれない。

ＳＸ20（第５図）

８区Ｃの中央やや東寄りに位置する。南北長さ85cm、東西幅50cmの不整長方形状を呈する東側検出ラインの中位置から東西に交わる直線ラインが検出された。南端部分は攪乱が深く入っていたため平面形状は明らかではないが、西側が10cm、東側が18cmほど掘り下げて、焼土や灰の混じった砂質土を埋めて整地したような遺構であり、西側の土坑状のプランの中央北寄りの位置に直径20cm、深さ７cmの円形ピット（Ｐ24）があり、付近一帯の遺構検出レベルと洪水性の砂の堆積で覆われていたことから、何らかの建築物の柱を支えるため叩き締めの出来る土と入れ替えたのではないかと思われる。しかし、発掘範囲が狭いことに加えて上部からの畑の耕作、東側に大きな攪乱があって遺構全体の様相がはっきりしない。埋め立てた土の中に土師器片がいくつか含まれていたので、古墳時代の遺構と考えられる。

石組４（第５図）

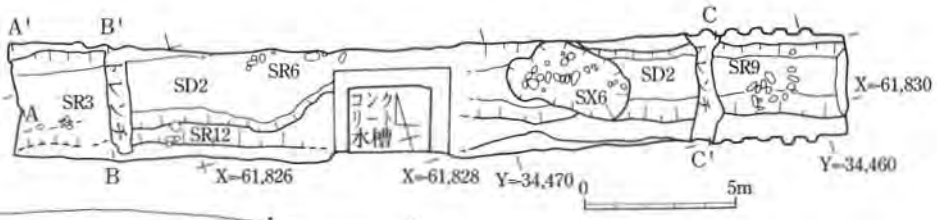
８区Ｅの東側、北寄りの位置にある。東側壁に接していることから、石組遺構の全体を発掘していないかもしれないが、南北80cm、東西50cmの範囲に８～35cm大の川原石11個が密集している。石材には、焼けた形跡が無く破損のみられるものが含まれる。ＳＢ３床面直上に敷石されたような状態を呈し、位置的に住居南側入口部分と推定される。

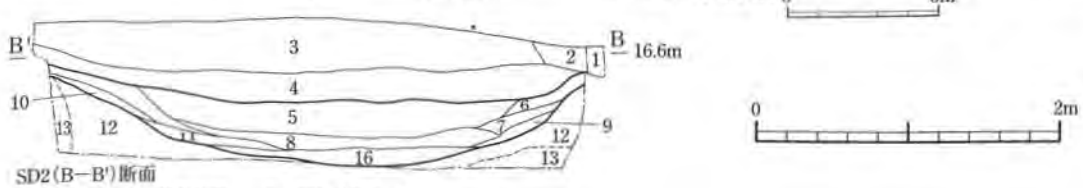
（３）中世

中世の遺構は、１～２区下層、5～６区を主に分布している。まず、１～２区下層では段丘下の地形でＳＤ２、ＳＸ６（石段を伴う土坑）、溝の埋土中にＳＲ（集石状の遺構）６基が検出されている。５～６区では、南側に張り出した舌状の台地地形と考えられ、溝、土坑、ピット、ＳＸ（性格不明遺構及び倒木痕）が多数検出されている。次に代表的遺構について説明する。

ＳＤ２（第６図）

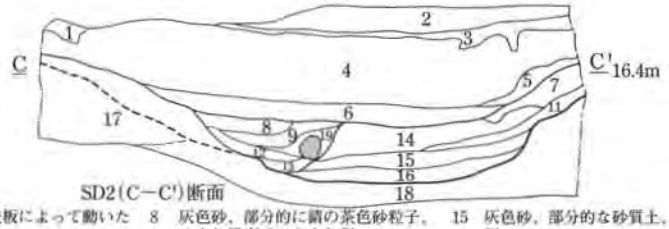
１区Ｆ～Ｋ、２区Ａ～Ｇの下層で検出された。溝の発掘範囲は限定的で遺構全体の規模は明らかでない。ＳＤ２の特徴として、１区下層の調査範囲では、溝の主軸が発掘区内にうまく納まり、溝の肩が直線的で、横断面が逆台形状から弓形状を呈し人工的に掘削された溝である印象を強く持つ。ところが、２区下層の調査範囲では溝の横断面が発掘区内に納まりきらずに北の方へ長軸が振れて主に南側傾斜面の検出となったが、東から西へ移動するに従って、人工的な溝から自然流路に近い性質を持



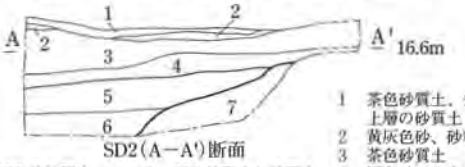


SD2(B−B')断面

1 矢板攪乱：茶色砂質
2 黄灰色砂質
3 茶灰色砂
4 茶灰色砂＋礫混じり
5 灰色砂、3より細かい
6 灰色砂質
7 灰色砂質
8 灰茶色砂、錆の沈殿
9 灰色砂質シルト
10 灰色砂質、ややシルトっぽい
11 灰茶色砂、錆
12 灰色砂質シルト　SD2のベース
13 暗灰色砂、黒色斑文
14 上部錆、砂礫ベースと思われる
15 灰色砂
16 灰色砂質シルト、礫混じり



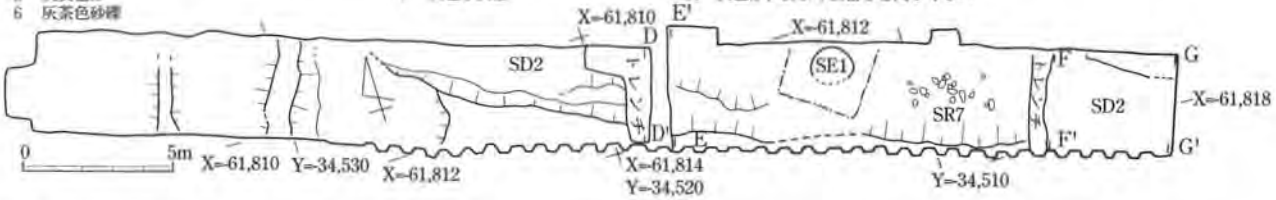
SD2(C−C')断面

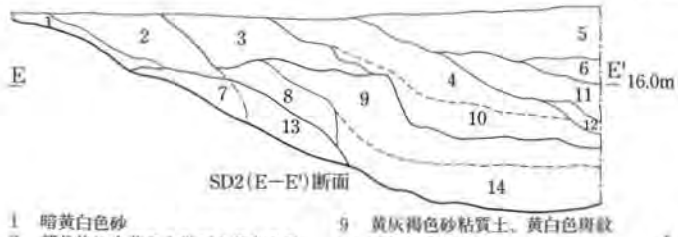


SD2(A−A')断面

1 茶褐色砂粘質土
2 茶色粘質土混じり砂
3 灰黄色砂
4 灰色砂礫
5 灰黄色砂
6 灰茶色砂礫
7 灰色粘質土と砂質土入り混じる

1 茶色砂質土、矢板によって動いた上層の砂質土
2 黄灰色砂、砂粒子緻密
3 茶色砂質土
4 灰色砂、2より砂粒子粗い
5 灰色砂質土
6 灰色砂、円礫多く含む、大形の円礫や人為的に割れた礫を含む
7 灰色砂質土
8 灰色砂、部分的に錆の茶色砂粒子、4より緻密で、2より粗い
9 灰色砂礫、部分的に錆色砂、8より粗い
10 灰茶色砂、8と同じくらいの粗さ
11 灰色砂質土
12 灰色砂質土
13 灰色砂質土、11・12より砂が多い
14 灰色砂、10より緻密2と同じくらい
15 灰色砂、部分的な砂質土、14より粗い
16 灰色砂質シルト、部分的には砂質土に近いところあり
17 暗灰色砂質、黒色斑紋
18 砂礫、上部は暗茶色〜茶色の錆
19 灰色砂礫



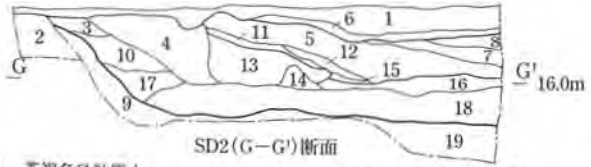


SD2(E−E')断面

1 暗黄白色砂
2 部分的に赤茶色を帯びた黄白色砂
3 黄灰色砂粘質土：2〜3㎝大円礫含む
4 黄褐色中粒砂
5 黄灰褐色砂粘質土
6 黄灰褐色粘質土
7 薄い鉄錆色中粒砂
8 黄灰色砂粘質土、2〜3㎝大円礫含む
9 黄灰褐色砂粘質土、黄白色斑紋
10 黄褐色中粒砂
11 黄灰褐色粘質土、灰白色斑紋
12 淡赤色を帯びる褐色砂質土
13 灰褐色砂質土：1〜5㎝大円礫多く含む
14 黄灰褐色砂粘質土、下部に3㎝大円礫若干含む

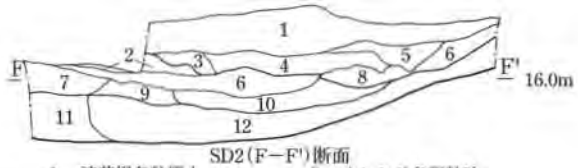
SD2(D−D')断面

1 黄茶褐色土
2 淡黄灰色砂質土
3 淡黄灰色砂粘質土、灰白色砂粘質土斑紋
4 茶色を帯びた灰白色砂粘質土
5 青灰色砂
6 灰白色砂
7 黄灰色粗粒砂
8 淡灰色粗粒砂：2〜4㎝大円礫多く含む
9 薄〜濃色のオレンジ色砂
10 4より白っぽい、茶色を帯びた灰白色砂粘質土
11 青灰色砂粘質土
12 鉄錆色砂礫
13 暗灰色〜暗オレンジ色粗粒砂
14 灰白色粗粒砂：5㎝大円礫多く含む　鉄錆沈殿
15 暗灰色粗粒砂
16 鉄錆色大粒砂



SD2(G−G')断面

1 茶褐色砂粘質土
2 淡茶色粘質土
3 淡茶灰白色細粒砂粘質土
4 灰白色砂とオレンジ色砂の斜向ラミナ
5 黄灰白色粗粒砂
6 暗褐色粗粒砂
7 淡茶褐色中粒砂
8 淡茶褐色粗粒砂
9 淡茶灰白色粘土
10 灰白色粘質土、オレンジ色砂斑文状
11 淡茶灰白色細粒砂
12 暗灰白色粗粒砂：1㎝大円礫少し含む
13 淡茶褐色中粒砂
14 暗オレンジ色粗粒砂
15 淡茶灰白色粘質土
16 淡灰白色細粒砂
17 淡鉄錆色を帯びた灰白細粒砂
18 灰白色砂礫：2〜5㎝大円礫
19 茶灰白色細粒砂



SD2(F−F')断面

1 淡茶褐色粘質土
2 茶灰黒色砂
3 茶灰白色砂粘質土
4 オレンジ色帯び灰白色砂
5 灰白色細粒砂
6 青灰色細粒砂、オレンジ色砂斑文状
7 暗鉄錆色砂礫
8 暗オレンジ色砂礫
9 オレンジ色粗粒砂
10 淡オレンジ色砂
11 茶灰白色粘質土
12 帯オレンジ色淡青灰色粘質細粒砂

第6図　ＳＤ２断面実測図

つようである。溝の肩部分は緩やかな蛇行をみせ、傾斜面も緩く全体に締まりが無くなってくる。溝の中には、ＳＸ６（石段を伴う土坑）がありこの溝の特殊性を感じさせられるが、溝の用途についてはわからない。

ＳＫ11（別添３図）

６区Ｆの西寄りの北壁に入り込む位置にあり、南側半分程度を発掘したと思われる。プランは長方形状を呈し、東西幅約１ｍ、深さ25cmの規模。長軸方位は、北から東へ20度振れる。

ＳＫ12（第９図）

６区Ｃの北壁際に位置する。正方形に近い不整五角形状のプランを呈し、東西、南北径が1.05cm、深さ30cmの規模。遺構検出レベルで、南東隅に長径20cm、短径15cmの扁平川原石が１個出土した。埋土は、茶灰白色砂質土で木炭粒を含み山茶碗、かわらけ細片が若干出土した。

ＳＫ16（第10図）

６区Ｈの南側東寄りに位置し、円形プランを呈する。径1.3ｍ、深さ65cmの規模。埋土中からの出土遺物は少なく特に目立ったものはない。

ＳＫ17（第10図）

６区Ｈの北壁寄りに位置し、円形プランを呈する。径1.2ｍ、深さ30cmの規模。埋土整地面とみられるＳＸ31を切る。

ＳＫ18（第10図）

６区Ｉの北寄りに位置し、円形プランを呈する。径1.3ｍ、深さ40cmの規模。周囲に展開する遺構（ＳＫ24、ＳＫ45、ＳＸ25、ＳＸ30）を切る。

ＳＫ21（別添３図）

６区ＧＨの南寄りに位置し、北側半分がＳＫ10に切られ、南側はＳＫ22と試掘トレンチに切られる。東西長さ1.85ｍ、南北幅不明。深さ30cm。

ＳＫ24（第10図）

６区Ｉの北寄りに位置し、不整長方形プランを呈する。長さ1.05ｍ、幅85cm、深さ75cmの規模。ＳＸ25を切り、さらにＳＫ24とＳＸ25をＳＫ18が切る。埋土除去後の南北断面が起伏のかなり大きい山形になり、樹木の根を掘り抜いたような山形の底面形状を呈する。

ＳＫ26（第８図）

６区Ａ南西隅に位置し、不整方形プランを呈する。遺構の南と西が発掘区域外になり平面規模は不

明。深さは30cmで底面からＰ115、Ｐ116を検出。東側のＳＫ50を切る。

ＳＫ27（第８図）

６区Ａのほぼ中央に位置し、長方形状のプランを呈する。東側部分は大きくＳＫ27に切られる。北側のＰ108を切っており、南北幅70cm、深さ20cmの規模。長軸方位は、南から80度東に振れる。

ＳＫ28（第８図）

６区Ａ南寄りの位置にあって、すでに東側半分が破壊されており、平面形状を知り得ないが方形または長方形プランを呈するものであろう。深さ13cm。ＳＫ47、ＳＫ27、ＳＫ50を切る。また、現代のＳＸ23によって北東側を大きく破壊される。

ＳＫ31（第10図）

６区Ｈの北寄りの位置にあり、不整円形状プランを呈する。長径78cm、短径64cm、深さ21cm。埋め立て整地面と考えられるＳＸ31を切る。

ＳＫ32（別添３図）

６区Ｆの中央東寄りの位置にあり、不整円形状のプランを呈する。長径1.32ｍ、短径1.18ｍ、深さ50cm。北側のＳＫ47と南側のＳＸ６を切る。

ＳＫ33、ＳＤ５、ＳＤ８（第８図）

６区Ｂの東側北寄りの位置にあり、北側部分は発掘区域外に入り平面形状を知り得ない。ＳＫ33の南東寄りの位置で、ほぼ完形の山茶碗が横位置に直立した状態で出土した。この山茶碗に接して長方形プランで赤色を呈する焼土面が確認され、高い温度で加熱作業が行われた形跡と思われる。焼土の範囲は、南北20cm、東西幅12cm、深さ12cm以上。またＳＫ33の埋土中から１cm足らずの鉄滓とみられる金属片が僅かに出土した。他に、山茶碗の底部で比較的残りの良いものが出土した。ＳＫ33の南側に南北方向の規模の小さな溝状遺構ＳＤ５とＳＤ８がある。ＳＤ８は、ＳＸ23（現代）によって破壊されるが、ＳＤ５の方は形が良く残っている。２つの溝は、幅が75cm程有り80cm程度の空間をおいて並列する。東側のＳＤ５が収束する位置で、ＳＫ33の南東コーナーと接している。西側のＳＤ８は、ＳＸ23がＳＫ33の南西コーナー付近を壊しているためはっきりしないが、ＳＫ33と２つの溝は意識的な配置のように思われることから一組の遺構ではないかとも考えられる。

ＳＫ51（第８図）

６区Ａの西北隅に遺構の一部が検出された。プランは方形もしくは長方形で規模は大部分が発掘区域外のため何も知ることが出来ない。灰褐色粘質土の埋土で、土坑として扱ったが埋土整地遺構のＳＸ30・ＳＸ31に性格的に近いものであろう。

ＳＸ６（第11図）

１区下層ＧＨに跨った位置にある。東西４ｍ、南北２ｍの不整長方形を呈し、ＳＤ２の溝底からの深さが90cm規模の土坑。西側斜面は20度前後の比較的緩やかな傾斜で川原石を用いた階段が設けられる。ＳＤ２とＳＸ６の内部堆積が共に同質の洪水堆積砂であり、一時期に埋設した可能性が高く切り合い関係は確認できなかった。したがって、ＳＸ６がやや早い時期に造られた可能性はあるもののＳＤ２と同時期に埋没したものと考えられる。石段は、10個ほどの川原石を使用して、８段に築かれている。石材の一部には、被熱痕を残すものもみられ、石材転用が推定される。石段の最下部には、上面が平坦な長さ47cm、幅25cmの大きな踏み石を置く。その東側は、長径１ｍ、短径80cmの規模の土坑底面である。また、石段最上位置から２番目の長さ40cm、幅30cmの栗の実状の最も重量のある石は、角張った部分のない石で、力自慢の大人でも素手で抱えてなかなか持ち運べるものではない。この石の北側と西側に各１個づつ、石が僅かに重なる位置に配置されることから石段はもう少し長く続いていたものと考えられる。この最大の石を起点に石段が二手に分かれていることから踏み分け石とみることも可能である。

ＳＸ25（第10図）

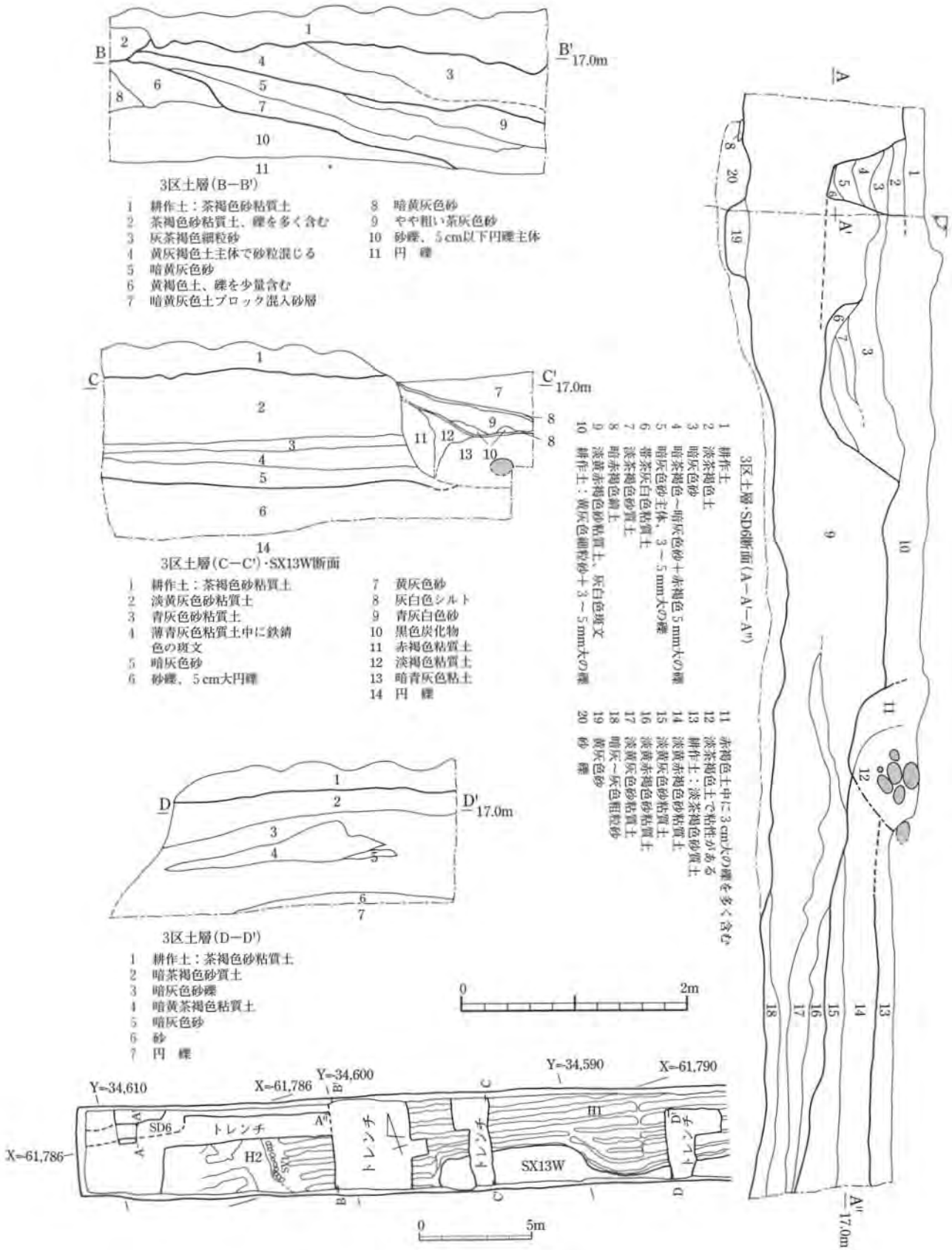
６区Ｈ～Ｉに跨る位置にあり、遺構の東南部分が南壁に入り込んでおり、未発掘である。全体の平面形状はわからないが、東西のコーナー部分に舌状の張り出しを持つ不整長方形状のプランを呈する。長軸方向は、北から西へ70度振れる。張り出し部を除いた長さが4.05ｍで、南西隅の張り出しは半径50cmの半円形状の弧を描く。また、北西隅は長方形状を呈する土坑（ＳＫ24）と円形土坑（ＳＫ18）とに切られる。ＳＫ24はＳＫ18に切られる。北東隅の張り出しは、東に55cm突き出し、幅45cmの規模がある。また、東側に幅30cm程の帯状の平らな段を持つ。床面は、全面的にやや硬化した感じがあり、ピット４基が検出されたが、ＳＸ25に伴うものかどうかはっきりしない。埋土中には、厚手の山茶碗の破片が大量に含まれ、青磁の破片も比較的多く見つかっている。遺物の出土状態から、破損容器の廃棄と思われるが、ＳＸ25が本来どのような遺構であったかは不明である。

ＳＸ26ａ～ｄ（第11図）

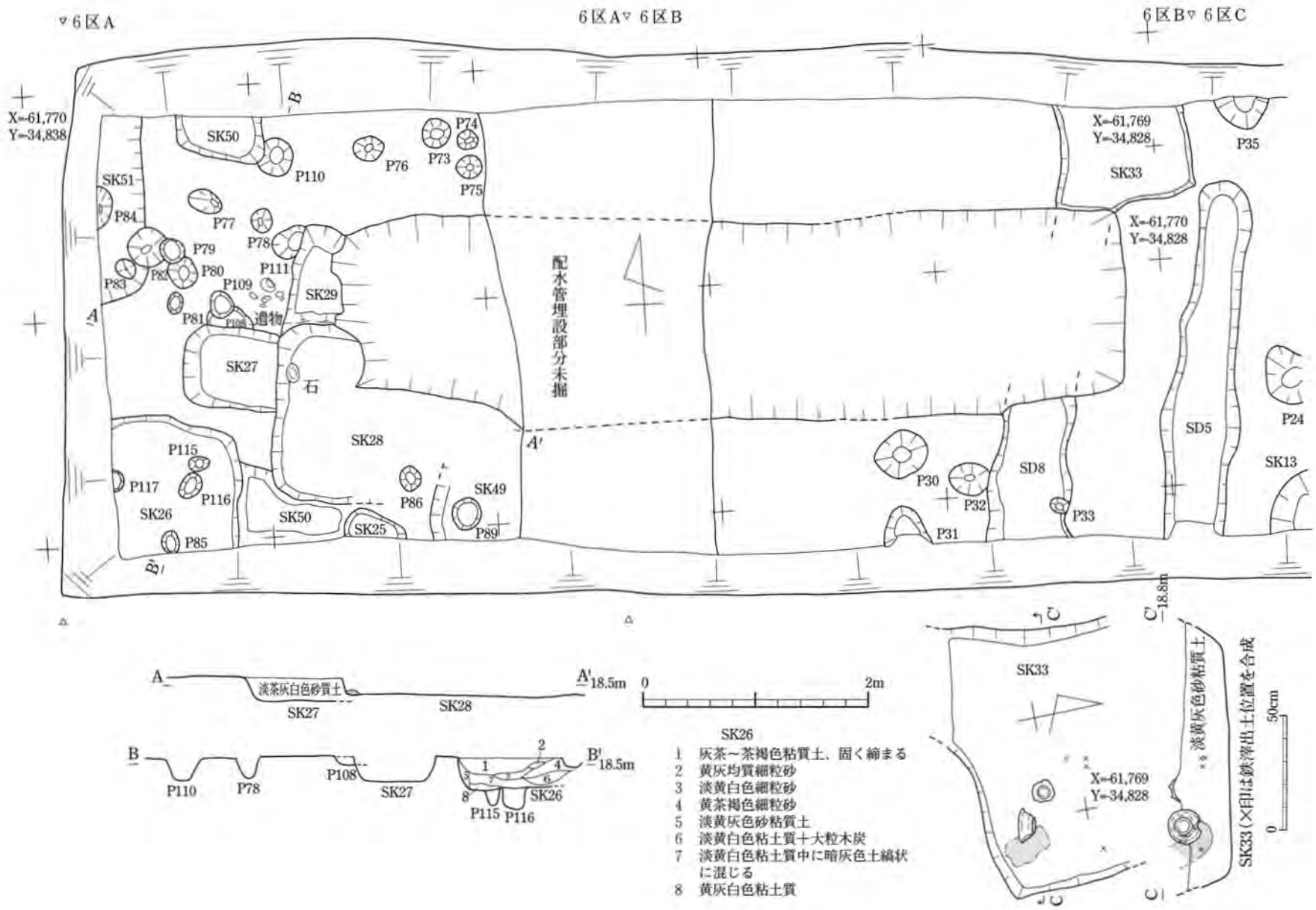
６区Ｆ南壁寄りに位置する。南北方向に長い不定型なプランを有する落ち込みが並行に４基接触しているが、人為的に掘られた土坑等ではなくおそらく倒木痕跡であろう。本来中心部（ｂ）に形成される隆起（陸：ロームマウンド）が存在しないのは、倒木の根本が邪魔になったので抜き取ったためであろう。周囲の落ち込み（海：ａｃｄ）は、40cm前後の深さで、それほどの巨木ではなかったと考えられる。埋土中からの遺物の出土は少ない。

ＳＸ27（第11図）

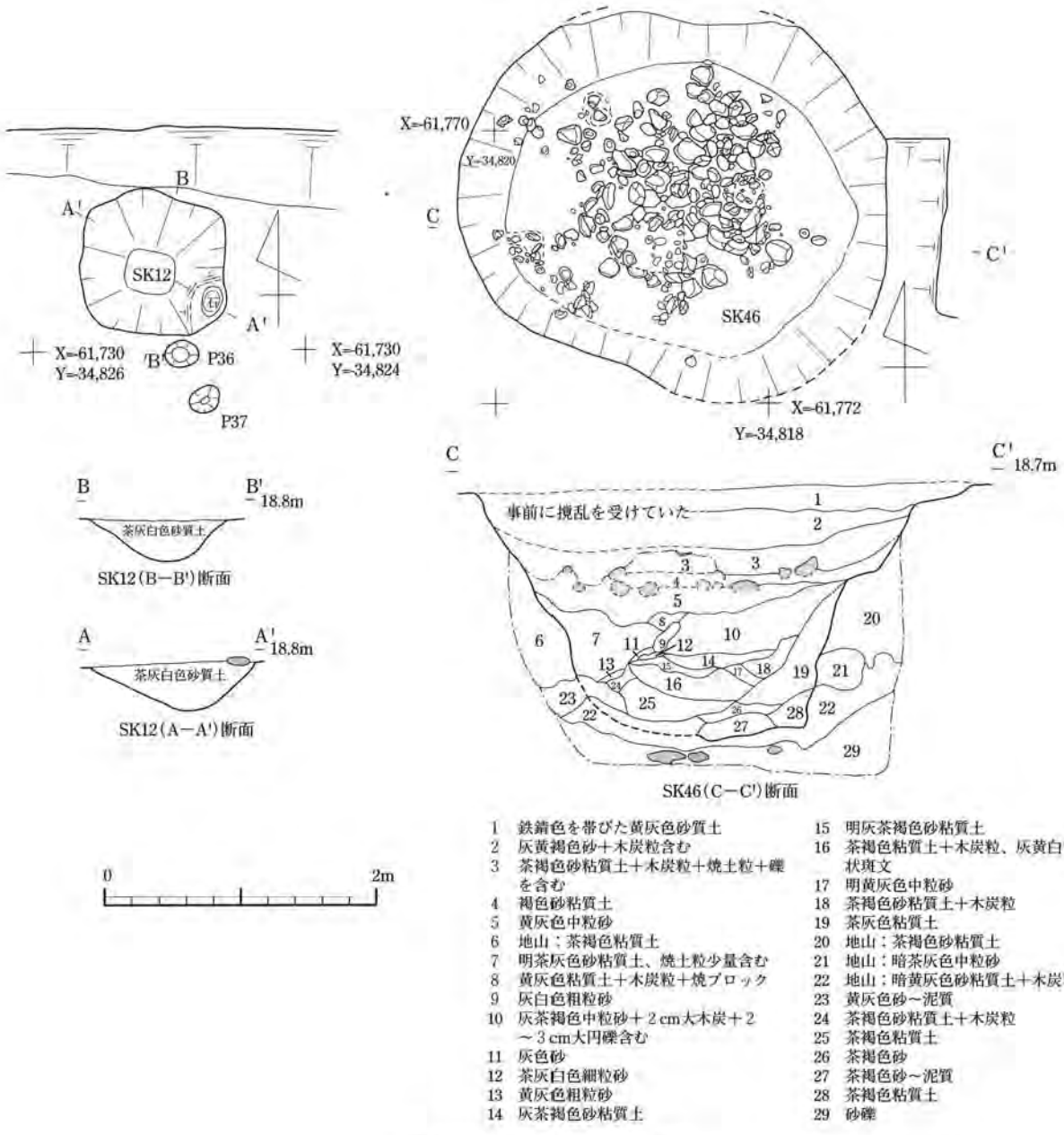
６区ＫＬに跨った位置にあり、戦国時代の区画溝（ＳＤ７）に北側の一部が切られる。長軸は、北から東に25度振れる不整台形状のプランを持つ。西側現存長さ2.4ｍ、東側長さ1.7ｍ、幅4.8ｍ、深さ45cmの規模の掘り込みである。しかし、一般的な土坑とは異なり灰白色の砂混じり粘土質の土で埋め



第7図　3区土層実測図（下層調査）

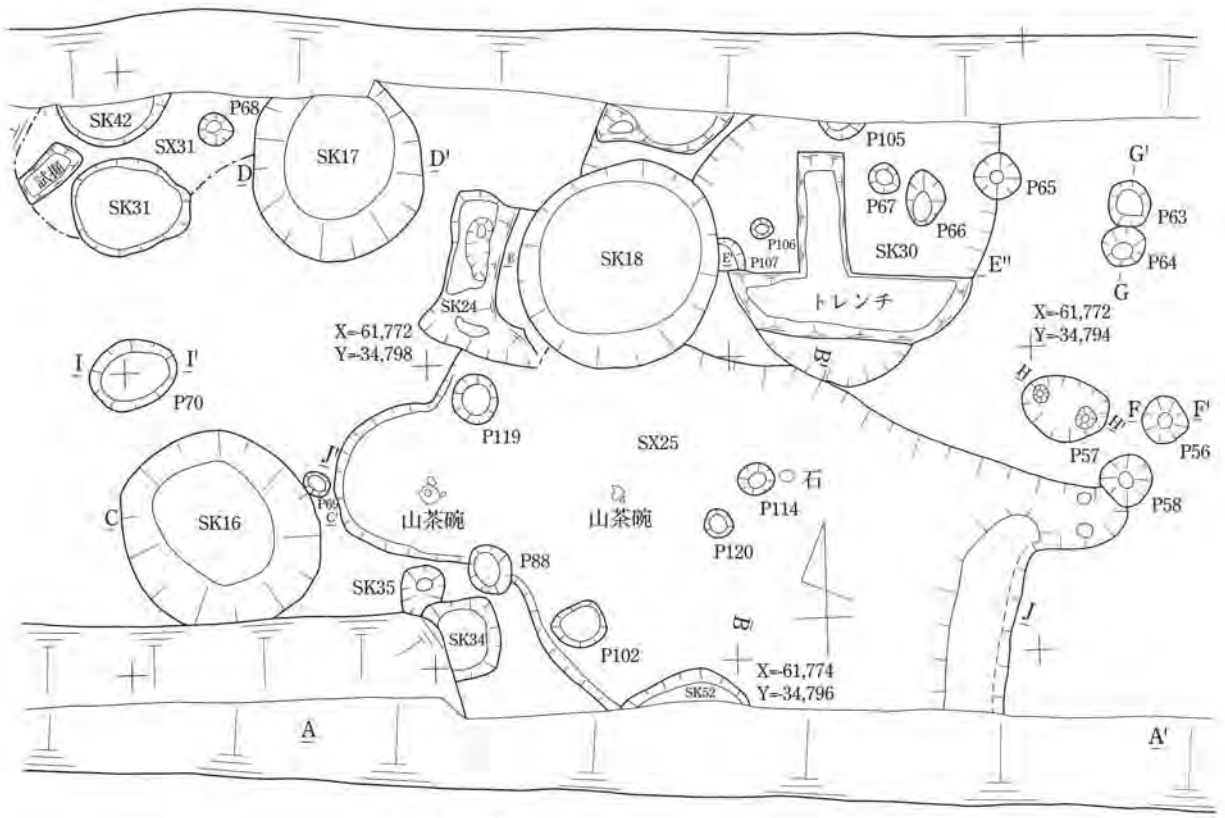


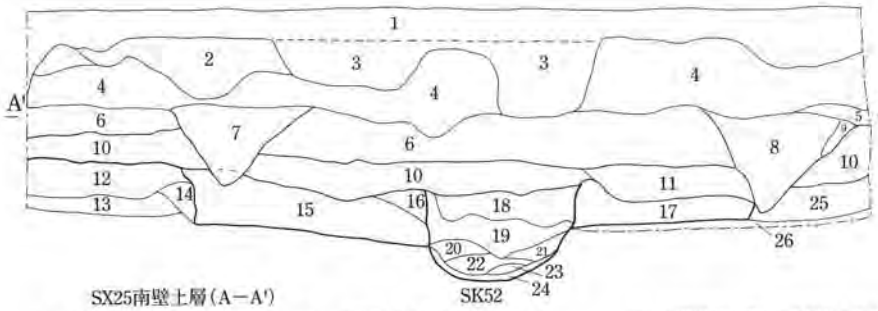
第8図　6区AB遺構実測図



1 鉄錆色を帯びた黄灰色砂質土
2 灰黄褐色砂＋木炭粒含む
3 茶褐色砂粘質土＋木炭粒＋焼土粒＋礫を含む
4 褐色砂粘質土
5 黄灰色中粒砂
6 地山：茶褐色粘質土
7 明茶灰色砂粘質土、焼土粒少量含む
8 黄灰色粘質土＋木炭粒＋焼ブロック
9 灰白色粗粒砂
10 灰茶褐色中粒砂＋2cm大木炭＋2～3cm大円礫含む
11 灰色砂
12 茶灰白色細粒砂
13 黄灰色粗粒砂
14 灰茶褐色砂粘質土
15 明灰茶褐色砂粘質土
16 茶褐色粘質土＋木炭粒、灰黄白色球状斑文
17 明黄灰色中粒砂
18 茶褐色砂粘質土＋木炭粒
19 茶灰色粘質土
20 地山：茶褐色砂粘質土
21 地山：暗茶灰色中粒砂
22 地山：暗黄灰色砂粘質土＋木炭粒
23 黄灰色砂～泥質
24 茶褐色砂粘質土＋木炭粒
25 茶褐色粘質土
26 茶褐色砂
27 茶褐色砂～泥質
28 茶褐色粘質土
29 砂礫

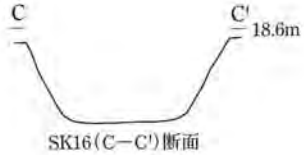
第9図　ＳＫ12・46実測図

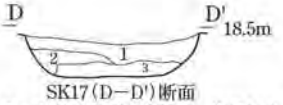




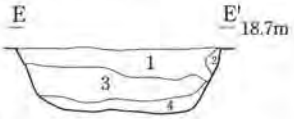
1 暗黄灰色砂質土＋木炭粒
2 灰黒色砂粘質土＋木炭粒
3 暗灰色砂質土＋木炭粒

1 砕　石
2 表土：暗灰色粗粒砂
3 表土：黄灰色砂に円礫含む
4 表土：暗灰～黄灰色砂質土
5 表土：灰茶褐色砂質土
6 表土：灰茶褐色砂質土
7 白色砂
8 白色粗粒砂
9 黄灰白色粗粒砂
10 暗茶褐色砂質土
11 暗茶褐色砂質土、固く締まる
12 地山：黄灰色砂質土
13 地山：黄灰色砂質土、青灰白色斑文
14 地山：濃茶褐色砂質土
15 暗茶褐色砂質土＋木炭粒＋焼土粒目立つ、大量の遺物包含
16 均質の暗茶褐色土
17 黄灰茶白色砂粘質土
18 暗茶褐色砂質土、淡黄灰白色斑文＋木炭粒＋焼土粒
19 暗茶褐色砂質土＋木炭粒＋焼土粒
20 暗茶褐色砂粘質土＋木炭粒＋焼土粒
21 暗茶褐色砂粘質土
22 安定した暗茶褐色砂粘質土
23 暗茶褐色砂質土
24 茶色を帯びた黒褐色土
25 地山：暗茶褐色砂質土、黄灰白色砂粘質土斑文
26 地山：暗茶褐色砂粘質土

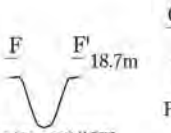


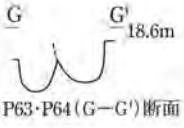


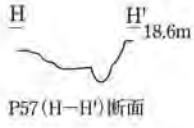
1 茶色を帯びた砂質土、黄灰色砂斑文
2 暗茶褐色細粒砂
3 暗灰色砂、黄灰色砂球状斑文

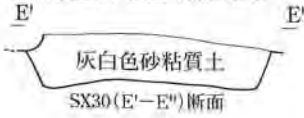


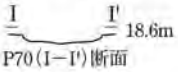
1 黄～茶灰色砂質土＋木炭粒＋焼土粒
2 黄茶灰色砂質土＋木炭粒
3 黄茶灰色砂質土、黄茶灰～暗灰色土球状斑文＋木炭粒
4 淡黄灰色粘質土

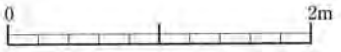




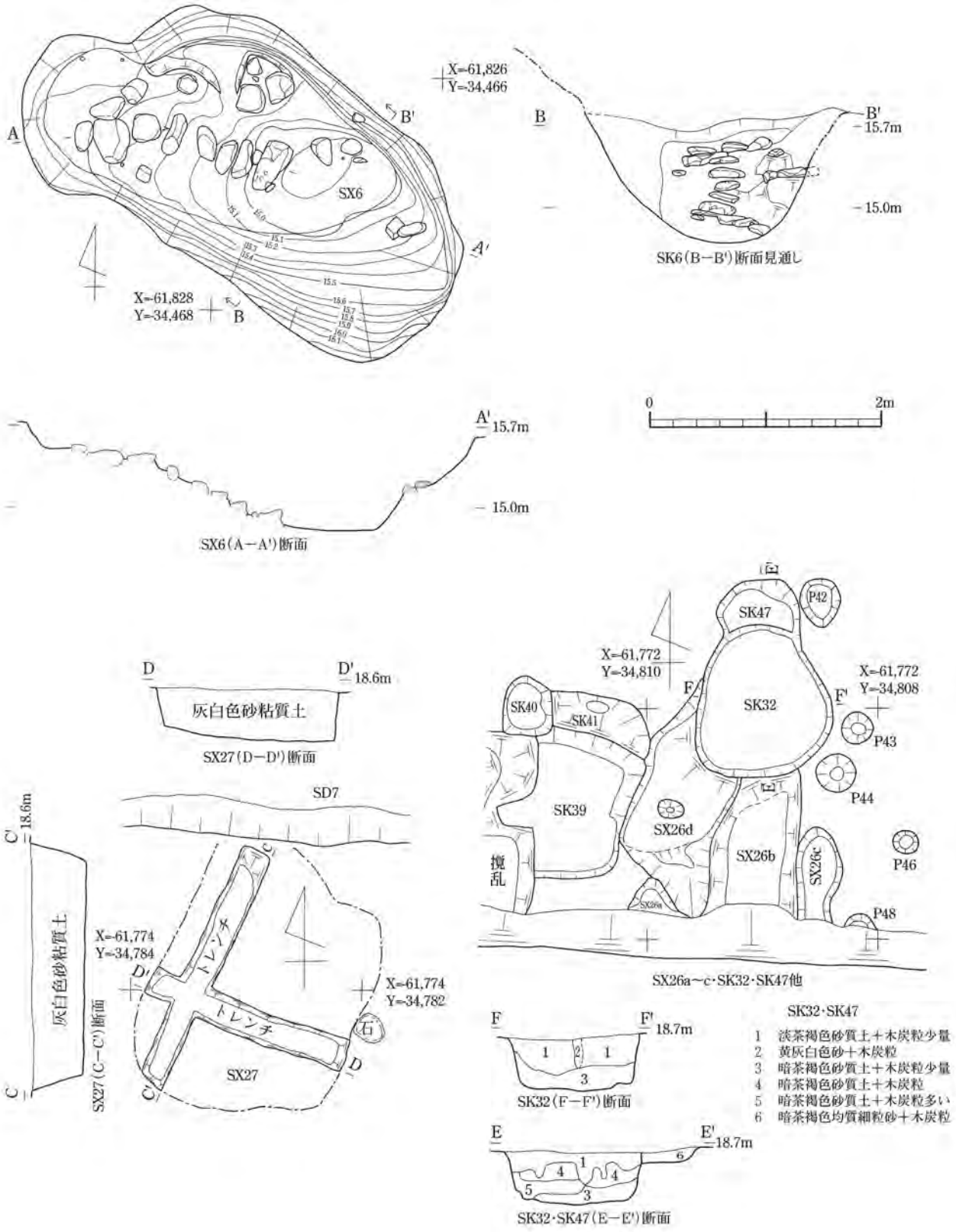








第10図　6区ＨＩ遺構実測図



第11図　ＳＸ６・27・26ａ～ｃ、ＳＫ32・47他実測図

戻された特殊な整地面と考えられる。このような整地面を造るのは、付近の地山が砂もしくは砂質土で、水を含むと地盤が不安定（泥沼化）になるためではないかと思われる。遺物は、厚手の山茶碗が完形で検出面から出土したが、埋め立てた土の内部からは殆ど遺物の出土を認めない。同様な性格の遺構は、6区AのSK51、6区IのSX30、6区HのSX31がある。

SR6（第12図）

1区IJに跨り、北壁の中に入り込むSD2埋土上層部に位置する。したがって、全体の規模は不明であるが東西3.5mの範囲に、8個の川原石[注1]がみられる。長さ40～45cm大の石が3個有り、12～20cm大の石が5個で、西に向かってレベルを減じる。被熱痕を持つ石が、少なくとも4個含まれ、破損礫は1個である。

SR7（第12図）

2区BCに跨り、SD2の中央を占める埋土上層部に位置する。長軸方向は、北から西へ65度前後振れる長楕円形の範囲に大小18個の川原石が散乱する。長さ42cm大の石2個を最大に、最小は7cm大の石である。その内破損礫は5個ほどで、被熱痕を持つ石が少なくとも5個含まれる。

SR9（第12図）

1区Gの中央東寄りの位置にあり、SD2の中央を占める埋土上層。東西1.8m、南北1mの範囲に大小13個程度の川原石が大きく2群に分かれて分布する。東群は、5個の川原石で構成され、最大の川原石は、長さ47cm大の枕状を呈する円礫。最小が長さ7cm大。破損礫3個。被熱痕のある石は未確認。西群は8個で構成され、最大の川原石は長さ47cm大の枕状の円礫で、最小が長さ20cm大の破損礫である。破損礫は2個。被熱痕を持つ礫は6個みられるが、全体的に痕跡が弱く判定が難しい。伴出遺物は、山茶碗、常滑甕破片がある。

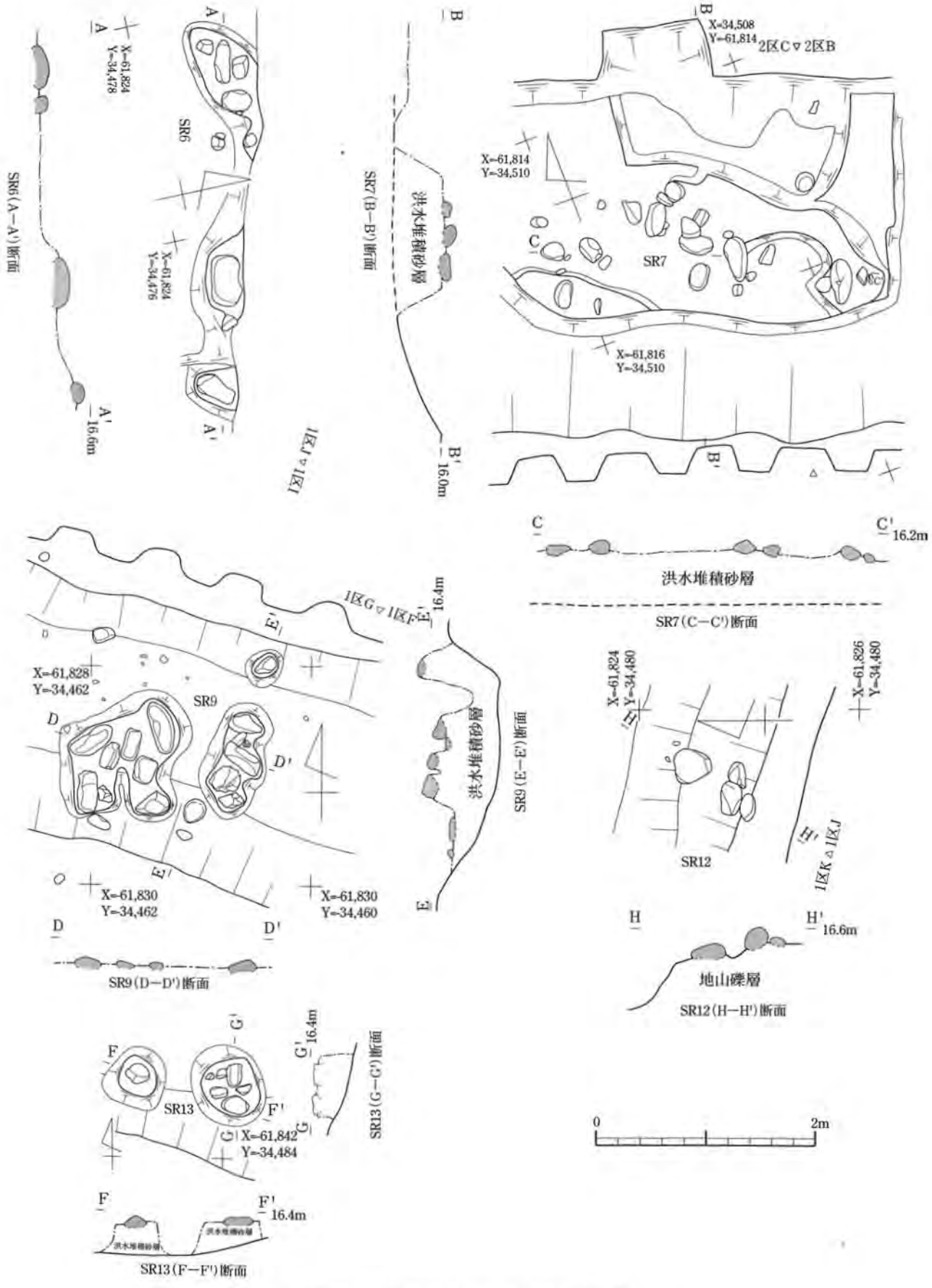
SR12（第12図）

1区Jの南側、西端部に位置し、SD2の南側斜面に4個の川原石で構成される規模の小さな集石状遺構である。破損礫は1個。被熱痕を持つ石は3個。北位置にある石は、上面が平坦で、隅丸三角形状を呈し長さ35cm、幅30cmの大きさがあり、全体に強く火を受けた形跡がある。SD2の南斜面中程の高さで踏み石のような状況を呈して出土した。

SR13（第12図）

1区Kの南側、西寄りの位置にあり、SD2の南側斜面に近い埋土上層部で検出された。構成する礫は大小7個で、東に6個、約50cmの空間を持って西に1個が単独で存在する。破損礫は2個。全ての石に被熱痕がある。

（4）戦国時代



第12図　ＳＲ６・７・９・12・13実測図

戦国時代の遺構は１～２区上層、３区ＭＮ～５区に集中している。検出された遺構の主なものは東西方向に並列する区画溝群で、埋土中から大量のかわらけ、瀬戸美濃陶器が出土している。区画溝の検出範囲は、３区ＭＮ～５区にほぼ限られる。１区ＧＨの南北方向の溝は、発掘範囲が狭いため区画溝の確かな情報が乏しい。区画溝以外では、１区Ｊ～２区Ａの範囲に大量の礫と灰白色砂粘質土で突き固めたような遺構が検出されている。付近に特徴的な石組遺構と集石遺構が検出されている。４区Ｈ～Ｋの発掘範囲において、窪地状の地形が検出され石組遺構の周囲でかわらけ、瀬戸美濃陶器、中国製磁器、土鍋等多数の遺物が出土した。

ＳＤ１（第13図）

１区ＧＨに跨った南壁側に位置する。溝の長軸は約10度東に振れる。発掘範囲が非常に狭く、溝は長さ1.3ｍ、幅１ｍ、深さ35cmの規模を確認したに留まる。北端の収束部分が発掘された。北側の内側斜面で平板状の川原石の下から完形のかわらけ１点が出土した。

ＳＤ４（第14図）

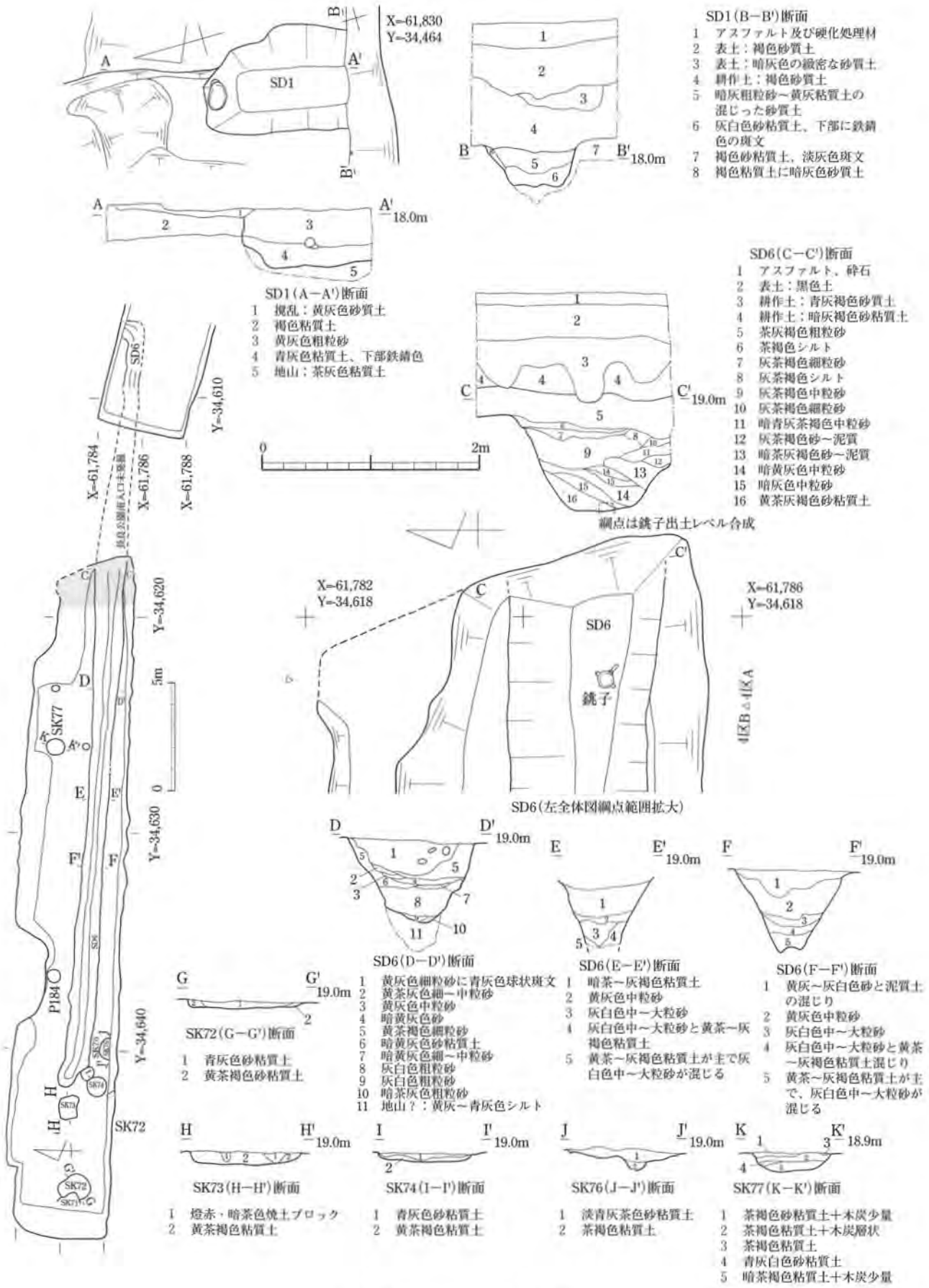
５区Ｊ～Ｍ、４区Ｍ～Ｐの発掘調査範囲で東西方向の溝が確認された。長さ約42ｍ。幅は、南北方向が幅広で90cm、東西方向が30～50cm。遺物はかわらけが多く、溝の埋土上半部の褐色砂質土層に集中する。

ＳＤ６（第13図）

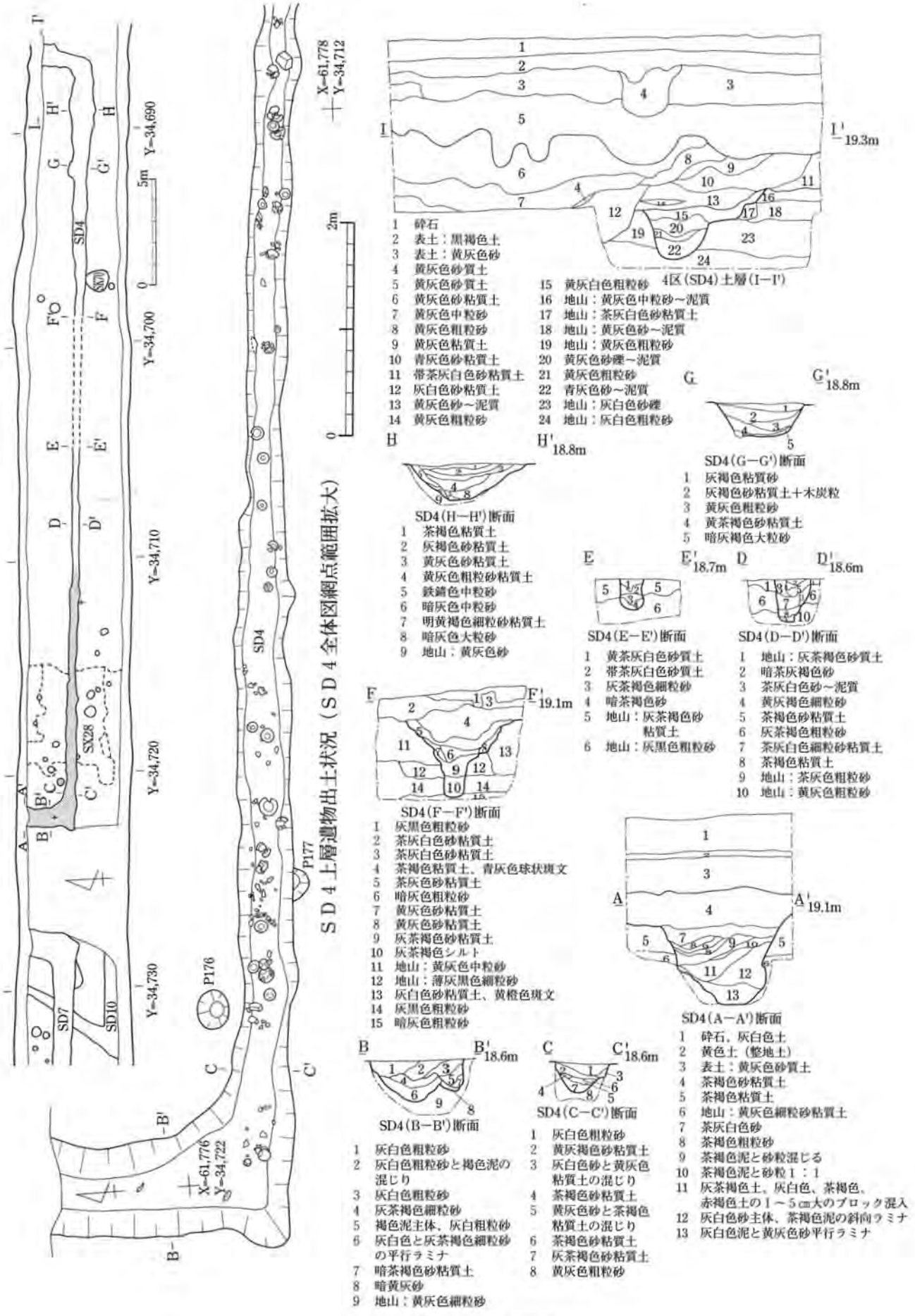
３区ＭＮ、４区Ａ～Ｆの発掘調査範囲で東西方向の溝が確認された。３区Ｍの北壁寄りの位置に南東コーナー部分を確認し、４区Ｆでは端部の鈍い切先状プランを呈して不自然に溝が収束してしまう。東西長さ52ｍ、幅0.9～1.4ｍ。深さは、溝底が安定した水平面でないため凹凸面となり75cm前後の深さがあり、最深部で礫層に達している部分がある。ＳＤ４が４区Ｆで突然収束してしまうことと、溝底が凹凸面を成し仕上がりが今少し良くないなど溝の掘削工事途中で洪水により埋没した可能性も考えられる。また、４区Ａの溝底直上で金銅製銚子が出土したが、洪水災害で埋没したものと考えられる。

ＳＤ７（第15図）

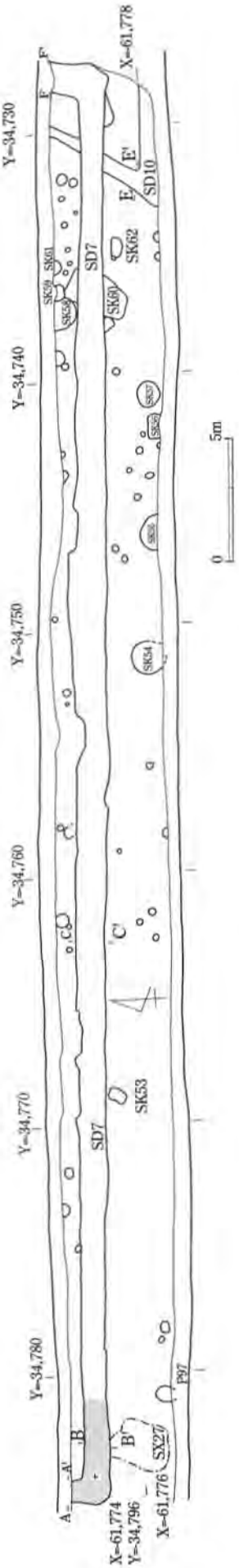
５区Ａ～Ｈ。６区Ｋ～Ｎの発掘調査範囲で東西方向の溝が確認された。東西方向の長さ約57ｍ、幅0.8～1.5ｍ、検出面からの深さ30～40cmであるが、本来60cmくらいの深さで、幅もより広いものであったようだ。この溝の埋没（洪水による）後に６区ＫのＳＤ７コーナー（南北方向）付近で溝内部の洪水堆積砂を除去して墓（火葬墓ＳＸ18）を築いている。また、溝の埋土上層部にＳＲ４、５、８がみられる。遺物では、５区Ｂの上層と５区Ｃの下層で墨書文字のあるかわらけが出土しており、特に５区Ｃの下層の墨書かわらけは細かく破砕された状態で10数個体が発見された。今回の発掘調査では、ＳＤ７以外の溝で墨書かわらけは出土していないこと、ＳＤ７内部でも５区ＢとＣの２ヶ所に集中するなど出土状態に特徴がみられた。さらに、５区Ｇの真ん中あたりの下層で東西60cm、南北40cmの

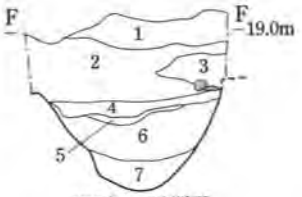


第13図　ＳＤ１・６他実測図


SD4上層遺物出土状況（SD4全体図網点範囲拡大）
X=61,778
Y=34,712
X=61,776
Y=34,722
Y=34,690
Y=34,700
Y=34,710
Y=34,720
Y=34,730
5m
0
2m
0
SD4
SD7
SD10
SX28
P176
P177
4区（SD4）土層（I−I'）
1 砕石
2 表土：黒褐色土
3 表土：黄灰色砂
4 黄灰色砂質土
5 黄灰色砂質土
6 黄灰色砂粘質土
7 黄灰色中粒砂
8 黄灰色粗粒砂
9 黄灰色粘質土
10 青灰色砂粘質土
11 帯茶灰白色砂粘質土
12 灰白色砂粘質土
13 黄灰色砂～泥質
14 黄灰色粗粒砂
15 黄灰白色粗粒砂
16 地山：黄灰色中粒砂～泥質
17 地山：茶灰白色砂粘質土
18 地山：黄灰色砂～泥質
19 地山：黄灰色粗粒砂
20 黄灰色砂礫～泥質
21 黄灰色粗粒砂
22 青灰色砂～泥質
23 地山：灰白色砂礫
24 地山：灰白色粗粒砂
SD4（H−H'）断面
1 茶褐色粘質土
2 灰褐色砂粘質土
3 黄灰色砂粘質土
4 黄灰色粗粒砂粘質土
5 鉄錆色中粒砂
6 暗灰色中粒砂
7 明黄褐色細粒砂粘質土
8 暗灰色大粒砂
9 地山：黄灰色砂
SD4（G−G'）断面
1 灰褐色粘質砂
2 灰褐色砂粘質土＋木炭粒
3 黄灰色粗粒砂
4 黄茶褐色砂粘質土
5 暗灰褐色大粒砂
SD4（E−E'）断面
1 黄茶灰白色砂質土
2 帯茶灰白色砂質土
3 灰茶褐色細粒砂
4 暗茶褐色砂
5 地山：灰茶褐色砂粘質土
6 地山：灰黒色粗粒砂
SD4（D−D'）断面
1 地山：灰茶褐色砂質土
2 暗茶灰褐色砂
3 茶灰白色砂～泥質
4 黄灰褐色細粒砂
5 茶褐色砂粘質土
6 灰茶褐色粗粒砂
7 茶灰白色細粒砂粘質土
8 茶褐色粘質土
9 地山：茶灰色粗粒砂
10 地山：黄灰色粗粒砂
SD4（F−F'）断面
1 灰黒色粗粒砂
2 茶灰白色砂粘質土
3 茶灰白色砂粘質土
4 茶褐色粘質土、青灰色球状斑文
5 茶灰色砂粘質土
6 暗灰色粗粒砂
7 黄灰色砂粘質土
8 黄灰色砂粘質土
9 灰茶褐色砂粘質土
10 灰茶褐色シルト
11 地山：黄灰色中粒砂
12 地山：薄灰黒色細粒砂
13 灰白色砂粘質土、黄橙色斑文
14 灰黒色粗粒砂
15 暗灰色粗粒砂
SD4（A−A'）断面
1 砕石、灰白色土
2 黄色土（整地土）
3 表土：黄灰色砂質土
4 茶褐色砂粘質土
5 茶褐色粘質土
6 地山：黄灰色細粒砂粘質土
7 茶灰白色砂
8 茶褐色粗粒砂
9 茶褐色泥と砂粒混じる
10 茶褐色泥と砂粒1：1
11 灰茶褐色土、灰白色、茶褐色、赤褐色土の1～5㎝大のブロック混入
12 灰白色砂主体、茶褐色泥の斜向ラミナ
13 灰白色泥と黄灰色砂平行ラミナ
SD4（B−B'）断面
1 灰白色粗粒砂
2 灰白色粗粒砂と褐色泥の混じり
3 灰白色粗粒砂
4 灰茶褐色細粒砂
5 褐色泥主体、灰白粗粒砂
6 灰白色と灰茶褐色細粒砂の平行ラミナ
7 暗茶褐色砂粘質土
8 暗黄灰砂
9 地山：黄灰色細粒砂
SD4（C−C'）断面
1 灰白色粗粒砂
2 黄灰褐色砂粘質土
3 灰白色砂と黄灰色粘質土の混じり
4 茶褐色砂粘質土
5 黄灰色砂と茶褐色粘質土の混じり
6 茶褐色砂粘質土
7 灰茶褐色砂粘質土
8 黄灰色粗粒砂

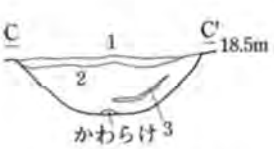
第14図　ＳＤ４実測図





SD7(F－F')断面

1 黄灰色砂＋木炭粒
2 淡黄褐色細粒砂粘質土
3 黒褐色撹乱
4 黄灰色砂粘質土
5 黄灰色シルト
6 黄灰色砂
7 茶～茶褐色粘質土

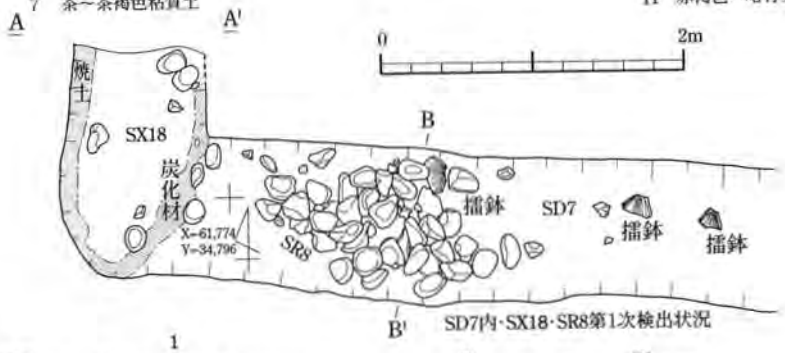


SD7(C－C')断面

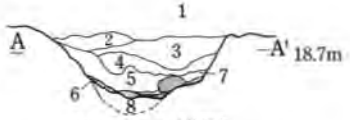
1 黄褐色泥
2 灰白色砂
3 黄褐色シルト

SD10(E－E')断面

1 帯茶灰白色砂
2 暗茶灰色細粒砂
3 茶褐色細粒砂
4 黒色焼土
5 茶灰色細粒砂
6 暗茶褐色砂質土
7 暗茶褐色粘質土
8 黄青灰色砂粘質土
9 暗茶褐色砂粘質土
10 暗黄色砂
11 赤褐色～暗青灰色砂粘質土

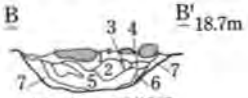


SD7内・SX18・SR8第1次検出状況



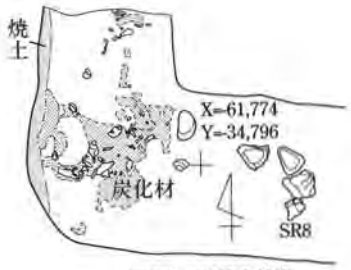
SX18(A－A')断面

1 暗茶褐色砂質土
2 灰茶褐色砂
3 茶褐色砂粘質土
4 茶褐色粘質土
5 暗黄灰色砂
6 焼土＋木炭粒＋骨片固く締まる
7 青灰色シルト
8 地山：暗灰色砂

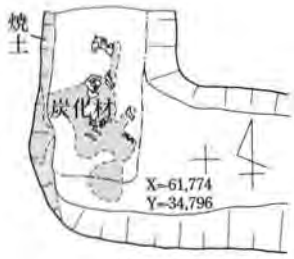


SR8(A－A')断面

1 黄灰色砂
2 黄褐色砂粘質土に暗黄灰色砂混じり
3 黄灰色粗粒砂
4 黄灰色中粒砂
5 暗黄灰色粗粒砂
6 暗黄灰色中粒砂
7 黄褐色粘質土

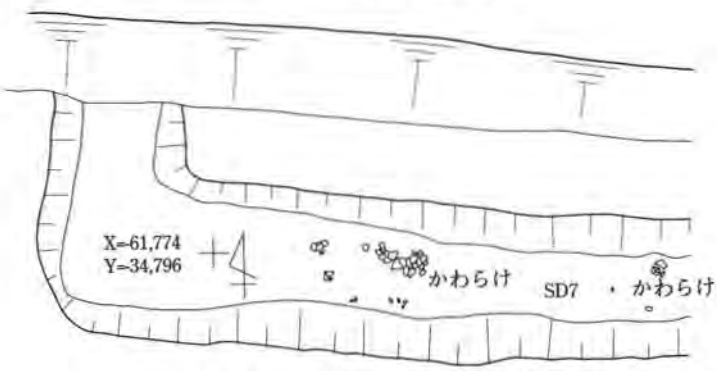


SX18第2次検出状況
(焼土・炭化材・骨片分布)



SX18第3次検出状況
(焼土・炭化材・骨片分布)

6区K～6区L



SD7・SX18・SR8発掘後(左SD7全体図の網点範囲の拡大)

第15図　ＳＤ７、ＳＸ18、ＳＲ８他実測図

範囲に完形かわらけが二重から三重になって大量出土した。検出がほぼ完了した翌日、大雨で、発掘区全体に被害があり、ＳＤ７南側立ち上がり部分の下部斜面に一本の炭化した竹杭らしいものが検出されていたが、雨水の排水後に竹杭は再検出出来なかった。この竹杭とかわらけ、SD７との関わりについてはわからない。なお、この一群のかわらけには墨書資料を含んでいなかった。ＳＤ７は、ＳＤ４、ＳＤ６に比較して内底面に青灰シルト質の堆積がみられ底面レベルが安定している。その上に灰白色砂の洪水堆積が覆っていることから、今回検出した溝の中では割合早い時期に完成し、洪水災害以前にある程度機能していたと考えられる。

ＳＤ10（別添２図）

５区ＨＩに跨るＬ字形に強く折れる溝で、南に向かって溝幅と深さを増す。埋土は、褐色砂質土で、遺物の出土は非常に少なかった。埋土の色調と土質から中世に遡る可能性も考えられるが、狭い範囲の発掘であり出土遺物が少なく性格のつかみにくい遺構である。ＳＤ７がＳＤ10を切る。

ＳＤ11（第16図）

４区Ｉの北壁寄りの位置にあり、ＳＸ19の北側肩部を貫いて収束する溝と思われる。溝の長軸方位は南北方位にほぼ一致し、発掘範囲内で長さ1.6ｍ、幅30cm、深さ25cmほどの小規模な溝で、本来深さが45cm前後であったと思われる。溝の埋土中に礫やかわらけが含まれていたため遺構の検出の目安となった。

ＳＫ46（第９図）

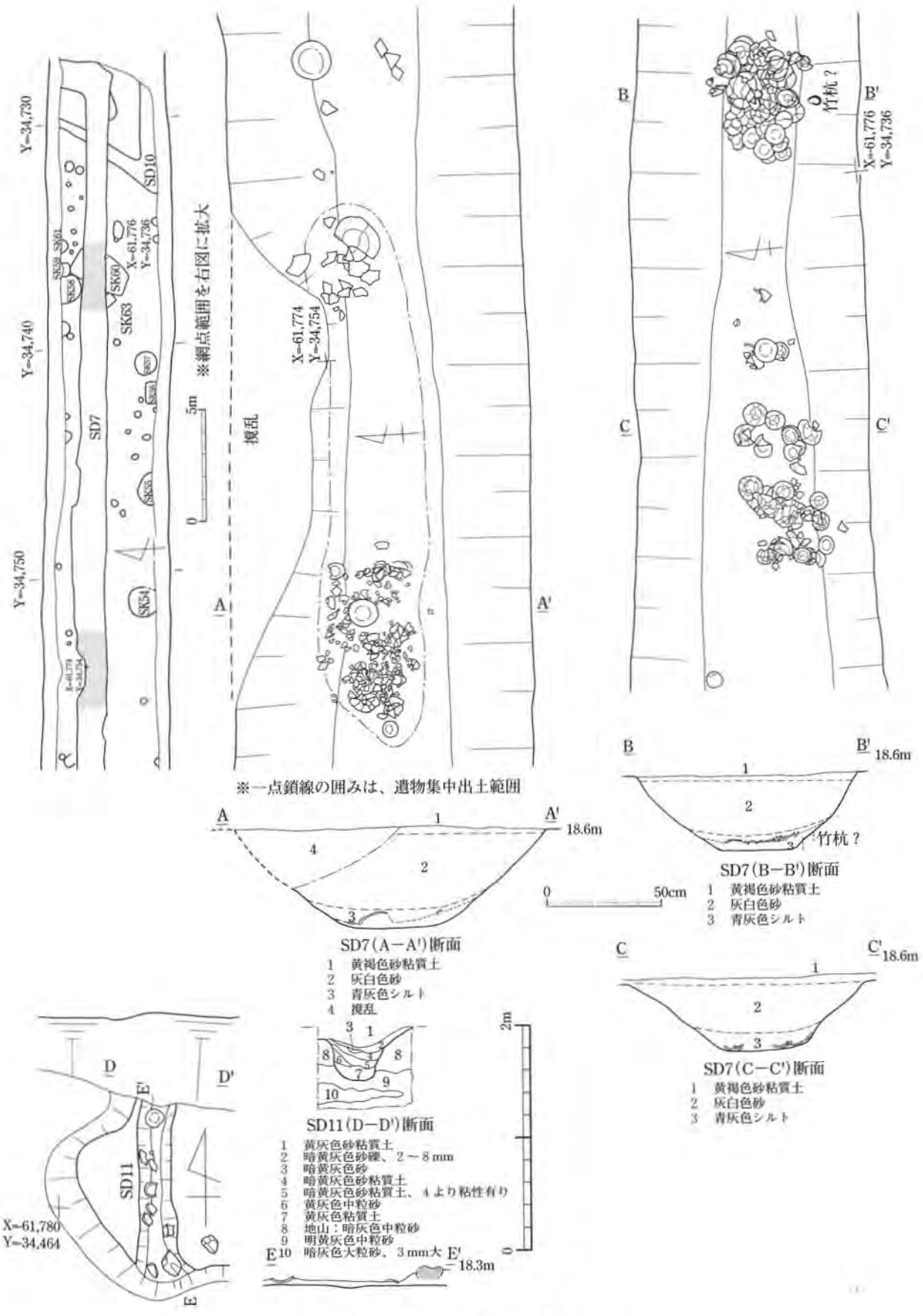
６区ＤＥに跨った北壁に接する位置にある。東西径3.2ｍ、深さ1.78ｍ。不整円形プランを呈する。埋土の中上位レベル（標高17.8ｍ以上）に拳大の礫が大量に廃棄された状況で検出され、同時に陶器の破片等が出土した。礫廃棄面の下層部では、砂質から砂粘質土の埋土が主体で、木炭粒の混じりが目立ち遺物や礫の混入は極めて稀な状態となる。土坑底部は、砂礫層の直上付近（標高16.7ｍ）で埋土と基盤となる砂礫の区別がはっきりつかない状況となる。発掘当初、素掘り井戸と考えたが、底部に鉄錆の沈殿も殆どみられず井戸として機能していた可能性が低く比較的短期間である程度埋め戻されたであろう。中上位レベルの礫の廃棄は埋め戻しが一段落してからのゴミ穴の廃棄に近い感じがする。

Ｐ97（第20図）

６区Ｌの南壁に一部入り込む位置にあって、東西径65cm、深さ20cm程度。南北径が実測できないが規模的にはＳＫとして扱っても問題がない。埋土中に礫が５個含まれ、焼土と木炭がかなり目立った。ピット内で何等かの火を使用する作業を行ったものと考えられる。出土遺物は山茶碗等がある。

Ｐ190（第20図）

１区Ｋの西側、北壁寄りの位置にあってＳＸ１の精査を行った際に検出した唯一のピットである。



第16図　ＳＤ７・11遺物出土実測図

方形プランを呈し、東へ約30度振れる。一辺が25cm、深さ９cm。内底面は丸底状となり、内壁にサバ石[注2]を粉々に粉砕したとみられる濃黄褐色の粉末状の皮膜が張り付いた状態で、かなり入念に突き固められていた。遺物は出土しなかった。

ＳＸ１（第17図）

１区Ｊ～Ｎに跨る規模の大きな遺構で北壁に入り込む位置にある。はっきりしないが、基壇状の高まりを持った整地面と考えられる。灰白色砂粘質土を主に用い、内部の心材として大量の礫を入れている。礫の多くは川原石であるが、破損したものや被熱により赤色かあるいは黒みを帯びたものが多く見受けられる。また、石材の中には敲石に使用したものや砥石に利用したものがある。この他に宝篋印塔の屋蓋部があり、大部分の石が廃棄に伴う石材転用とみられる。

ＳＸ18（第15図）

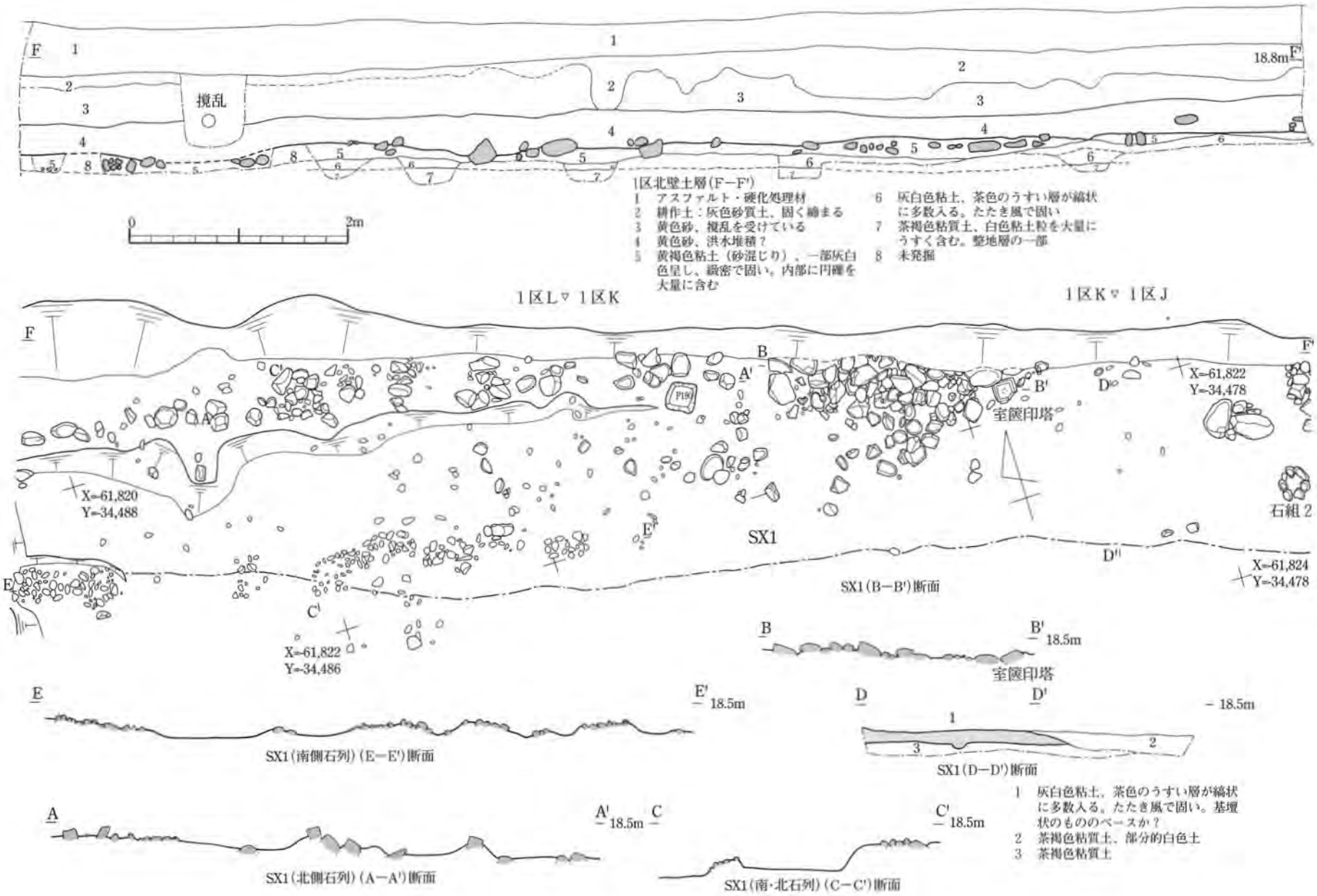
ＳＤ７の南西コーナー部の南北方向溝内部に位置する。ＳＤ７埋没後に丁寧に堆積砂を取り除いて墓壙を作り内部で火葬を行った形跡をみる。出土した骨片は、細かな細片となって散乱し、全体的に骨の遺存状態は良くなかったが、頭頂骨、骨盤、大腿骨の可能性のある骨片の出土位置から頭位は南位置の可能性があるものの全体的には現位置を保っているか疑問が残る。また、多くの炭化材が出土したため分析を行ったところ松、栗が樹種同定で検出された（第５章第１節参照）。一般的には高温燃焼材として松、栗は火葬墓に良く使用されるものらしいが、その他の樹種として栃、桃または梅、あるいは棺材とみられる高野槙といった多様な樹種が検出されたのは比較的珍しい例であるらしい。火葬墓は、大きく４段階の検出作業を行って発掘を完了した。初回の検出で、溝のプランの検出と同時に溝の西壁に焼土壁面を確認し、微細な骨片を検出したので、火葬墓の可能性を想定した。第２段階では、内部の堆積砂の除去を中心に行い炭化材、焼土、骨片を検出した。第３段階では、第２段階までに検出した炭化材、骨片を取り上げ、その下部の炭化材と骨片の検出を行った。また、溝底まで掘り下げた段階で東西幅60cm、調査部分で南北長さ1.1ｍの長方形のプランを検出した。最も北位置に出土した骨片が腰骨の一部ではないかと思われる。なお、副葬品については確実なものがない。

ＳＸ19（第18図）

４区Ｈ～Ｊに跨る南側に面した不整形の窪地状の地形であり、段丘崖など自然地形を反映しているのか、人工のものなのかはわからなかった。３枚の戦国時代の遺構面が検出され、遺構を砂の堆積が厚く覆っていたことから、ＳＸ19の埋没は少なくとも２回の洪水によるものとみられる。戦国時代の最上層の遺構としてＳ３（３期）がある。Ｓ３の検出面より50cm下で第２遺構面が検出され集石状遺構ＳＲ３（２期）が確認された。第３遺構面（１期）は、ＳＸ19基盤地形上に石組５、ＳＲ１、Ｓ４が築かれる。

ＳＸ28（別添２図）

５区Ｊ～Ｋに跨る位置。矩形の突出部を持つ長方形状のプランを呈する。15～25cm前後に灰茶褐色



第17図　1区北壁土層、SX1実測図

砂粘質土を埋め立てた特殊な整地面である。この付近の地盤は、洪水堆積砂が一帯を覆っており最も不安定である。ＳＸ28の中央部をＳＤ４が切る。時期を決定できる遺物の出土はないが中世洪水堆積層の上面に築かれている。

石組１（第19図）

１区Ｇの東側北壁寄りの位置。扁平に近い川原石４枚を囲炉裏状に組み合わせた遺構。直径約45cm。北側の２つの石が接する外側空間部分に焼土ブロック（網点部分）が検出されたが、石組自体は焼けた形跡が認められない。石組は、水平をかなり意識して配置しているように思われる。付近から戦国時代のかわらけ細片が若干出土した。

石組２（第19図）

１区Ｊの北西寄りの位置にあり、SX１の内部に取り込まれている。10cm大の不定形な礫７個を円環状に組み合わせる。直径約30cm。石組１に良く似ており、焼けた形跡が無く、水平を意識して配置されたようであり、遺物を伴わない。

石組５（第19図）

４区Ｉの西寄りの位置にあり、ＳＸ19の形成後のその中に築かれた。長さ38cm大と長さ26～28cm大の枕状を呈する川原石がそれぞれ２個と15cm大の円板状を呈する川原石や四角形状を呈する石材等８個が南北70cm、東西65cmの範囲に石組みされた状態で検出された。その南側部分に10cm以下の不定形な円礫12個程度と10～22cm大の石材６個が東西長さ1.5ｍの範囲に僅かに蛇行する線状分布（標高17.8ｍの等高線に沿う）をみせる。石組５の北側部分は、遺構の保存状態が比較的良かったが、これに対して南側の過半部が崩壊した状態と思われる。北側に接する位置で、中国製の染付皿とかわらけ、土鍋が出土している。

Ｓ１（第19図）

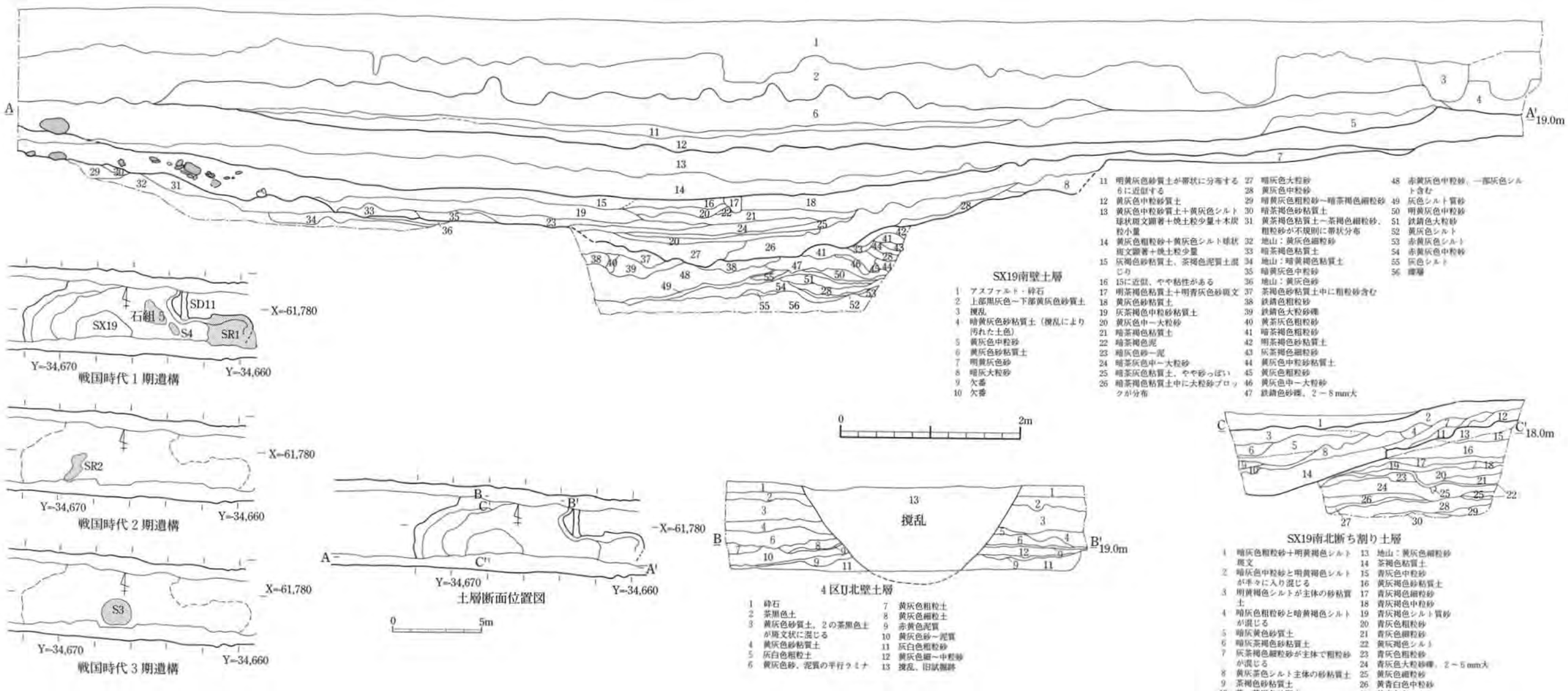
１区Ｆの西側北壁寄りの位置にあり、10cm内外の大きさの不定形礫が20cm四方の範囲内に50個ほど密集する。礫は３cm大と８cm大程度のものが目立ち大きさについて石材の選択性が感じられる。

Ｓ２（第19図）

１区Ｎの南西に位置する。５cm内外の大きさの不定形礫40個程度が東西30cm、南北20cmの範囲内に密集する。５cm大の礫が主体的になり、３cm大の小粒の礫も目立つ。伴出遺物には青磁碗底部を利用した加工円盤がある。ＳＸ１の範囲内に取り込まれる。

Ｓ３（第19図）

４区ＩＪに跨った南壁寄りの位置にある。東西1.6ｍ、南北1.5ｍのＤ字状を呈するプランで、南側

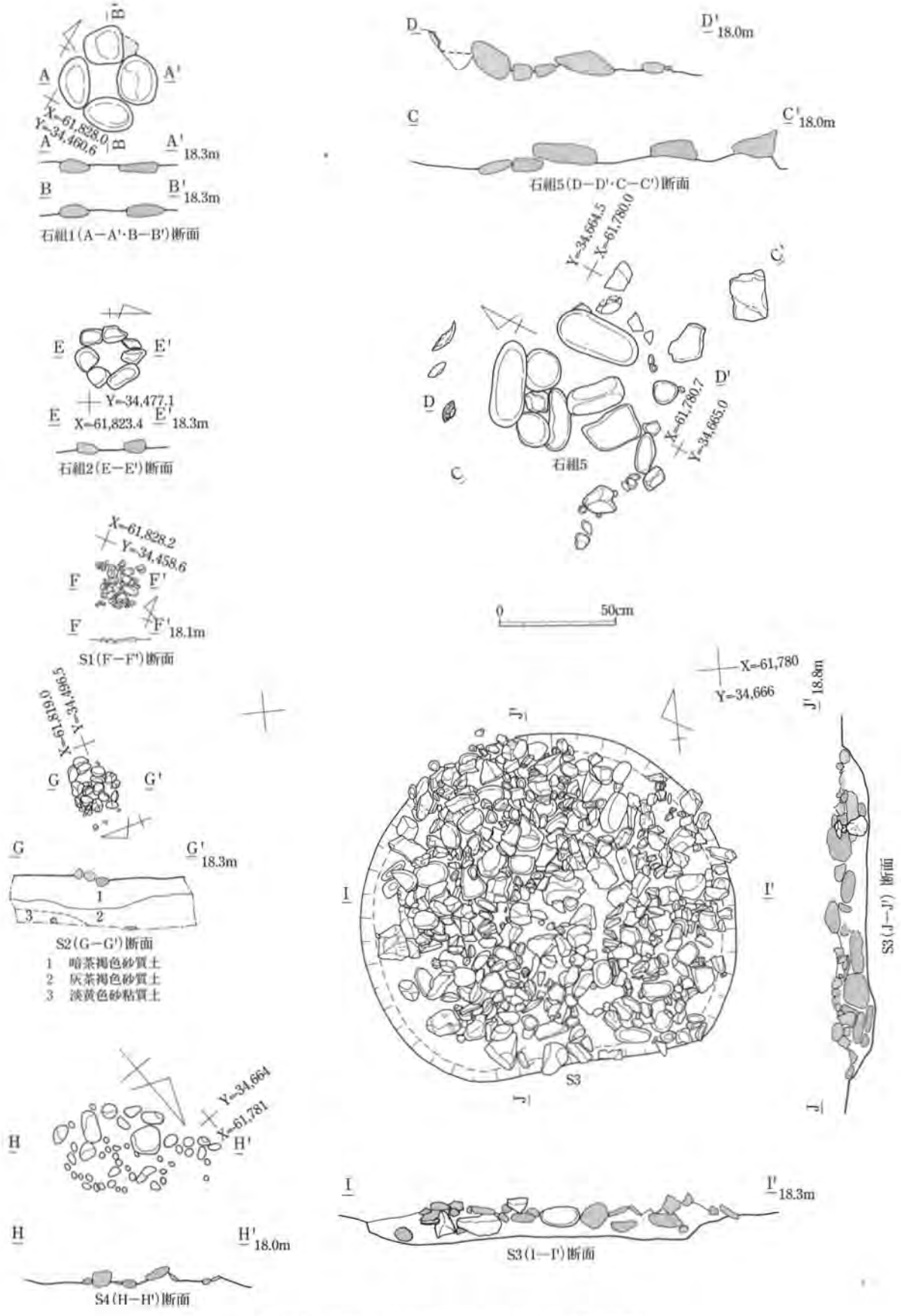


1 砕石
2 茶黒色土
3 黄灰色砂質土，2の茶黒色土が斑文状に混じる
4 黄灰色砂粘質土
5 灰白色粗粒土
6 黄灰色砂，泥質の平行ラミナ
7 黄灰色粗粒土
8 黄灰色細粒土
9 赤黄色泥質
10 黄灰色砂～泥質
11 灰白色粗粒砂
12 黄灰色細～中粒砂
13 搅乱，旧試掘跡

1 アスファルト・砕石
2 上部黒灰色～下部黄灰色砂質土
3 攪乱
4 暗黄灰色砂粘質土（攪乱により汚れた土色）
5 黄灰色中粒砂
6 黄灰色砂粘質土
7 明黄灰色砂
8 暗灰大粒砂
9 欠番
10 欠番
11 明黄灰色砂質土が帯状に分布する 6 に近似する
12 黄灰色中粒砂質土
13 黄灰色中粒砂質土＋黄灰色シルト球状斑文顕著＋焼土粒少量＋木炭粒小量
14 黄灰色粗粒砂＋黄灰色シルト球状斑文顕著＋焼土粒少量
15 灰褐色砂粘質土，茶褐色泥質土混じり
16 15に近似，やや粘性がある
17 明茶褐色粘質土＋明青灰色砂斑文
18 黄灰色砂粘質土
19 灰茶褐色中粒砂粘質土
20 黄灰色中～大粒砂
21 暗茶褐色粘質土
22 暗茶褐色泥
23 暗灰色砂～泥
24 暗茶灰色中～大粒砂
25 暗茶灰色粘質土，やや砂っぽい
26 暗茶褐色粘質土中に大粒砂ブロックが分布
27 暗灰色大粒砂
28 黄灰色中粒砂
29 暗黄灰色粗粒砂～暗茶褐色細粒砂
30 暗茶褐色砂粘質土
31 黄茶褐色粘質土～茶褐色細粒砂，粗粒砂が不規則に帯状分布
32 地山：黄灰色細粒砂
33 暗茶褐色粘質土
34 地山：暗黄褐色粘質土
35 暗黄灰色中粒砂
36 地山：黄灰色砂
37 茶褐色砂粘質土中に粗粒砂含む
38 鉄錆色粗粒砂
39 鉄錆色大粒砂礫
40 黄茶灰色粗粒砂
41 暗茶褐色粗粒砂
42 明茶褐色砂粘質土
43 灰茶褐色細粒砂
44 黄灰色中粒砂粘質土
45 黄灰色粗粒砂
46 黄灰色中～大粒砂
47 鉄錆色砂礫，2～8 mm大
48 赤黄灰色中粒砂，一部灰色シルト含む
49 灰色シルト質砂
50 明黄灰色中粒砂
51 鉄錆色大粒砂
52 黄灰色シルト
53 赤黄灰色シルト
54 赤黄灰色中粒砂
55 灰色シルト
56 礫層

1 暗灰色粗粒砂＋明黄褐色シルト斑文
2 暗灰色中粒砂と明黄褐色シルトが半々に入り混じる
3 明黄褐色シルトが主体の砂粘質土
4 暗灰色粗粒砂と暗黄褐色シルトが混じる
5 暗灰黄色砂質土
6 暗灰茶褐色砂粘質土
7 灰茶褐色細粒砂が主体で粗粒砂が混じる
8 黄灰茶色シルト主体の砂粘質土
9 茶褐色砂粘質土
10 茶～黄灰色砂質土
11 暗灰茶褐色砂礫，2～4 mm大＋茶褐色シルトブロック
12 帯茶黄灰色粘質細粒砂
13 地山：黄灰色細粒砂
14 茶褐色粘質土
15 黄灰色中粒砂
16 黄灰褐色砂粘質土
17 青灰褐色細粒砂
18 青灰褐色中粒砂
19 青灰褐色シルト質砂
20 青灰色粗粒砂
21 青灰色細粒砂
22 黄灰褐色シルト
23 青灰色粗粒砂
24 青灰色大粒砂礫，2～5 mm大
25 黄灰色細粒砂
26 黄青白色中粒砂
27 黄青白色シルト
28 黄青白色中～大粒砂
29 鉄錆色砂礫
30 青灰白シルト

第18図　ＳＸ19土層実測・遺構変遷図



第19図　石組１・２・５、Ｓ１～４実測図

の直線部分が長さ１ｍ程である。深さ15cmほどの掘り込みに大量の礫が廃棄されたような状態で瀬戸美濃陶器片や砥石等の石製品が多く混入する。今回扱った集石遺構としては、土坑内の礫廃棄に近い性質を持つが、石の密集度が非常に高く石材も大小様々で、遺構が作られた目的はわからない。ＳＸ19が完全に埋没した後に築かれている。

Ｓ４（第19図）

４区Ｉのやや東、南壁寄りに位置する。ＳＸ19形成後その中に築かれた。。長軸方向は、北から45度前後西に振る。南北長70cm、東西幅40cmの変形楕円形状のプランを持ち、長軸の東半分の範囲は３cm大の小円礫が密集し、西半分には、5～13cm大の円礫を５個程度含み全体に礫が東側より大きいものとなっている。遺構の範囲内から少量の鉄片が出土した。

ＳＲ１（第20図）

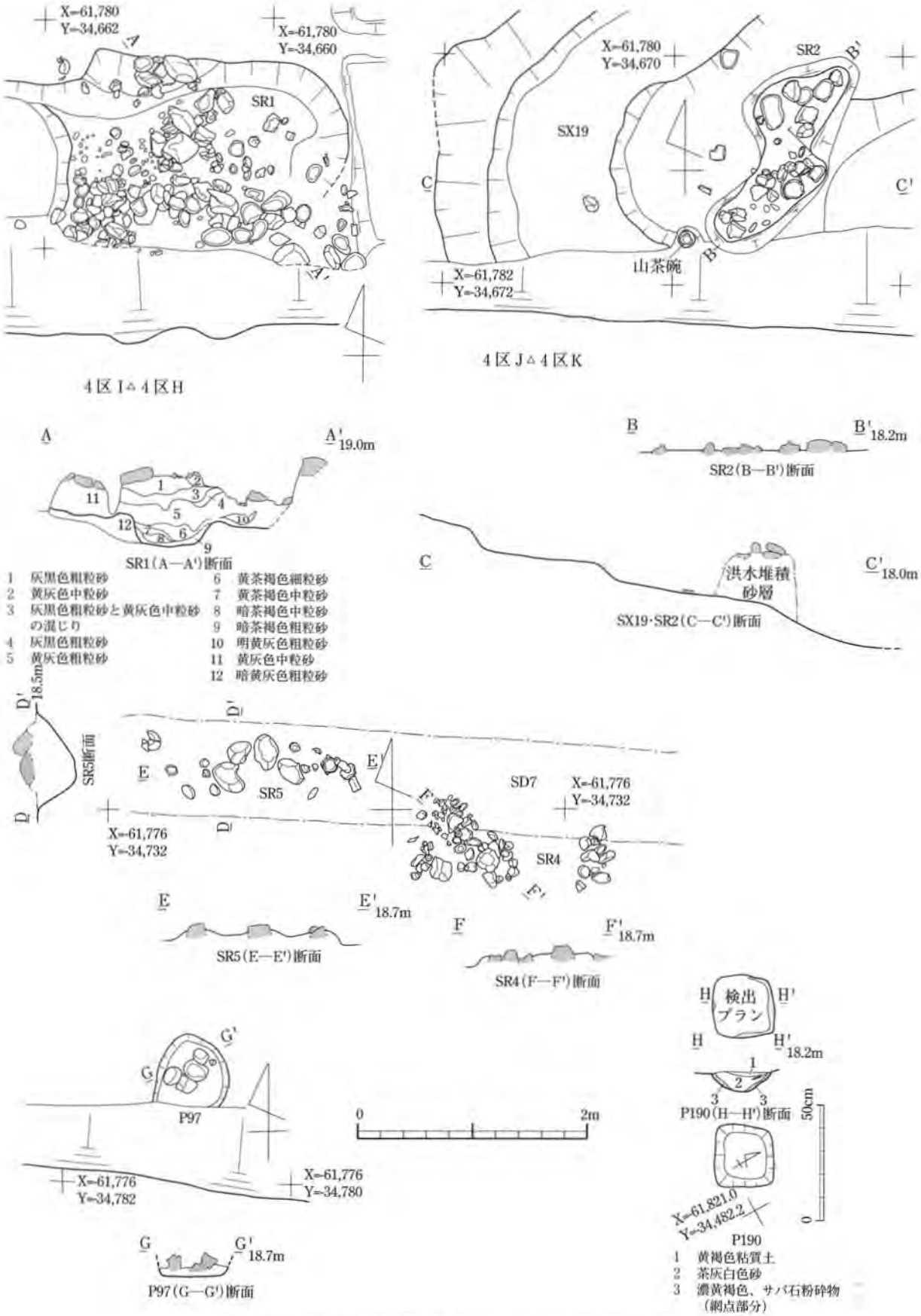
４区ＨＩに跨る位置で、南壁に深く入り込むものと思われる。ＳＸ19形成後築かれた。概ね東南位置にある石材は30cm内外の川原石が多く、石列状を呈し南壁に接している。石列状の北側は、東西2.4ｍ、南北幅1.1ｍの西側に開いた箕の様な凹状地形で、東寄りに10～30cm大の礫が堆積砂の中に入り混じる。西側底面には、２～５cm大の小粒の礫が東西70cm、南北50cmの範囲内に敷き詰められた様な状態で検出された。発掘区域外の遺構の状態について知ることが出来ないためＳＲ１の性格は不明である。石列状の礫分布と集石状に小粒の礫が密集する部分を見る限り何等かの目的で人為的に築かれたものかもしれないが、洪水によって大量の砂礫を被っており、自然か人為的かとなると一概に決し難い。礫中には、破損礫や被熱痕のある礫が多く含まれる。また、砥石や研磨痕、敲き痕を有する石材が多く含まれており、戦国時代に集落内で使用されたであろう石材が多く含まれる点が注意される。

ＳＲ２（第20図）

４区Ｊの南壁に接する位置にある。ＳＸ19内の洪水堆積が一度おさまって地盤が安定してから築かれた。標高18.1ｍ前後のレベルで扁平な川原石が含まれ石敷状を呈する。長軸方向は、北から東へ30～40度振れて平行四辺形状のプランを成し、南限に山茶碗の底部破片が出土した。石材は火を受けて黒色化あるいは赤色化するものがあり破損するものが含まれる。ＳＸ19の底面にある石組５とＳＲＩが戦国時代の遺構であり、ＳＲ２の上層に築かれたＳ３も戦国時代の範疇に入る瀬戸美濃陶器片を多く出土しているため、中間層位にあるＳＲ２は出土遺物が少ないが戦国時代に帰属するものであると考えて良いであろう。

ＳＲ４（第20図）

５区ＧＨに跨る位置にあって、ＳＤ７の埋没後に出現する。ＳＲ４は北側の一部がＳＤ７の埋土上部に乗っており、大きく東西２群に分かれる。東群は、南北60cm、東西30cmの範囲に15cm大の礫が主体的に構成される。西群は、南北80cm、東西90cmの二等辺三角形状の範囲に５cm大の礫を主体に



第20図　ＳＲ１・２・４・５、Ｐ97・190実測図

して、20cm大の礫２個程度を含む密集度の高い集石状の遺構である。石材の中には破損礫が多く、被熱痕のある礫も若干みられ、かなり使い込まれた砥石２点が出土している。

ＳＲ５（第20図）

５区Ｇの東寄りに位置し、全体がＳＤ７の埋土上部に乗る。東西1.6ｍ、南北60cmの範囲内に20～30cm大の礫４個を中央に挟んで東西に5～15cm大の礫数個がみられる。遺物として、山茶碗類やかわらけが若干出土した。破損礫や火を受けた礫は２～３個程度で多くない。

ＳＲ８（第15図）

６区ＫＬに跨り、ＳＤ７埋土の上に乗る。東西２ｍ、南北１ｍの範囲に20cm前後の円礫が主体となり重複する。破損礫や火を受けた形跡のみられる礫は少なく、大半が完形の円礫である。礫群の中に擂鉢片があり、東側にも同一個体の破片が２片あって接合したところ口縁部を欠き、底部に穿孔を持つものであった。

（５）近世～現代

近世から現代に至る遺構は発掘区の全域で検出されている。保存状態の良い特徴的な遺構について記述する。この地域は一体が洪水堆積による砂で覆い尽くされている。現在微高地状の部分はかつて桑畑等に利用されていたらしく、今でも付近に桑畑の一部が僅かに残っている。２～３区で検出された土取り跡は、近在の民家の壁土に利用するため土を採掘した跡とみられ、旧家の土蔵に須恵器片が数個露出している例を堀田地区の民家の土壁でみることができた。これらの土砂採掘坑は埋土が共通することから、一回の洪水で埋まったものと思われる。また、遺跡地は岐阜師範学校、岐阜大学が建設されたところである。学校関係の可能性のある遺構としてＳＫ１、ＳＸ23がある。

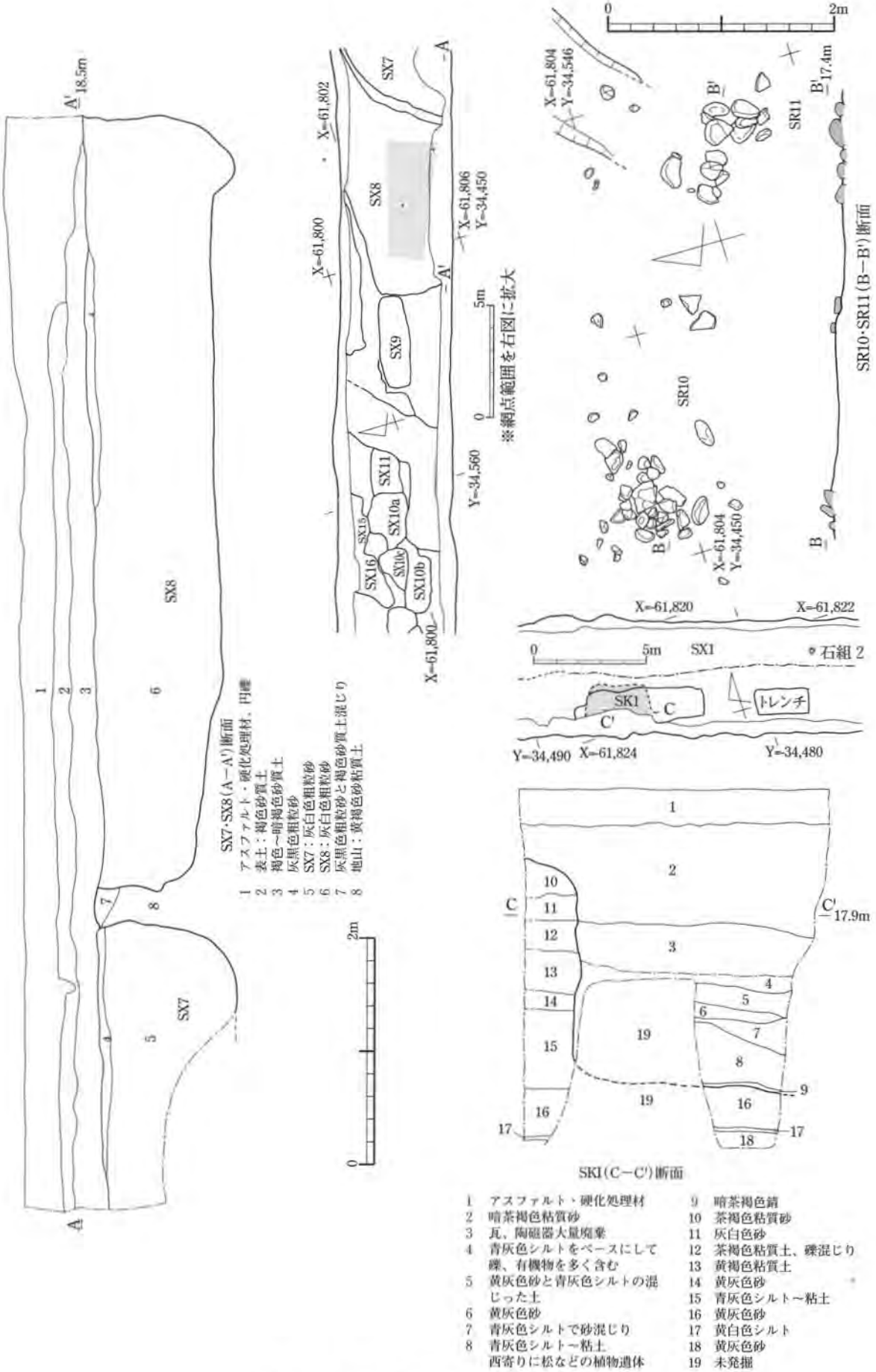
ＳＫ１（第21図）

１区Ｌ南壁に入り込む位置にあり、東西2.9ｍ、南北1.2ｍの発掘範囲に限られ、全体の規模は不明であるが、方形状のプランを呈するであろう。ＳＫ１は主に瓦、陶器、磁器など不燃ゴミの廃棄を目的とした小規模のゴミ捨て穴と思われる。検出面からの深さが1.8ｍ程あって、立ち上がりが垂直である。底部から厚さ60cmほどが、主に青灰色シルト～粘土質の堆積であるが、有機質が多く含まれていたため、土壌を採取して花粉分析を実施した。

ＳＫ10（別添３図）

６区ＧＨに跨る。東西4.25ｍ、南北1.1ｍ、深さは、西側の立ち上がりが最も深くて40cm。東側の立ち上がりが、20cmと最も浅い。底面は、緩やかなステップ状を呈する。埋土中からやや大きめの土鈴２点が出土した。

ＳＫ14（別添３図）



第21図　ＳＲ10・11、ＳＫ１実測図

6区C東寄りの南壁に入り込む位置に有り、全体プランの北側半分を発掘した結果ほぼ正方形に近い形状を呈する土坑と思われる。東西径1.75m、深さ40cmの規模。

SX2（別添1図）

2区GFに跨る。東西5.8m、南北発掘範囲は3mで、全体規模は不明ながらこの種の遺構としては大規模である。内部は洪水堆積と思われる灰白色砂で満たされる。土砂採掘坑。

SX3（別添1図）

2区GHに跨る。東西3.8m、南北発掘範囲は3.2mで全体規模は不明。内部は洪水堆積と思われる灰白色砂で満たされる。土砂採掘坑。

SX4～5（別添1図）

2区HIに跨る。当初の遺構検出では、SX4、5の区別は出来なかったが、発掘途中で不自然な壁の掘り残しが確認され、SX4、5と区別した。したがって、当初の出土遺物はSX4、5のどちらに帰属するかわからないが内部の堆積砂は同時期の洪水等で埋没した状況であり、時期差を考慮する必要がない。発掘範囲の限界で平面形状をとらえることが出来なかったがSX3に隣接して、方形状に掘り進める途中で洪水によって埋没した可能性がある。土砂採掘坑。

SX8（別添1図）

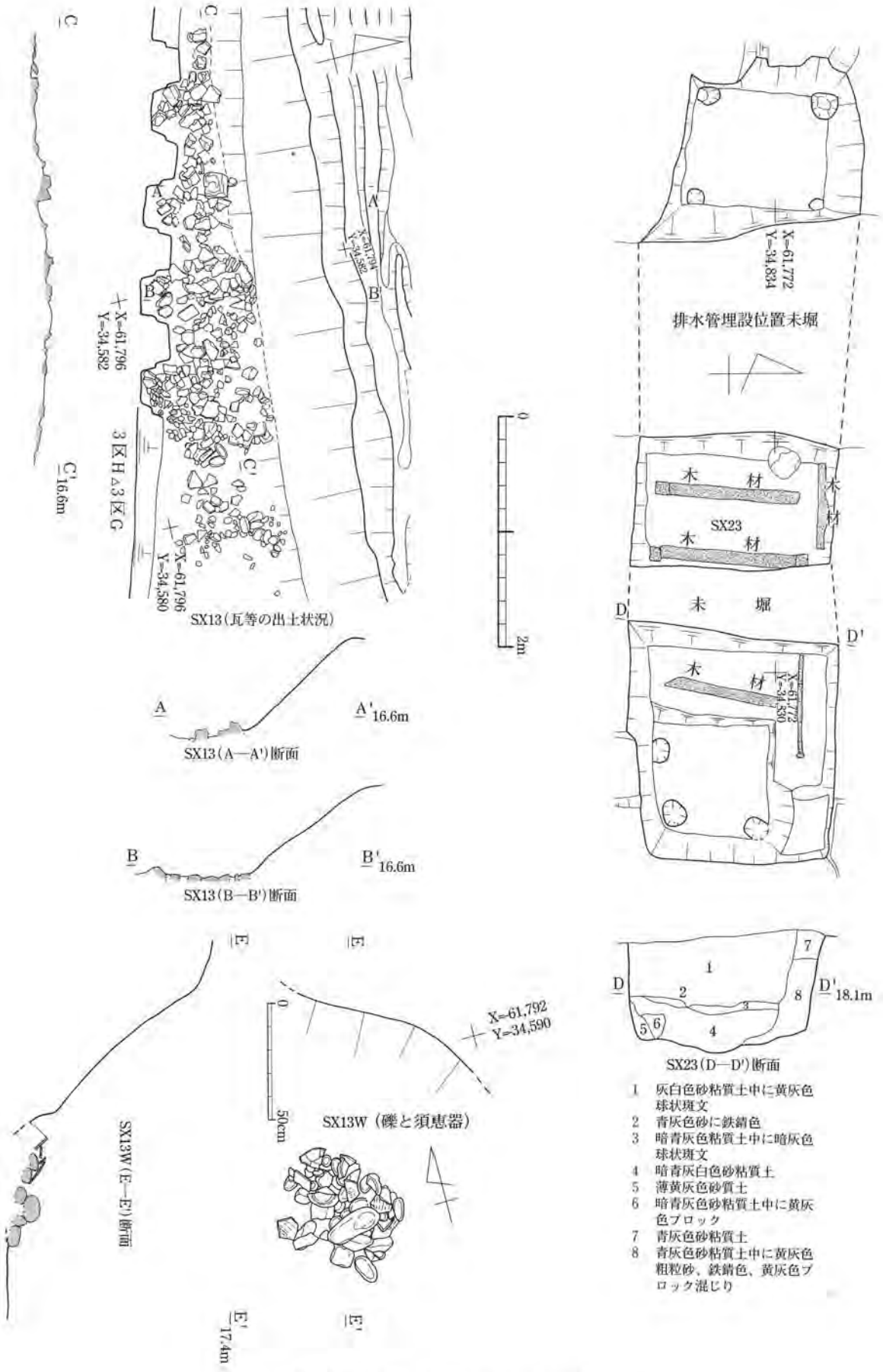
2区J、3区ABに跨る。土砂採掘坑と見られる遺構の中では、面積的に最大級となるが、SX2、3と比較するとかなり浅い。東に隣接するSX7が円弧状に曲がるため東西幅の計測が適切ではないかもしれないが、中央部で8mに及ぶ。南北幅については、発掘区域外になるため計測出来ない。南壁のセクションでは、立ち上がりが鋭く垂直になり、深さ1.1mを測る。底面南壁付近の2ヶ所に川原石の密集するSR10、11がみられる。土砂採掘坑。

SX9（別添1図）

3区Bの中央部に位置する。長方形状を呈し、東西長4.1m、南北幅1.4m、深さ55cmを測る。土砂採掘坑。

SX13・13W（第22図）

SX13は、3区E～Iに跨る溝状の遺構で、SX13W（SX13の西側）は3区I～Kに跨る北に張りだした部分を発掘した。遺構全体の発掘ではないため、いずれも遺構の性格がはっきりしないが、SX13・SX13Wは3区Iで区切れることなく連続する遺構と思われる。SX13・13Wの北側に開かれた畑の畝は、遺構の肩部ぎりぎりまで迫るが畝の方向はSX13・13Wの上端ラインに沿って並行関係になる。畑の上を覆っていた洪水堆積砂は、20cm前後でSX内にはさらに厚く堆積していた。この洪水堆積砂は先述の土砂採掘坑を覆っていた砂層と一連の洪水に由来する可能性が高い。SX13・13



第22図　ＳＸ13・13Ｗ・23実測図

Wの下半分の堆積土は青灰シルト～暗灰色粘土質の泥で、礫層上面で鉄錆色の沈殿があり、貯水あるいは排水路的な役目があったのかもしれない。ＳＸ13の３区ＧＨの範囲内に大量の瓦製品と焼土ブロックが廃棄された状態で出土したが、これらについては瓦窯の窯壁材の可能性が高い。また、ＳＸ13Wから大量の円礫が廃棄された状態で出土しているが、北東コーナー部分では礫に混じって須恵器がまとまって出土した。

ＳＸ23（第22図）

６区ＡＢに跨る位置。長方形状プランを呈し、東西長７ｍ、南北幅1.85ｍ、深さ１ｍの土坑状の掘り込みで、立ち上がり角度は80度をこえる急角度。立ち上がり部分に接して70～80cm間隔で木柱が地面に直接立てられ、梁が組まれる。遺構の性格は良くわからないが、半地下施設を持った建築の一部であろう。

ＳＲ10・11（第21図）

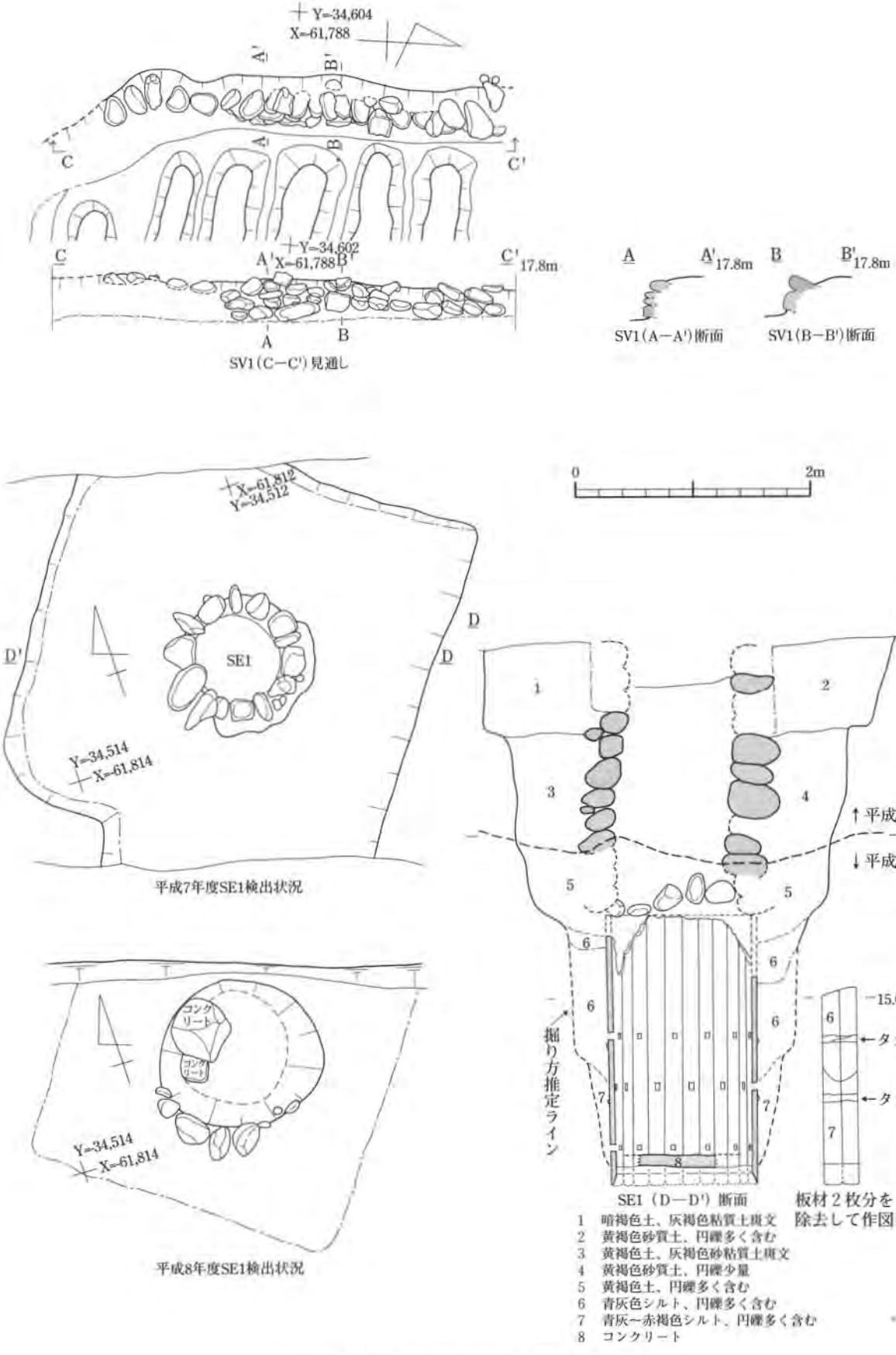
ＳＲ10・11はＳＸ８の下底面に密集する礫群で、本来は１つの遺構としてとらえるべきかもしれない。ＳＲ10は３区Ａの中央やや南寄りの位置にあり、東西2.5ｍ、、南北1.5ｍの範囲に20～30cm大の石９個、5～15cm大の石が30個以上入り混じって散乱する状況で、東側にまばらに分布を広げる。破損礫や焼けた形跡のみられる石材も含まれるが、遺構の性格ははっきりしない。単なる石材の集中廃棄か土取りの際の足場に利用したものかもしれない。ＳＲ11は３区ＡＢに跨り、南壁際で検出されたため礫群の範囲は確定できないが、礫の現状での検出範囲は、東西1.2ｍ、南北１ｍ。

Ｈ１・Ｈ２（別添１図）

３区Ｆ～Ｎにおいて畑の畝が良好な状態で発掘された。その他の発掘区内でも畑の耕作土は確認されているものの、遺存状態が極めて悪く面的に発掘出来たのは本調査地区に限られる。畑の畝の検出が良好であったのは、畑が洪水堆積砂で完全に埋もれていたため、砂をきれいに取り除いたところ耕作面が容易に検出されたためである。畑の土壌を調べたが栽培植物は特定出来なかった。Ｈ１は３区Ｆ～Ｌの範囲で東西方向に畑の畝を切っている。３区Ｉの中央付近で畝の切れ目が読みとれる。このほか、３区ＧＨと３区ＩＪで畝が部分的に途切れるのは南側にＳＸ13・13Wが存在するためであろう。Ｈ２はＨ１より一段高い位置にあって、東側に川原石積みの簡単な石垣を境にして幅１ｍ前後の南北方向の小道？を挟んでいる。南側には東西方向にピット状の掘り込みが連続している。尚、北側は東西方向の短冊形の掘り込みが並列する。

ＳＶ１（第23図）

３区Ｌの西側に位置する南北方向の石垣で、長径20～30cmの枕状を呈する川原石を主体的に用いて２～５段に石積みする。石材は、割れ石等も多少みられるが、短側面（小口面）を正面に向けて石組みされる。特に石垣の南側部分は小形の円礫が多く積み重なり、石垣積みの状態ではなかった。目的は明らかでないが、おそらく石積みの石材を抜き取ったため東に張り出した感じで裏込めの礫が崩れ



第23図　ＳＶ１・ＳＥ１実測図

たのであろう。

ＳＥ１（第23図）

２区ＤＣに跨る位置。平成７年に上部を検出し、断ち割り調査を実施した。平成８年には下層の発掘調査のため鋼材で架設を行って下部の調査を実施した。平成７年調査では、東西幅3.4ｍ、南北長不明、南に張り出しを持った方形プランを呈する井戸の掘り方を検出。掘り方の長軸方位は、北から東へ35度振れる。中心部は内径70～75cmの円形プランに川原石積みの石壁とする。石材は付近の川原で採取した20～50cm大の枕状の円礫が使用され、短側面（小口面）を内側に向けて積み重ねる。北側半分を断ち割り、深さ２ｍ程度掘り下げたが、掘り下げ途中で北壁が崩落し危険な状態となったため翌年度に調査を継続した。平成８年に下層部の調査を行い、石積み遺構の下に木製の井戸枠構造を確認した。松、高野槙が使用されているらしい。井戸枠材は、幅15cm前後で、長さ2.35ｍ、厚さ５cmの板で、下端部を片刃状に削り込んで地山に突き刺すようになっている。上端部は腐食のため遺存状態が悪かったが、おそらく平坦に仕上げられていたであろう。板材には下端部から80cm程度上に長さ５cm、幅３cm程度の長方形窓が開いているものと、下端部から30cm程度上とその上に90cm近く間隔を置き長方形窓を穿つ２種類の板があり、これを交互に円筒の樽形に組んでいる。発掘作業において、標高14ｍ付近まで内部の埋土を除去したところ、板材に穿たれていた方形の窓から水がこんこんと湧き出し、井戸底の砂礫面まで掘り下げた段階で底面からも水がブクブク湧き出してきた。板材の下端部から３段目（約1.3ｍ上）の窓部分で水位を一定に保ち調整する仕組みとなっているらしく、小形水中ポンプをフル回転しても完全に排水できなかった。井戸の下部には厚さ10cmほどの粒子の粗い砂や磁器片の混じったコンクリートの板が残っており、この直上部で現行の１円硬貨30枚以上が発見された。同時に手づくねの焼き物で灰皿が出土した。 上層調査の時エンビ製のパイプの息抜きが垂直に入っており、井戸の埋土中に50cm角のコンクリートブロック、硬化処理剤が大量に入っていた。井戸が作られた時期を特定できる遺物は確認出来ない。

注

1　岐阜県美濃加茂市の野笹遺跡で敷石遺構と堰のある大溝が発掘された。同遺跡における（財）岐阜県文化財保護センターの発掘調査による所見では、「この敷石遺構は、水をせき止めて、ある程度水深のある場所で作業をする際の足場のようなものであったと考えられます。」と野笹遺跡現地説明会資料（1997･11･15）に解説されている。城之内遺跡で見つかったＳＤ２の堆積砂に埋もれていたＳＲ（６・７・９・12・13）は、野笹遺跡と同様な性格の遺構である可能性もあり、溝内部に設けられた足場の一種（堰）ではないかとみることもできるが、筆者はＳＲについて、自然によるものか人の手によるものか明確な根拠を持っていない。

2　凝灰岩質の黄褐色砂岩で、かなり脆いが加工が容易であるため岐阜県可児市付近では、古代から石棺材や岩盤を穿って横穴墓を築いた。また、登り窯の窯壁を作る際に赤土と混ぜ、敲き締めると強度が増すらしい。最近まで石段や手水鉢、竈材に加工されていたようである。

第４章　遺物

第１節　遺物の分類

遺物の分類は、基本的に「城之内遺跡－長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査－（第１分冊）」の分類に準じる[注1]。今回報告した土器の一部について以下に簡単な解説を行う。

Ｓ字甕　口縁部が受口状に屈折し、上外方に伸びる台付甕で、形態、技法、胎土等の緊密性が高い。

Ａ類…口縁部第２段の外面に押し引き刺突をもつもの。

ＢＣ類…Ａ・Ｄ類以外のＳ字甕。従来の定義ではＢ類とＣ類の境界部分の区別が困難なため、ここでは両者を一括して扱う。

Ｄ類…口縁端部が肥厚するか、肥厚して先端に面をもつもの。Ｄ１～Ｄ３類に細分。

Ｄ１類…器壁の厚さや屈曲の形態がＢＣ類と同じもの。

柳ヶ坪型壺　口縁部に二重口縁技法を持ち、口縁部内外面羽状・胴部上半に横線文＋波状文＋横線文のハケメ加飾をもつもの。口縁部と胴部の加飾は同じハケメ工具による可能性がある。底部外面に木葉痕を残す。肉眼観察による限り、胎土は赤色粒子を含むなど共通性が高い。

有段高杯　杯部は直線的あるいは内彎気味に上外方に伸びる。脚部は短く、中途で屈折内彎する。脚部に円孔が開けられ、杯部内外面、脚部外面をミガキ調整する。

屈折脚高杯　杯部は直線的あるいは外反して上外方に伸びる。脚部は有段高杯より長く、脚上半部は棒状で下半部は屈折して外に開く。器壁が薄く、杯部内外面、脚部外面をミガキ調整する精製土器と器壁が厚くナデ調整を行うものが見られる。ナデ調整を行うものは大小２分可能で、大形のものには杯部外面段部に垂下稜を貼り付けるものが見られる。

杯部椀形高杯　杯部は椀形を呈し、端部は短く外折する。脚部は緩やかに外方に開き、先端で内折する。胎土は赤色を呈する。

平底甕４類　平底甕で、濃尾型と異質なもの。口縁端部に面を持つものが多く、胴部外面下半には縦ハケ後に横方向のハケが特徴的に見られる。９世紀頃の遺跡に散見される。

中世前半のかわらけ（土師器皿）

Ｍ類　内面底部一方向ナデ後、内面～外面口縁部を横ナデ調整するグループ。大小２法量を基本とする。時代が新しくなるにつれてナデ手法の簡略化、器壁の薄化、大形品の口径の縮小化等の傾向が見られる。口縁端部形状、器壁の厚さ、ナデ手法などからＭ１～Ｍ４の４つに細分できる。この４つは各々時間的変化を示すと考えられる。

Ｍ２類…外面１段ナデが主体。大形品では口縁端部に独立したナデ調整が施され、結果として口縁端部に面あるいは丸味を持つものが多い。厚さはＭ１類より薄くなる傾向がある。

Ｍ３類…外面１段ナデ。口縁先端を特に調整せず、端部は尖る形状のものが多い。器壁はＭ２類よ

りさらに薄くなる。

M４類…外面１段ナデ。器壁は２～３㎜と最も薄い。口端部が内彎気味のものが見られる。

中世後半のかわらけ（土師器皿）

井川祥子氏の分類に基づき、本報告に掲載されたものの説明を行う[注2]。

Ａ３類…底部内面一方向ナデ、体部内面と外面の一部をナデ調整する。体部は直線的である。京都及び美濃以外からの搬入品、もしくは美濃で忠実に模倣したものとされる。

Ｂ２類…形態・調整手法はＡ類と似ているが、全体的に器壁が厚く、口縁端部の調整が雑である。体部が直線的なもの。京都系のかわらけを模倣した在地産のものとされる。

Ｃ２類…内面に一方向ナデを施す。外面無調整で凹凸の無いもの。京都のかわらけに原型を求めにくいものとされる。

Ｄ１類…小形品。底部内面を一方向ナデ。体部を横ナデする。Ａ、Ｂ、Ｃとは別系譜とされる。

第２節　遺物

遺構出土の遺物を主として時期毎に概略を述べる。遺物の詳細に関しては観察表を参照されたい。時期区分は第４表のとおり行う[注3]。ＳＤ６出土金銅製銚子については第３節で述べる。

遺物時期	説明	フォーラム編年
1期	縄文晩期	
2期	弥生前期	
3期	弥生中期前半(朝日式併行)	
4期	弥生中期後半(貝田町式併行)	
5期	弥生中期末(高蔵式併行)	
6期	弥生後期(山中式併行)	Ⅰ期
7期	弥生終末期(欠山式・廻間Ⅰ式併行)	Ⅱ期
8期	弥生終末期(元屋敷式・廻間Ⅱ式併行)	Ⅲ期
9期	古墳時代(廻間Ⅲ式・松河戸Ⅰ式併行)	Ⅳ期
10期	古墳時代(松河戸Ⅱ式併行)	Ⅴ期
11期	古墳時代後期(宇田式併行)	Ⅵ期
12期	古墳時代後期	
13期	7世紀後半～8世紀前半	
14期	8世紀後半～9世紀前葉	
15期	9世紀中葉～10世紀中葉(K14～大原2)	
16期	10世紀後葉～11世紀中葉(虎渓山1～丸石2)	
17期	11世紀後葉～13世紀初頭(3型式～5型式)	
18期	13世紀前葉～14世紀前葉(白土原1～大畑大洞1新)	
19期	14世紀中葉～15世紀後葉(大洞東1～生田2)	
20期	16世紀前葉	

第４表　遺物時期区分

（1）弥生時代終末期～古墳時代の遺構出土遺物

ＳＢ1（第24図1～3）

1・2は有段高杯。3は壷。弥生時代終末期（7～8期）。

ＳＢ2（第24図4～15）

弥生時代終末期～古墳時代後期の遺物が出土した。13・14は須恵器の高杯と高杯蓋で、廃絶時期を示す可能性が高い。

ＳＢ3（第24～25図16～34、第50図873）

古墳時代初頭の遺物がまとまって出土した。32～34はⅡ層最下部（ＳＢ3直上層）から出土したものであるが、同時期の組成を示すと考えられるのでまとめて紹介する。16～24はＳ字甕ＢＣ類。25はＳ字甕Ｄ1類で、口縁端部に明瞭な平坦面を形成する。26・27は山陰系と考えられる口縁形態の甕。29・30は外来系（畿内？）の口縁形態の甕。28は畿内系と考えられる丸底壷で、胴部外面を丁寧にヘラミガキ調整し、口縁端部をわずかに内屈させる。器壁は非常に薄い。31は畿内系の有段口縁鉢。赤褐色の胎土。32・33は屈折脚高杯の脚部で器壁は比較的薄い。外面はナデ調整。34は小形壷。これらの遺物群は9期（古墳時代初頭）の標識資料となりうる。なお、この上部（Ⅱ層）中からも同時期の遺物が多数出土している（7～9区Ⅱ層）。

ＳＢ4（第25図35・36）

35・36はＳ字甕ＢＣ類。

（2）中世の遺構出土遺物

ＳＤ2（第25～28図37～123、第52図912）

出土遺物の大多数は山茶碗で、それに伴うかわらけ、常滑、中国製磁器などが見られる。17～18期の遺物が大半を占める。遺構の年代より古い遺物として須恵器・土師器、灰釉陶器・ロクロ土師器などがある。遺物の年代の下限は山茶碗でみると、第7型式・明和1号窯式であるが、量的に多数を占めるのは第6型式のものである。溝出土という点で年代幅は長くなる可能性が高いが、この時期の器種組成を示す資料である。

42は須恵器壷で外面底部に「本」のヘラ書きがある。38は須恵器有台杯。41は須恵器杯蓋。43は須恵器甕。46～50は平底甕4類。53は灰釉陶器深椀。55は灰釉陶器輪花椀。57はロクロ土師器皿。

58～98は山茶碗で図化したものの大半は第6型式に帰属する。67は南部系の玉縁小皿。68・69・92・98は大平鉢。99～108は常滑甕で中野・赤羽編年の4～6型式（5型式主体）。109～118はかわらけでＭ2～Ｍ4類が見られる（Ｍ3類主体）。121は中国製青白磁小壷。119・120は中国製青磁碗。122は中世伊勢型鍋。912は小刀。

ＳＸ6（第29図135～137）

ＳＤ2の中に形成された遺構であり、調査所見によればＳＤ2と同時期に埋没したとされる。135はＭ2類のかわらけ。136はＭ2類相当の杯部に高台のついたかわらけ。137は常滑。18期。

ＳＸ25（第29図138～151）

138～145は南部系の山茶碗ですべて第6型式。146・147・149は伊勢型鍋で第6～7型式併行。148

は中国製青磁碗。149～151は管状土錘。

ＳＲ７（第29図153～159）

153～156は山茶碗第６～７型式。158・159は常滑甕。157ははかわらけ（Ｍ２類）。18期

（３）戦国期の遺構出土遺物

ＳＤ１（第29図160・161、第52図918）

160はかわらけ（Ｂ２類）。161はかわらけ（Ｃ２類）。20期。

ＳＤ４（第29～30図162～205、第52図917）

出土遺物にはかわらけが多く見られる。163・164は灰釉陶器深椀。165～167・169は山茶碗。168は常滑甕。170～174は古瀬戸後期の天目茶碗で後期Ⅳ新が多い。175は古瀬戸後期Ⅳ新の、177は大窯１段階の擂鉢。176は古瀬戸中期の茶入。178は古瀬戸後期の瓶子。179は中国製染付皿。180は中国製白磁碗。182～205はかわらけで、182～187はＣ２類。188～205はＢ２類。遺物は19期～20期のものが大半。

ＳＤ６（第30図206～213、第54～57図920）

206は須恵器杯蓋（東山11号窯式期）。207は山茶碗小皿。208は灰釉端反皿（大窯１段階）。209は鉄釉水滴（大窯１～２段階）。210は天目茶碗。211は古瀬戸後期Ⅳ新の擂鉢。212はかわらけ（Ｃ２類）。920は金銅製銚子（後述）。遺物は20期が多い。

ＳＤ７（第30～33図214～283、第50図874、第52図901～903・916）

214は須恵器長脚２段透し高杯。215～217は灰釉陶器。218～227は山茶碗（４型式～大畑大洞４号窯式古）。229は古瀬戸後Ⅲ～Ⅳの壺。236は香炉、232は鉢、230は擂鉢で古瀬戸後期Ⅳ古に帰属。31は古瀬戸後期Ⅳ新の擂鉢。234・235は大窯１段階の端反皿。233は花瓶。238は瓦器の脚で外面には縦方向の丁寧なミガキ調整が施される。237は中国産染付。240～252はかわらけ（Ｃ２類）。245は底部に内面から穿孔を施す。253～265はかわらけ（Ｂ２類）。261・262・264はタール痕を残す。266・267はかわらけ（Ａ３類）。器壁は薄く、丁寧に作られている。出土点数は僅少。268～283は外面底部に墨書が書かれたかわらけ（Ｂ２類）。墨書にはいくつかの種類が認められるが、意味が通じるのは270で「そうしやう」と読める。269は「上□」。遺物の大半は20期。873は敲石。901～903は砥石。916は銅銭。

ＳＤ11（第33図284～286）

284は古瀬戸後Ⅱ期の甕。285・286はかわらけ（Ｂ２類）。かわらけは20期。

ＳＫ46（第33図287～290）

287・288は山茶碗。289は台付碗（大窯１段階）。289は20期。

ＳＸ１（第33図291～311、第50図875～877、第51図879・900、第52図904・905・911）

291はくの字台付甕。292は須恵器こね鉢。外面底部から途中まで穴を穿つ。293～298は山茶碗。306は古瀬戸後Ⅲ～Ⅳの瓶。299は大窯１段階の天目茶碗。300は古瀬戸後期Ⅳ新の擂鉢。301～303は大窯１段階の擂鉢。304は大窯３段階の鉢。307は常滑甕。310・311はかわらけ（Ｂ２類）。309は中国製青磁碗。口縁部がやや外反する。875～877は敲石。879・900は磨石。904・905は砥石。911は宝篋

印塔の屋蓋部。遺物の大半は20期。

ＳＸ19（第34図313～327、第52図906・913・916）

313・314は須恵器。315～317は灰釉陶器。318は山茶碗。320は大窯１段階の擂鉢。322は壺。321は大窯１～２段階のⅢ。323はかわらけ（Ｂ２類）。324は内耳鍋。325は中国製青磁碗（口縁部端反り）。326は中国製染付Ⅲ。906は砥石。913は金銅製の目貫金具で外面に花の文様を施す。916は銅銭。20期が主体で、739は新しい年代観を示す。

Ｓ２（第34図328）

328は中国製青磁碗の底部を利用した加工円盤。

Ｓ３（第34図329～341、第50図872、第51図890～899、第52図907～909）

329・330は山茶碗。340は瓶で後Ⅲ～Ⅳ期。331は古瀬戸後期Ⅳの天目茶碗。334は後期Ⅳ新の香炉。335・336は後期Ⅳ新の擂鉢。337～339は大窯１段階の擂鉢。332は大窯１段階の端反Ⅲ。341は中国製白磁玉縁碗。890～899は敲石あるいは磨石。907～909は砥石。陶磁器の大半は20期。

ＳＲ１（第34図342～346、第51図882・884～889）

343・345は常滑。344は生田２号窯式の山茶碗。346は大窯１段階の擂鉢。882・884～889は敲石。最新遺物は20期。

ＳＲ８（第35図347）

347は大窯の擂鉢で底部に径６cmの穿孔。胴部上半～口縁部欠失。

（４）近世～現代の遺構に伴う遺物

土砂採掘坑に伴う遺物（第38～39図386～446、第50図878、第51図883）

ＳＸ２～５、８・９は土砂採掘坑で、一回の洪水で埋まったと考えられる。ここでは埋没時期に近いと思われる遺物の主なものを紹介する。396はＳＸ２・３出土の瀬戸産広東碗で19世紀前半。415はＳＸ３出土の幕末頃の瀬戸美濃産擂鉢。425はＳＸ５出土肥前？産染付Ⅲ。433はＳＸ８出土瀬戸産広東碗（19世紀前半）。439はＳＸ８出土の鳩笛で顔料をわずかに留める。最新の遺物で見ると、19世紀前半～中頃に埋没した可能性が高い。

畑・畑の脇の溝状遺構に伴う遺物（第39～40図447～474、第51図880・881、第52図914・918、第53図920）

上下２段の畑（Ｈ１・２）と段部に築かれた石垣（ＳＶ１）、畑脇の溝状遺構（ＳＸ13・13Ｗ）は全て一連の洪水堆積砂層で覆われていた。この砂層は先述の土砂採掘坑の埋土と同時期に形成された可能性が高い。最新の遺物の主なものを紹介する。454はＳＸ13出土の常滑甕。465はＳＸ13Ｗ出土の擂鉢（19世紀前半）。472は瀬戸美濃産小瓶（近代？）。474はＳＶ１出土の瀬戸美濃産瓶類（19世紀）。918はＳＶ１出土の銅銭（至道元宝）。920はＳＸ13出土の瓦窯の分焔柱の一部と考えられるものである。桟瓦を打ち欠いて平面正方形の板状に成形し、それを重ねて心材とする。心材の回りに粘土を貼り付けて表面を平滑に仕上げている。ＳＸ13からはこの他にも瓦窯の一部と考えられる瓦片や窯壁片が多数出土している。畑関連遺構出土遺物には近代に下がる可能性のあるものもあるが大半は幕末までの遺物で占められる。

ＳＫ１（第35～37図348～383）

ゴミ捨て穴と考えられる遺構中に大正時代を主体とする瀬戸美濃産の磁器等が大量に廃棄されていた。349は型紙摺りの染付碗。350は銅版摺り染付碗で体部を削る。354はゴム印使用の染付碗。359は吹き技法使用の小杯。364は銅版摺りの皿で機械ロクロ使用。367は肥前？産の染付鉢。375は徳利。373は手水鉢。377は白錫徳利。378は常滑産の容器（把手付）。379～382は瓦。383は竈。ＳＫ１出土磁器の器種は小杯、碗、皿、徳利、擂鉢など多岐にわたり、この時期の食器組成の一端を示す。

（５）その他の出土遺物

ここでは７～９区Ⅰ・Ⅱ層出土の弥生時代終末～古墳時代初頭等の遺物と４区から出土した古瀬戸水注を紹介する。

７～９区Ⅱ層（第45・46図696～734）

下部に弥生時代終末期～古墳時代の住居跡が存在しており、層中の遺物にもその時期のものが多く見られる。698は受口甕。712は類例の乏しいくの字甕で、胴部内面をヨコハケ調整後縦方向にヘラケズリ調整する。700はＳ字甕Ａ類。702・705・706・707・710はＳ字甕ＢＣ類。703・704はＳ字甕Ｄ１類。709はＳ字甕を模倣したものと考えられる。718・719は柳ヶ坪型壺。713は壺の口縁部と考えられるものであるが、外面をヘラミガキした後穴を途中まであける特異なもの。727は畿内系と考えられる甕。728はＸ字型器台の脚部。729は土師器杯。724～726は杯部椀形高杯の脚部。717は二重口縁壺。722・723は屈折脚高杯の脚部。

７～９区Ⅰ層（第48～49図830～867）

830・831は縄文晩期？土器。833はＳ字甕ＢＣ類（Ｂ的）。832は有段高杯の杯部で内面に多条沈線と八の字状の文様を巡らす。840は二重口縁壺。841は柳ヶ坪型壺。

層不明（第48図803）

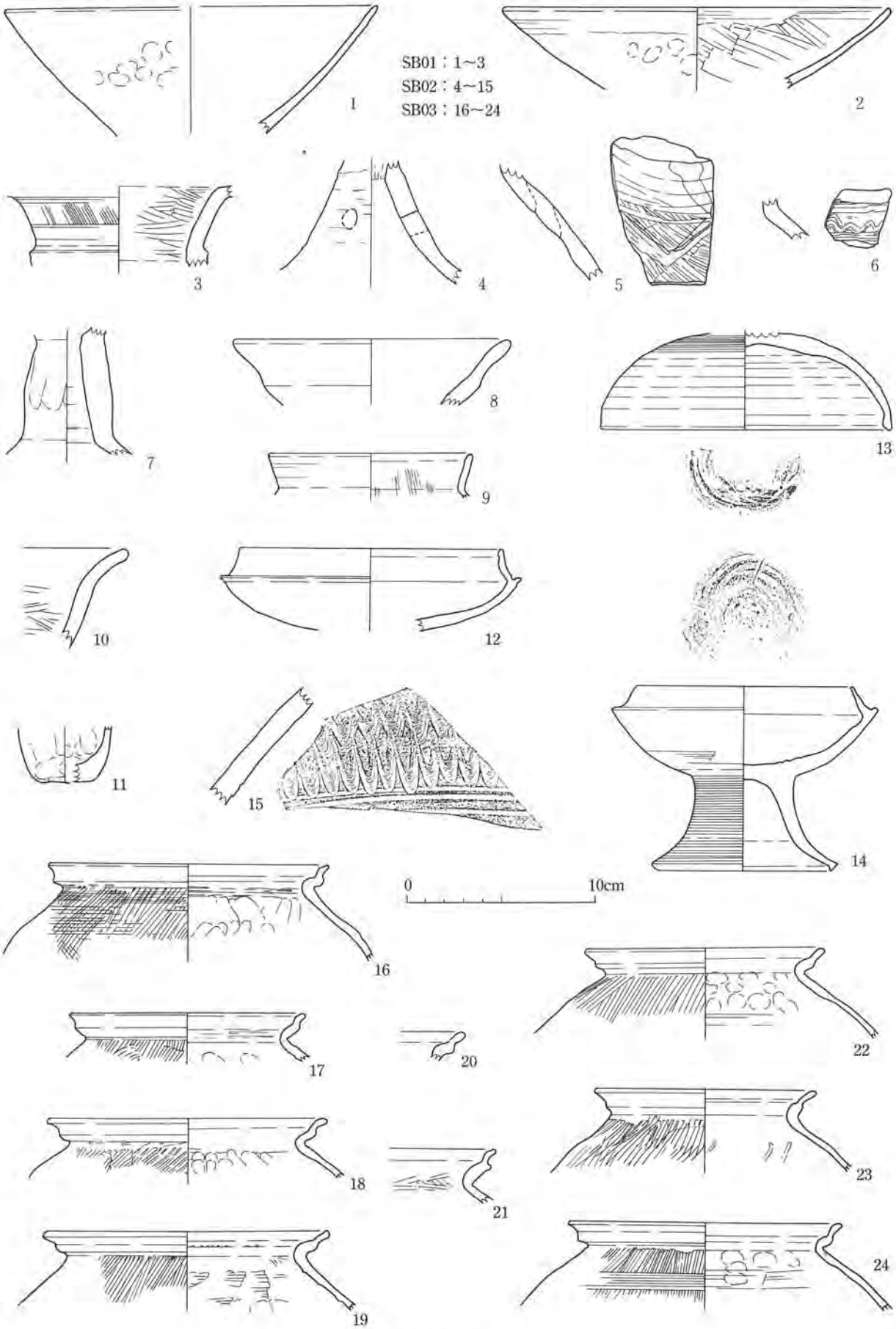
４区Ｐから工事中に出土した。古瀬戸前期の水注で口縁部を打ち欠き研磨している。

注

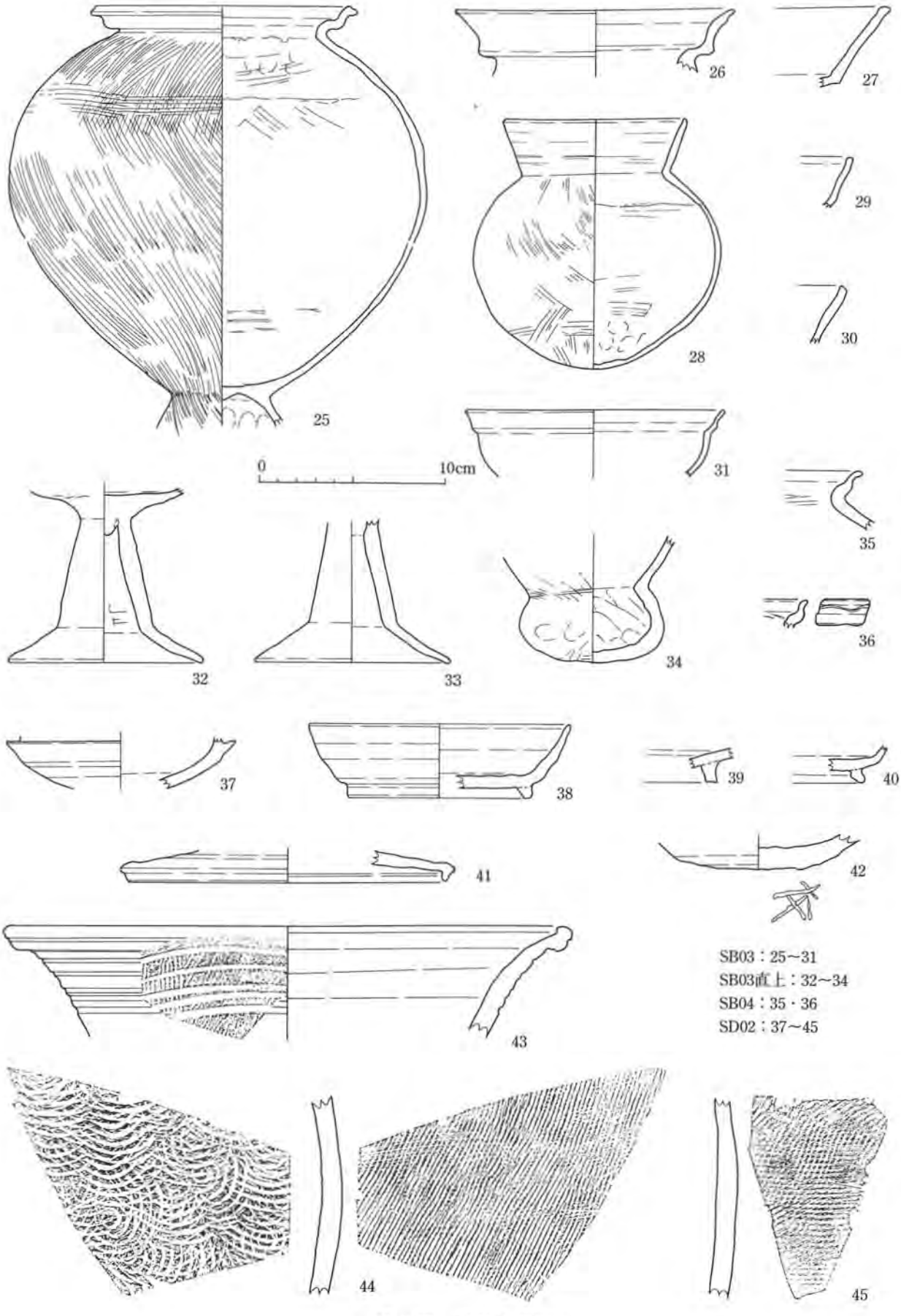
1 岐阜市教育委員会　1999『城之内遺跡－長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査－』（第１分冊）

2 井川祥子　1997「15世紀前半から16世紀前葉の土師器皿－中濃地域を中心として－」『美濃の考古学 第２号』

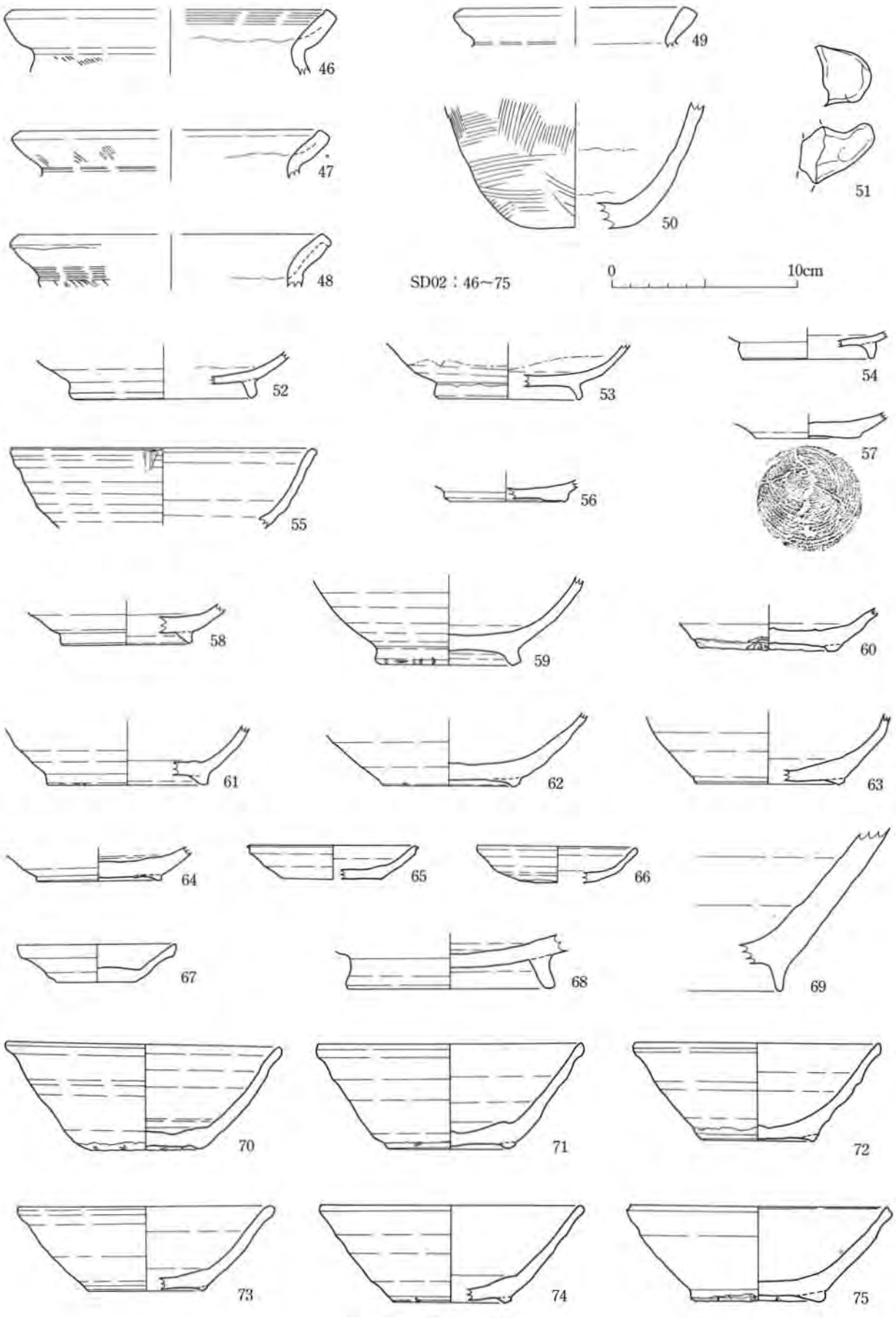
3 注１文献による時期区分


SB01：1～3
SB02：4～15
SB03：16～24
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
0
10cm

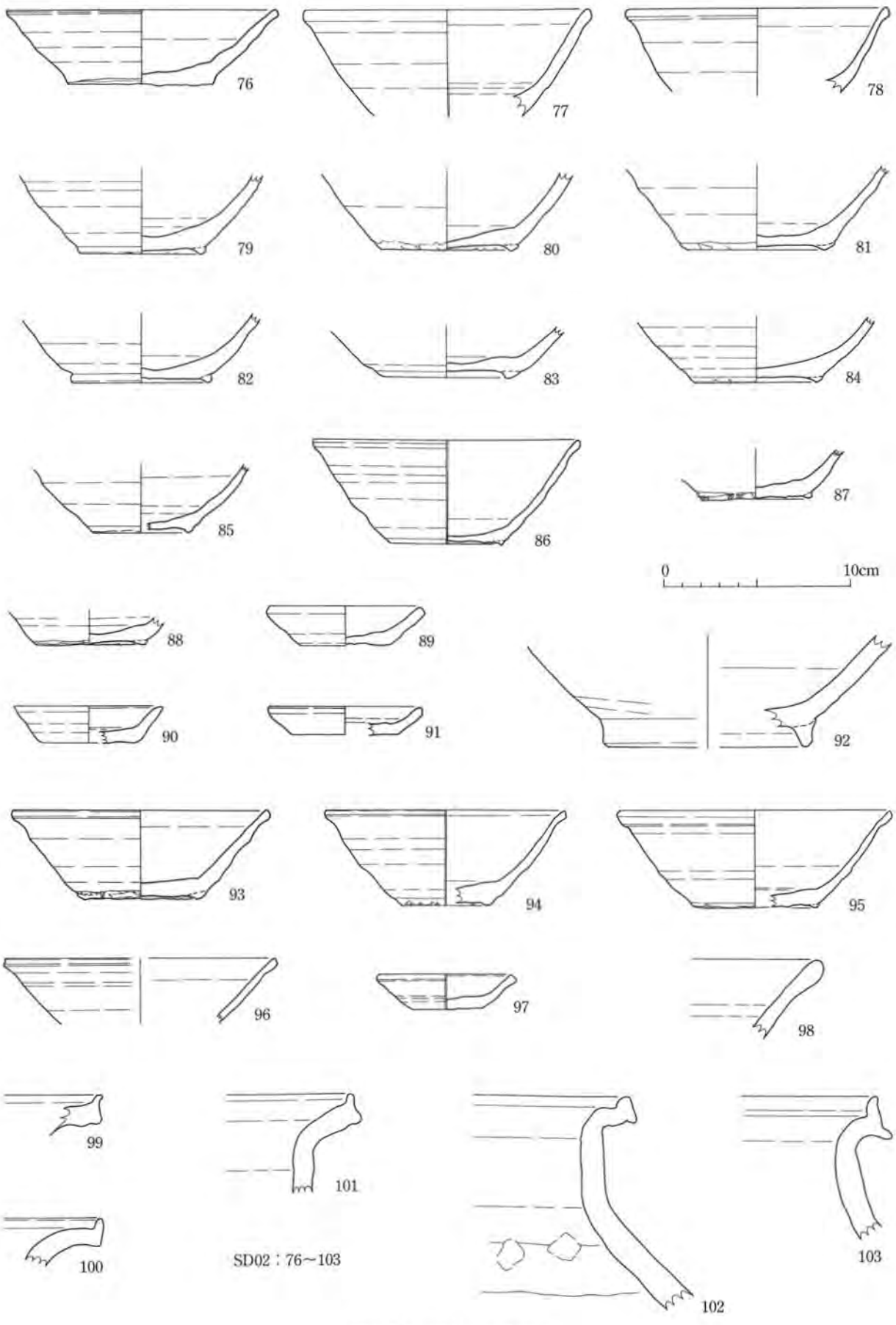
第24図　遺物実測図(1)


25
26
27
28
29
30
31
0
10cm
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
SB03：25～31
SB03直上：32～34
SB04：35・36
SD02：37～45
44
45

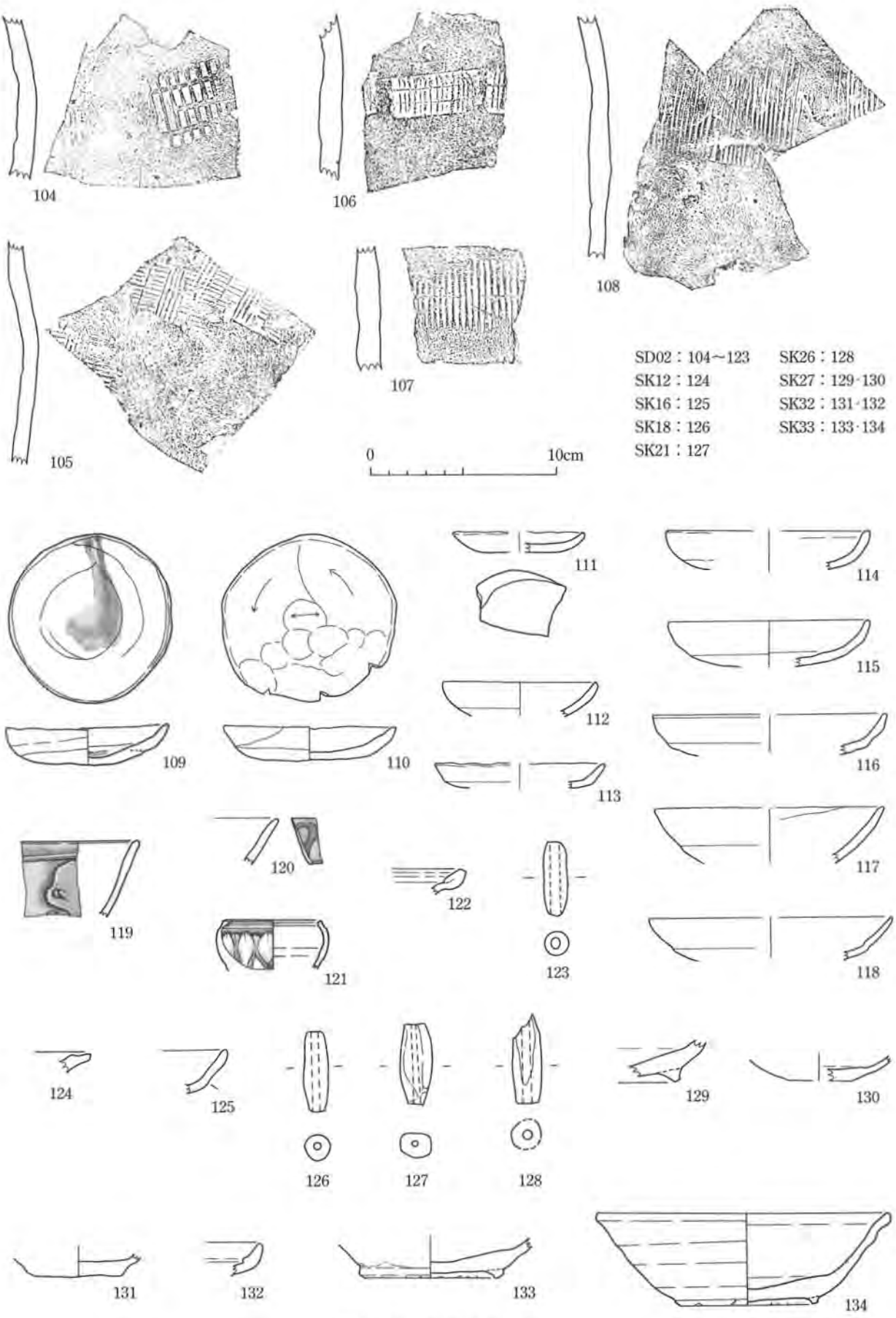
第25図　遺物実測図(2)


46
47
48
49
50
51
SD02：46～75
0
10cm
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75

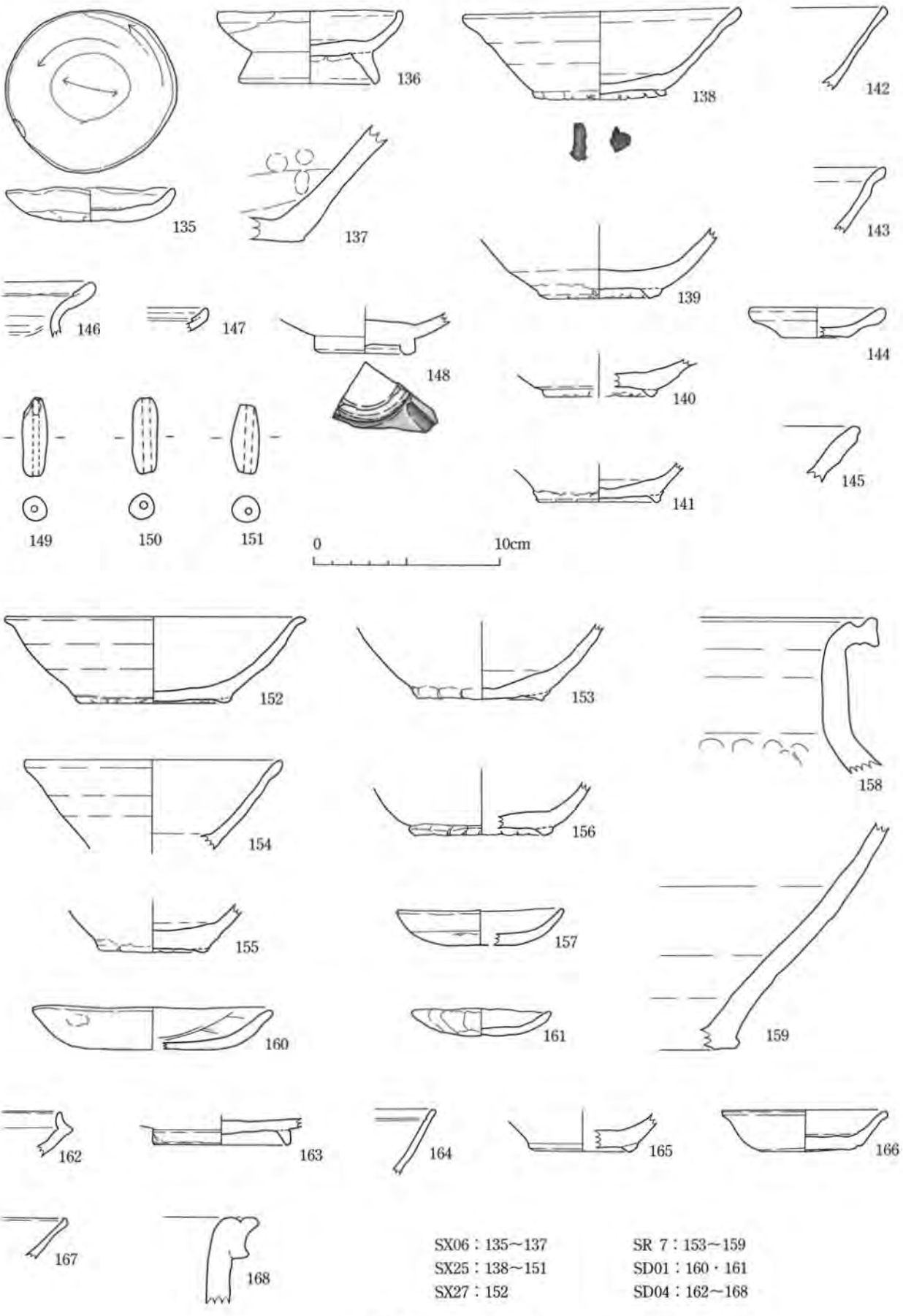
第26図　遺物実測図(3)


76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
0
10cm
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
101
100
SD02：76～103
102
103

第27図　遺物実測図(4)

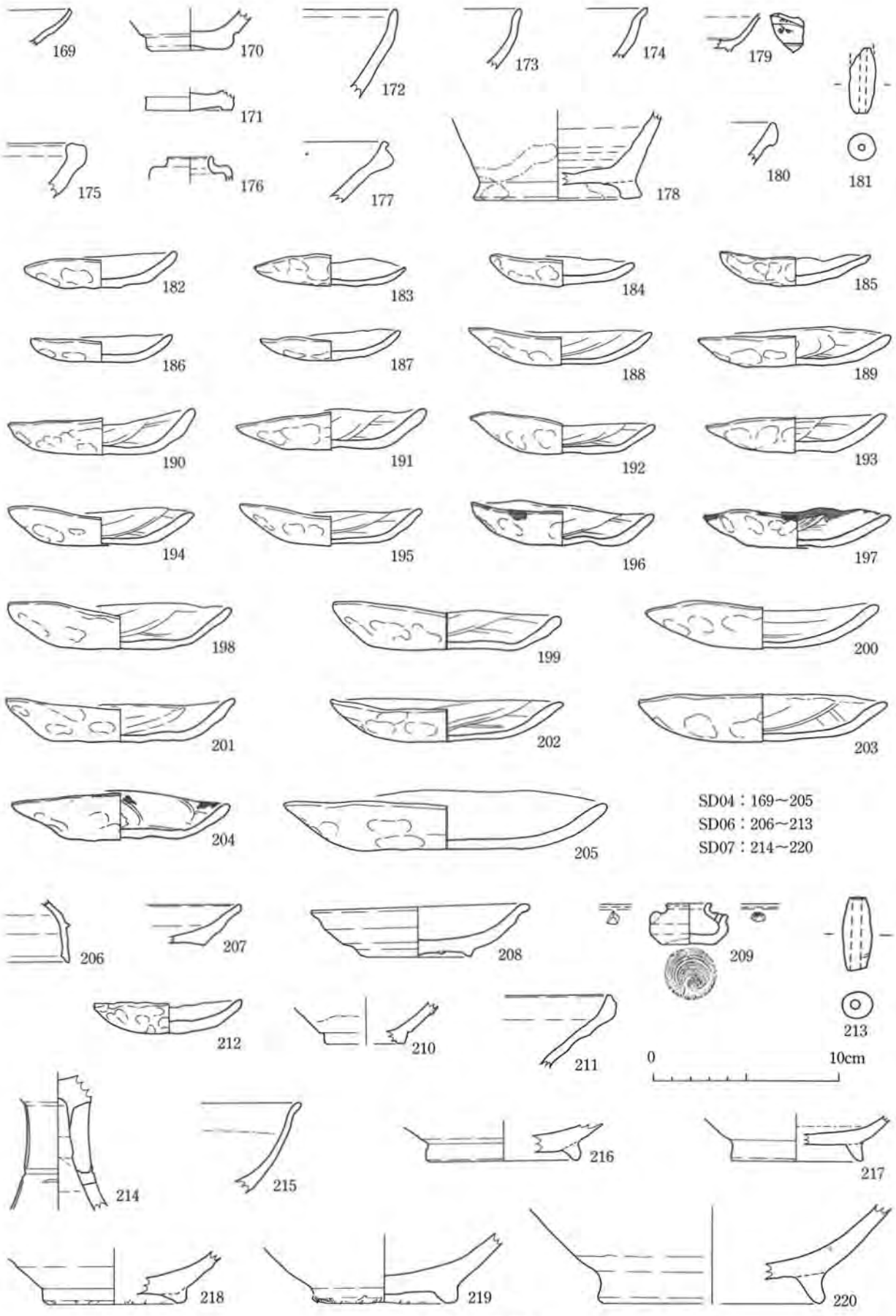

104
106
108
105
107
0
10cm
SD02：104～123
SK12：124
SK16：125
SK18：126
SK21：127
SK26：128
SK27：129·130
SK32：131·132
SK33：133·134
111
114
115
112
116
109
110
113
117
120
122
119
123
118
121
124
125
129
130
126
127
128
131
132
133
134

第28図　遺物実測図(5)

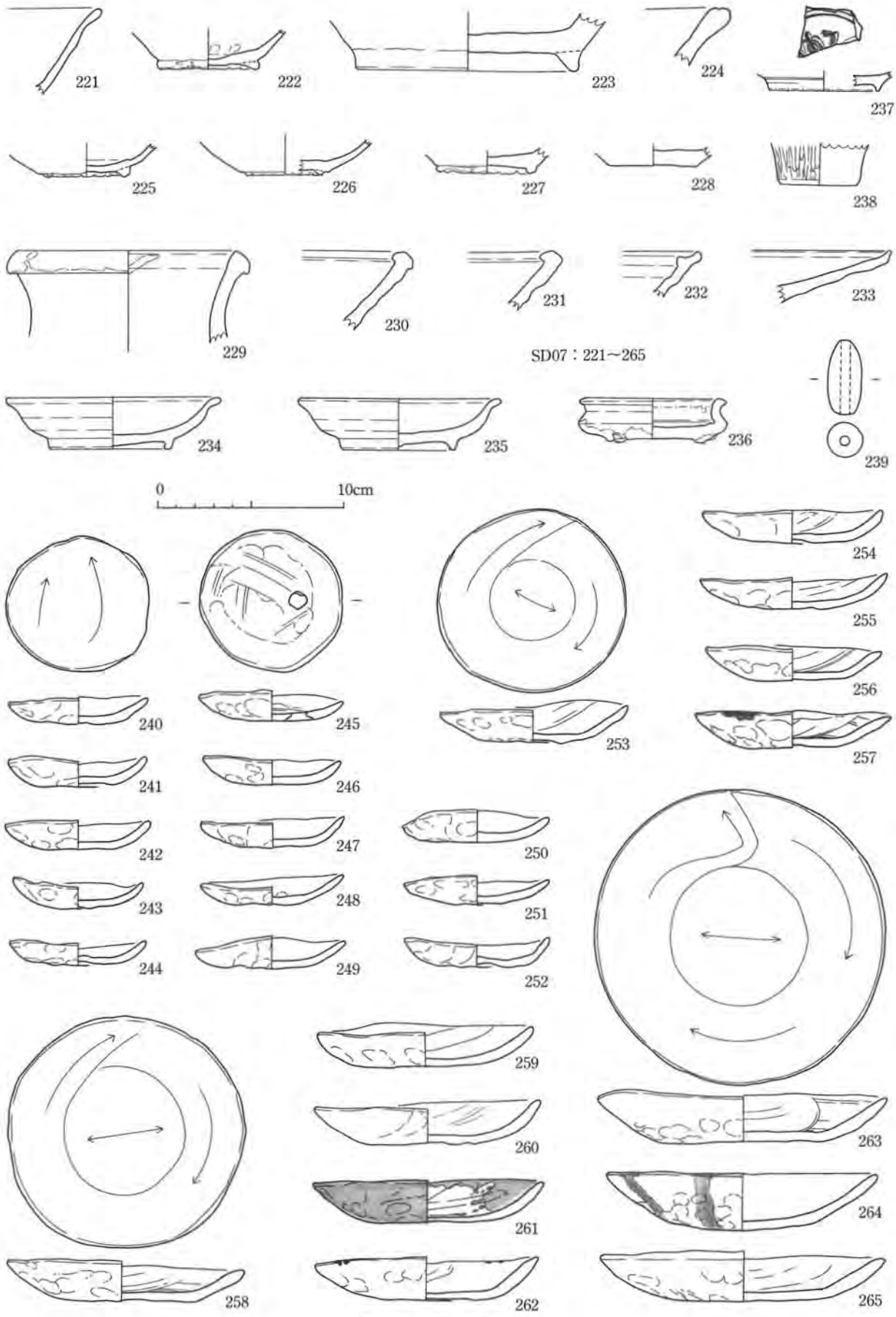


SX06：135～137
SX25：138～151
SX27：152
SR 7：153～159
SD01：160・161
SD04：162～168

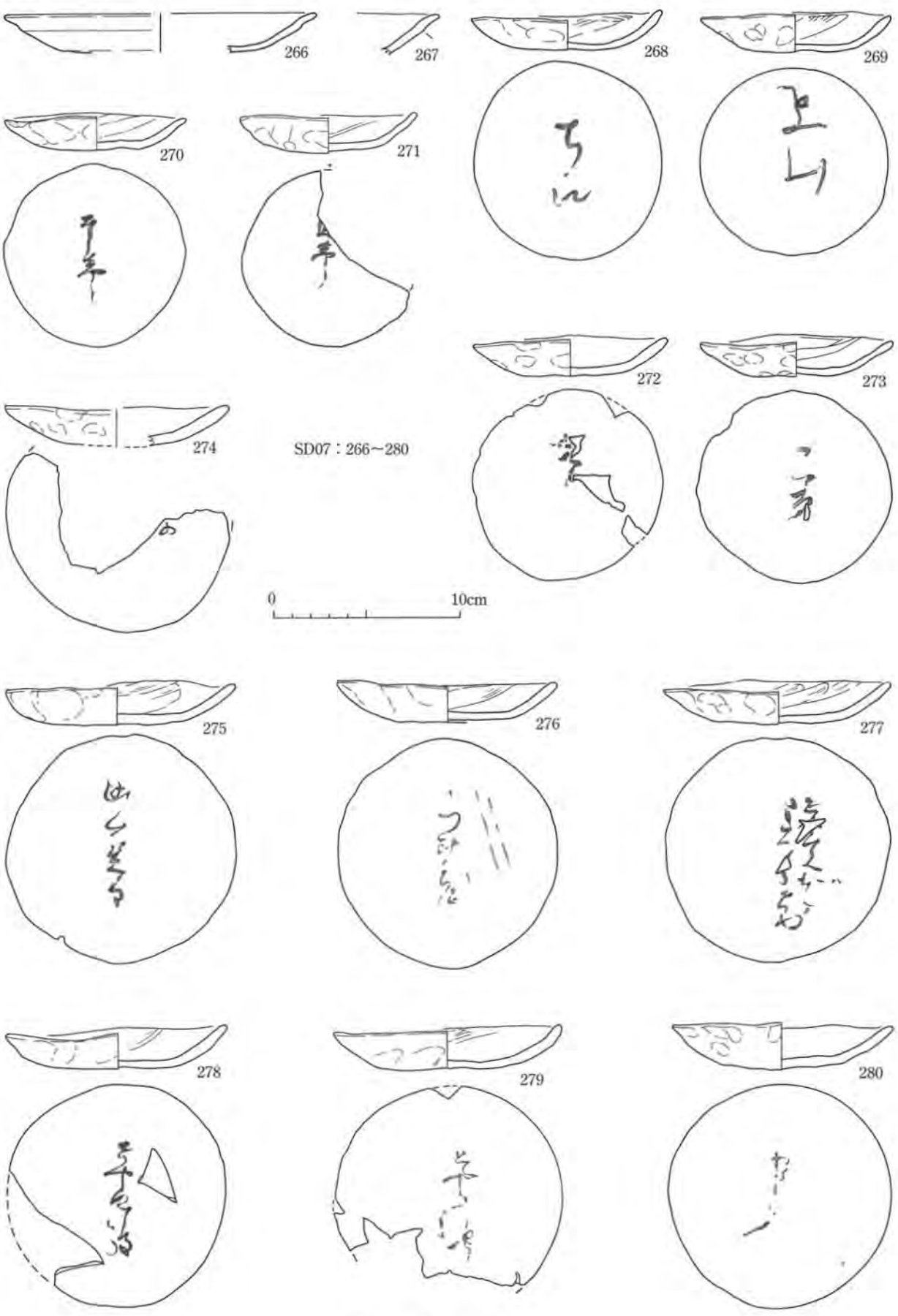
第29図　遺物実測図(6)


169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
SD04：169～205
SD06：206～213
SD07：214～220
0
10cm

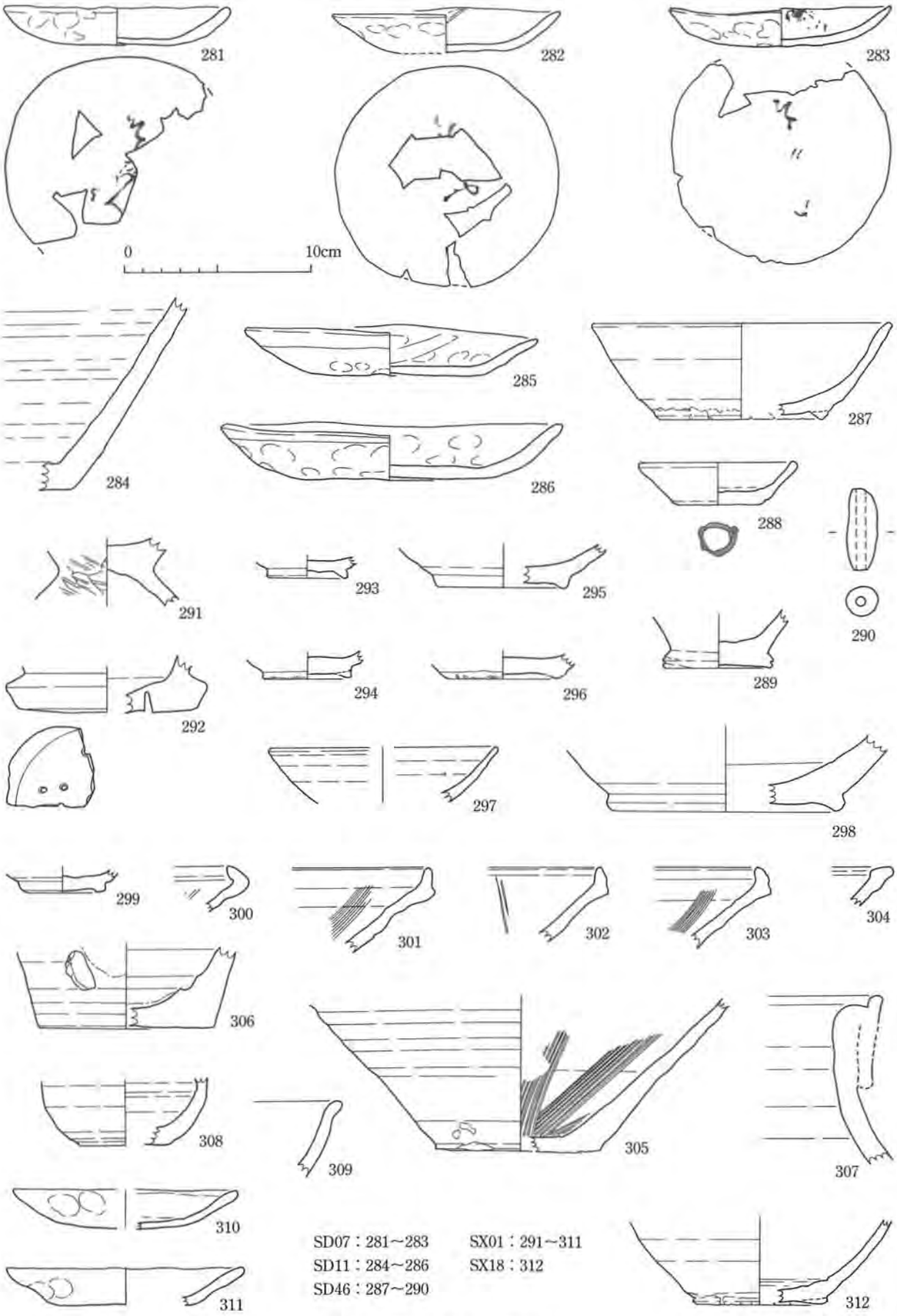
第30図　遺物実測図(7)


221
222
223
224
237
225
226
227
228
238
229
230
231
232
233
SD07：221～265
234
235
236
239
0
10cm
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265

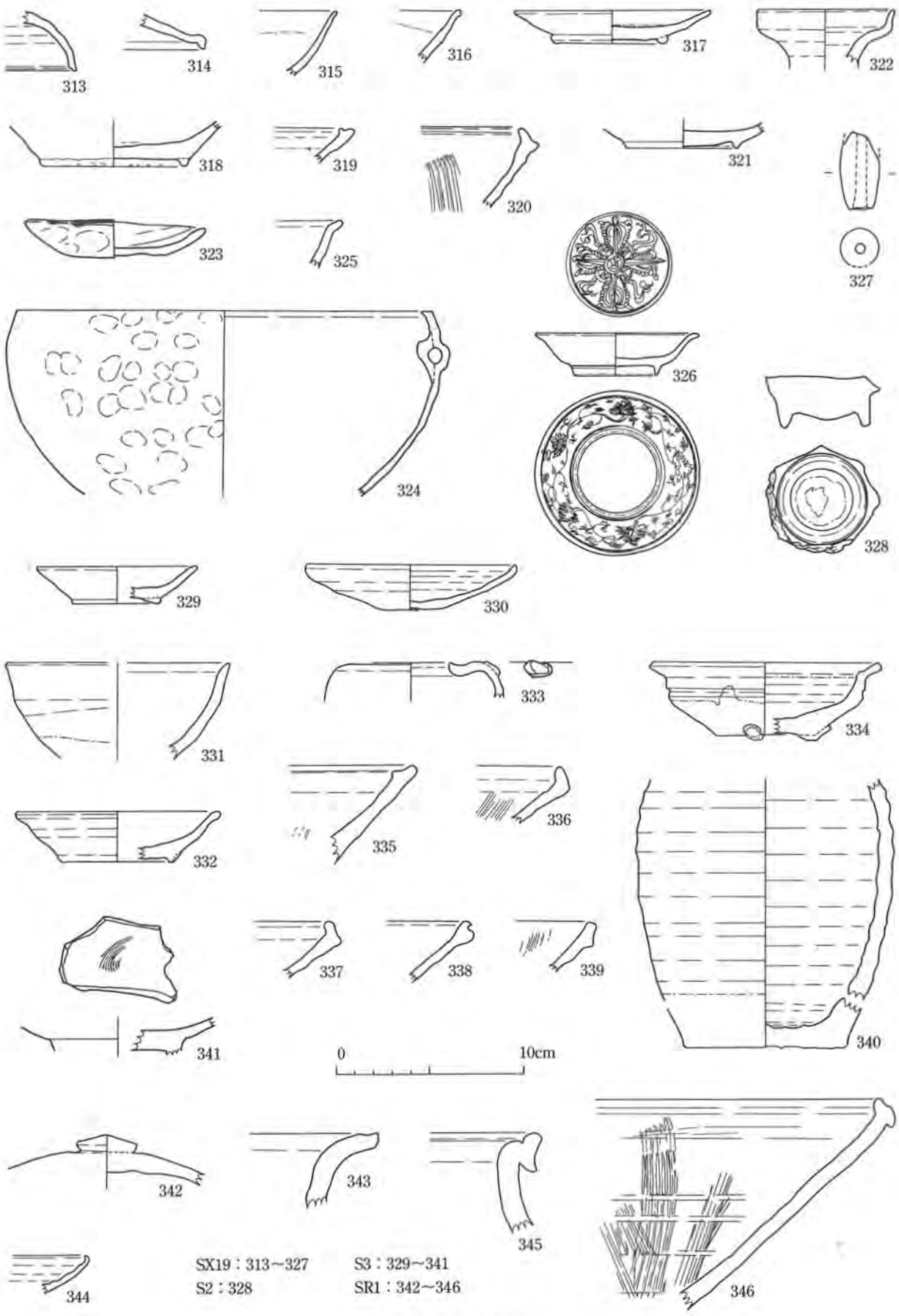
第31図　遺物実測図(8)


266
267
268
269
270
271
272
273
274
SD07：266～280
0
10cm
275
276
277
278
279
280

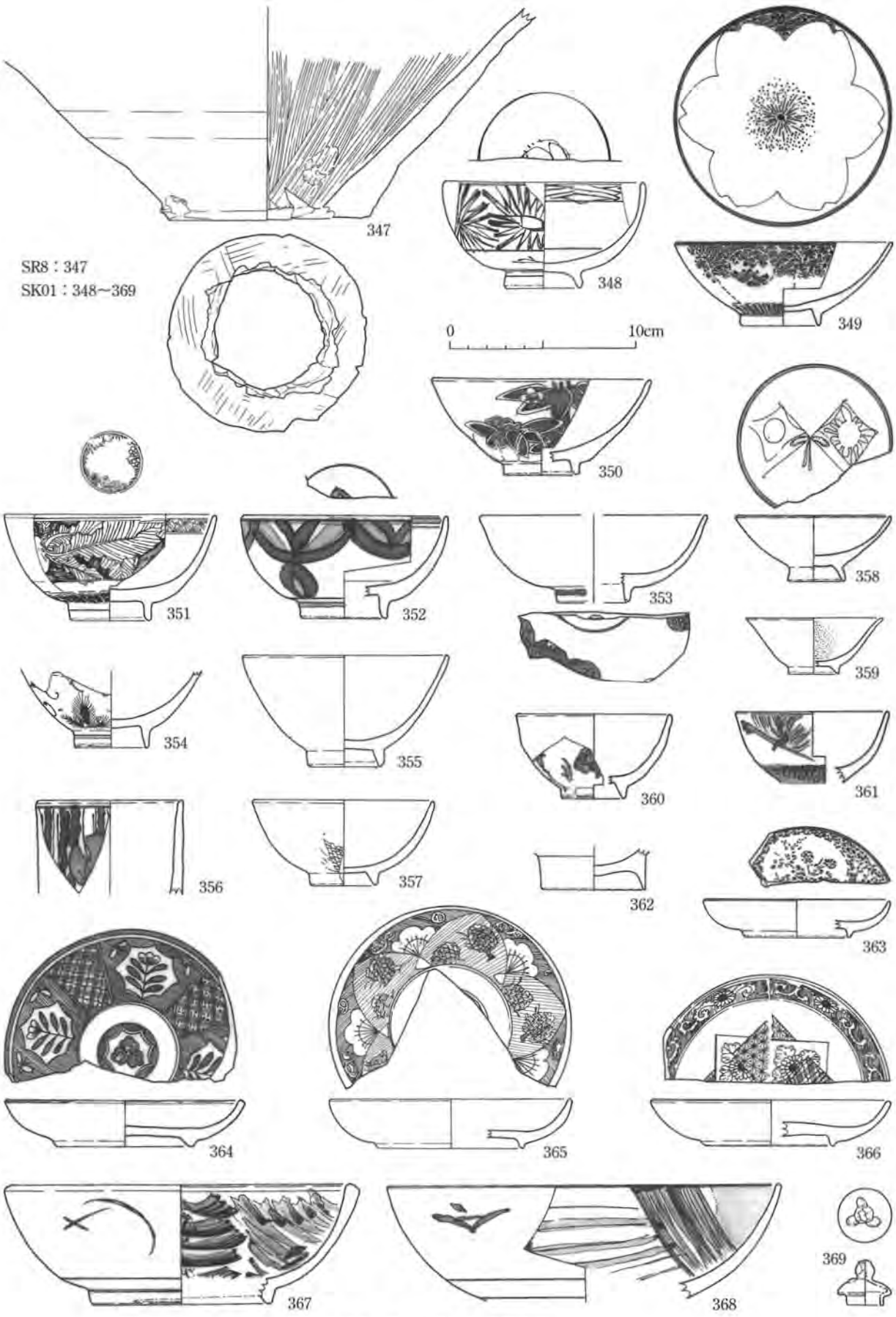
第32図　遺物実測図(9)



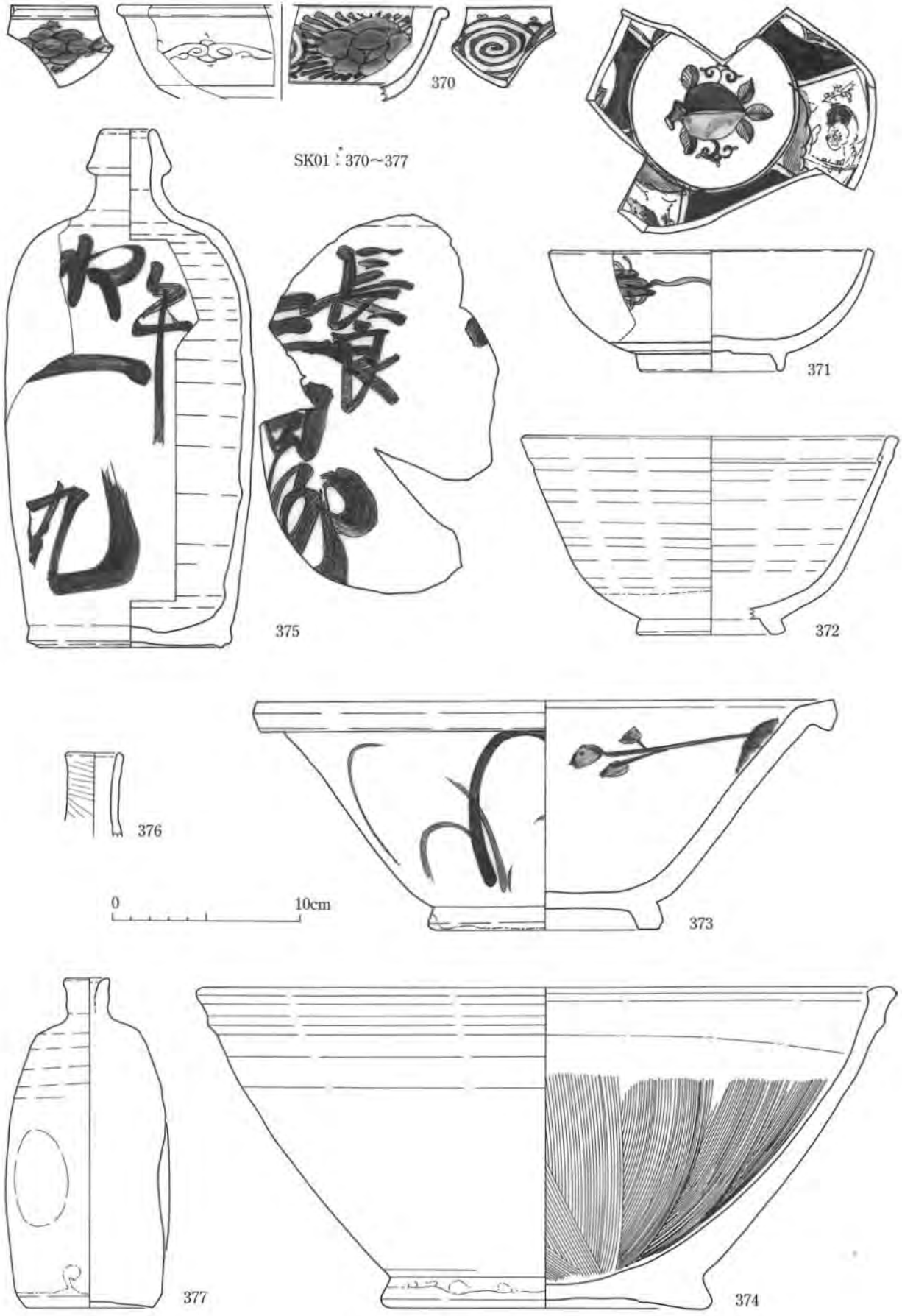
第33図　遺物実測図(10)



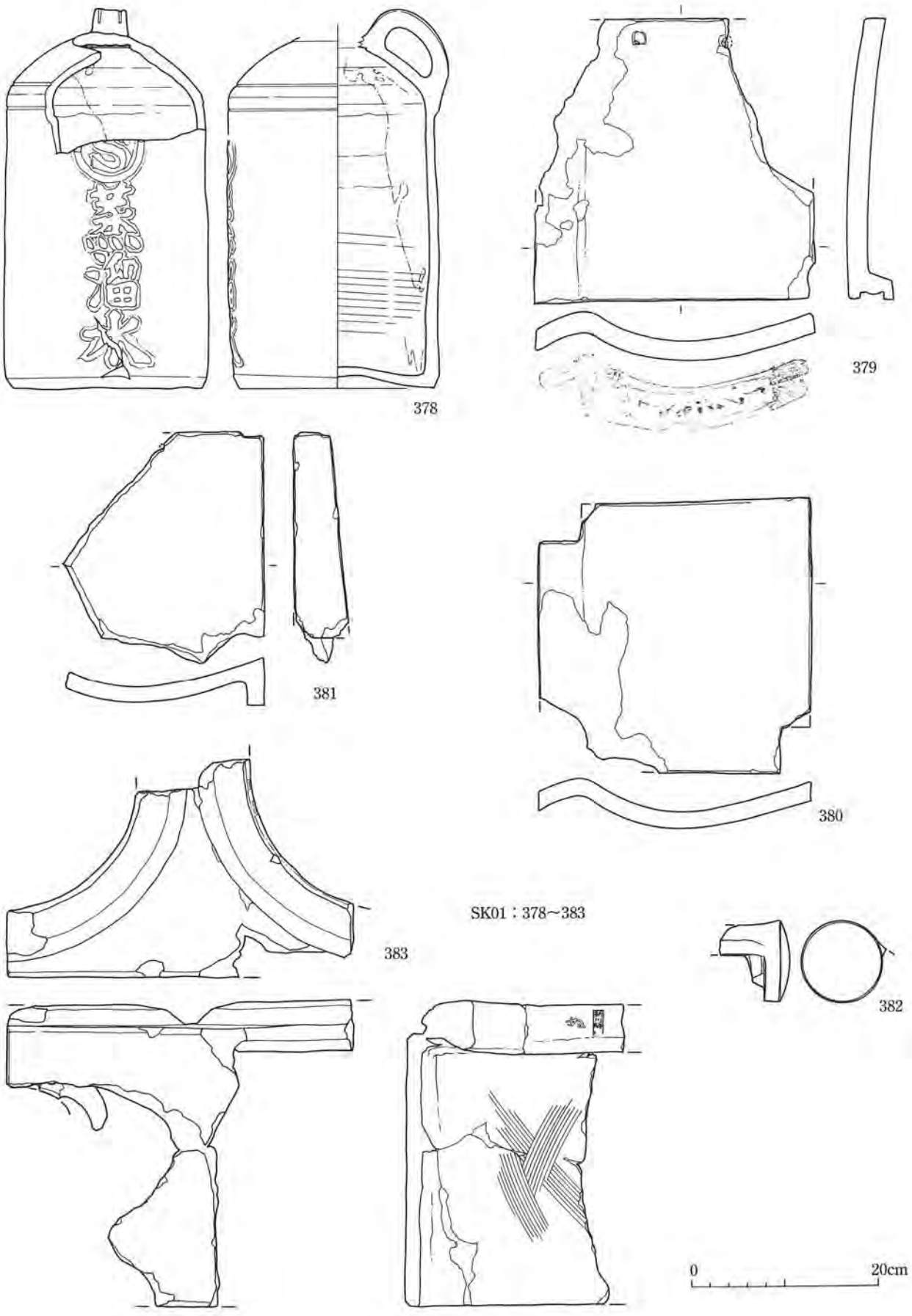
第34図　遺物実測図(11)



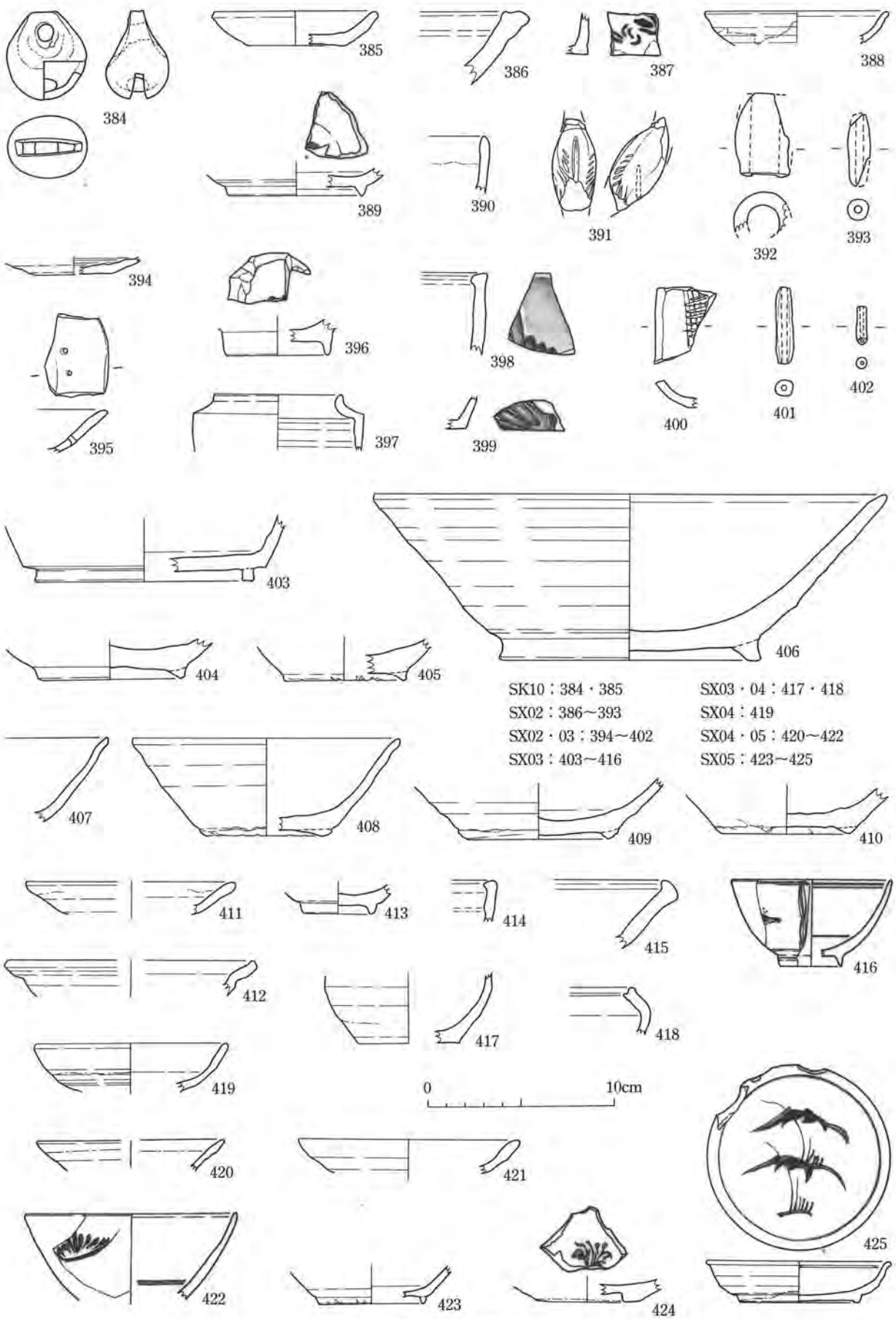
第35図　遺物実測図(12)



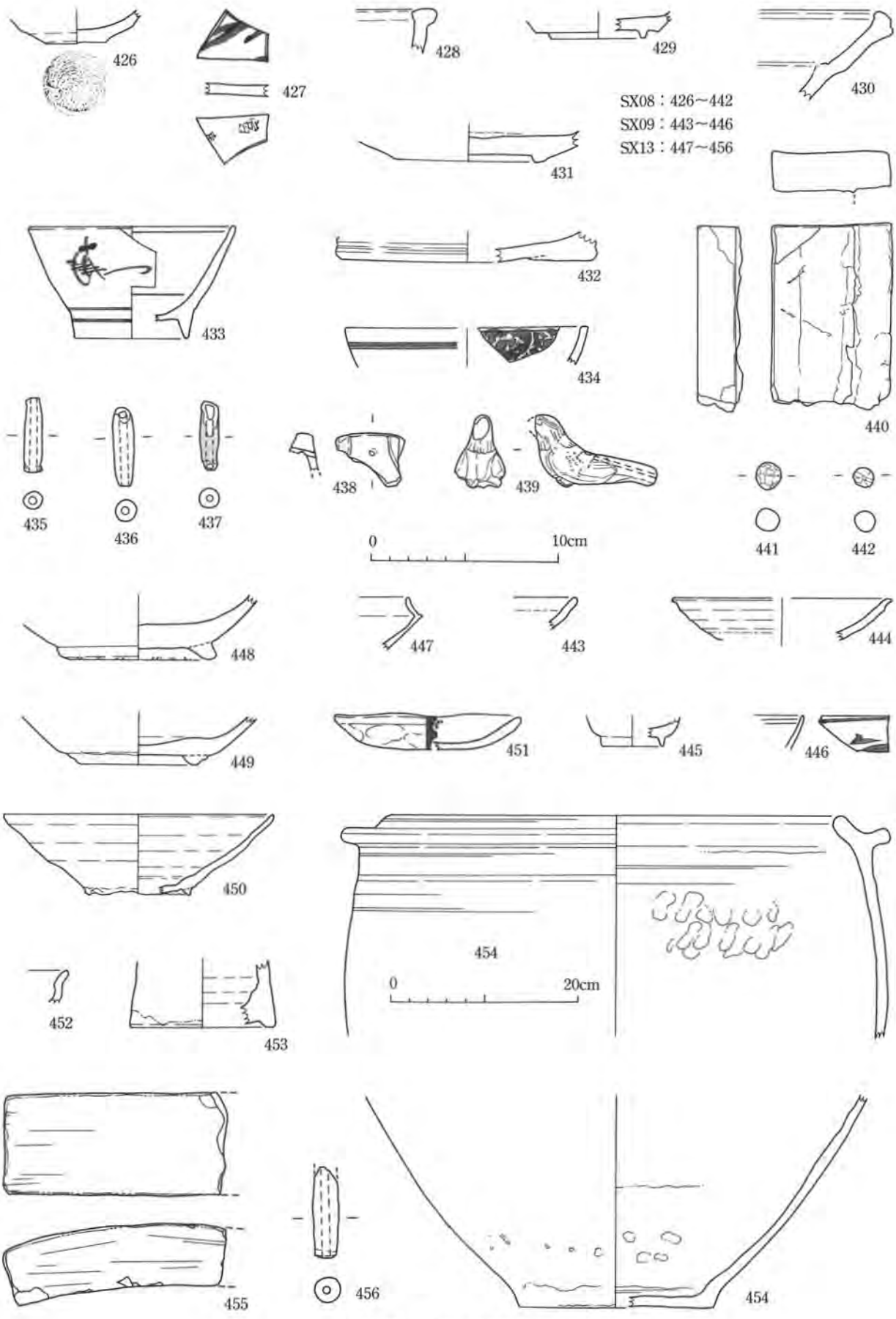
第36図　遺物実測図(13)



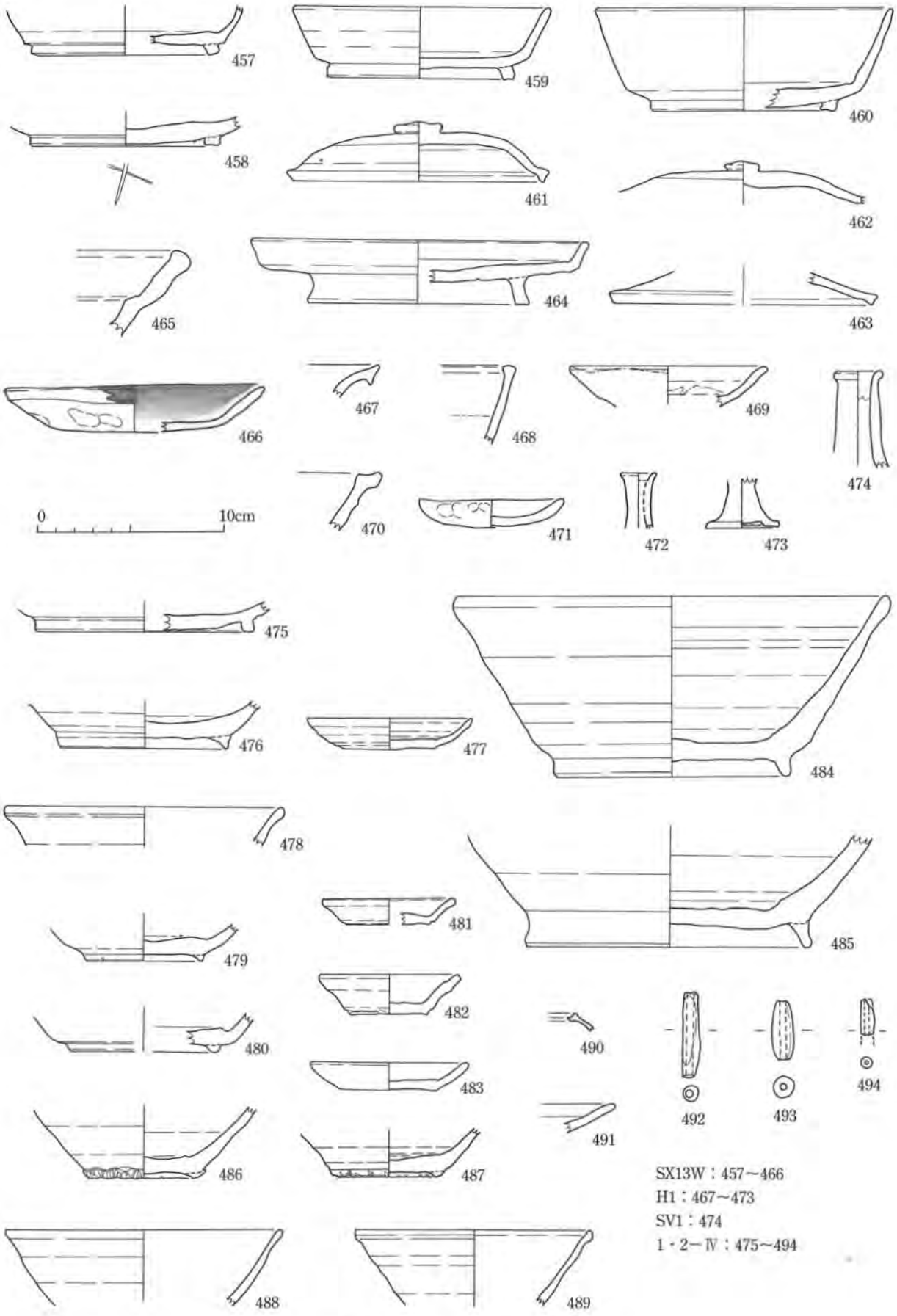
第37図　遺物実測図(14)



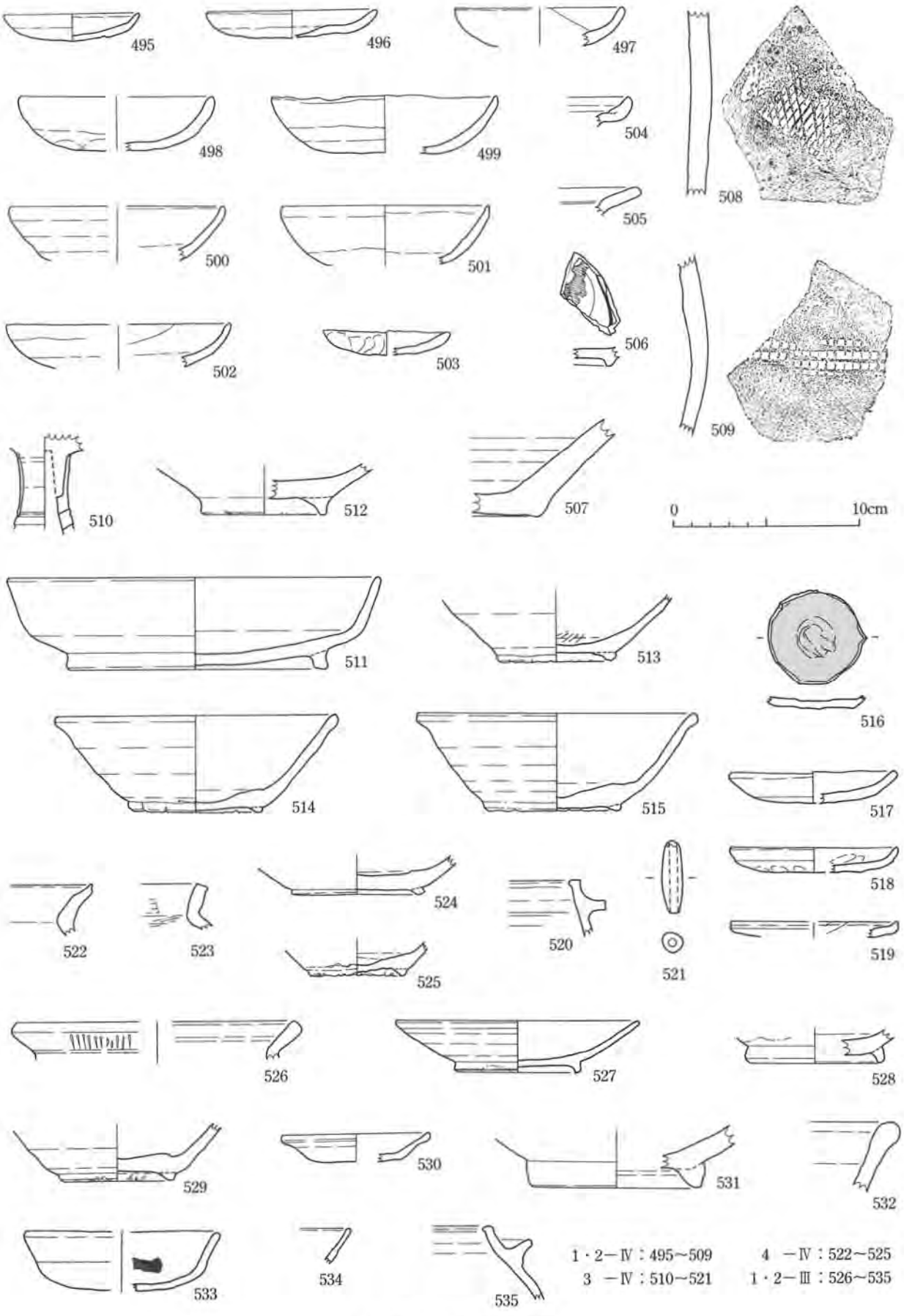
第38図　遺物実測図(15)



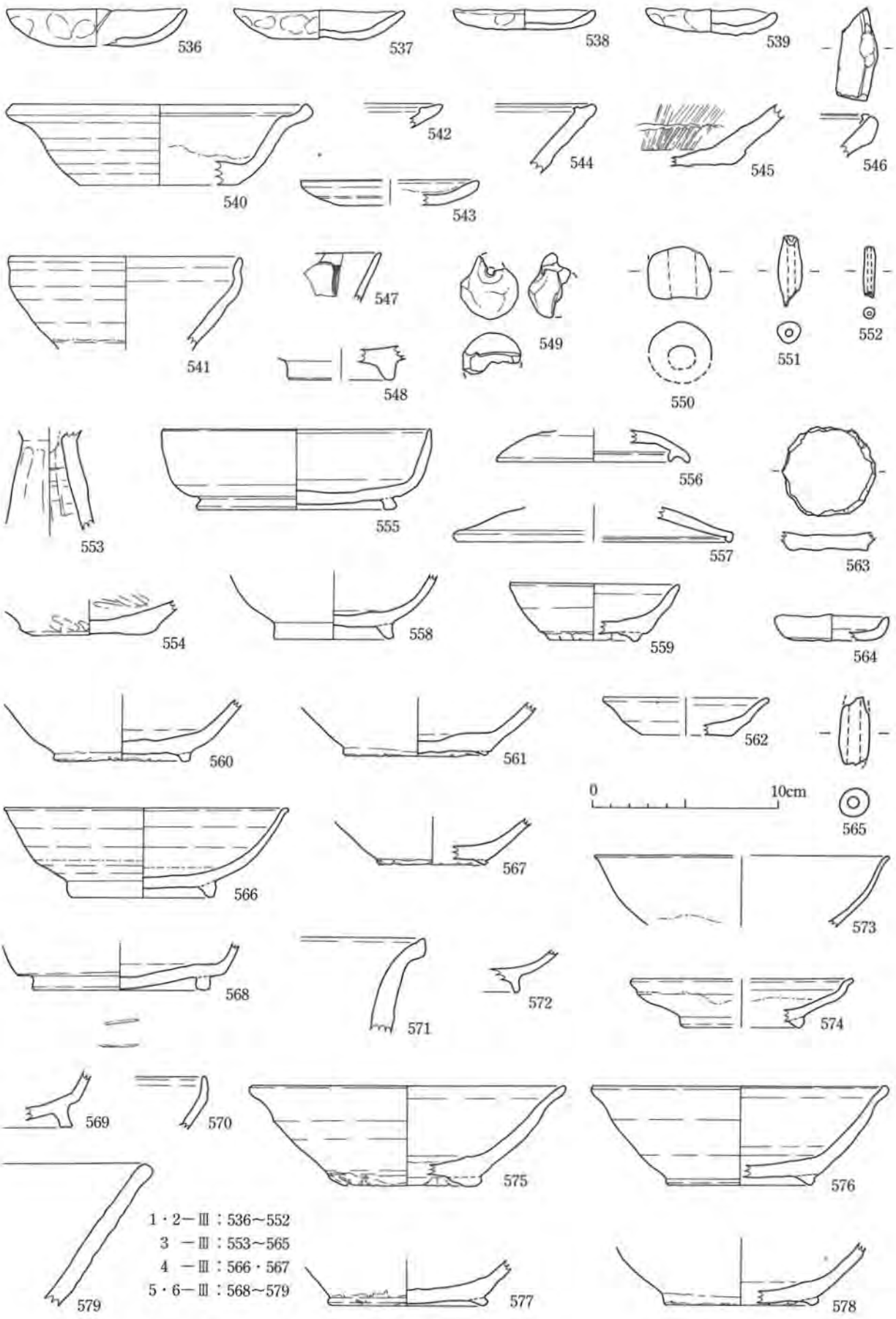
第39図　遺物実測図(16)



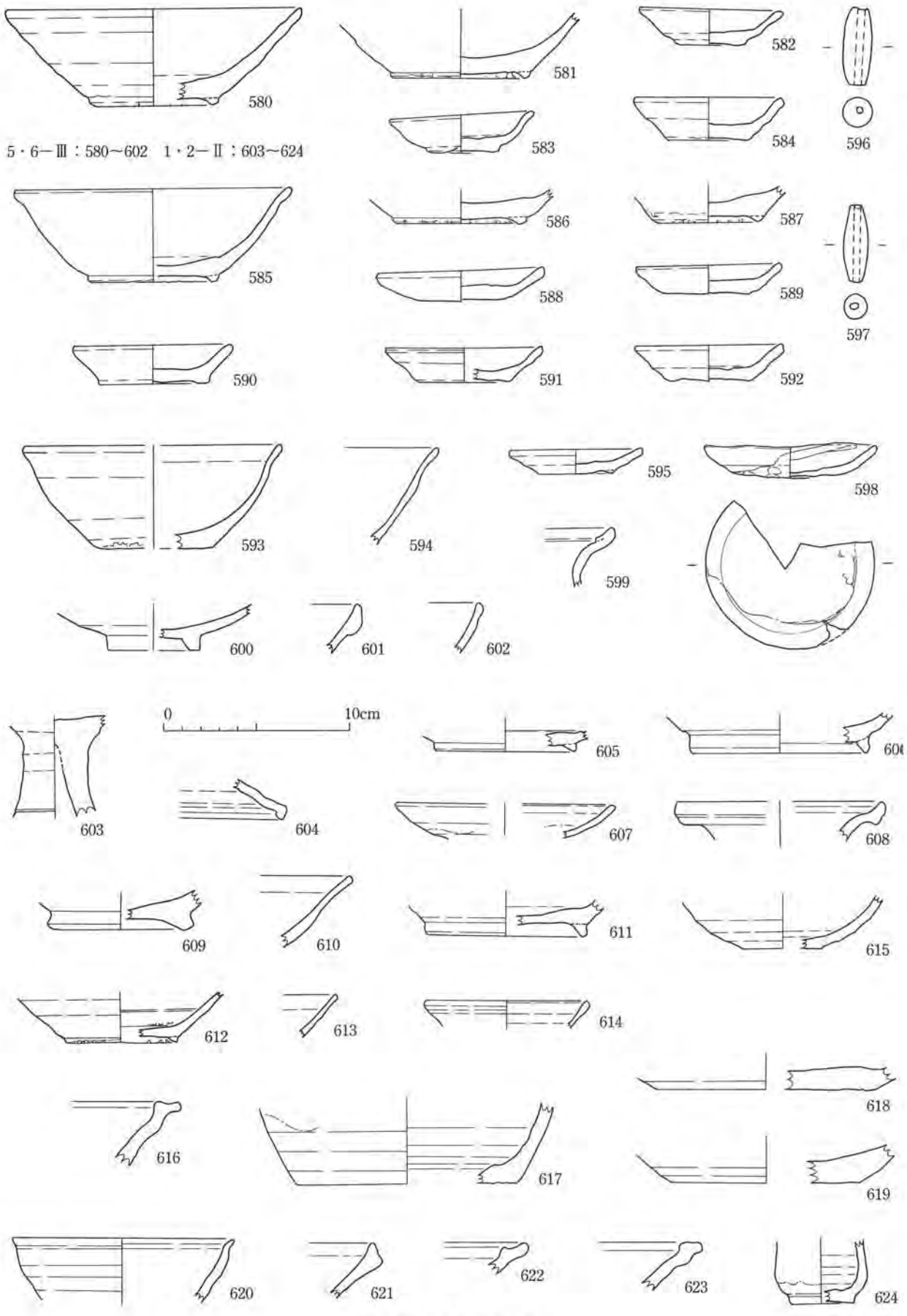
第40図　遺物実測図(17)



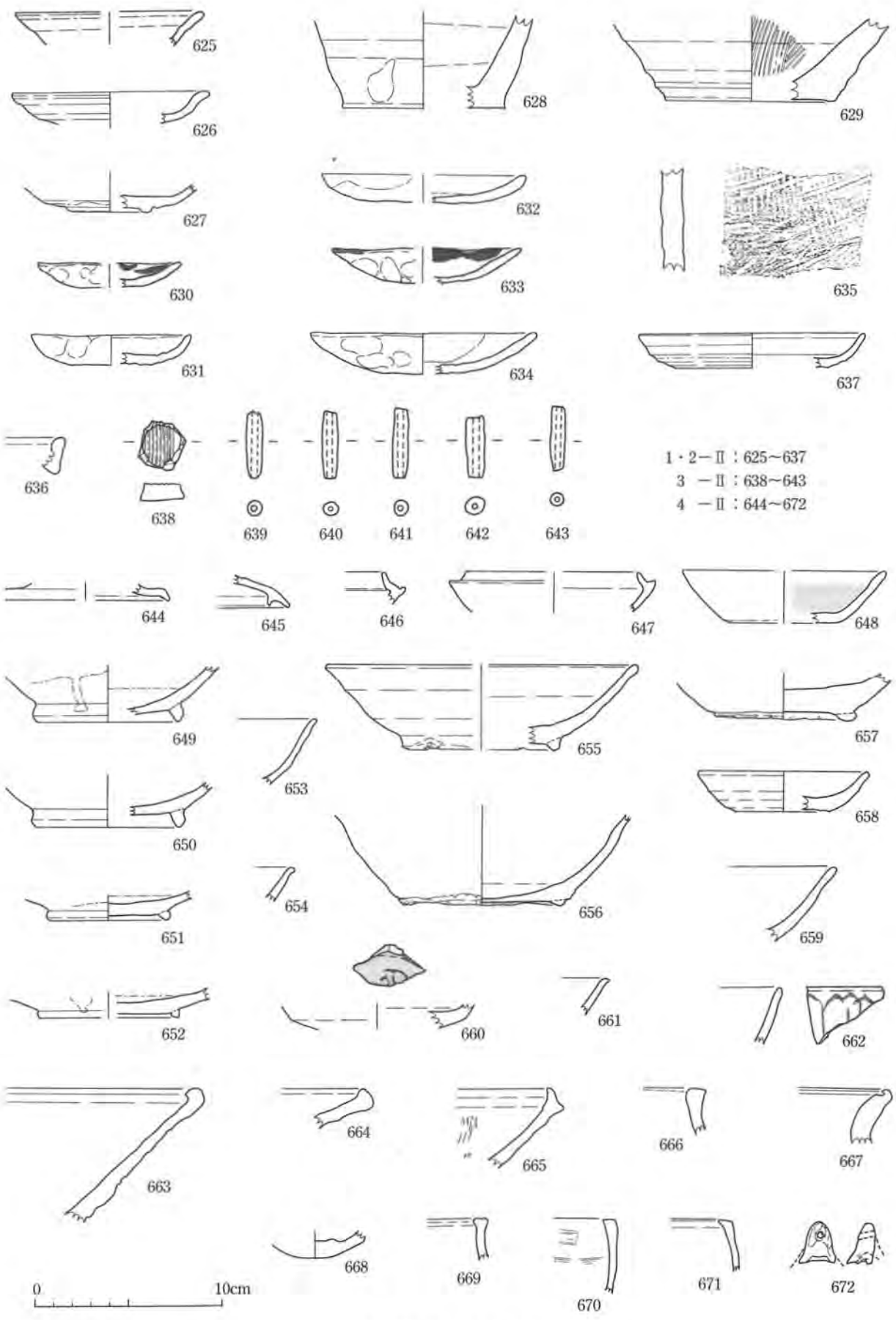
第41図　遺物実測図(18)



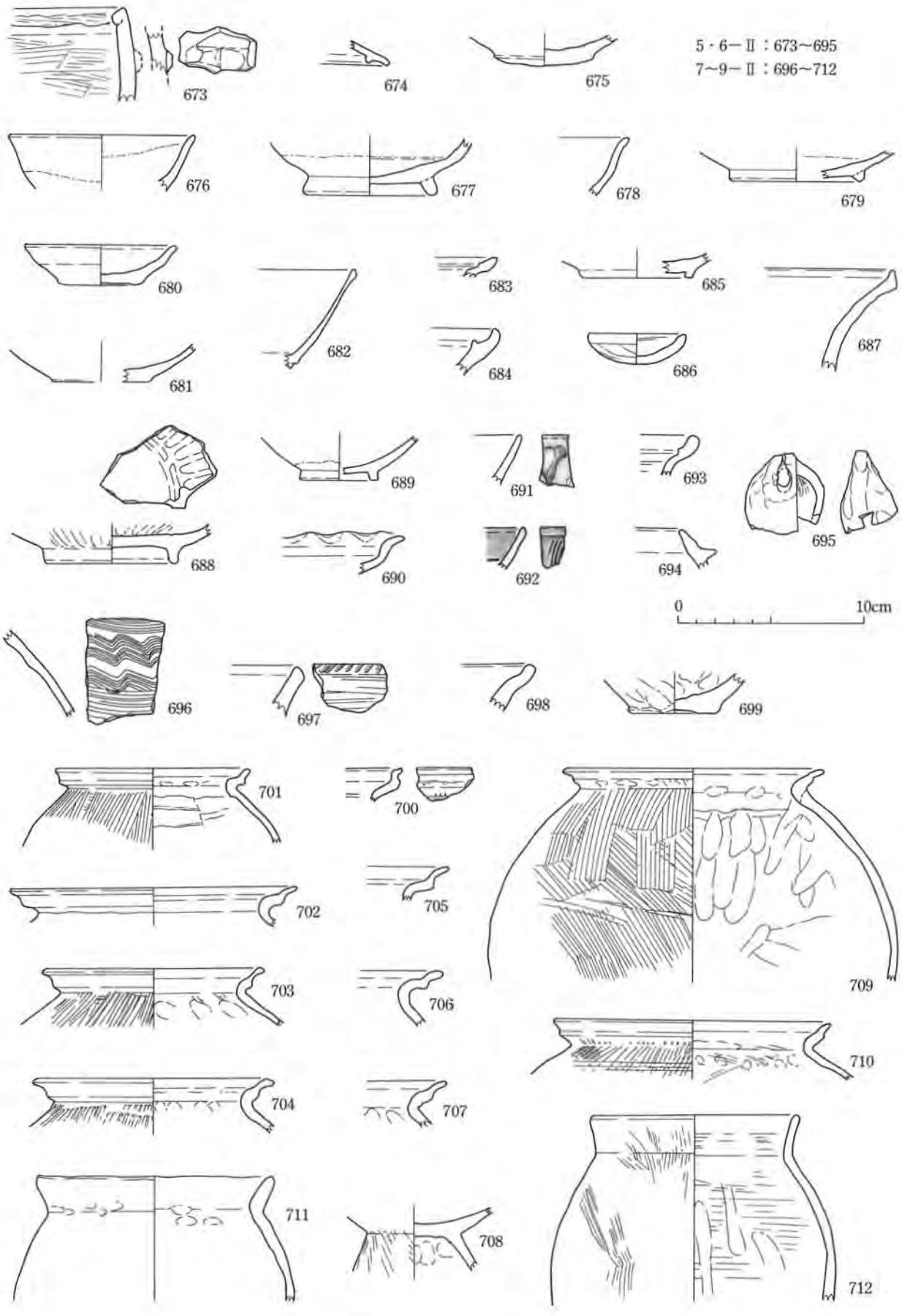
第42図　遺物実測図(19)



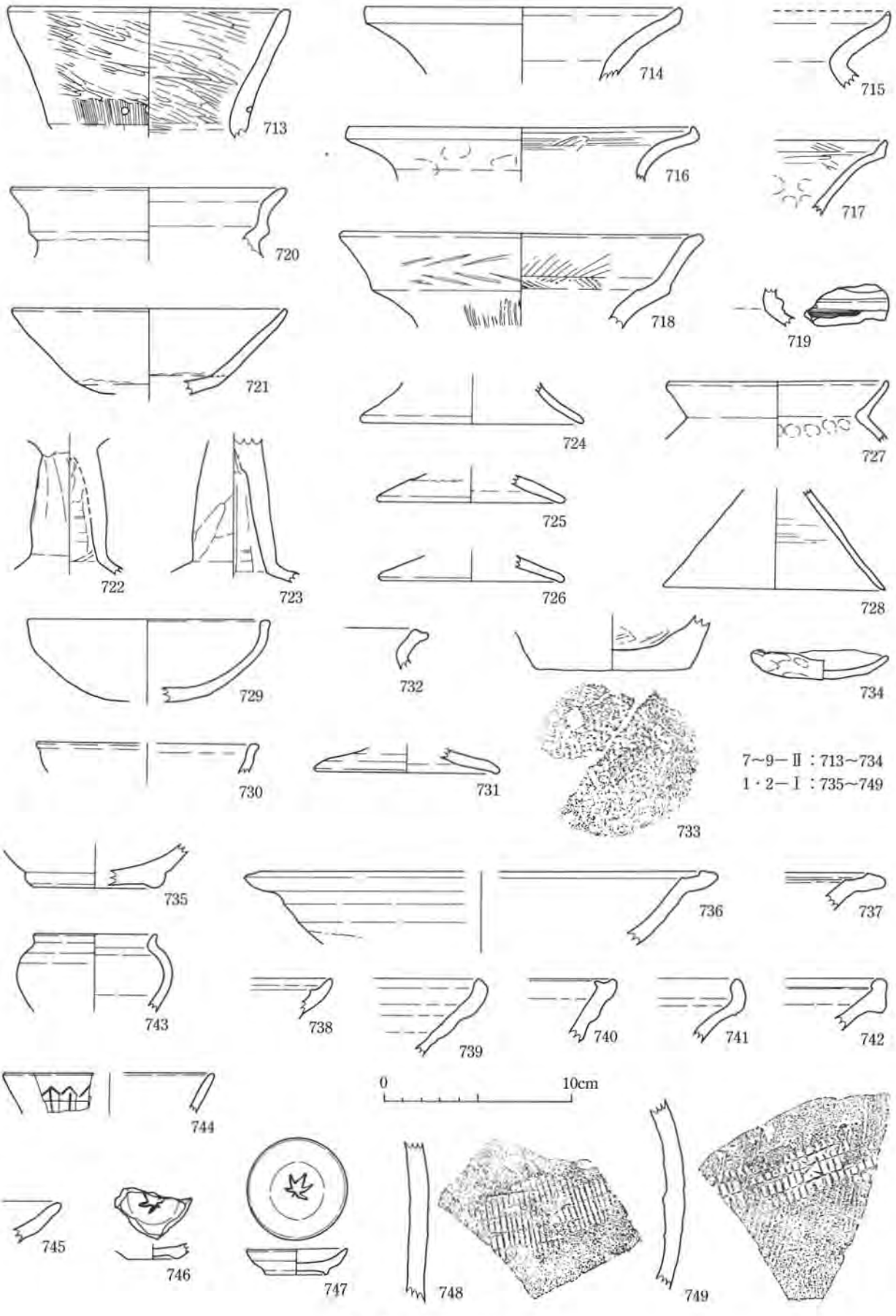
第43図　遺物実測図(20)



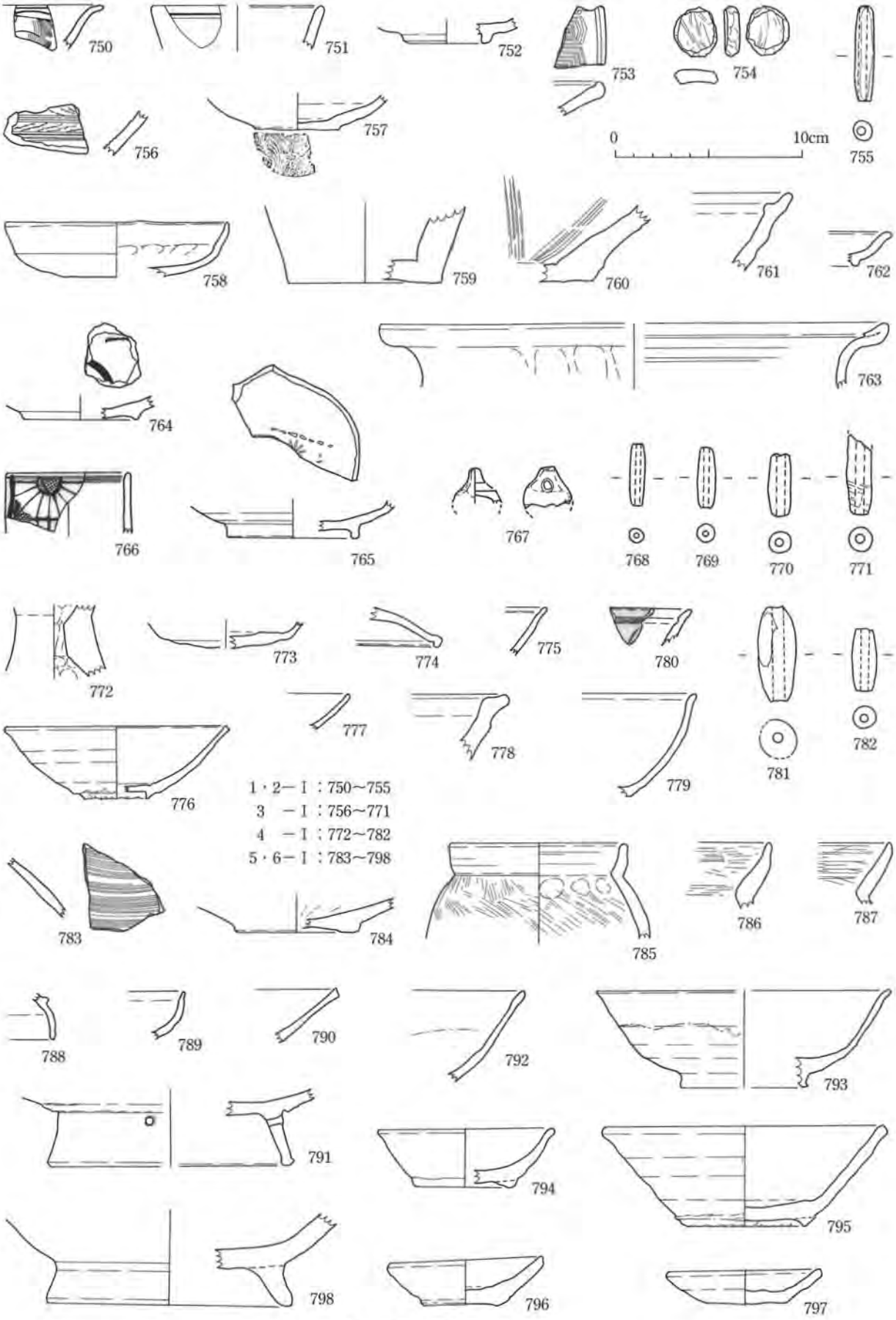
第44図　遺物実測図(21)



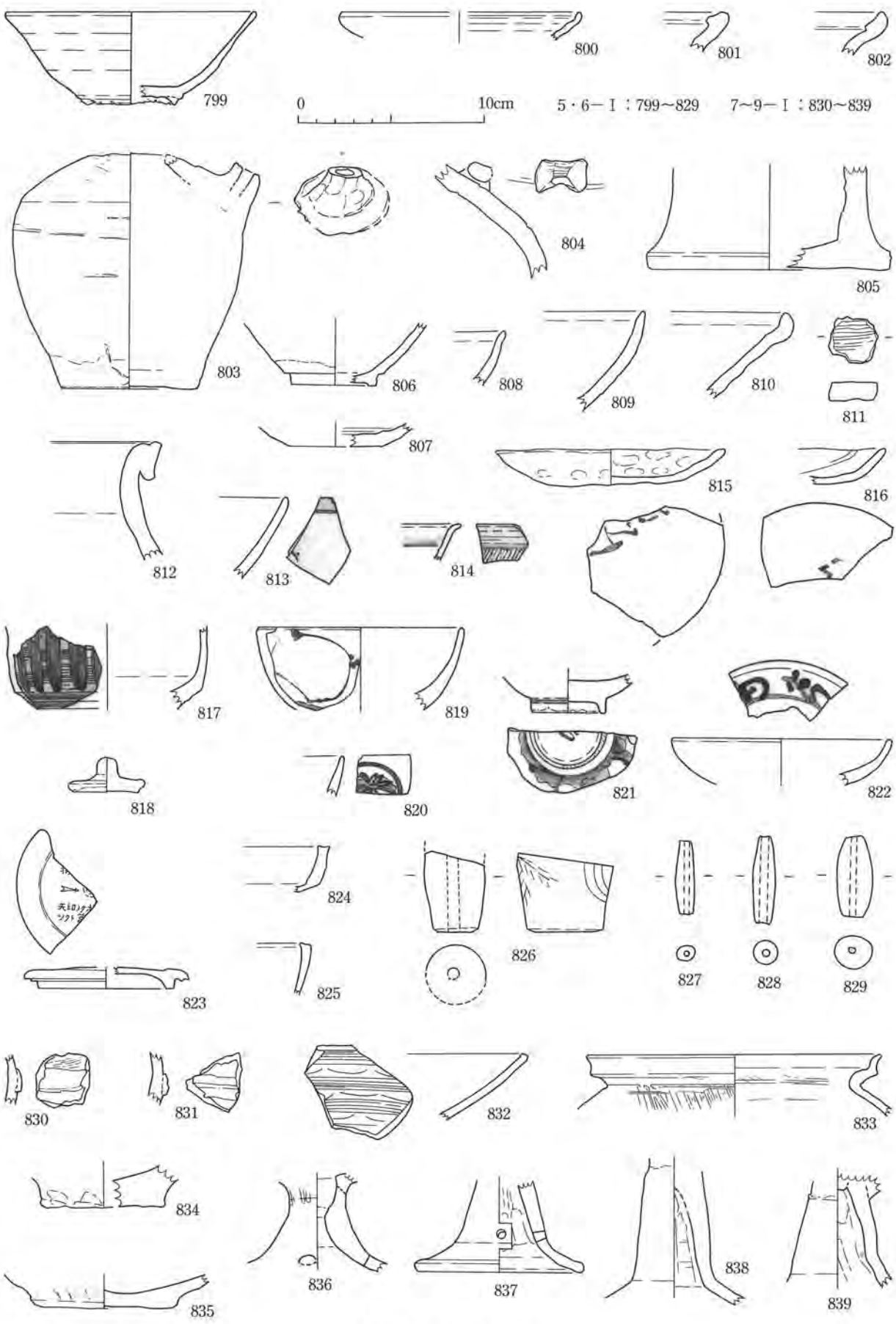
第45図　遺物実測図(22)



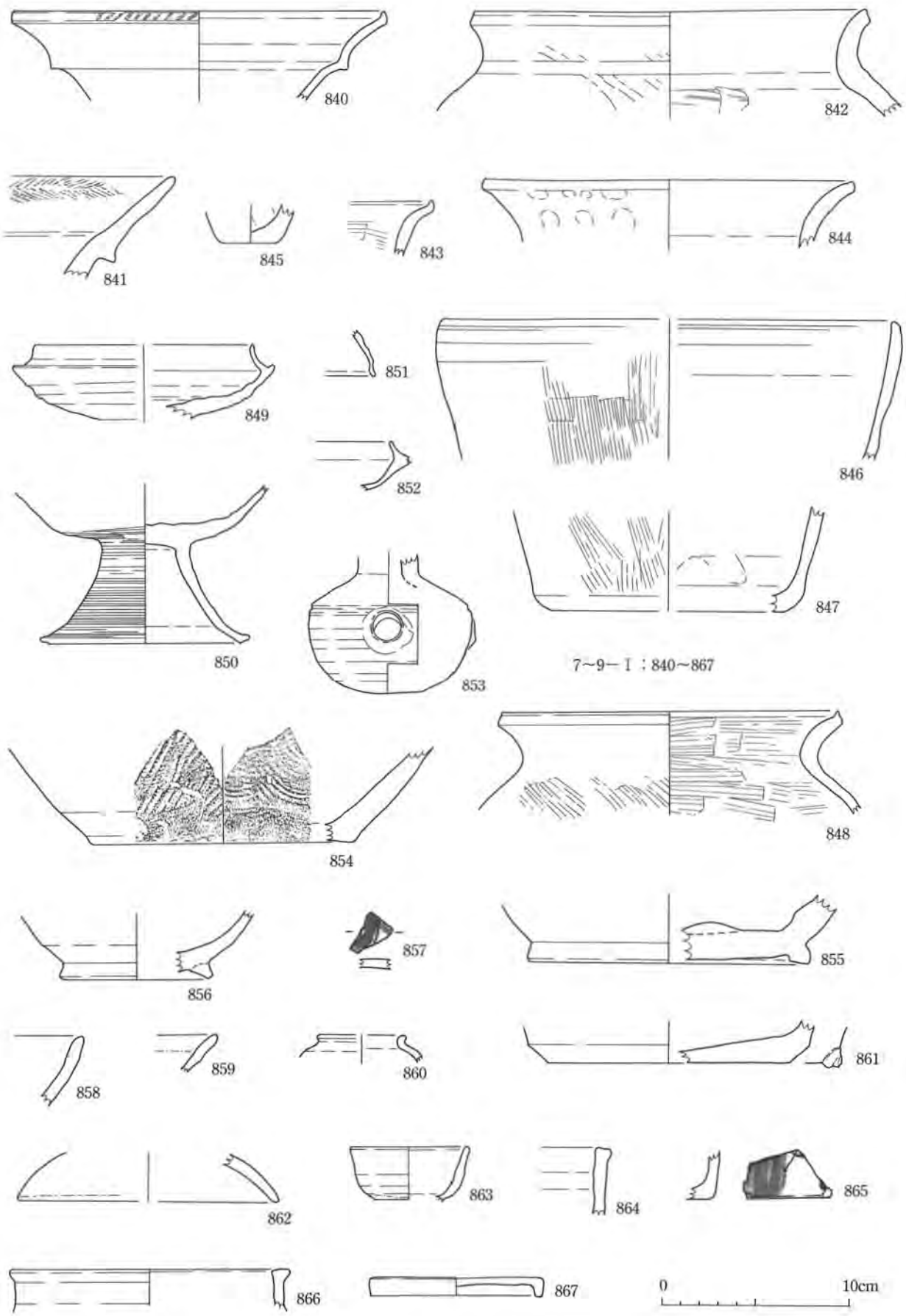
第46図　遺物実測図(23)



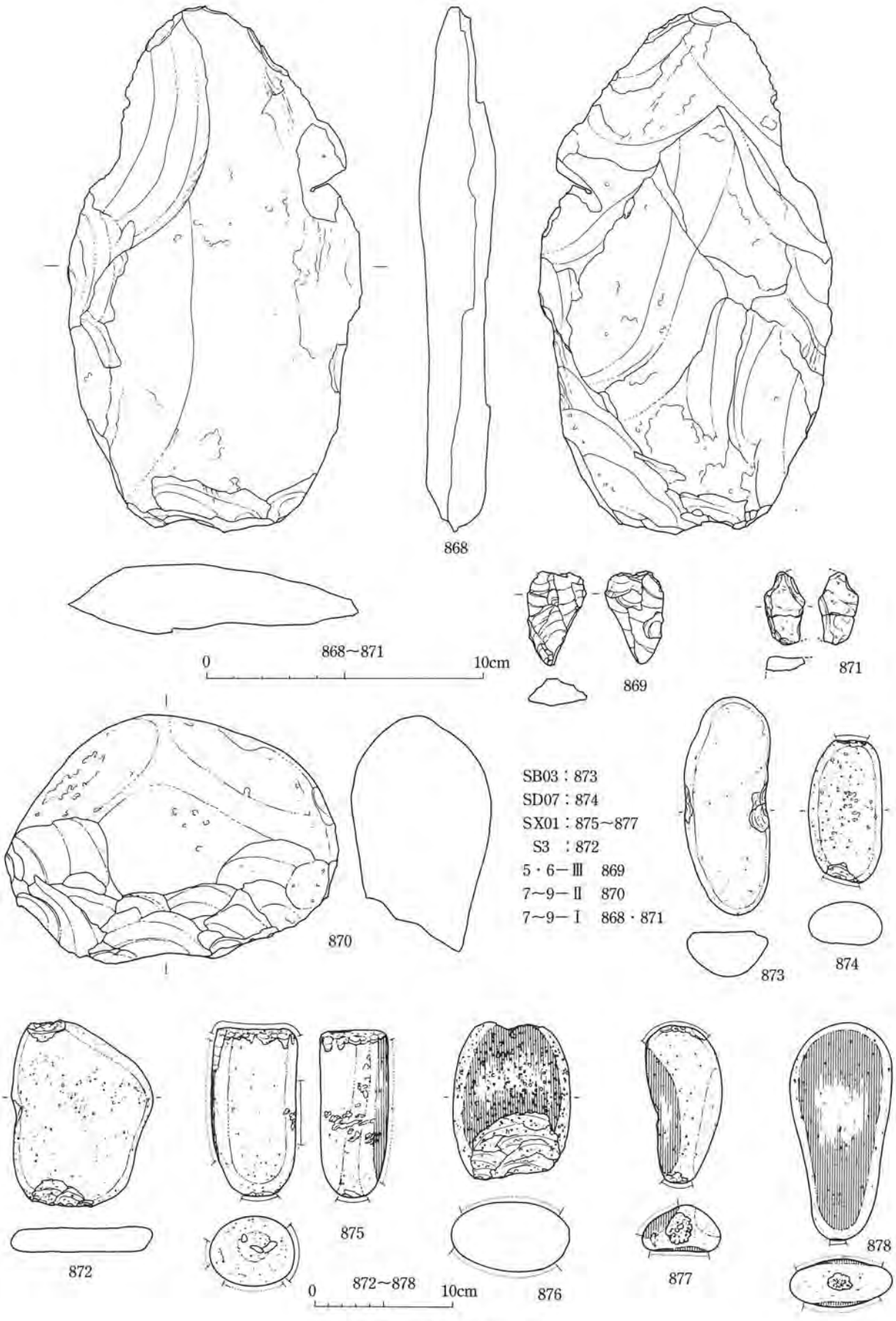
第47図　遺物実測図(24)



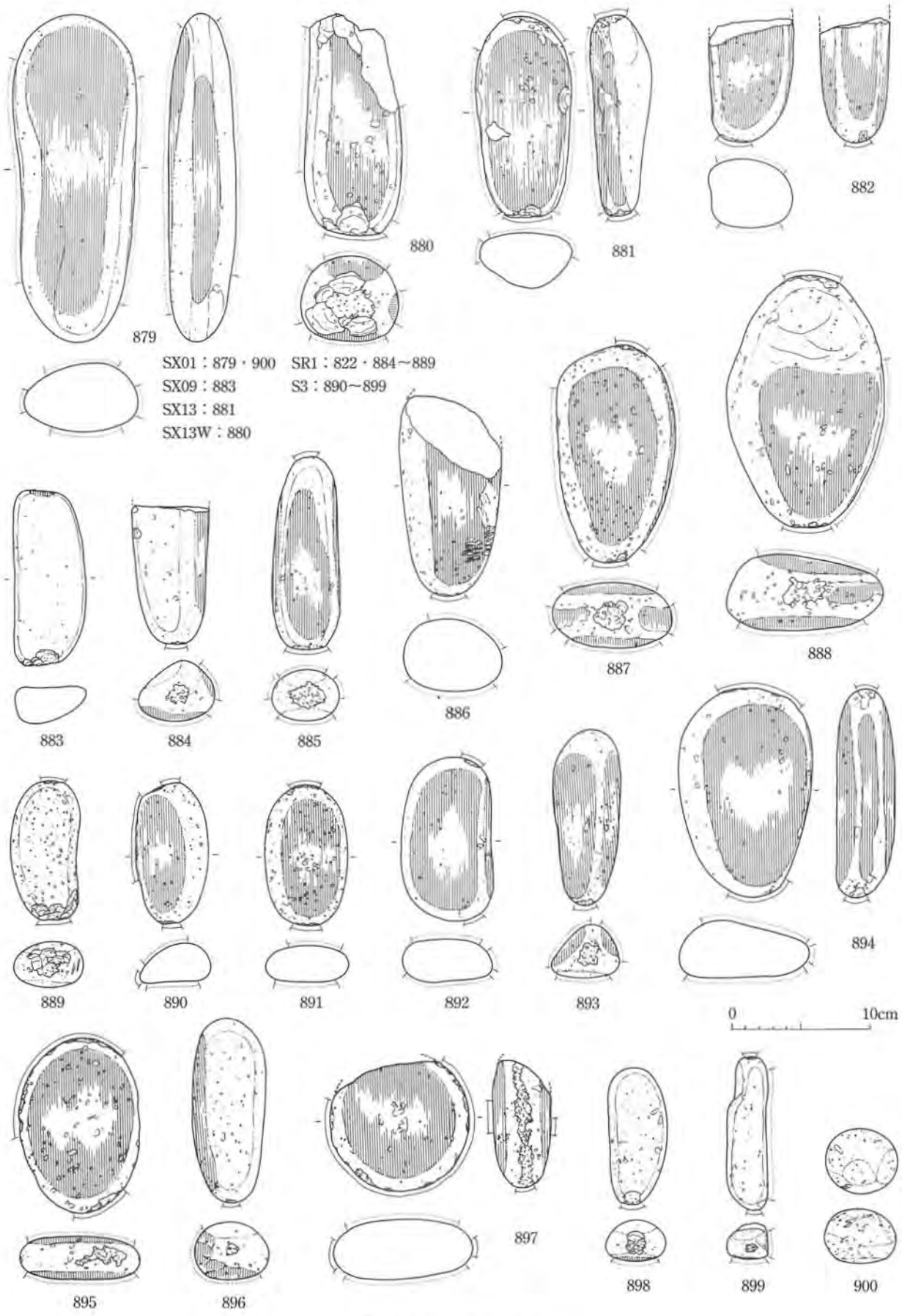
第48図　遺物実測図(25)


840
842
841
845
843
844
849
851
846
852
850
853
847
7～9－Ⅰ：840～867
854
848
856
857
855
858
859
860
861
862
863
864
865
866
867
0
10cm

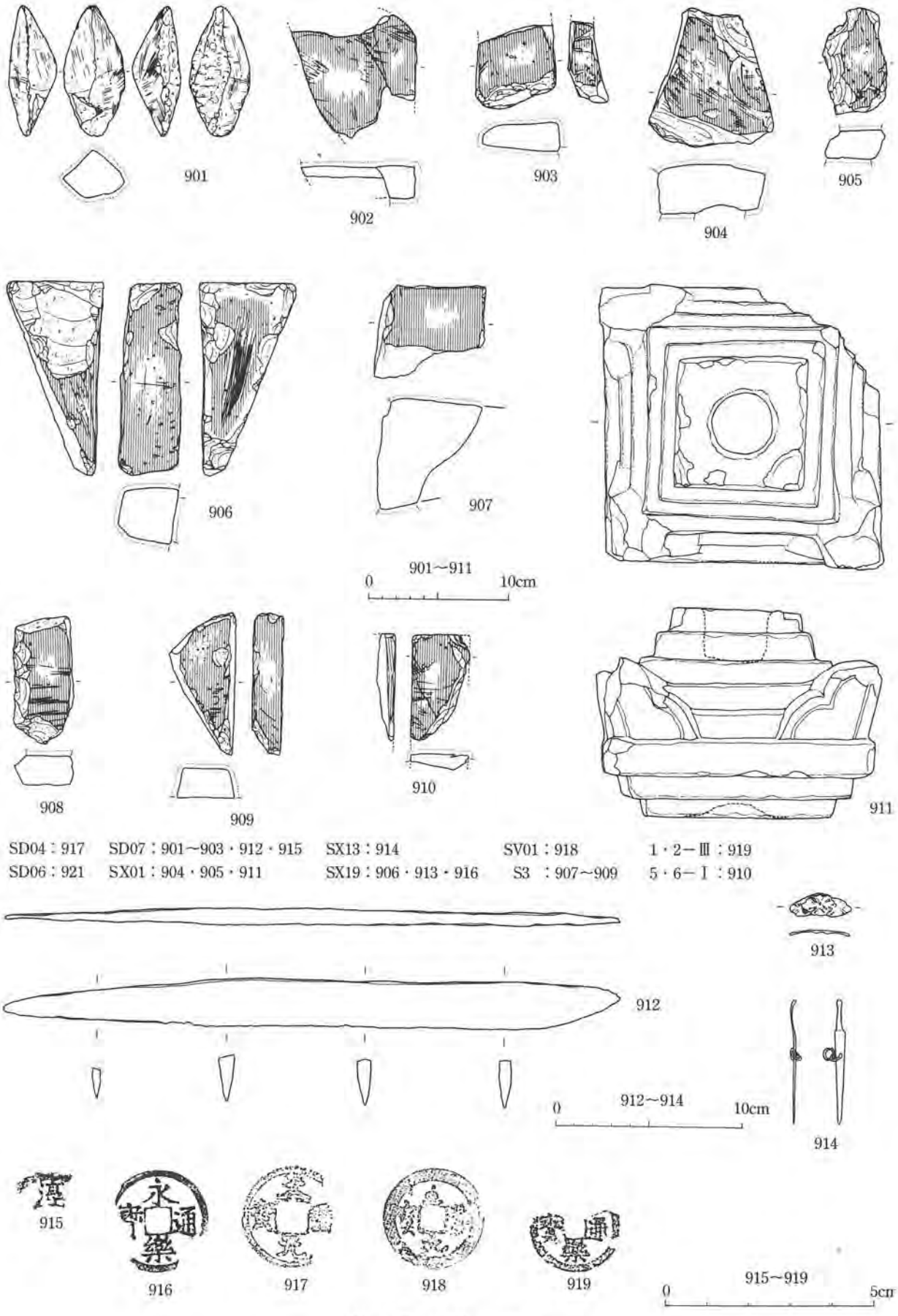
第49図　遺物実測図㉖



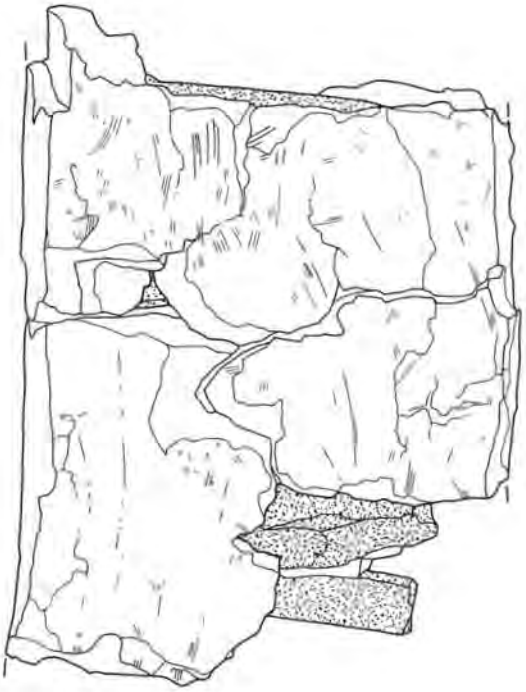
第50図　遺物実測図(27)


879
880
881
882
SX01：879・900
SX09：883
SX13：881
SX13W：880
SR1：822・884～889
S3：890～899
883
884
885
886
887
888
889
890
891
892
893
894
0
10cm
895
896
897
898
899
900

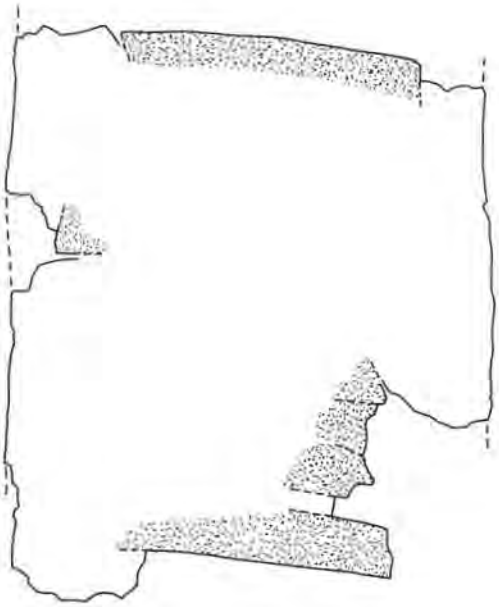
第51図　遺物実測図㉘



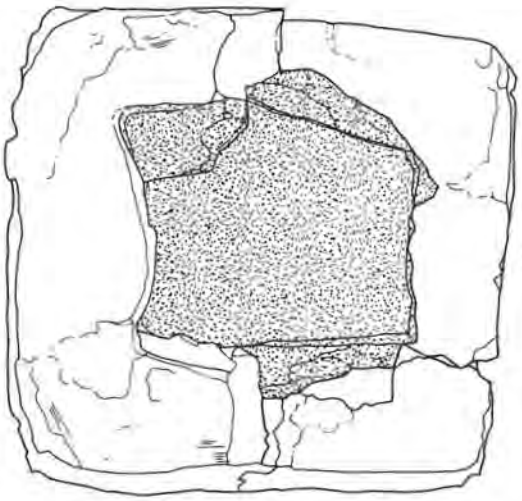
第52図　遺物実測図(29)



920



SX13：920



0　20cm

アミ目は瓦の部分

第53図　遺物実測図(30)

第３節　金銅製銚子（桐丸紋散長柄銚子）（第54～57図）

ＳＤ６（４区Ａ）溝底直上から出土。本体は銅鍛造でつくられ、両口式。本体及び長柄と接続する柄、本体と接続する柄の延長部分、接続に必要な部品（Ｌ字状金具、花先金具、リベット等）がほぼ完存。柄の延長部断面は台形を呈する。柄の下部には木材が残存しており、柄の上から笠鋲がさしこまれている。柄と木材は方形環（１個残）で固定。長柄は残っていない。本体の口縁部は内側に折り曲げて強化されている。本体の器厚は口縁から底部にかけてしだいに薄くなっていく。本体底部と胴部の境界は部分的に欠損。全面に鍍金が施される。本体胴部外面には鍍金の上から鍍銀により桐丸紋を13個描く。桐丸紋の形状は不鮮明であるが、五三の桐と思われる。紋は相互に酷似し、型紙使用の可能性もある。柄の表面には魚々子地に桐文を２カ所、八双文を１ヶ所蹴彫りで描く。本体の径15cm。柄の残存部まで含めた全長27cm。本体の高さ９cm。重量562ｇ。

製作工程について現段階では第57図のように推定している。

①本体部分を鍛造で製作し、２カ所に別につくった口を溶接する。

②本体と柄の接続部分で、花先金具とＬ字形の金具を５個のリベットを用いて本体に固定する。リベットによる固定の仕方は外側から内側へ差し込み、内側に菊座をかませた後先端をつぶしている。

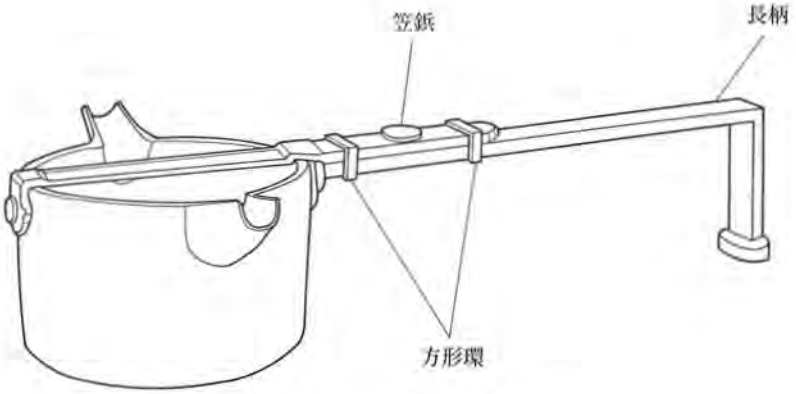
③本体の口縁外面で、柄の延長部分の折り曲げた先端を１個のリベットを用いて本体に固定する。リベットによる固定の仕方は、内側から外側へ差し込む以外は②と同じ。

④長柄（現存せず）の加工した先端に木材（ヒノキ属、長さ7.6cm、幅1.8cm、厚さ1.2cm）を組み込んだ後、③で本体と接続した柄の下部に入れ、方形環２個を用いて両者を結びつける。方形環は１個のみ残存。木材を組み込む意味はよくわからないが、柄と長柄の接触する部分を補強するための工夫の可能性がある。

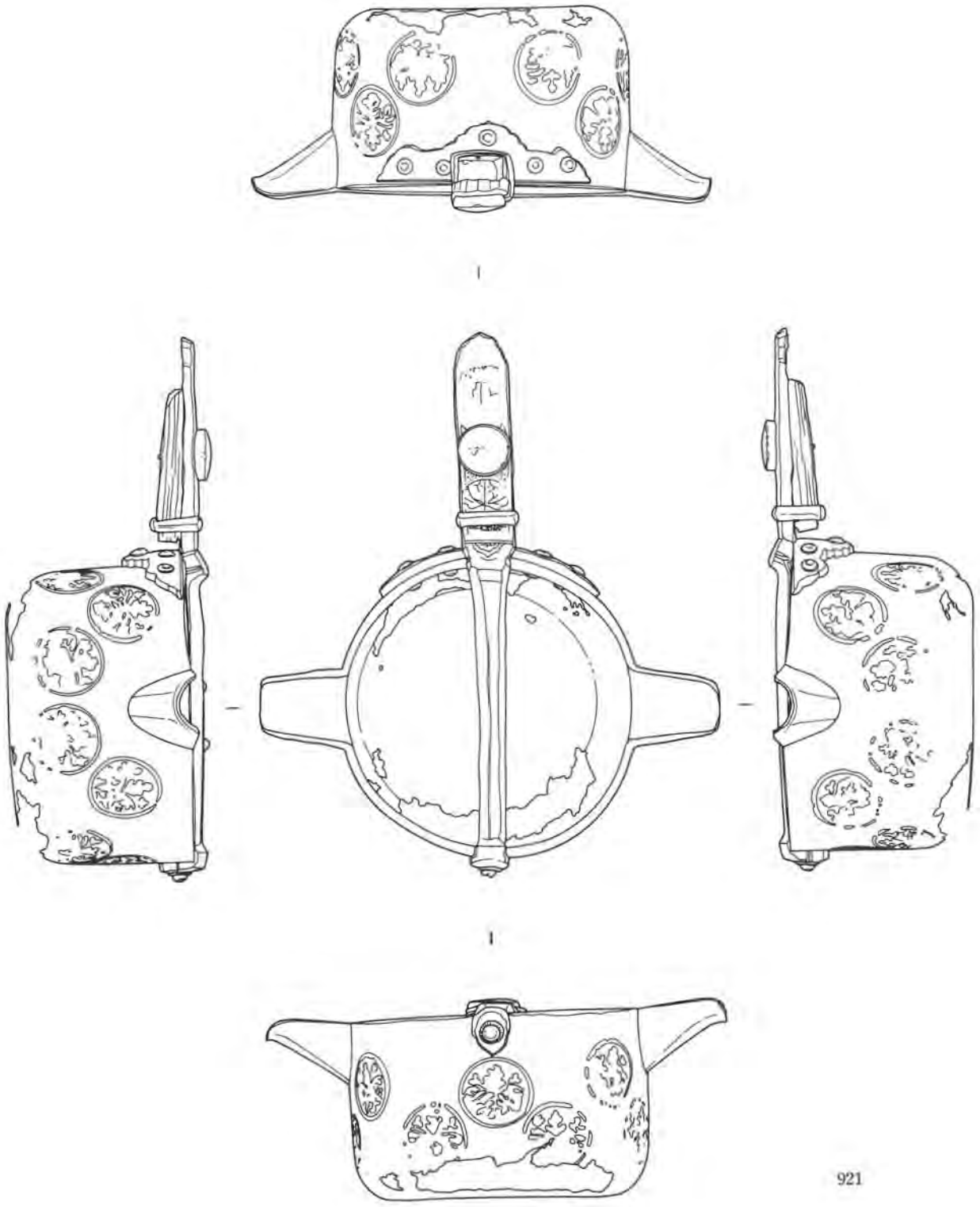
⑤笠鋲を用いて、本体に接続する柄と木材を固定する。これは材の移動防止のためと考えられる。

この銚子は、公家や武家などの酒宴の場で用いられた酒器である。洪水砂層中で出土していることから下限が天文４年（1535）と推定できる(注)。

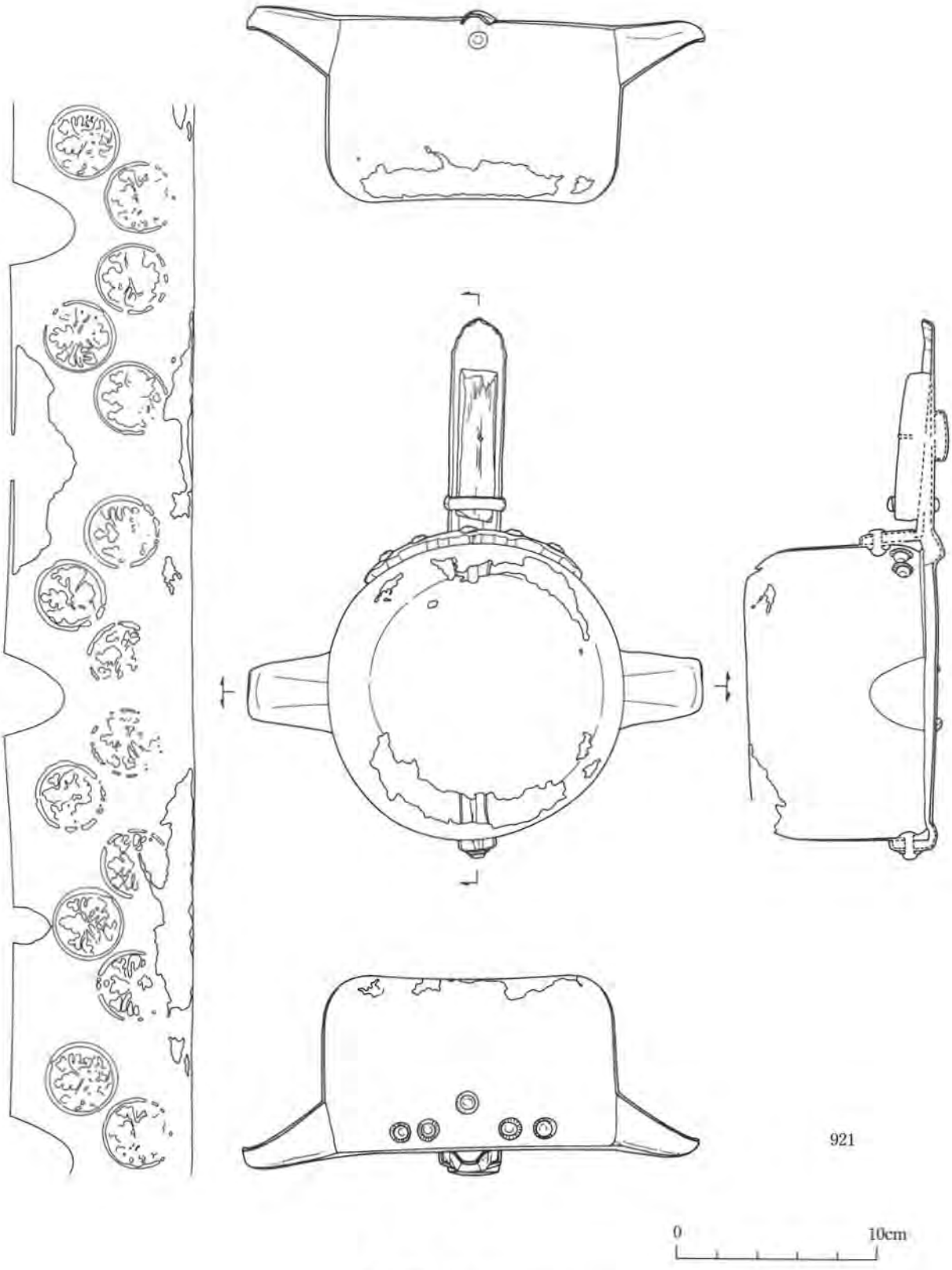
注　内堀信雄　1993　「土岐氏居館跡推定地の発掘調査」『日本歴史 第541号』吉川弘文館



第54図　長柄銚子模式図

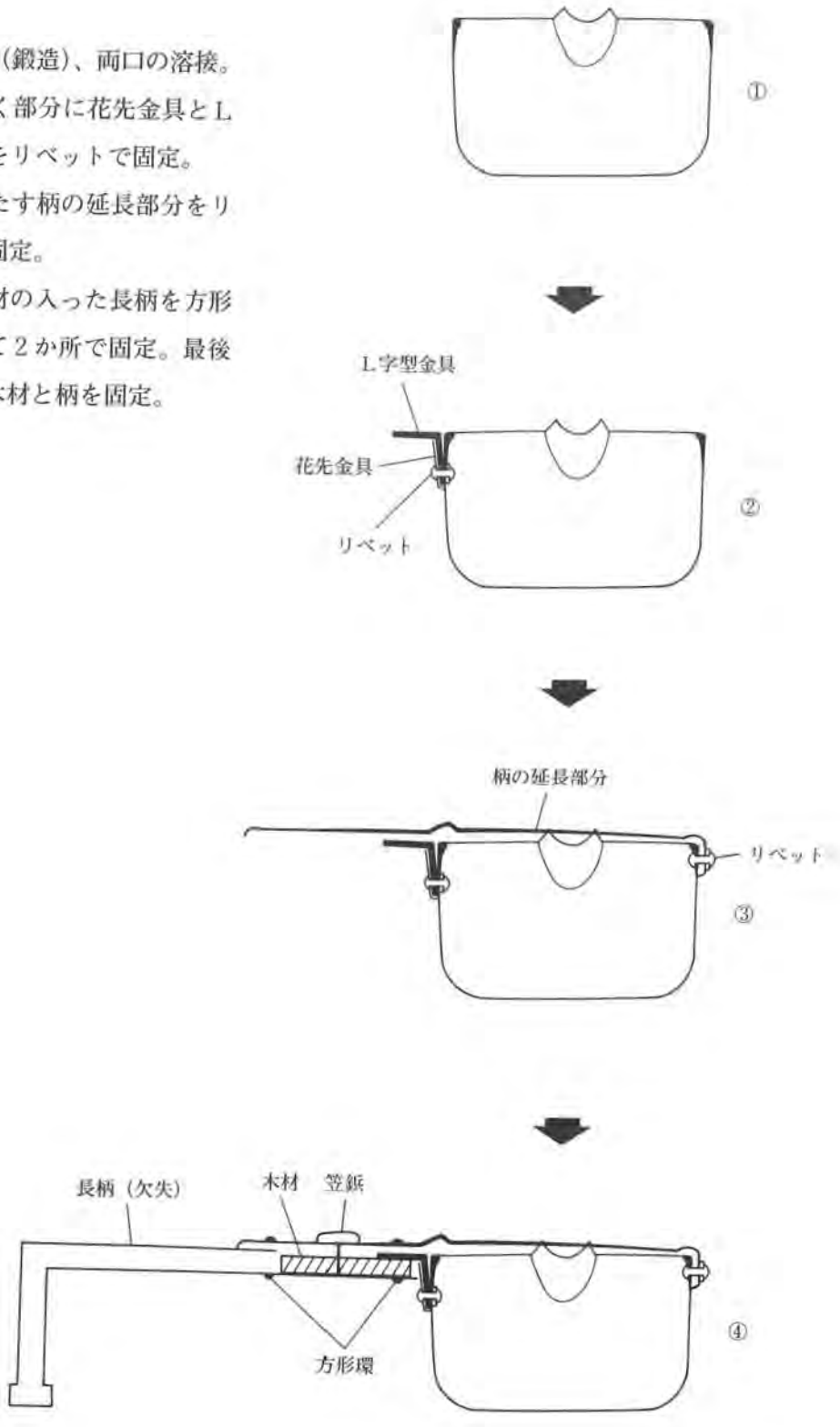


第55図　銚子実測図(1)



第56図　銚子実測図(2)

①本体製作（鍛造）、両口の溶接。
②長柄の付く部分に花先金具とL字形金具をリベットで固定。
③本体にわたす柄の延長部分をリベットで固定。
④先端に木材の入った長柄を方形環を用いて２か所で固定。最後に笠鋲で木材と柄を固定。



第57図　長柄銚子製作工程推定図

第5表　遺構（SK·P·SX）一覧表
第6表　遺物観察表

凡　例

1　第6表の弥生土器と土師器の区分は第4表に基づく（8期と9期の間）

2　第6表の法量の単位はcm、g。

3　第6表の編年・分類の内、期は第4表の時期区分による。

遺構番号	地区欠番	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	埋土	挿図番号(別冊図番号)	遺構番号	地区欠番	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	埋土	挿図番号(別冊図番号)
1	1区L	—	290	180	青灰色シルト～粘土質	挿-21 (別-1)	40	6区F	47	42	8	黄灰砂，灰白色砂球状塊＋木炭粒	挿-11 (別-3)
2	8区D	—	112	35	黄色砂粘質土	挿-3 (別-3)	41	6区F	—	—	45	黄灰砂，灰白色砂球状塊＋木炭粒	挿-11 (別-3)
3	9区E	70	65	13	黒色土	挿-3 (別-3)	42	6区H	—	78	—	黄灰～暗灰色砂粘質＋木炭粒，焼土粒	挿-10 (別-3)
4	欠番	—	—	—	—	—	43	6区J	—	80	18	黄茶褐色粘質，部分的に暗茶灰白色土	(別-3)
5	欠番	—	—	—	—	—	44	6区K		86	18	灰茶褐色砂粘質土	(別-3)
6	欠番	—	—	—	—	—	45	6区I	—	—	36	帯茶，青灰色砂＋木炭粒少し	(別-3)
7	欠番	—	—	—	—	—	46	6区D	315	(290)	178	黄白色砂，灰白色砂球状塊＋木炭粒	挿-9 (別-3)
8	欠番	—	—	—	—	—	47	6区F	—	72	12	暗茶褐色砂質土＋木炭粒	挿-11 (別-3)
9	欠番	—	—	—	—	—	48	6区C	112	43	12	灰白色砂粘質土	(別-3)
10	6区G	423	110	40	黄青灰褐粘砂，黄褐色粘質球状塊	(別-3)	49	6区A	—	—	15	暗茶褐色粘質土＋木炭粒＋焼土	挿-8 (別-3)
11	6区F	—	95	25	明茶褐色砂質土	(別-3)	50	6区A	—	—	—	淡黄灰粘質土＋木炭粒少し	挿-8 (別-3)
12	6区C	106	104	30	茶灰白色砂質土＋木炭粒	挿-9 (別-3)	51	6区A	—	—	15	灰褐色粘質土	挿-8 (別-3)
13	6区C	—	98	24	明茶褐色砂質土＋木炭微量	(別-3)	52	6区I	—	—	—	暗茶灰色粘質土＋木炭粒少し	挿-10 (別-3)
14	6区C	—	170	42	淡茶灰白色砂質土	(別-3)	53	6区N	66	50	24	黄灰褐色粘質土	(別-2)
15	6区G	—	77	25	茶褐色均質土	(別-3)	54	5区D	132	(132)	30	淡灰色砂質～黄灰色砂粘質土	(別-2)
16	6区H	(130)	127	65	黄灰褐色砂質土＋木炭粒	挿-10 (別-3)	55	5区E	—	145	8	黄茶褐色砂粘質土	(別-2)
17	6区H	(125)	115	28	黄灰色砂質土	(別-3)	56	5区F	—	96	16	茶褐色土	(別-2)
18	6区I	130	128	40	黄～茶灰色砂質土＋木炭粒	挿-10 (別-3)	57	5区F	100	98	17	黄灰褐色砂粘質土	(別-2)
19	6区E	93	54	26	黄灰色砂質土＋木炭粒	(別-3)	58	5区G	—	140	15	茶褐色細砂	(別-2)
20	6区E	—	78	24	淡茶灰色砂質土＋木炭粒	(別-3)	59	5区G	—	62	30	暗茶褐色細砂＋焼土粒＋木炭粒	(別-2)
21	6区G	184	—	32	茶褐色砂質土＋木炭粒	(別-3)	60	5区G	—	132	17	暗黄灰褐色砂粘質土	(別-2)
22	6区G	—	—	20	暗茶褐色粘質土	(別-3)	61	5区G	—	64	36	黄灰砂土体で，青灰砂混じり	(別-2)
23	6区G	—	—	10	暗茶褐色～暗灰色土＋木炭粒	(別-3)	62	5区G	83	49	16	黒褐色土と黄褐色土の縞状混じり	(別-2)
24	6区H	(85)	103	75	灰～暗灰砂質土＋木炭粒多い	挿-10 (別-3)	63	5区G	—	50	36	暗茶褐色細砂＋木炭微粒多い	(別-2)
25	6区A	52	—	31	暗茶褐色粘質土	挿-8 (別-3)	64	欠番	—	—	—	—	—
26	6区A	—	—	28	淡黄～帯赤色粘質土＋木炭粒	挿-8 (別-3)	65	欠番	—	—	—	—	—
27	6区A	—	70	23	淡茶灰白砂質土＋木炭粒，焼土塊	挿-8 (別-3)	66	欠番	—	—	—	—	—
28	6区A	—	155	15	明黄褐色砂粘質土＋木炭粒少々	挿-8 (別-3)	67	欠番	—	—	—	—	—
29	6区A	—	—	15	暗灰褐色砂粘質土	挿-8 (別-3)	68	欠番	—	—	—	—	—
30	6区A	—	77	17	帯赤色青灰色粘質土	(別-3)	69	欠番	—	—	—	—	—
31	6区H	78	64	21	明黄灰色砂質土＋木炭粒	挿-10 (別-3)	70	4区P	110	105	15	暗灰褐粘砂	(別-2)
32	6区F	132	118	50	淡茶褐色砂質土＋木炭粒	挿-11 (別-3)	71	4区G	—	—	7	黄茶褐色粘質土	(別-2)
33	6区B	—	120	40	淡黄灰色砂粘質土＋木炭粒	挿-8 (別-3)	72	4区G	145	120	7	青灰色砂粘質土	挿-13 (別-2)
34	6区I	53	50	10	明～暗茶褐色砂質土	挿-10 (別-3)	73	4区F	107	87	11	黄茶褐色粘質土＋橙赤・暗茶ブロック	挿-13 (別-2)
35	6区H	—	25	18	暗茶褐色砂質土＋木炭粒	挿-10 (別-3)	74	4区F	91	88	7	青灰色砂粘質土	挿-13 (別-2)
36	6区D	—	—	30	黄灰褐色砂粘質土＋木炭粒少し	(別-3)	75	4区F	(60)	60	19	黄茶褐色砂粘質土	(別-2)
37	欠番	—	—	—	—	—	76	4区F	100	—	12	淡青灰砂粘質土	挿-13 (別-2)
38	6区G	—	65	9	暗黄灰褐色土＋木炭粒＋焼土粒	(別-3)	77	4区C	78	76	16	茶褐色粘質土＋木炭斑状	挿-13 (別-2)
39	6区F	—	132	27	暗黄灰褐色砂質土＋木炭粒少し	挿-11 (別-3)							

第5表(1)　ＳＫ一覧

遺構番号	地区(欠番)	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	埋土	挿図番号(別冊図番号)	遺構番号	地区(欠番)	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	埋土	挿図番号(別冊図番号)
1	9区B	34	32	41	黒色土	(別-3)	96	6区L	44	30	25	暗茶灰色細砂＋木炭微量	(別-3)
2	9区B	27	24	6	黒色土	(別-3)	97	6区L	—	63	(20)	暗茶褐色砂＋大粒木炭，焼土，焼石	挿-20 (別-3)
3	9区B	21	18	32	黒色土	(別-3)	98	6区N	38	30	10	茶褐色細砂	(別-3)
4	9区A	26	22	13	黒色土	(別-3)	99	6区M	—	43	10	中々暗茶褐色細砂	(別-3)
5	9区C	44	18	18	黒色土	(別-3)	100	6区M	30	19	10	中々暗茶褐色細砂	(別-3)
6	9区C	19	18	32	黒色土	(別-3)	101	6区J	—	75	20	明茶褐色粘質土，青灰色砂球状塊	(別-3)
7	9区D	32	26	35	黒色土	(別-3)	102	6区I	35	29	9	暗茶褐色細砂＋木炭粒	挿-10 (別-3)
8	9区D	24	23	55	黒色土	(別-3)	103	6区J	—	55	18	茶褐色粘質土	(別-3)
9	9区D	28	22	17	黒色土	(別-3)	104	6区E	38	30	15	中々暗茶褐色細砂	(別-3)
10	9区D	28	24	13	黒色土	(別-3)	105	6区I	—	30	—	暗灰褐色砂質土，灰黄白色球状塊	挿-10 (別-3)
11	9区D	44	28	30	黒色土	(別-3)	106	6区I	15	16	8	淡黄灰色砂質土＋木炭粒	挿-10 (別-3)
12	9区D	18	—	7	黒色土	(別-3)	107	6区I	—	—	11	淡灰色砂＋1cm大木炭粒	挿-10 (別-3)
13	9区D	22	18	4	黒色土	(別-3)	108	6区A	—	40	7	暗褐色砂粘質土＋木炭粒	挿-8 (別-3)
14	9区D	31	24	3	黒色土	(別-3)	109	6区A	20	20	10	茶灰色砂粘質土＋木炭粒	挿-8 (別-3)
15	9区F	28	18	末確認	黒色土	(別-3)	110	6区A	(33)	33	13	黄赤灰褐色粘質土＋木炭粒，焼土粒	挿-8 (別-3)
16	9区D	40	24	末確認	黒色土	(別-3)	111	6区A	(35)	25	18	黄灰褐色砂粘質土＋木炭粒	挿-8 (別-3)
17	欠番	—	—	—	—	—	112	6区E	28	23	30	暗茶褐色砂粘質土＋木炭粒	(別-3)
18	欠番	—	—	—	—	—	113	欠番	—	—	—	—	—
19	欠番	—	—	—	—	—	114	6区I	24	21	23	暗黄灰砂質土＋木炭粒	挿-10 (別-3)
20	8区B	44	33	28	黄灰～黄褐色砂質土	挿-4 (別-3)	115	6区A	20	14	13	明茶褐色砂粘質土＋木炭粒	挿-8 (別-3)
21	8区C	44	32	37	茶褐色砂質土～粘質土	挿-4 (別-3)	116	6区A	24	16	15	淡黄灰砂粘質土＋木炭粒，焼土粒	挿-8 (別-3)
22	8区C	36	33	17	茶褐色砂質土	(別-3)	117	6区A	—	20	15	淡黄灰砂粘質土＋木炭粒	挿-8 (別-3)
23	8区B	19	16	8	茶褐色砂質土	挿-4 (別-3)	118	2区F	22	18	5	茶褐色砂	(別-2)

第5表(2)　ＳＫ一覧（その１）

遺構番号	地区欠番	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	埋土	挿図番号(別添図番号)
24	8区C	20	19	8	灰褐色砂質土, 固く締まる	挿-5 (別-3)
25	8区D	28	27	26	暗茶褐色砂質土	挿-5 (別-3)
26	8区E	26	19	21	茶褐色砂質土	(別-3)
27	欠番	—	—	—	—	—
28	欠番	—	—	—	—	—
29	欠番	—	—	—	—	—
30	6区B	45	41	30	薄茶色灰白色砂+木炭粒少々	挿-8 (別-3)
31	6区B	—	42	35	灰褐色砂粘質土+木炭粒	挿-8 (別-3)
32	6区B	39	30	35	やや茶色帯び灰白色砂+木炭粒少々	挿-8 (別-3)
33	6区B	21	15	27	茶褐色粘質土+木炭粒	挿-8 (別-3)
34	6区C	55	44	21	褐色粘質土	(別-3)
35	6区C	—	(57)	15	褐色粘質土	挿-8 (別-3)
36	6区C	21	18	9	黄灰白色土+木炭粒	(別-3)
37	6区C	23	17	18	淡茶褐色砂+焼土粒	(別-3)
38	6区C	27	21	25	黄灰色砂粘質土+焼土粒	(別-3)
39	6区E	25	22	26	淡茶褐色細砂	(別-3)
40	6区E	(26)	26	24	黄灰白細砂	(別-3)
41	6区E	21	21	15	黄灰褐色土+木炭粒	(別-3)
42	6区F	40	35	7	黒~帯赤色, 黄灰褐色土	挿-11 (別-3)
43	6区F	28	28	52	暗黄灰褐色土+木炭粒	挿-11 (別-3)
44	6区F	32	32	24	暗灰褐色土+木炭粒少し	挿-11 (別-3)
45	6区G	20	16	3	帯灰白色茶褐色土	(別-3)
46	6区G	17	18	8	淡黄灰褐色砂+木炭粒	挿-11 (別-3)
47	6区G	52	48	17	茶褐色土+木炭粒	(別-3)
48	6区F	—	30	18	灰茶褐色砂+木炭粒	挿-11 (別-3)
49	6区G	37	30	18	暗灰褐色砂+木炭粒	(別-3)
50	6区G	32	32	14	茶灰色砂, 表部灰白砂粘質	(別-3)
51	6区G	24	21	38	茶灰色砂, 表部灰白砂粘質	(別-3)
52	6区G	14	13	6	茶灰色砂, 表部灰白砂粘質	(別-3)
53	6区G	23	16	9	茶灰色砂, 表部灰白砂粘質	(別-3)
54	6区G	63	32	21	暗赤褐色土	(別-3)
55	6区G	(25)	21	21	暗茶褐色土+木炭粒	(別-3)
56	6区I	31	30	32	暗黄灰色砂+木炭粒微量, 焼土粒	挿-10 (別-3)
57	6区I	(57)	43	38	黒灰色土+木炭粒多い	挿-10 (別-3)
58	6区I	34	33	48	黄灰褐色土+木炭粒微量	挿-10 (別-3)
59	6区J	30	28	3	暗黄灰色砂+木炭粒微量	(別-3)
60	6区J	20	20	5	暗黄灰色砂+木炭粒, 焼土粒微量	(別-3)
61	6区J	23	23	40	黄灰褐色土+木炭粒	(別-3)
62	6区J	45	33	10	暗灰黄色土+5mm大木炭粒+焼土粒	(別-3)
63	6区I	(30)	28	27	淡黄灰褐色砂+木炭粒	挿-10 (別-3)
64	6区I	28	25	30	淡黄灰褐色砂	挿-10 (別-3)
65	6区I	30	27	9	灰白色砂粘質土, 赭色微粒	挿-10 (別-3)
66	6区I	34	23	10	黄灰色砂+木炭粒, 焼土粒微量	挿-10 (別-3)
67	6区I	21	18	10	やや暗色黄灰色砂+木炭1cm大粒	挿-10 (別-3)
68	6区H	22	21	30	暗茶灰白色砂質土+木炭粒, 上面焼石	挿-10 (別-3)
69	6区H	17	16	5	淡黄灰褐色細砂	挿-10 (別-3)
70	6区H	56	45	5	灰白色砂粘質土	挿-10 (別-3)
71	欠番	—	—	—	—	—
72	欠番	—	—	—	—	—
73	6区A	23	23	18	茶褐色砂粘質土+木炭粒	挿-8 (別-3)
74	6区A	16	16	17	茶~黒褐色砂粘質土+木炭粒	挿-8 (別-3)
75	6区A	20	20	24	茶~黒褐色砂粘質土+木炭粒多い	挿-8 (別-3)
76	6区A	25	22	17	淡茶灰白砂粘質土+木炭粒	挿-8 (別-3)
77	6区A	28	20	32	暗茶褐色砂粘質土+木炭粒	挿-8 (別-3)
78	6区A	18	17	22	茶褐色砂粘質土+木炭粒	挿-8 (別-3)
79	6区A	24	22	6	暗茶褐色砂粘質土+木炭粒	挿-8 (別-3)
80	6区A	23	22	14	暗茶褐色砂粘質土+木炭粒	挿-8 (別-3)
81	6区A	18	15	5	暗茶褐色砂粘質土+木炭粒	挿-8 (別-3)
82	6区A	34	28	29	暗茶褐色砂粘質土+木炭粒	挿-8 (別-3)
83	6区A	17	15	14	黄灰白色粘質土	挿-8 (別-3)
84	6区A	—	32	16	黄赤褐色粘質土	挿-8 (別-3)
85	6区A	18	14	8	明黄褐色砂粘質土+木炭1cm大粒	挿-8 (別-3)
86	6区A	21	20	30	黄茶褐色砂粘質, 灰白色球状塊+木炭	挿-8 (別-3)
87	6区A	26	26	31	暗茶~灰褐色砂粘質土+木炭多い	挿-8 (別-3)
88	6区H	35	28	12	暗黄灰細砂+木炭粒	挿-10 (別-3)
89	6区J	25	25	43	褐色サビ色+1cm大木炭粒	(別-3)
90	6区J	23	23	10	暗黄灰色砂+木炭粒, 焼土 (赤~黒)	(別-3)
91	6区J	20	17	9	淡青灰砂	(別-3)
119	6区I	32	30	未確認	暗黄灰砂質土+木炭粒	挿-10 (別-3)
120	6区I	18	18	18	暗茶褐色砂質土+木炭粒	挿-10 (別-3)
121	5区B	24	23	18	暗茶褐色砂粘質土	(別-2)
122	5区B	27	27	16	暗茶褐色砂粘質土	(別-2)
123	5区B	30	26	16	暗茶褐色砂粘質土	(別-2)
124	5区A	24	23	28	黄灰砂粘質土	(別-2)
125	5区B	—	23	22	やや暗色黄灰砂粘質土	(別-2)
126	5区B	—	59	28	黄灰砂粘質土	(別-2)
127	5区B	—	40	15	黄灰砂粘質土+焼土ブロック	(別-2)
128	5区B	—	27	19	暗色黄灰砂粘質土	(別-2)
129	5区B	27	25	16	黄灰砂粘質土	(別-2)
130	5区B	—	47	23	暗茶褐色砂粘質土	(別-2)
131	5区C	34	27	25	暗茶褐色砂粘質土	(別-2)
132	5区C	21	21	13	灰茶褐色砂粘質土+木炭粒	(別-2)
133	5区D	38	38	28	灰茶褐色砂粘質土+木炭粒	(別-2)
134	5区D	26	24	21	灰茶褐色砂粘質土+木炭粒	(別-2)
135	5区E	24	23	42	暗茶灰色砂粘質土	(別-2)
136	5区E	28	28	34	暗茶灰色砂粘質土+焼土+木炭粒	(別-2)
137	5区E	31	26	30	灰白色細粒砂+木炭粒	(別-2)
138	5区E	24	21	31	暗茶灰色砂粘質土+木炭粒	(別-2)
139	5区E	25	20	15	灰白色細粒砂+木炭粒	(別-2)
140	5区E	33	31	33	黄灰砂質土+暗褐色焼土+木炭粒	(別-2)
141	5区F	23	18	32	明黄灰色砂質土+木炭粒	(別-2)
142	5区F	18	18	30	暗茶褐色土+木炭粒	(別-2)
143	5区F	—	27	20	茶褐色砂粘質土	(別-2)
144	5区E	—	51	14	茶褐色砂粘質土	(別-2)
145	5区F	—	20	27	茶褐色砂粘質土	(別-2)
146	5区G	30	28	10	暗茶褐色土+焼土+木炭粒目立つ	(別-2)
147	5区G	—	64	15	暗茶褐色土+焼土+木炭粒目立つ	(別-2)
148	5区F	27	27	26	灰褐色砂質土+木炭粒少し	(別-2)
149	5区F	23	22	10	暗茶褐色粘質土	(別-2)
150	5区G	—	29	26	暗黄灰色粘質土	(別-2)
151	5区G	—	33	33	暗黄灰色粘質土	(別-2)
152	5区G	(19)	19	14	暗黄灰色粘質土	(別-2)
153	5区G	17	17	10	暗茶褐色細砂+焼土粒少し	(別-2)
154	5区G	22	18	15	暗茶褐色細砂+焼土粒少し	(別-2)
155	5区G	19	19	15	暗茶褐色細砂	(別-2)
156	5区G	19	18	12	暗茶褐色細砂+木炭粒少し	(別-2)
157	5区G	22	21	15	暗茶~青灰色砂	(別-2)
158	5区G	25	21	16	暗茶褐色砂質土+木炭微粒	(別-2)
159	5区G	16	16	16	暗茶褐色砂質土+木炭大粒	(別-2)
160	5区H	22	22	未確認	暗茶褐色砂質土	(別-2)
161	5区H	47	40	36	暗灰褐色砂質土+木炭粒少し	(別-2)
162	5区H	35	33	30	暗灰褐色砂質土+木炭粒少し	(別-2)
163	5区G	22	16	19	暗茶褐色砂質土	(別-2)
164	5区F	18	15	20	茶灰白色細粒砂	(別-2)
165	5区J	36	30	10	灰茶褐色砂質土+木炭粒	挿-14 (別-2)
166	5区J	20	18	7	黄灰~暗灰褐色砂質土+木炭粒	(別-2)
167	5区J	30	27	15	灰白~灰茶褐色砂質土+木炭粒少し	(別-2)
168	5区J	30	26	8	青灰褐色砂粘質土+木炭粒少し	(別-2)
169	5区K	17	16	8	黄赤褐色砂質土+木炭粒	(別-2)
170	5区K	24	21	18	青灰褐色砂質土	(別-2)
171	5区K	55	53	58	黄灰色粗粒砂	(別-2)
172	5区K	20	18	12	青灰褐色砂質土+木炭粒少し	(別-2)
173	5区K	18	17	43	青灰褐色砂質土+木炭粒少し	(別-2)
174	5区K	26	20	18	茶系青灰砂質土+木炭粒	(別-2)
175	5区K	35	28	49	青灰砂質土	(別-2)
176	5区K	42	30	22	灰茶褐色砂粘質土	(別-2)
177	5区J	—	30	10	暗黄灰砂+木炭粒	挿-14 (別-2)
178	5区M	—	19	16	暗灰粘質土	(別-2)
179	欠番	—	—	—	—	—
180	欠番	—	—	—	—	—
181	4区F	—	23	9	茶褐色砂粘質土	(別-2)
182	4区C	30	28	12	灰白砂粘質土	(別-2)
183	4区C	38	34	9	灰白砂粘質土	(別-2)
184	4区E	62	57	20	暗灰黒色土	(別-2)
185	4区P	30	27	20	暗茶灰色粗粒砂	(別-2)
186	4区P	44	45	19	帯黄青灰砂粘質土+黄褐色斑状	(別-2)

第5表(3)　P一覧（その2）

遺構番号	地区欠番	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	埋土	挿図番号(別冊図番号)	遺構番号	地区欠番	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	埋土	挿図番号(別冊図番号)
92	6区J	19	18	14	やや暗灰色砂+木炭粒, 焼土粒	(別-3)	187	4区P	32	30	28	暗茶灰砂粘質土	(別-2)
93	6区J	17	17	17	茶灰色細砂+木炭粒	(別-3)	188	欠番	—	—	—	—	—
94	6区K	27	19	25	明茶褐色細砂	(別-3)	189	欠番	—	—	—	—	—
95	6区L	23	22	33	暗茶灰色細砂+木炭微量	(別-3)	190	1区K	25	25	9	黄褐色粘質土	掃-20 (別-1)

第5表(4)　P一覧（その3）

遺構番号	地区欠番	発掘範囲(長さ:m)	発掘範囲(幅:m)	深さ(m)	埋土	挿図番号(別冊図番号)	備考	遺構番号	地区欠番	発掘範囲(長さ:m)	発掘範囲(幅:m)	深さ(m)	埋土	挿図番号(別冊図番号)	備考
1	1KJ~N	(29.5)	(2.8)	—	灰白砂粘質土	掃-17 (別-1)	埋立て整地?	20	8KC	(0.8)	(0.9)	0.1	赤褐色土/灰白色土	(別-3)	埋立て整地?
2	2KG~F	(2.7)	5.7	1.6	灰白色砂	(別-2)	土砂採掘跡?	21a~c	9KC	(3.9)	(1.5)	0.4	黒色土	掃-3 (別-3)	倒木痕?
3	2KG~H	(3.1)	3.7	2.6	灰白色砂	(別-2)	土砂採掘跡?	22	9KD~E	2.0	(1.1)	—	黒色土	(別-3)	倒木痕?
4	2KH~I	6.4	(3.1)	2.1	灰白色砂	(別-2)	土砂採掘跡?	23	6KA~B	7.2	1.8	0.78	灰白色砂粘質土	掃-22 (別-3)	校舎建築物
5	2KH~I	3.6	1.7	0.6	灰白色砂	(別-2)	土砂採掘跡?	24	8KE	—	—	—	黒褐色砂粘質土	(別-3)	段丘崖地形?
6	1KG~H	4.2	(2.2)	0.9	灰白色砂	掃-11 (別-4)	不明/石段有り	25	6KH~I	5.3	(2.5)	0.35	暗茶褐色砂質土	掃-10 (別-3)	建築物床面?
7	2KI~J	(5.0)	(4.7)	1.0	灰白色砂	掃-21 (別-1)	土砂採掘跡?	26a~d	6KF	2.0	(2.1)	0.55	暗茶褐色砂質土	掃-11 (別-3)	倒木痕?
8	2KJ~3KA	(11.6)	(4.3)	1.0	灰白色砂	掃-21 (別-1)	土砂採掘跡?	27	6KK~L	(2.4)	1.8	0.22	灰白色砂粘質土	掃-11 (別-3)	埋立て整地?
9	3KA~B	4.2	1.4	0.45	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?	28	5KJ~K	5.6	(4.0)	0.3	灰茶褐色粘質土	(別-2)	埋立て整地?
10a~c	3KC~E	6.6	2.3	0.37	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?	29	欠番	—	—	—	—	—	—
11	3KC	(4.4)	1.4	0.38	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?	30	6KI	(2.0)	(1.8)	0.3	灰白色砂粘質土	掃-10 (別-3)	埋立て整地?
12	3KE~F	5.5	1.0	0.3	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?	31	6KH	(1.5)	(0.9)		灰白色砂粘質土	掃-10 (別-3)	埋立て整地?
13・13W	3KE~K	(37.6)	3.3	1.2	灰白砂/青灰シルト	掃-22 (別-1)	一部が溝状	32	2KA	1.1	0.8	0.28	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?
14	3KA~B	(6.0)	(6.0)	0.3	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?	33	2KA	1.2	0.6	0.29	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?
15	3KC~D	2.6	(0.8)	0.63	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?	34	1KN~2KA	1.5	1.1	0.54	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?
16	3D~E	2.6	(1.3)	0.6	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?	35	1KN	1.2	0.4	0.5	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?
17	3KE	1.2	0.2	0.1	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?	36	1KN	1.7	(1.0)	0.29	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?
18	6KK~L	(1.5)	0.9	0.48	灰白砂/焼土/木炭粒	掃-15 (別-3)	火葬墓	37	1KN	2.2	1.0	0.55	灰白色砂	(別-1)	土砂採掘跡?
19	4KH~J	12.8	(2.8)	1.2	灰白色砂	掃-18 (別-2)	不明/落ち込状								

第5表(5)　SX一覧

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量				備考
								口径	器高	底径	その他	
1	422		SB1	土師器	有段高杯	8期	—	—	—	—		
2	421		SB1	土師器	有段高杯	8期	—	21.0	—	—		口縁部横方向の調整
3	423		SB1	土師器	広口壺	7～8期	—	—	—	—		内面横方向のミガキ
4	433		SB2	土師器	有段高杯	7～8期	—	—	—	—		
5	426		SB2	土師器	パレス壺	8期	—	—	—	—		外面横線＋鋸歯文、赤彩
6	427		SB2	土師器	壺	6～8期	—	—	—	—		体部外面に波状文＋横線文
7	432		SB2	土師器	屈折脚高杯	9～10期	—	—	—	—		
8	428		SB2	土師器	有段口縁壺	9期	—	15.0	—	—		
9	430		SB2	土師器	丸底壺？	9期	—	11.0	—	—		口縁部横ナデ
10	429		SB2	土師器	鉢(鍋)	—	—	—	—	—		
11	431		SB2	土師器	手づくね土器	—	—	—	—	2.6		
12	425		SB2	須恵器	杯身	尾張3型式	猿投	14.0	—	—	受け部径16.0 受け部高1.6	底部ヘラ記号？
13	532		SB2	須恵器	蓋(高杯)	畿内3～4型式	畿内	15.5	—	—		天井部に当て具痕、外面カキ目
14	533		SB2	須恵器	高杯	畿内4～5型式	畿内	11.6	9.9	9.3	受け部径14.3 受け部高1.2	脚にカキ目、内底部に当て具痕
15	424		SB2	須恵器	甕	7C後半	美濃須衛？	—	—	—		頸部に横線＋波状文
16	410		SB3	土師器	S字甕	BC類・8～9期	—	15.0	—	—	頸部径13.5 頸部高1.3	外面スス
17	408		SB3	土師器	S字甕	BC類・9期	—	12.6	—	—	頸部径11.0 頸部高1.3	
18	413		SB3	土師器	S字甕	BC類・9期	—	15.0	—	—	頸部径12.6 頸部高1.3	外面スス
19	416		SB3	土師器	S字甕	BC類・9期	—	15.4	—	—	頸部径12.8 頸部高1.3	外面スス
20	412		SB3	土師器	S字甕	BC類・9期	—	—	—	—		
21	411		SB3	土師器	S字甕	BC類・8～9期	—	—	—	—	頸部高1.9	外面スス
22	409		SB3	土師器	S字甕	BC類・9期	—	13.0	—	—	頸部径10.6 頸部高1.4	
23	415		SB3	土師器	S字甕	BC類・9期	—	12.0	—	—	頸部径10.0 頸部高1.4	外面スス
24	414		SB3	土師器	S字甕	D1類・9期	—	14.6	—	—	頸部径12.6 頸部高1.3	外面スス
25	418		SB3	土師器	S字甕	D1類・9期	—	14.4	—	—	頸部径10.2 頸部高1.3 胴部最大径22.4 台基部径5.2	外面スス
26	407		SB3	土師器	甕(山陰系)	9期	—	15.0	—	—		
27	406		SB3	土師器	甕	9期	—	—	—	—		
28	417		SB3	土師器	丸底壺(外来系)	9期	—	10.0	13.5	—	頸部径8.0 頸部高3.0 胴部最大径13.4	外面ミガキ・スス、内面付着物
29	403		SB3	土師器	甕(外来系)	9期	—	—	—	—		口縁部横ナデ
30	404		SB3	土師器	甕(外来系)	9期	—	—	—	—		口縁部横ナデ、外面スス
31	405		SB3	土師器	鉢(外来系)	9期	—	13.9	—	—		内外面ミガキ
32	401		SB3直上	土師器	屈折脚高杯	9期	—	—	—	—	脚部径10.6 脚高7.7	
33	402		SB3直上	土師器	屈折脚高杯	9期	—	—	—	—	脚部径10.5 脚高7.5	
34	535		SB3直上	土師器	小型丸底壺	9期	—	—	—	—		
35	435		SB4	土師器	S字甕	BC類・8～9期	—	—	—	—		外面スス
36	436		SB4	土師器	S字甕	A類?・7期？	—	—	—	—		
37	168		SD2	須恵器	杯身	—	—	—	—	—		
38	150		SD2	須恵器	有台杯	7C後半	美濃須衛	14.1	4.0	9.9		内底部使用痕
39	156		SD2	須恵器	有台杯	8C後半	美濃須衛？	—	—	—		
40	154		SD2	須恵器	有台杯	7C後半	尾張	—	—	—		内底部使用痕
41	167		SD2	須恵器	蓋	7C後半 ～8C代	尾張	—	—	—		
42	253		SD2	須恵器	壺	7C後半	尾北？	—	—	—		外底部に「本」のヘラ描き
43	310		SD2	須恵器	甕	7C代	尾北？	30.5	—	—		
44	295		SD2	須恵器	甕	6C末 ～7C前半	美濃須衛	—	—	—		外面平行叩き、内面同心円当て具痕
45	294		SD2	須恵器	甕	—	—	—	—	—		外面平行叩き
46	213		SD2	土師器	甕	平底甕4類	—	—	—	—		
47	214		SD2	土師器	甕	平底甕4類	—	—	—	—		
48	215		SD2	土師器	甕	平底甕4類	—	—	—	—		
49	230		SD2	土師器	甕	平底甕4類	—	—	—	—		
50	313		SD2	土師器	甕	平底甕4類	—	—	—	—		体部外面縦ハケ、底部横ハケ
51	319		SD2	土師器	把手	—	—	—	—	—		
52	104		SD2	灰釉陶器	椀	大原2～虎渓山1	美濃？	—	—	10.2		内底使用痕
53	561		SD2	灰釉陶器	深椀	虎渓山1～丸石2	美濃	—	—	8.0		内底使用痕
54	101		SD2	灰釉陶器	深椀？	虎渓山1～丸石2	美濃？	—	—	7.5		内底使用痕
55	107		SD2	灰釉陶器	輪花椀	丸石2	美濃？	16.4	—	—		輪花
56	105		SD2	灰釉陶器	皿	丸石2～明和27	美濃？	—	—	6.8		
57	164		SD2	土師器	皿	古代	—	—	—	5.7		ロクロ土師器
58	102		SD2	山茶碗(南部系)	碗	百代寺～3型式	美濃？	—	—	7.2		内底使用痕
59	16		SD2	山茶碗(南部系)	碗	4型式新	尾張	—	—	7.8		内底部・高台接地部使用痕
60	3		SD2	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	7.6		内定部使用痕
61	141		SD2	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	8.3		内定部使用痕
62	14		SD2	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	7.6		内底部・高台接地部使用痕
63	10		SD2	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	8.1		内底部・高台接地部使用痕
64	80		SD2	山茶碗(北部系)	碗	5型式併行	東濃	—	—	6.7		内底部使用痕
65	12		SD2	山茶碗(北部系)	皿	5型式併行	東濃	9.2	1.8	5.3		
66	54		SD2	山茶碗(北部系)	皿	5型式併行	東濃	8.7	2.0	4.2		
67	136		SD2	山茶碗(南部系)	玉縁小皿	5型式併行	尾張	8.6	4.4	2.1		
68	75		SD2	山茶碗(南部系)	大平鉢	5型式併行	常滑	—	—	11.2		内底部・高台接地部使用痕
69	198		SD2	山茶碗(南部系)	大平鉢	5型式併行	常滑	—	—	—		内底部使用痕

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量			その他	備考
								口径	器高	底径		
70	1		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	14.9	5.7	7.2		内底部・高台接地部使用痕
71	2		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	14.4	5.8	7.0		
72	4		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	13.4	5.2	6.6		内底部・高台接地部使用痕
73	84		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	13.9	4.5	6.6		内底部・高台接地部使用痕
74	53		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	14.3	5.3	6.4		内底部・高台接地部使用痕
75	5		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	14.3	5.2	7.1		内底部・高台接地部使用痕
76	7		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	14.5	4.1	7.7		内底部使用痕
77	17		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	15.4	—	—		
78	28		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	14.1	—	—		
79	15		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	6.3		内底部・高台接地部使用痕
80	558		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.0		内底部・高台接地部使用痕
81	562		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	8.2		内底部・高台接地部使用痕
82	83		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	6.6		内底部・高台接地部使用痕
83	82		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.5		内底部・高台接地部使用痕
84	140		SD2	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.1		
85	27		SD2	山茶碗(北部系)	碗	白土原1	東濃	—	—	5.8		
86	30		SD2	山茶碗(北部系)	碗	白土原1	東濃	14.2	5.6	6.3		内底部使用痕
87	13		SD2	山茶碗(北部系)	碗	白土原1	東濃	—	—	6.1		内底部・高台接地部使用痕
88	78		SD2	山茶碗(北部系)	碗	白土原1	東濃	—	—	6.1		内底部・高台接地部使用痕
89	21		SD2	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	8.5	2.1	4.9		内底部使用痕
90	133		SD2	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	8.0	2.0	5.0		
91	19		SD2	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	8.8	1.6	5.3		
92	77		SD2	山茶碗(南部系)	大平鉢	6型式併行	尾張	—	—	11.2		内底部使用痕
93	6		SD2	山茶碗(南部系)	碗	7型式	尾張	13.7	4.8	6.9		内底部使用痕
94	52		SD2	山茶碗(南部系)	碗	7型式	尾張	12.9	5.2	4.2		
95	25		SD2	山茶碗(南部系)	碗	7型式	尾張	14.7	5.3	6.8		内底部使用痕、外底部墨書？
96	72		SD2	山茶碗(北部系)	碗	明和1	東濃	14.6	—	—		
97	20		SD2	山茶碗(南部系)	皿	7型式	尾張	7.4	1.9	3.7		
98	199		SD2	山茶碗(南部系)	大平鉢	7型式併行	常滑	—	—	—		
99	191		SD2	陶器(常滑)	甕	4～5型式	常滑	—	—	—		
100	190		SD2	陶器(常滑)	甕	5型式	常滑	—	—	—		
101	186		SD2	陶器(常滑)	甕	5型式	常滑	—	—	—		
102	184		SD2	陶器(常滑)	甕	5型式	常滑	—	—	—		
103	185		SD2	陶器(常滑)	甕	6a型式	常滑	—	—	—		
104	302		SD2	陶器(常滑)	甕	—	常滑	—	—	—		
105	303		SD2	陶器(常滑)	甕	—	常滑	—	—	—		
106	299		SD2	陶器(常滑)	甕	—	常滑	—	—	—		
107	301		SD2	陶器(常滑)	甕	—	常滑	—	—	—		
108	297		SD2	陶器(常滑)	甕	—	常滑	—	—	—		
109	63		SD2	土師器	かわらけ	M2類	在地	8.7	2.2	—		内面タール痕、外面接合痕
110	56		SD2	土師器	かわらけ	M2類	在地	9.3	2.9	—		
111	66		SD2	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		外面接合痕
112	67		SD2	土師器	かわらけ	M3類	在地	8.3	—	—		
113	65		SD2	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		
114	231		SD2	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		
115	60		SD2	土師器	かわらけ	M3類	在地	10.9	—	—		
116	61		SD2	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		
117	59		SD2	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		
118	64		SD2	土師器	かわらけ	M4類	在地	—	—	—		
119	177		SD2	磁器(中国)	青磁碗	龍泉窯系 青磁椀Ⅰ類	中国	—	—	—		
120	173		SD2	磁器(中国)	青磁碗	龍泉窯系 青磁椀Ⅰ類	中国	—	—	—		
121	338		SD2	磁器(中国)	青白磁小壺	12～13C	中国	5.3	—	—		
122	110		SD2	土師器	伊勢型鍋	山茶碗6～7併行	—	—	—	—		
123	212		SD2	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.0 径1.3 孔径0.5 重さ7.3	
124	899		SK12	陶器(常滑)	広口壺	12C代	常滑	—	—	—		
125	899		SK16	土師器	かわらけ	M2類	在地	—	—	—		
126	1006		SK18	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.3 径1.3 孔径0.35 重さ7.2	
127	1001		SK21	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.3 径1.5 孔径0.3 重さ9.6	錆釉？
128	890		SK26	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径1.6 孔径0.5 重さ8.9	
129	892		SK27	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	—		内底部・高台接地部使用痕
130	893		SK27	磁器(中国)	碗(白磁皿？)	—	中国	—	—	—		
131	895		SK32	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	—	—	4.8		内底部・高台接地部使用痕
132	894		SK32	土師器	伊勢型鍋	—	—	—	—	—		
133	811		SK33	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.8		内底部・高台接地部使用痕
134	816		SK33	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	15.6	4.9	7.7		内底部・高台接地部使用痕
135	58		SX6	土師器	かわらけ	M2類	在地	9.1	2.8	—		
136	68		SX6	土師器	かわらけ(高台付)	M2類併行	在地	10.0	3.9	7.5		内面肌荒れ
137	188		SX6	陶器(常滑)	甕	—	常滑	—	—	—		
138	1048		SX25	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張・常滑	15.0	4.8	7.0		外底部墨書 内面使用痕
139	873		SX25	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	6.6		内底部・高台接地部使用痕

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量				備考
								口径	器高	底径	その他	
140	876		SX25	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	—		内底部・高台接地部使用痕
141	874		SX25	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	6.6		内底部・高台接地部使用痕
142	869		SX25	山茶碗(北部系)	碗	白土原1	東濃	—	—	—		
143	872		SX25	山茶碗(南部系)	碗	7型式	尾張	—	—	—		
144	877		SX25	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	7.4	1.6	3.5		
145	879		SX25	山茶碗(南部系)	大平鉢	6型式併行	常滑	—	—	—		
146	881		SX25	土師器	伊勢型鍋	山茶碗6～7併行	—	—	—	—		外面スス
147	111		SX25	土師器	伊勢型鍋	山茶碗6～7併行	—	—	—	—		外面スス
148	880		SX25	磁器(中国)	青磁碗	龍泉窯系 青磁碗Ⅰ－5類	中国	—	—	5.4		
149	882		SX25	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.1 径1.3 孔径0.3 重さ6.5	
150	1004		SX25	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.1 径1.3 孔径0.4 重さ7.9	
151	1010		SX25	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.7 径1.5 孔径0.35 重さ6.0	
152	891		SX27	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	16.2	4.6	8.4		内底部・高台接地部使用痕
153	563		SR7	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.2		内底部・高台接地部使用痕
154	559		SR7	山茶碗(南部系)	碗	7型式	尾張	14.0	—	—		
155	557		SR7	山茶碗(南部系)	碗	7型式	尾張	—	—	5.9		内底部使用痕
156	560		SR7	山茶碗(南部系)	碗	7型式	尾張	—	—	7.5		内底部・高台接地部使用痕
157	586		SR7	土師器	かわらけ	M2類	在地	9.0	1.9	—		外面接合痕
158	582		SR7	陶器(常滑)	甕	5型式	常滑	—	—	—		
159	584		SR7	陶器(常滑)	甕(底部)	—	常滑	—	—	—		
160	315		SD1	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.9	2.3	—		
161	42		SD1	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.5	1.5	—		
162	858		SD4	須恵器	杯身？蓋？	7C後半	美濃須衛？	—	—	—		
163	721		SD4	灰釉陶器	深椀？	虎渓山1	美濃	—	—	7.4		内底部使用痕
164	722		SD4	灰釉陶器	深椀	虎渓山1～丸石2	美濃	—	—	—		
165	861		SD4	山茶碗(北部系)	碗	白土原1	東濃	—	—	5.8		内底部・高台接地部使用痕
166	860		SD4	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	8.9	2.2	5.2		内定部使用痕
167	859		SD4	山茶碗(北部系)	碗	大畑大洞4古	東濃	—	—	—		
168	867		SD4	陶器(常滑)	甕	6a型式	常滑	—	—	—		
169	862		SD4	山茶碗(北部系)	皿	生田2	東濃	—	—	—		
170	727		SD4	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅲ期	瀬戸	—	—	4.6		内面鉄釉
171	725		SD4	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	4.6		内面鉄釉、高台錆釉
172	724		SD4	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面鉄釉
173	786		SD4	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面鉄釉
174	864		SD4	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面鉄釉
175	728		SD4	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
176	726		SD4	陶器(瀬戸美濃)	茶入	古瀬戸中期	瀬戸	—	—	—		
177	729		SD4	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
178	723		SD4	陶器(瀬戸美濃)	瓶子	古瀬戸後期	瀬戸	—	—	9.0		外面灰釉
179	866		SD4	磁器(中国)	染付皿	染付皿B1群	中国	—	—	—		牡丹唐草
180	865		SD4	磁器(中国)	白磁碗	白磁碗Ⅴ類	中国	—	—	—		
181	926		SD4	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径1.4 孔径0.3 重さ5.5	
182	1101		SD4	土師器	かわらけ	C2類	在地	8.2	1.5	—		
183	1057		SD4	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.9	2.3	—		
184	1125		SD4	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.7	1.3	—		
185	1058		SD4	土師器	かわらけ	C2類	在地	8.0	1.7	—		
186	1115		SD4	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.4	1.3	—		
187	1110		SD4	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.7	1.3	—		
188	1120		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.9	1.6	—		
189	1105		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.1	1.8	—		
190	1114		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.3	2.0	—		
191	1106		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.7	1.7	—		
192	1123		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.1	1.8	—		
193	1107		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.7	1.7	—		
194	1103		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.0	1.8	—		
195	1122		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.0	1.8	—		
196	1109		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.0	2.0	—		口縁部タール痕
197	720		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.1	1.8	—		口縁部タール痕
198	1124		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.3	1.9	—		
199	1121		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.5	2.0	—		
200	1119		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.3	2.1	—		
201	1059		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.2	2.1	—		
202	1111		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.8	1.7	—		
203	1100		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.9	2.2	—		内外面タール痕
204	1118		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	11.3	2.3	—		口縁部タール痕
205	1113		SD4	土師器	かわらけ	B2類	在地	17.4	2.8	—		
206	731		SD6	須恵器	杯蓋	H-11	猿投	—	—	—		
207	732		SD6	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	—	—	—		内底部使用痕
208	730		SD6	陶器(瀬戸美濃)	端反り皿	大窯1	瀬戸・美濃	11.7	1.7	5.8		内外面灰釉、外底部輪トチ
209	690		SD6	陶器(瀬戸美濃)	水滴	大窯1～2	瀬戸・美濃	2.5	2.2	2.8		内外面鉄釉
210	787		SD6	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	—	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉、高台錆釉
211	734		SD6	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量				備考
								口径	器高	底径	その他	
212	1056		SD6	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.9	1.5	—		
213	668		SD6	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.9 径1.6 孔径0.5 重さ7.2	
214	833		SD7	須恵器	高杯	7C前半	尾張？	—	—	—		二方向透かし
215	839		SD7	灰釉陶器	椀	丸石2	美濃	—	—	—		
216	846		SD7	灰釉陶器	椀	丸石2	美濃	—	—	8.2		内底使用痕
217	836		SD7	灰釉陶器	椀	丸石2～明和27	美濃	—	—	7.0		内底部・高台接地部使用痕
218	848		SD7	山茶碗(南部系)	碗	4型式	尾張	—	—	—		内底部・高台接地部使用痕
219	831		SD7	山茶碗(南部系)	碗	4型式新	尾張	—	—	7.8		内底部・高台接地部使用痕
220	835		SD7	山茶碗(南部系)	大平鉢	4～5型式	尾張	—	—	—		内面部使用痕
221	847		SD7	山茶碗(北部系)	碗	白土原1	東濃	—	—	7.7		内底部使用痕
222	849		SD7	山茶碗(北部系)	碗	白土原1	東濃	—	—	—		内底部・高台接地部使用痕
223	832		SD7	山茶碗(南部系)	大平鉢	6型式併行	尾張	—	—	12.0		
224	851		SD7	山茶碗(南部系)	大平鉢	8型式併行	瀬戸	—	—	—		
225	850		SD7	山茶碗(北部系)	碗	大畑大洞4古	東濃	—	—	4.7		内底部・高台接地部使用痕
226	838		SD7	山茶碗(北部系)	椀	大畑大洞4古	東濃	—	—	4.2		内底部使用痕
227	830		SD7	山茶碗(北部系)	碗	大畑大洞4古	東濃	—	—	5.2		
228	824		SD7	陶器(瀬戸美濃)	皿	古瀬戸中期	瀬戸	—	—	4.8		内外面灰釉
229	853		SD7	陶器(瀬戸美濃)	壺	古瀬戸 後Ⅲ～Ⅳ期	美濃	11.7	—	—		外面灰釉
230	855		SD7	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期古	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
231	841		SD7	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
232	863		SD7	陶器(瀬戸美濃)	鉢	古瀬戸後Ⅳ期古	瀬戸	—	—	—		内外面灰釉
233	856		SD7	陶器(瀬戸美濃)	花瓶	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面鉄釉
234	834		SD7	陶器(瀬戸美濃)	端反皿	大窯1	瀬戸・美濃	11.5	2.8	6.5		内外面灰釉・外底部輪トチ
235	852		SD7	陶器(瀬戸美濃)	端反皿	大窯1	瀬戸・美濃	10.8	2.8	6.0		内外面灰釉・外底部輪トチ
236	854		SD7	陶器(瀬戸美濃)	香炉	古瀬戸後Ⅳ期古	瀬戸	7.9	2.4	8.0		口縁部鉄釉
237	1020		SD7	磁器(中国)	染付皿	染付皿B1群	中国	—	—	6.0		
238	842		SD7	瓦器	(脚)	—	—	—	—	—		縦ミガキ
239	857		SD7	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.9 径1.8 孔径0.5 重さ14.3	
240	1064		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.5	1.4	—		
241	1080		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.8	1.5	—		
242	1079		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.9	1.5	—		
243	1076		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.2	1.4	—		
244	1082		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.5	1.2	—		
245	1085		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.6	1.4	—		底部穿孔
246	1089		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.3	1.4	—		
247	1073		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.9	1.5	—		
248	1063		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.9	1.3	—		
249	1062		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.8	1.4	—		
250	1078		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	8.0	1.3	—		
251	1075		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.8	1.3	—		
252	1077		SD7	土師器	かわらけ	C2類	在地	8.0	1.3	—		
253	1068		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.0	1.9	—		
254	1070		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.8	1.8	—		
255	1072		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.9	1.7	—		
256	1083		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.2	1.7	—		
257	1098		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.3	1.7	—		口縁部にタール痕
258	1094		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.6	1.9	—		
259	1024		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	11.6	2.1	—		
260	1034		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.0	2.2	—		
261	1066		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.2	2.2	—		内外面にタール痕
262	1065		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	11.9	2.1	—		口縁部にタール痕
263	1099		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	15.7	2.5	—		
264	845		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	14.6	2.1	—		内外面にタール痕
265	1060		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	15.3	2.5	—		
266	1067		SD7	土師器	かわらけ	A3類	在地	—	—	—		
267	844		SD7	土師器	かわらけ	A3類	在地	—	—	—		
268	1027		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.3	1.9	—		外底部に墨書
269	1026		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.2	2.0	—		外底部に墨書
270	1031		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.8	1.8	—		外底部に墨書
271	1042		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.5	2.0	—		外底部に墨書
272	1041		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.2	1.9	—		外底部に墨書
273	1025		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.4	1.9	—		外底部に墨書
274	1039		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.0	—	—		外底部に墨書
275	1030		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.2	2.0	—		外底部に墨書
276	1028		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.0	2.0	—		外底部に墨書
277	1029		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.2	2.1	—		外底部に墨書
278	1035		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	11.9	2.0	—		外底部に墨書
279	1036		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.2	2.2	—		外底部に墨書
280	1033		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.0	2.3	—		外底部に墨書
281	1040		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.1	2.0	—		外底部に墨書
282	1038		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.0	2.2	—		外底部に墨書
283	1037		SD7	土師器	かわらけ	B2類	在地	11.8	2.1	—		外底部に墨書・口縁部にタール痕
284	744		SD11	陶器(瀬戸美濃)	甕	古瀬戸後Ⅱ期	瀬戸	—	—	—		内外面灰釉

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量 口径	器高	底径	その他	備考
285	1054		SD11	土師器	かわらけ	B2類	在地	15.6	2.3	—		
286	1053		SD11	土師器	かわらけ	B2類	在地	18.2	2.7	—		
287	1046		SK46	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	16.0	5.2	9.2		内底部使用痕、外底部墨書？
288	1032		SK46	山茶碗(南部系)	小皿	5型式	尾張	8.5	2.3	5.0		外底部墨書、内底部使用痕
289	897		SK46	陶器(瀬戸美濃)	台付碗	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	5.6		内外面鉄釉
290	898		SK46	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.3 径1.6 孔径0.5 重さ9.3	
291	312		SX1	土師器	くの字台付甕	—	—	—	—	—		
292	311		SX1	須恵器	こね鉢	—	美濃須衛	—	—	10.8		
293	166		SX1	山茶碗(南部系)	碗(小碗)	4型式	尾張	—	—	4.4		内底部・高台接地部使用痕
294	146		SX1	山茶碗(南部系)	碗(小碗)	4型式	尾張	—	—	4.7		内底部・高台接地部使用痕
295	11		SX1	山茶碗(北部系)	碗	5型式併行	東濃	—	—	6.9		内底部使用痕
296	149		SX1	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	6.8		内底部使用痕
297	243		SX1	山茶碗(北部系)	碗	大洞東1	東濃	—	—	—		
298	139		SX1	山茶碗(南部系)	大平鉢	6型式併行	常滑	—	—	12.8		内底部・高台接地部使用痕
299	122		SX1	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	4.7		内面鉄釉、高台錆釉
300	308		SX1	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
301	255		SX1	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1新	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
302	256		SX1	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1新	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
303	307		SX1	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
304	183		SX1	陶器(瀬戸美濃)	鉢？	大窯3	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面灰釉
305	309		SX1	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯？	瀬戸・美濃	—	—	8.6		内外面錆釉
306	189		SX1	陶器(瀬戸美濃)	瓶	古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期	瀬戸	—	—	9.3		外面一部灰釉
307	187		SX1	陶器(常滑)	甕	9型式	常滑	—	—	—		
308	165		SX1	陶器	壺類	—	—	—	—	4.9		内面付着物
309	170		SX1	磁器(中国)	青磁碗	15C	中国	—	—	—		
310	49		SX1	土師器	かわらけ	B2類	在地	—	—	—		
311	32		SX1	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.7	—	—		
312	1047		SX18	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	7.2		
313	707		SX19	須恵器	杯蓋	畿内4～5型式	畿内系	—	—	—		
314	705		SX19	須恵器	高杯？	7C後葉～8C前葉	美濃須衛	—	—	—		
315	712		SX19	灰釉陶器	椀	虎渓山1	美濃	—	—	—		
316	713		SX19	灰釉陶器	椀	丸石2	美濃	—	—	—		
317	805		SX19	灰釉陶器	皿	丸石2～明和27	美濃	10.6	1.7	6.2		内底部・高台接地部使用痕
318	708		SX19	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	8.0		内底部・高台接地部使用痕
319	716		SX19	陶器(瀬戸美濃)	鉢？	古瀬戸後Ⅲ期	瀬戸	—	—	—		内外面口縁部灰釉
320	740		SX19	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
321	1050		SX19	陶器(瀬戸美濃)	皿	大窯1～2	瀬戸・美濃	—	—	6.0		
322	717		SX19	陶器(瀬戸美濃)	壺？	—	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面鉄釉＋錆釉
323	1055		SX19	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.8	2.0	—		内面タール痕
324	739		SX19	土師器	内耳鍋	17C代	—	22.3	—	—		外面スス、内面付着物
325	715		SX19	磁器(中国)	青磁皿(端反り)	14～15C	中国	—	—	—		
326	701		SX19	磁器(中国)	染付皿	染付皿B1群	中国	8.8	2.3	4.4		内底十字花文、体部外面牡丹唐草文
327	799		SX19	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径2.1 孔径0.5 重さ16.4	
328	244		S2	磁器(中国)	青磁碗(加工円盤)	15C	中国	—	—	4.5		
329	779		S3	山茶碗(南部系)	小碗	4型式	尾張	9.2	2.0	4.7		
330	806		S3	山茶碗(北部系)	碗	脇之島	東濃	11.2	2.4	3.6		
331	735		S3	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期	瀬戸	—	—	—		内外面鉄釉
332	782		S3	陶器(瀬戸美濃)	端反皿	大窯1	瀬戸・美濃	11.0	2.7	6.0		内外面灰釉
333	736		S3	陶器(瀬戸美濃)	双耳合子	古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期	瀬戸	4.0	—	—		内外面鉄釉
334	737		S3	陶器(瀬戸美濃)	香炉	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	12.5	4.2	5.4		口縁内外面鉄釉
335	1052		S3	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
336	793		S3	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
337	794		S3	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
338	738		S3	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
339	795		S3	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
340	1051		S3	陶器(瀬戸美濃)	瓶	古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期	瀬戸	—	—	8.8		内面錆釉、外面鉄釉
341	781		S3	磁器(中国)	白磁碗	白磁Ⅴ類	中国	—	—	—		
342	747		SR1	須恵器	杯蓋	7C後半	—	—	—	—	摘径3.3 摘高0.9	
343	745		SR1	陶器(常滑)	甕	3型式＝4新	常滑	—	—	—		
344	770		SR1	山茶碗(北部系)	碗	生田2	東濃	—	—	—		
345	746		SR1	陶器(常滑)	甕	6a型式	常滑	—	—	—		
346	743		SR1	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
347	1018		SR8	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯	瀬戸・美濃	—	—	10.8		底部穿孔、内外面錆釉
348	265		SK1	磁器	染付碗	明治	美濃	11.0	5.2	4.2		手描き、ロクロ
349	270		SK1	磁器	染付碗	明治20年代	美濃	11.6	4.5	4.2		摺り絵
350	264		SK1	磁器	染付碗	大正	瀬戸・美濃	11.8	5.2	4.1		銅版摺り、酸化コバルト、体部を削る
351	268		SK1	磁器	染付碗	大正	美濃	11.4	5.7	4.3		銅版印刷
352	267		SK1	磁器	染付碗	大正	美濃	11.0	5.0	4.6		手描き、酸化コバルト
353	266		SK1	磁器	染付碗	大正	瀬戸・美濃	—	4.7	—		銅版摺り、酸化コバルト・クローム
354	263		SK1	磁器	染付碗	大正～昭和初	美濃	—	—	4.0		手描き、ゴム印
355	262		SK1	磁器	碗	大正	瀬戸・美濃	11.0	6.0	4.1		

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量			その他	備考
								口径	器高	底径		
356	271		SK1	磁器	染付筒型碗	現代	美濃	7.8	—	—		手描き
357	261		SK1	磁器	染付小碗	昭和	瀬戸・美濃	9.8	4.6	3.6		
358	258		SK1	磁器	小杯	大正	美濃	8.3	3.5	3.1		口縁部鉄釉、除隊・出征・戦勝記念
359	257		SK1	磁器	小杯	明治～大正	美濃	7.4	3.0	2.8		吹き
360	259		SK1	磁器	染付小碗	大正	美濃	8.4	4.5	3.6		
361	260		SK1	磁器	染付小碗	大正	美濃	8.2	—	—		
362	269		SK1	磁器	染付碗(広東碗)	19C前半	瀬戸・美濃	—	—	5.6		
363	272		SK1	磁器	染付皿	明治	美濃	10.0	2.0	5.7		摺り絵
364	273		SK1	磁器	染付皿	大正	美濃	13.0	2.5	7.4		銅版摺り、酸化コバルト、機械ロクロ
365	274		SK1	磁器	染付皿	大正	美濃	13.0	2.6	7.8		銅版摺り、酸化コバルト、機械ロクロ
366	275		SK1	磁器	染付皿	大正	美濃	13.0	2.5	7.0		銅版摺り、クローム、機械ロクロ
367	277		SK1	磁器	鉢	大正～	肥前？	—	—	—		
368	278		SK1	磁器	染付鉢	大正	肥前？	21.0	—	—		口縁部鉄釉
369	280		SK1	磁器	蓋(スパイスセット)	明治～大正	瀬戸・美濃	2.0	2.4	—		
370	276		SK1	磁器	染付鉢	—	肥前？	—	—	—		タコ唐草、クローム
371	279		SK1	磁器	染付鉢	—	肥前？	17.4	6.5	7.8		色染付
372	281		SK1	陶器(瀬戸美濃)	大平鉢	19C・明治	瀬戸	20.0	10.7	8.0		内外面灰釉、内底部トチ痕
373	282		SK1	陶器(瀬戸美濃)	こね鉢	—	瀬戸	30.8	12.2	12.4		内底部トチ痕
374	287		SK1	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	—	瀬戸・美濃	37.3	17.2	17.7		
375	284		SK1	陶器(瀬戸美濃)	徳利	大正	美濃	2.6	27.7	9.8		
376	285		SK1	陶器(瀬戸美濃)	徳利	—		3.1	—	—		内外面灰釉、
377	283		SK1	陶器(瀬戸美濃)	白すず徳利	19C	瀬戸	2.5	17.6	7.0		二度焼き
378	288		SK1	陶器(常滑)	？	—	常滑	—	—	20.2		
379	291		SK1	瓦	軒平瓦	—	—	—	—	—		
380	290		SK1	瓦	平瓦	—	—	—	—	—		
381	289		SK1	瓦	軒平瓦	—	—	—	—	—		
382	292		SK1	瓦	軒平瓦	—	—	—	—	—		
383	293		SK1	瓦質土器	竈	—	—	—	—	—		押印
384	884		SK10	土製品	土鈴	—	—	—	—	—	最大幅4.2	
385	883		SK10	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	9.0	1.8	5.2		
386	126		SX2	陶器(瀬戸美濃)	鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
387	326		SX2	陶器(瀬戸美濃)	向付？	18C前葉	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面長石釉、外面鉄釉
388	208		SX2	陶器(瀬戸美濃)	皿	17C初	美濃	10.0	—	—		口縁部灰釉
389	219		SX2	陶器(瀬戸美濃)	皿	17C	瀬戸・美濃	—	—	7.6		内面長石釉・鉄絵
390	180		SX2	陶器(瀬戸美濃)	尾呂茶碗	18C前半	瀬戸	—	—	—		内外面飴釉のち口縁部うのふ釉
391	336		SX2	土製品	鳥	—	—	—	—	—		
392	333		SX2	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.3 径3.2 孔径1.8 重さ16.0	
393	226		SX2	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径1.1 孔径0.4 重さ3.9	
394	178		SX2・3	陶器(瀬戸美濃)	皿	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	4.1		内外面錆釉
395	316		SX2・3	土師器	かわらけ	B2類	在地	—	—	—		穿孔
396	209		SX2・3	陶器(瀬戸美濃)	広東碗	天保の頃	瀬戸	—	—	5.2		
397	217		SX2・3	陶器(瀬戸美濃)	水注	17・18C	瀬戸・美濃	7.0	—	—		外面・口縁部内面灰釉
398	179		SX2・3	陶器(瀬戸美濃)	香炉	18C中葉	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面飴釉
399	181		SX2・3	陶器(瀬戸美濃)	香炉	18C中葉	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面飴釉
400	332		SX2・3	陶器(瀬戸美濃)	卸し皿	17C中頃	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面鉄釉
401	224		SX2・3	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.1 径0.9 孔径0.3 重さ3.4	
402	250		SX2・3	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径0.5 孔径0.15 重さ0.7	
403	547		SX3	須恵器	有台杯	8C後半	美濃須衛	—	—	11.8		
404	555		SX3	山茶碗(南部系)	碗	4型式	尾張	—	—	7.9		
405	552		SX3	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	6.6		内底部使用痕
406	583		SX3	山茶碗(南部系)	大平鉢	5型式併行	常滑	27.6	9.0	14.0		内底部・高台接地部使用痕
407	546		SX3	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	—		
408	556		SX3～	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	14.5	5.3	6.6		内底部・高台接地部使用痕
409	551		SX3	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	8.4		内底部・高台接地部使用痕
410	553		SX3	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.0		
411	196		SX3	陶器(瀬戸美濃)	縁釉小皿	古瀬戸後Ⅲ期	瀬戸	—	—	—		口縁部内外面鉄釉
412	203		SX3	陶器(瀬戸美濃)	皿	古瀬戸後Ⅲ期	瀬戸	—	—	—		内面灰釉
413	218		SX3	陶器(瀬戸美濃)	椀	19C	瀬戸	—	—	4.1		内外面錆釉
414	182		SX3	陶器(瀬戸美濃)	香炉	—	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面鉄釉
415	207		SX3	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	幕末	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
416	325		SX3	磁器	染付碗	19C末	美濃以外	8.6	4.7	3.4		
417	128		SX3・4	陶器(瀬戸美濃)	壺類？	大窯1～2	瀬戸・美濃	—	—	6.8		内外面鉄釉・底部錆釉
418	331		SX3・4	土師器	焙烙鍋	18C後半	—	—	—	—		
419	202		SX4	陶器(瀬戸美濃)	灯明皿	19C	瀬戸・美濃	10.4	—	—		内外面灰釉
420	197		SX4・5	陶器(瀬戸美濃)	縁釉小皿	古瀬戸後Ⅳ期古	瀬戸	—	—	—		口縁端部内外面灰釉
421	204		SX4・5	陶器(瀬戸美濃)	皿	17C	瀬戸・美濃	11.9	—	—		内外面長石釉
422	252		SX4・5	磁器	染付碗	—	肥前	11.5	—	—		
423	130		SX5	山茶碗(北部系)	碗	明和1	東濃	—	—	6.0		
424	175		SX5	磁器(中国)	染付皿	染付皿C群	中国	—	—	4.2		
425	233		SX5	磁器	染付皿	近世	肥前	10.0	2.2	6.5		
426	591		SX8	土師器	皿？	古代？	—	—	3.4	—		
427	622		SX8	磁器(中国)	染付皿	染付皿E群	中国	—	—	—		外底部(長)(命)富貴・トチ痕
428	616		SX8	陶器(瀬戸美濃)	大平鉢	—	瀬戸	—	—	—		

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量 口径	器高	底径	その他	備考
429	620		SX8	陶器(瀬戸美濃)	碗？	19C	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面灰釉
430	602		SX8	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	19C	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
431	581		SX8	陶器(瀬戸美濃)	鉢	16C？	瀬戸・美濃	—	—	7.7		高台接地部使用痕
432	598		SX8	陶器(瀬戸美濃)	徳利の底	—	瀬戸・美濃	—	—	14.0		
433	619		SX8	陶器	広東碗	19C	瀬戸	11.0	6.0	6.2		
434	621		SX8	磁器	染付小鉢	近世	肥前？	—	—	—		墨はじき
435	607		SX8	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.0 径1.0 孔径0.4 重さ3.3	
436	605		SX8	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径1.2 孔径0.4 重さ4.7	
437	611		SX8	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径1.0 孔径0.35 重さ3.0	錆釉？
438	628		SX8	土製品	土鈴	—	—	—	—	—		
439	687		SX8	土製品	鳴笛	—	—	—	—	—		顔料付着
440	630		SX8	瓦	塀瓦	—	—	—	—	—		
441	614		SX8	陶製品	土玉	—	—	—	—	—	径1.3	
442	615		SX8	陶製品	陶丸	—	—	—	—	—	径1.1	
443	626		SX9	陶器(瀬戸美濃)	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅳ期古	瀬戸	—	—	—		口縁端部灰釉
444	625		SX9	陶器(瀬戸美濃)	皿	17C	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面灰釉
445	624		SX9	磁器	白磁小杯	—	肥前？	—	—	—		
446	623		SX9	磁器	染付碗	—	肥前？	—	—	—		
447	633		SX13	須恵器	杯身	7C後半	尾張？	—	—	—		口縁端部使用痕
448	637		SX13	山茶碗(南部系)	碗	4型式新	尾張	—	—	8.3		内底部・高台接地部使用痕
449	638		SX13	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	6.5		内底部・高台接地部使用痕
450	642		SX13	山茶碗(北部系)	碗	大畑大洞4新	東濃	14.4	4.4	5.6		
451	645		SX13	土師器	かわらけ	B2類	在地	10.0	1.9	—		内面タール痕
452	646		SX13	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面鉄釉
453	664		SX13	陶器(瀬戸美濃)	水注	18C中頃	瀬戸・美濃	—	—	7.8		内外面飴釉
454	1200		SX13	陶器(常滑)	甕	近世	常滑	49.0	—	21.0	最大径58.8	
455	691		SX13	瓦	—	—	—	—	—	—		
456	667		SX13	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径1.4 孔径0.4 重さ7.8	
457	565		SX13W	須恵器	有台杯	7C後半	美濃須衛	—	—	10.0		内底部・高台接地部使用痕
458	564		SX13W	須恵器	有台杯	8C後半？	美濃須衛	—	—	10.2		外底部にヘラ記号
459	537		SX13W	須恵器	有台杯	8C後半	美濃須衛	13.8	3.9	10.0		口縁端部・内底部・高台接地部使用痕
460	567		SX13W	須恵器	有台杯	7C後半	美濃須衛？	16.0	5.5	10.0		
461	539		SX13W	須恵器	杯蓋	9C前葉	美濃須衛	13.2	3.2	—	最大径14.0 摘み2.5 摘み0.6	天井部・つまみ使用痕
462	540		SX13W	須恵器	杯蓋	9C前葉	美濃須衛	—	—	—		
463	566		SX13W	須恵器	蓋	9C前葉	美濃須衛	14.0	—	—		
464	538		SX13W	須恵器	有台盤	8C後半	美濃須衛	18.1	3.4	11.9		口縁端部・内底部・高台接地部使用痕
465	650		SX13W	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	19C前半	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
466	544		SX13W	土師器	かわらけ	B2類	在地	—	2.5	—		内外面タール痕
467	635		H1	灰釉陶器	壺？	—	尾張？	—	—	—		
468	647		H1	陶器(瀬戸美濃)	香炉	17C末	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面鉄釉
469	655		H1	陶器(瀬戸美濃)	皿	古瀬戸後Ⅳ期古	瀬戸	10.6	—	—		口縁部灰釉
470	656		H1	陶器(瀬戸美濃)	鉢	古瀬戸後Ⅳ期古	瀬戸	—	—	—		内外面灰釉
471	543		H1	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.7	1.6	—		
472	665		H1	陶器(瀬戸美濃)	小瓶	明治？	—	1.9	—	—		
473	666		H1	陶器(瀬戸美濃)	仏飯器	明治？	—	—	—	4.0		
474	695		SV1	陶器(瀬戸美濃)	瓶類	19C	—	2.6	—	—		
475	151	1・2	Ⅳ	須恵器	有台杯	7C後半？	美濃須衛	—	—	11.7		内底部使用痕
476	159	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	4型式	尾張	—	—	—		内底部・高台接地部使用痕
477	113	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	皿	5型式併行	東濃	8.7	2.2	4.8		
478	81	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	14.9	—	—		
479	138	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	6.5		内底部・高台接地部使用痕
480	134	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	—		内底部使用痕
481	24	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	7.1	1.4	4.3		
482	22	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	7.6	2.1	4.2		内底部使用痕
483	86	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	8.9	1.5	5.2		内底部使用痕
484	193	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	大平鉢	6型式併行	尾張	22.8	9.6	12.6		内底部・高台接地部使用痕
485	97	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	大平鉢	6型式併行	常滑	—	—	15.4		内底部・高台接地部使用痕
486	70	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	7型式	尾張	—	—	6.4		内底部使用痕
487	18	1・2	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	7型式	尾張	—	—	6.2		内底部使用痕
488	71	1・2	Ⅳ	山茶碗(北部系)	碗	明和1	東濃	14.8	—	—		
489	26	1・2	Ⅳ	山茶碗(北部系)	碗	明和1	東濃	12.7	—	—		内底部使用痕
490	328	1・2	Ⅳ	磁器(中国)	白磁小壺	12・13C	中国	—	—	—		
491	171	1・2	Ⅳ	磁器(中国)	白磁皿	12C	中国	—	—	—		
492	211	1・2	Ⅳ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ5.1 径1.0 孔径0.4 重さ6.1	
493	225	1・2	Ⅳ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.1 径1.2 孔径0.4 重さ4.3	
494	334	1・2	Ⅳ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径0.7 孔径0.2 重さ0.7	
495	40	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		外面接合痕
496	43	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M2～M3類	在地	9.2	1.5	—		
497	62	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		
498	33	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	2.9	—		

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量 口径	器高	底径	その他	備考
499	31	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	12.0	3.1	—		
500	35	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		外面接合痕
501	44	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		
502	36	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		
503	34	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	C2類	在地	6.8	1.3	—		
504	109	1・2	Ⅳ	土師器	伊勢型鍋	山茶碗6～7型式併行	—	—	—	—		内外面スス
505	205	1・2	Ⅳ	陶器(瀬戸美濃)	皿	連房1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面長石釉
506	235	1・2	Ⅳ	陶器(瀬戸美濃)	皿	連房1 16・17C	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面長石釉、内底部鉄絵
507	192	1・2	Ⅳ	陶器(常滑)	甕(底部)	—	常滑	—	—	—		
508	298	1・2	Ⅳ	陶器(常滑)	甕(胴部)	—	常滑	—	—	—		
509	305	1・2	Ⅳ	陶器(常滑)	甕(胴部)	—	常滑	—	—	—		
510	572	3	Ⅳ	須恵器	高杯(2段透かし)	H-50	尾張	—	—	—		
511	536	3	Ⅳ	須恵器	有台杯	8C後半	美濃須衛	20.0	5.0	14.0		佐波里写し
512	573	3	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	4型式新	尾張	—	—	6.8		内底部・高台接地部使用痕
513	574	3	Ⅳ	山茶碗(北部系)	碗	5型式併行	東濃	—	—	6.0		
514	541	3	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	15.2	5.3	7.0		内底部・高台接地部使用痕
515	542	3	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	15.1	5.2	7.3		内底部・高台接地部使用痕
516	579	3	Ⅳ	陶器	入れ子	古瀬戸 前Ⅱ～中Ⅱ期	瀬戸	—	—	—	径5.0	紅付き
517	587	3	Ⅳ	土師器	かわらけ	M2類	在地	9.0	1.7	—		
518	588	3	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	9.0	1.3	—		
519	590	3	Ⅳ	土師器	かわらけ	その他	在地	—	—	—		
520	594	3	Ⅳ	土師器	羽釜	14C代	—	—	—	—		外面スス
521	608	3	Ⅳ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.8 径1.1 孔径0.4 重さ3.3	
522	752	4	Ⅳ	土師器	甕	—	—	—	—	—		
523	753	4	Ⅳ	土師器	甕	平底甕4類	—	—	—	—		体部縦ハケ、口縁部横ナデ
524	774	4	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.2		内底部・高台接地部使用痕
525	777	4	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	白土原	東濃	—	—	5.0		
526	229	1・2	Ⅲ	土師器	平底甕	平底甕4類	—	—	—	—		口縁外面縦ハケのち横ナデ、内面横ナデ
527	29	1・2	Ⅲ	灰釉陶器	皿	虎渓山1～丸石2	美濃	13.0	2.8	6.7		
528	103	1・2	Ⅲ	灰釉陶器	椀	丸石2	美濃	—	—	7.6		
529	137	1・2	Ⅲ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	6.5		
530	55	1・2	Ⅲ	山茶碗(南部系)	皿	—	東濃	8.0	2.5	4.7		
531	161	1・2	Ⅲ	山茶碗(南部系)	大平鉢	8～9型式併行	瀬戸	—	—	9.6		内底部使用痕
532	152	1・2	Ⅲ	山茶碗(南部系)	大平鉢	8型式併行	瀬戸	—	—	—		
533	50	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		内面タール痕
534	232	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	M4類	在地	—	—	—		
535	112	1・2	Ⅲ	土師器	羽釜	—	—	—	—	—		外面スス、横ハケ
536	45	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.6	2.0	—		
537	47	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.1	1.6	—		
538	37	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.5	1.1	—		
539	38	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	C2類	在地	6.9	1.2	—		
540	119	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	折縁皿	古瀬戸中Ⅱ期	瀬戸	16.9	4.3	8.9		内外灰釉
541	114	1・2	Ⅲ	陶器(中国)	天目茶碗	—	中国	12.5	—	—		内外面鉄釉
542	234	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸中Ⅳ期	瀬戸	—	—	—		内外面灰釉
543	121	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		口縁部内面灰釉
544	123	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期古	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
545	652	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
546	329	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
547	172	1・2	Ⅲ	磁器(中国)	青磁碗	龍泉窯系 青磁碗Ⅰ類	中国	—	—	—		
548	174	1・2	Ⅲ	磁器(中国)	白磁碗	白磁Ⅴ類 12C	中国	—	—	—		
549	335	1・2	Ⅲ	土製品	土鈴	—	—	—	—	—		
550	248	1・2	Ⅲ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径3.3 孔径1.4 重さ17.4	
551	228	1・2	Ⅲ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.7 径1.2 孔径0.4 重さ5.3	
552	227	1・2	Ⅲ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径0.5 孔径0.2 重さ0.8	
553	592	3	Ⅲ	土師器	屈折脚高杯	9～10期	—	—	—	—		
554	596	3	Ⅲ	土師器	壺	—	—	—	—	7.2		
555	568	3	Ⅲ	須恵器	有台杯	7C後半	美濃須衛？	14.5	4.3	10.8		内底部使用痕
556	571	3	Ⅲ	須恵器	蓋	7C中葉	美濃須衛？	—	—	—		
557	577	3	Ⅲ	須恵器	蓋	8C後半	美濃須衛	—	—	—		
558	636	3	Ⅲ	灰釉陶器	深椀	丸石2	美濃	—	—	6.4		
559	575	3	Ⅲ	山茶碗(南部系)	小碗	4型式	尾張	9.2	3.0	4.6		内面降灰、内底部使用痕
560	569	3	Ⅲ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.4		内底部使用痕
561	570	3	Ⅲ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.6		
562	576	3	Ⅲ	山茶碗(南部系)	小碗	6型式	尾張	—	2.0	—		
563	578	3	Ⅲ	山茶碗(南部系)	加工円盤(皿)	5型式	尾張	—	—	—	径5.0	
564	589	3	Ⅲ	土師器	かわらけ	D1類	在地	6.0	1.3	—		
565	669	3	Ⅲ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径1.6 孔径0.6 重さ6.7	
566	804	4	Ⅲ	灰釉陶器	碗	虎渓山1	美濃	15.2	4.8	7.8		
567	775	4	Ⅲ	山茶碗(北部系)	碗	白土原1	東濃	—	—	6.0		内底部・高台接地部使用痕

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量 口径	器高	底径	その他	備考
499	31	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	12.0	3.1	—		
500	35	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		外面接合痕
501	44	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		
502	36	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		
503	34	1・2	Ⅳ	土師器	かわらけ	C2類	在地	6.8	1.3	—		
504	109	1・2	Ⅳ	土師器	伊勢型鍋	山茶碗6～7型式併行	—	—	—	—		内外面ススス
505	205	1・2	Ⅳ	陶器(瀬戸美濃)	皿	連房1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面長石釉
506	235	1・2	Ⅳ	陶器(瀬戸美濃)	皿	連房1 16・17C	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面長石釉、内底部鉄絵
507	192	1・2	Ⅳ	陶器(常滑)	甕(底部)	—	常滑	—	—	—		
508	298	1・2	Ⅳ	陶器(常滑)	甕(胴部)	—	常滑	—	—	—		
509	305	1・2	Ⅳ	陶器(常滑)	甕(胴部)	—	常滑	—	—	—		
510	572	3	Ⅳ	須恵器	高杯(2段透かし)	H-50	尾張	—	—	—		
511	536	3	Ⅳ	須恵器	有台杯	8C後半	美濃須衛	20.0	5.0	14.0		佐波里写し
512	573	3	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	4型式新	尾張	—	—	6.8		内底部・高台接地部使用痕
513	574	3	Ⅳ	山茶碗(北部系)	碗	5型式併行	東濃	—	—	6.0		
514	541	3	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	15.2	5.3	7.0		内底部・高台接地部使用痕
515	542	3	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	15.1	5.2	7.3		内底部・高台接地部使用痕
516	579	3	Ⅳ	陶器	入れ子	古瀬戸前Ⅱ～中Ⅱ期	瀬戸	—	—	—	径5.0	紅付き
517	587	3	Ⅳ	土師器	かわらけ	M2類	在地	9.0	1.7	—		
518	588	3	Ⅳ	土師器	かわらけ	M3類	在地	9.0	1.3	—		
519	590	3	Ⅳ	土師器	かわらけ	その他	在地	—	—	—		
520	594	3	Ⅳ	土師器	羽釜	14C代	—	—	—	—		外面ススス
521	608	3	Ⅳ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.8 径1.1 孔径0.4 重さ3.3	
522	752	4	Ⅳ	土師器	甕	—	—	—	—	—		
523	753	4	Ⅳ	土師器	甕	平底甕4類	—	—	—	—		体部縦ハケ、口縁部横ナデ
524	774	4	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.2		内底部・高台接地部使用痕
525	777	4	Ⅳ	山茶碗(南部系)	碗	白土原	東濃	—	—	5.0		
526	229	1・2	Ⅲ	土師器	平底甕	平底甕4類	—	—	—	—		口縁外面縦ハケのち横ナデ、内面横ナデ
527	29	1・2	Ⅲ	灰釉陶器	皿	虎渓山1～丸石2	美濃	13.0	2.8	6.7		
528	103	1・2	Ⅲ	灰釉陶器	椀	丸石2	美濃	—	—	7.6		
529	137	1・2	Ⅲ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	6.5		
530	55	1・2	Ⅲ	山茶碗(南部系)	皿	—	東濃	8.0	2.5	4.7		
531	161	1・2	Ⅲ	山茶碗(南部系)	大平鉢	8～9型式併行	瀬戸	—	—	9.6		内底部使用痕
532	152	1・2	Ⅲ	山茶碗(南部系)	大平鉢	8型式併行	瀬戸	—	—	—		
533	50	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	M3類	在地	—	—	—		内面タール痕
534	232	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	M4類	在地	—	—	—		
535	112	1・2	Ⅲ	土師器	羽釜	—	—	—	—	—		外面ススス、横ハケ
536	45	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.6	2.0	—		
537	47	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	B2類	在地	9.1	1.6	—		
538	37	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.5	1.1	—		
539	38	1・2	Ⅲ	土師器	かわらけ	C2類	在地	6.9	1.2	—		
540	119	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	折縁皿	古瀬戸中Ⅱ期	瀬戸	16.9	4.3	8.9		内外灰釉
541	114	1・2	Ⅲ	陶器(中国)	天目茶碗	—	中国	12.5	—	—		内外面鉄釉
542	234	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸中Ⅳ期	瀬戸	—	—	—		内外面灰釉
543	121	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		口縁部内面灰釉
544	123	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期古	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
545	652	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
546	329	1・2	Ⅲ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
547	172	1・2	Ⅲ	磁器(中国)	青磁碗	龍泉窯系青磁碗Ⅰ類	中国	—	—	—		
548	174	1・2	Ⅲ	磁器(中国)	白磁碗	白磁Ⅴ類 12C	中国	—	—	—		
549	335	1・2	Ⅲ	土製品	土鈴	—	—	—	—	—		
550	248	1・2	Ⅲ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径3.3 孔径1.4 重さ17.4	
551	228	1・2	Ⅲ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.7 径1.2 孔径0.4 重さ5.3	
552	227	1・2	Ⅲ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径0.5 孔径0.2 重さ0.8	
553	592	3	Ⅲ	土師器	屈折脚高杯	9～10期	—	—	—	—		
554	596	3	Ⅲ	土師器	壺	—	—	—	—	7.2		
555	568	3	Ⅲ	須恵器	有台杯	7C後半	美濃須衛？	14.5	4.3	10.8		内底部使用痕
556	571	3	Ⅲ	須恵器	蓋	7C中葉	美濃須衛？	—	—	—		
557	577	3	Ⅲ	須恵器	蓋	8C後半	美濃須衛	—	—	—		
558	636	3	Ⅲ	灰釉陶器	深椀	丸石2	美濃	—	—	6.4		
559	575	3	Ⅲ	山茶碗(南部系)	小碗	4型式	尾張	9.2	3.0	4.6		内面降灰、内底部使用痕
560	569	3	Ⅲ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.4		内底部使用痕
561	570	3	Ⅲ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	7.6		
562	576	3	Ⅲ	山茶碗(南部系)	小碗	6型式	尾張	—	2.0	—		
563	578	3	Ⅲ	山茶碗(南部系)	加工円盤(皿)	5型式	尾張	—	—	—	径5.0	
564	589	3	Ⅲ	土師器	かわらけ	D1類	在地	6.0	1.3	—		
565	669	3	Ⅲ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径1.6 孔径0.6 重さ6.7	
566	804	4	Ⅲ	灰釉陶器	碗	虎渓山1	美濃	15.2	4.8	7.8		
567	775	4	Ⅲ	山茶碗(北部系)	碗	白土原1	東濃	—	—	6.0		内底部・高台接地部使用痕

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量 口径	器高	底径	その他	備考
639	682	3	Ⅱ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径0.8 孔径0.3	
640	683	3	Ⅱ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.6 径0.8 孔径0.25	
641	681	3	Ⅱ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.7 径0.8 孔径0.3	
642	678	3	Ⅱ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.3 径1.0 孔径0.35	
643	684	3	Ⅱ	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.3 径0.7 孔径0.25	
644	758	4	Ⅱ	須恵器	高杯	7C後半	美濃須衛	—	—	—		
645	757	4	Ⅱ	須恵器	蓋	7C後半	美濃須衛	—	—	—		
646	760	4	Ⅱ	須恵器	杯身	7C後半	尾張？	—	—	—		
647	759	4	Ⅱ	須恵器	杯身	—	—					
648	706	4	Ⅱ	須恵器	無台杯	8C後半	美濃須衛	—	—	—		内面赤彩顔料
649	766	4	Ⅱ	灰釉陶器	椀	虎渓山1？	美濃	—	—	—		内底部使用痕
650	810	4	Ⅱ	灰釉陶器	椀	丸石2	美濃	—	—	8.2		内底部使用痕
651	764	4	Ⅱ	灰釉陶器	皿	虎渓山1～丸石2	美濃	—	—	6.6		内底部使用痕
652	765	4	Ⅱ	灰釉陶器	皿	虎渓山1～丸石2	美濃	—	—	—		内底部・高台接地部使用痕
653	761	4	Ⅱ	灰釉陶器	椀	虎渓山1～丸石2	美濃	—	—	—		
654	762	4	Ⅱ	灰釉陶器	椀	丸石2	美濃	—	—	—		
655	768	4	Ⅱ	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	—		内底部・高台接地部使用痕
656	773	4	Ⅱ	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	—	—	8.4		内底部使用痕
657	772	4	Ⅱ	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	7.6		内底部・高台接地部使用痕
658	778	4	Ⅱ	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	9.2	1.6	5.0		
659	769	4	Ⅱ	山茶碗(南部系)	碗	5型式	尾張	—	—	—		内底部使用痕
660	749	4	Ⅱ	磁器(中国)	青磁碗	—	中国	—	—	—		
661	751	4	Ⅱ	磁器(中国)	青磁碗	—	中国	—	—	—		
662	783	4	Ⅱ	陶器	碗	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面灰釉
663	792	4	Ⅱ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		
664	791	4	Ⅱ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		
665	796	4	Ⅱ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		
666	788	4	Ⅱ	陶器(瀬戸美濃)	壷？	古瀬戸 後Ⅲ～Ⅳ期	瀬戸	—	—	—		内外面鉄釉
667	797	4	Ⅱ	陶器(瀬戸美濃)	甕	大窯2・3	瀬戸・美濃	—	—	—		
668	—	4	Ⅱ	土師器	小型丸底壷？	—	—	—	—	—		
669	809	4	Ⅱ	土師器	茶釜	—	—	—	—	—		外面スス
670	790	4	Ⅱ	土師器	内耳鍋	—	—	—	—	—		外面スス
671	789	4	Ⅱ	土師器	内耳鍋	—	—	—	—	—		外面スス
672	803	4	Ⅱ	土製品	土鈴	—	—	—	—	—		
673	1016	5・6	Ⅱ	縄文土器	浅鉢	五貫森	—	—	—	—		
674	930	5・6	Ⅱ	須恵器	蓋	7C後半	美濃須衛？	—	—	—		
675	904	5・6	Ⅱ	須恵器	無台杯	7C後半 ～8C前葉	尾北？	—	—	5.3		
676	908	5・6	Ⅱ	灰釉陶器	椀	虎渓山1～丸石2	美濃	10.0	—	—		
677	906	5・6	Ⅱ	灰釉陶器	深椀	丸石2	美濃	—	—	7.2		内底部・高台接地部使用痕
678	907	5・6	Ⅱ	灰釉陶器	椀	丸石2	美濃	—	—	—		
679	910	5・6	Ⅱ	灰釉陶器	皿	丸石2	美濃	—	—	7.2		
680	957	5・6	Ⅱ	山茶碗(南部系)	皿	5型式	尾張	8.2	2.1	4.5		内底部・底部使用痕
681	916	5・6	Ⅱ	山茶碗(北部系)	碗	脇之島3	東濃	—	—	—		
682	915	5・6	Ⅱ	山茶碗(北部系)	碗	大畑大洞4古	東濃	—	—	—		
683	912	5・6	Ⅱ	陶器(瀬戸美濃)	—	古瀬戸後Ⅰ期	瀬戸	—	—	—		内外面灰釉
684	993	5・6	Ⅱ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
685	980	5・6	Ⅱ	陶器(瀬戸美濃)	皿？	大窯1～2	瀬戸・美濃	—	—	6.0		内外面灰釉
686	1153	5・6	Ⅱ	土師器	かわらけ	D1類	在地	5.3	1.7	—		
687	911	5・6	Ⅱ	灰釉陶器	広口瓶	虎渓山1～丸石2	美濃	—	—	—		
688	978	5・6	Ⅱ	陶器(瀬戸美濃)	菊皿	17C	瀬戸・美濃	—	—	7.2		
689	975	5・6	Ⅱ	陶器	柳茶碗	—	瀬戸・美濃	—	—	4.2		
690	981	5・6	Ⅱ	陶器(瀬戸美濃)	皿	—	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面灰釉
691	828	5・6	Ⅱ	磁器(中国)	青磁碗	—	中国	—	—	—		
692	988	5・6	Ⅱ	磁器(中国)	青磁碗	同安窯系 青磁碗Ⅰ類	中国	—	—	—		
693	964	5・6	Ⅱ	土師器	伊勢型鍋	山茶碗6～7併行	—	—	—	—		外面スス
694	924	5・6	Ⅱ	土師器	羽釜	—	—	—	—	—		
695	1013	5・6	Ⅱ	土製品	土鈴	—	—	—	—	—		
696	462	7～9	Ⅱ	土師器	壺	高蔵式以降	—	—	—	—		体部に横線＋波状文の加飾
697	474	7～9	Ⅱ	土師器	くの字甕	6～7期	—	—	—	—		口縁端部にキザミ、口縁部横ナデ
698	499	7～9	Ⅱ	土師器	受口甕	—	—	—	—	—		口縁部横ナデ、口縁部横ナデ
699	485	7～9	Ⅱ	土師器	壺	—	—	—	—	5.0		口縁部横ナデ
700	488	7～9	Ⅱ	土師器	S字甕	A類・7期	—	—	—	—		
701	492	7～9	Ⅱ	土師器	S字甕	BC類・8期	—	10.5	—	—	頸部径9.0 頸部高1.1	外面スス
702	490	7～9	Ⅱ	土師器	S字甕	BC類・8期	—	15.4	—	—	頸部径12.4 頸部高1.3	
703	496	7～9	Ⅱ	土師器	S字甕	D1類・8期	—	—	—	—	頸部径10.0 頸部高1.3	
704	491	7～9	Ⅱ	土師器	S字甕	D1類・8期	—	13.0	—	—	頸部径10.6 頸部高1.3	外面スス
705	461	7～9	Ⅱ	土師器	S字甕	BC類・8期	—	—	—	—		
706	489	7～9	Ⅱ	土師器	S字甕	BC類・8期	—	—	—	—		
707	497	7～9	Ⅱ	土師器	S字甕	BC類・8期	—	—	—	—		外面スス
708	486	7～9	Ⅱ	土師器	S字甕	—	—	—	—	—		外面スス
709	493	7～9	Ⅱ	土師器	S字甕	BC類・8期	—	14.0	—	—	頸部径12.2 頸部高1.1 胴部最大径22.0	外面スス
710	494	7～9	Ⅱ	土師器	S字甕	BC類・8期	—	14.8	—	—	頸部径13.0 頸部高1.4	外面スス

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量 口径	器高	底径	その他	備考
711	487	7～9	II	土師器	くの字甕	—	—	12.7	—	—		外面スス、口縁横ナデ
712	470	7～9	II	土師器	くの字甕	—	—	11.3	—	—		外面スス・縦ハケ、内面横ハケ、口縁部横ナデ
713	472	7～9	II	土師器	壺	6～7期？	—	15.2	—	—		内外面横ミガキ
714	460	7～9	II	土師器	壺	—	—	17.0	—	—		
715	480	7～9	II	土師器	くの字甕	—	—	—	—	—		
716	471	7～9	II	土師器	甕	—	—	19.0	—	—		
717	481	7～9	II	土師器	二重口縁壺？	9期	—	—	—	—		内面横ミガキ、外面ミガキ？
718	483	7～9	II	土師器	柳ケ坪型壺	9期	—	—	—	—		外面口縁部上段ハケメ原体によるキザミ目下半縦ハケ、内面口縁部上段ハケメ原体によるキザミ目
719	468	7～9	II	土師器	壺	9期	—	—	—	—		頸部突帯
720	484	7～9	II	土師器	甕(山陰系)	9期	—	14.8	—	—		口縁部横ナデ
721	475	7～9	II	土師器	屈折脚高杯	9～10期	—	15.0	—	—		
722	476	7～9	II	土師器	屈折脚高杯	9～10期	—	—	—	—		
723	500	7～9	II	土師器	屈折脚高杯	9～10期	—	—	—	—		外面ナデ
724	469	7～9	II	土師器	屈折脚高杯	9期	—	—	—	—	脚部径12.0	
725	477	7～9	II	土師器	屈折脚高杯	9期	—	—	—	—	脚部径10.1	
726	479	7～9	II	土師器	屈折脚高杯	9期	—	—	—	—	脚部径10.0	
727	498	7～9	II	土師器	丸底壺(外来系)	9期	—	12.0	—	—		
728	473	7～9	II	土師器	器台	9期	—	—	—	—	脚台径12.0	内外面ミガキ
729	463	7～9	II	土師器	杯部椀形高杯	9期	—	12.0	—	—		
730	465	7～9	II	土師器	杯部椀形高杯	9期	—	—	—	—		
731	478	7～9	II	土師器	杯部椀形高杯	9期	—	—	—	—	脚部径10.0	
732	467	7～9	II	土師器	宇田甕	9期	—	—	—	—		
733	443	7～9	II	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	8.6		外底アジロ痕
734	510	7～9	II	土師器	かわらけ	C2類	在地	7.3	1.4	—		
735	317	1･2	I	土師器	碗(高台付き)	古代		—	—	7.6		ロクロ土師器
736	238	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	折縁深皿	古瀬戸中IV期	瀬戸	—	—	—		内外面灰釉
737	239	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	折縁皿	古瀬戸中IV期	瀬戸	—	—	—		内外面灰釉
738	236	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後IV期新	瀬戸	—	—	—		内外面灰釉
739	241	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後IV期新	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
740	237	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後IV期古	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
741	240	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	窖末	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
742	254	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯3	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
743	323	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	小壺	大窯1	瀬戸・美濃	7.4	—	—		内外面灰釉
744	251	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	丸碗	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面灰釉
745	242	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	丸皿	古瀬戸後IV期	瀬戸	—	—	—		内外面灰釉
746	324	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	皿	大窯2	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面灰釉、内底部刻印(紅葉)
747	339	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	皿	大窯1	瀬戸・美濃	5.5	1.4	3.4		内外面灰釉、内底部刻印
748	306	1･2	I	陶器(常滑)	甕	—	常滑	—	—	—		
749	304	1･2	I	陶器(常滑)	甕	—	常滑	—	—	—		
750	247	1･2	I	磁器(中国)	青磁碗	龍泉窯系青磁碗	中国	—	—	—		
751	245	1･2	I	磁器(中国)	青磁碗	15C	中国	—	—	—		
752	246	1･2	I	磁器(中国)	青磁稜花皿	15C	中国	—	—	4.1		
753	327	1･2	I	陶器	鉢	—	三島	—	—	—		
754	321	1･2	I	陶器(瀬戸美濃)	加工円盤	—	—	—	—	—		近世陶器の再利用
755	210	1･2	I	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.6 径0.9 孔径0.4 重さ4.1	
756	593	3	I	土師器	有段高杯	7～8期	—	—	—	—		内面多条沈線＋クシ状工具による刺突
757	643	3	I	土師器？	皿？	—		—	—	4.4		
758	585	3	I	土師器	かわらけ	M3～M4類	在地	12.0	2.9	—		
759	657	3	I	陶器(瀬戸美濃)	瓶類	古瀬戸 前III～IV期	瀬戸	—	—	8.0		外面灰釉
760	651	3	I	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	大窯	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
761	649	3	I	陶器(瀬戸美濃)	鉢	古瀬戸後IV期新	瀬戸	—	—	—		内外面錆油
762	658	3	I	陶器(瀬戸美濃)	端反皿	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面灰釉
763	595	3	I	土師器	伊勢型鍋	山茶碗6～7併行	—	—	—	—		内外面スス
764	660	3	I	陶器(瀬戸美濃)	皿	17C	瀬戸・美濃	—	—	6.2		内外面長石釉、内底部鉄絵
765	659	3	I	陶器(瀬戸美濃)	摺り絵皿	18C前半	瀬戸・美濃	—	—	7.0		見込み鉄絵
766	627	3	I	磁器	染付筒型碗	19C	美濃	6.4	—	—		
767	686	3	I	土製品	土鈴	—	—	—	—	—		
768	685	3		土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.3 径0.8 孔径0.25 重さ1.6	
769	680	3	I	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.2 径0.9 孔径0.3 重さ2.5	
770	675	3	I	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.3 径1.2 孔径0.4 重さ3.9	
771	670	3	I	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径1.3 孔径0.45 重さ6.4	
772	754	4	I	土師器	有段高杯	7～8期	—	—	—	—		
773	756	4	I	須恵器	無台杯	7C後半	美濃須衛	—	—	—		内底部使用痕
774	704	4	I	須恵器	杯蓋	8C後葉	美濃須衛	—	—	—		
775	767	4	I	山茶碗(北部系)	碗	大畑大洞4新	東濃	12.0	3.9	3.3		
776	771	4	I	山茶碗(北部系)	碗	脇之島1	東濃	—	—	—		
777	784	4	I	陶器(瀬戸美濃)	鉢	古瀬戸後III期	瀬戸	—	—	—		内外面灰釉

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量 口径	器高	底径	その他	備考
778	785	4	I	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面鉄釉
779	763	4	I	灰釉陶器	椀	—	美濃	—	—	—		
780	750	4	I	磁器(中国)	青磁碗	—	中国	—	—	—		
781	800	4	I	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ5.0 径2.0 孔径0.5 重さ30.1	
782	802	4	I	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.3 径1.3 孔径0.4 重さ5.0	
783	903	5・6	I	土師器	壺	朝日～貝田町式	—	—	—	—		縦ハケの後細かい横線文
784	928	5・6	I	土師器	壺	—	—	—	—	6.6		
785	899	5・6	I	土師器	くの字甕	—	—	9.6	—	—		体部斜めハケ、口縁部横ナデ
786	902	5・6	I	土師器	くの字甕	—	—	—	—	—		口縁部ハケのち横ナデ
787	900	5・6	I	土師器	くの字甕	—	—	—	—	—		口縁部横ナデ
788	929	5・6	I	須恵器	杯蓋	H-50	尾張	—	—	—		
789	934	5・6	I	須恵器	高杯	7C後半	美濃須衛	—	—	—		
790	932	5・6	I	須恵器	杯蓋	8C前葉～8C後葉	美濃須衛？	—	—	—		
791	938	5・6	I	須恵器	台付盤	8C後半	美濃須衛	—	—	—		
792	1019	5・6	I	灰釉陶器	椀	虎渓山1？	美濃	—	—	—		
793	905	5・6	I	灰釉陶器	椀	丸石2？	美濃？	15.6	5.2	6.8		
794	950	5・6	I	山茶碗(南部系)	小碗	4型式	尾張	9.5	3.1	5.0		内底部使用痕
795	945	5・6	I	山茶碗(南部系)	碗	6型式	尾張	15.2	5.3	6.3		内底部使用痕
796	817	5・6	I	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	8.1	2.4	4.7		
797	952	5・6	I	山茶碗(南部系)	皿	6型式	尾張	8.3	1.9	4.2		内底部使用痕
798	996	5・6	I	山茶碗(南部系)	大平鉢	3型式併行	東濃	—	—	13.2		内底部使用痕
799	914	5・6	I	山茶碗(北部系)	碗	明和1	東濃	13.4	4.9	4.7		
800	951	5・6	I	山茶碗(北部系)	碗？	生田2	東濃	—	—	—		
801	968	5・6	I	土師器	伊勢型鍋	山茶碗5型式併行	—	—	—	—		
802	965	5・6	I	土師器	伊勢型鍋	山茶碗 6～7型式併行	—	—	—	—		外面スス
803	1017	5・6	I	陶器(瀬戸美濃)	水注	古瀬戸前ⅡC期	瀬戸	—	—	7.4	胴部径12.3	外面灰釉、口縁打ち欠く
804	921	5・6	I	陶器(瀬戸美濃)	四耳壺	古瀬戸 前Ⅲ～Ⅳ期	瀬戸	—	—	—		外面灰釉
805	922	5・6	I	陶器(瀬戸美濃)	—	古瀬戸 前Ⅲ～Ⅳ期	瀬戸	—	—	13.0		外面灰釉
806	920	5・6	I	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	大窯1	瀬戸・美濃	—	—	4.5		内外面鉄釉 高台錆釉
807	974	5・6	I	陶器(瀬戸美濃)	皿	大窯	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
808	919	5・6	I	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面鉄釉
809	971	5・6	I	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期古	瀬戸	—	—	—		内外面鉄釉
810	923	5・6	I	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面錆釉
811	994	5・6	I	陶器(瀬戸美濃)	加工円盤(擂鉢)	大窯	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面錆釉
812	925	5・6	I	陶器(常滑)	甕	6a形式	常滑	—	—	—		
813	826	5・6	I	磁器(中国)	青磁碗	14～15C	中国	—	—	—		
814	829	5・6	I	磁器(中国)	白磁碗	白磁V類	中国	—	—	—		
815	1043	5・6	I	土師器	かわらけ	B2類	在地	12.1	1.9	—		外底部墨書
816	1044	5・6	I	土師器	かわらけ	B2類	在地	—	—	—		外底部墨書
817	985	5・6	I	陶器(瀬戸美濃)	香炉	17C末～18C	瀬戸	—	—	—		外面飴釉
818	986	5・6	I	陶器(瀬戸美濃)	蓋	17C末～18C	瀬戸・美濃	—	1.8	—	最大幅4.1	外面灰釉
819	969	5・6	I	磁器	染付碗	近世	肥前	11.2	—	—		
820	970	5・6	I	磁器	染付碗	近世	肥前	—	—	—		
821	976	5・6	I	磁器	染付碗	近世	肥前	—	—	4.0		
822	977	5・6	I	陶器	染付皿	18C代	瀬戸	11.8	—	—		
823	1015	5・6	I	磁器	缶詰(代用品)の蓋	戦時中	美濃	7.3	—	—	最大径8.8	戦時中の代用品
824	961	5・6	I	土師器	焙烙鍋	18C代	—	—	—	—		外面スス
825	962	5・6	I	土師器	内耳鍋	18C代	—	—	—	—		外面スス
826	888	5・6	I	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	径3.2 孔径0.6 重さ23.8	線刻
827	1011	5・6	I	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ3.9 径1.0 孔径0.25 重さ3.1	
828	1005	5・6	I	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.6 径1.2 孔径0.4 重さ6.1	
829	999	5・6	I	土製品	管状土錘	—	—	—	—	—	長さ4.2 径1.9 孔径0.35 重さ14.0	
830	441	7～9	I	縄文土器	—	縄文晩期？	—	—	—	—		
831	440	7～9	I	縄文土器	—	縄文晩期？		—	—	—		
832	521	7～9	I	土師器	有段高杯	8期	—	—	—	—		内面多条沈線＋弧文
833	503	7～9	I	土師器	S字甕	B類・7～8期	—	15.8	—	—	頸部径13.6 頸部高1.6	
834	442	7～9	I	土師器	壺	—	—	—	—	6.7		
835	520	7～9	I	土師器	壺	—	—	—	—	7.7		
836	501	7～9	I	土師器	有段高杯？	8期	—	—	—	—		脚部縦ミガキ
837	522	7～9	I	土師器	屈折脚高杯？	9期	—	—	—	—	脚端径9.0	脚部縦調整、脚端部横ナデ
838	523	7～9	I	土師器	屈折脚高杯	9～10期	—	—	—	—		
839	531	7～9	I	土師器	屈折脚高杯	9～10期	—	—	—	—		
840	482	7～9	I	土師器	二重口縁壺	8～9期	—	20.0	—	—		口縁端部にキザミ、内面横ナデ、外面ミガキのち横ナデ？
841	495	7～9	I	土師器	柳ケ坪型壺	9期	—	—	—	—		外面口縁部上段ハケメ原体によるキザミ目下半縦ハケ、内面口縁部上段ハケメ原体によるキザミ目

報告番号	整理番号	地区	遺構・層位	種類	器種	編年・分類	産地	法量				備考
								口径	器高	底径	その他	
842	508	7~9	I	土師器	甕	—	—	21.0	—	—		体部外面縦ハケ、口縁内外面横ナデ
843	445	7~9	I	土師器	甕	伊勢型？	—	—	—	—		内面横ハケ
844	519	7~9	I	土師器	甕	—	—	20.0	—	—		口縁外面横ナデ
845	526	7~9	I	土師器	ミニチュア土器	—	—	—	—	—		
846	524	7~9	I	土師器	甑	—	—	—	—	—		外面縦ハケ、体部内面・口縁部外面横ナデ
847	525	7~9	I	土師器	甑	—	—	—	—	—		外面縦ハケ
848	448	7~9	I	土師器	丸底甕	伊勢型1類	伊勢？	18.0	—	—		内面横ハケ、外面口縁部横ナデ、体部縦ハケ
849	514	7~9	I	須恵器	高杯	畿内4,~5型式	畿内系	—	—	—		
850	515	7~9	I	須恵器	高杯	畿内4～5型式	畿内系	—	—	—	脚台径11.3	脚部・杯部体部カキ目。
851	438	7~9	I	須恵器	杯蓋	畿内6型式	畿内	—	—	—		
852	439	7~9	I	須恵器	杯身	7C前半	美濃須衛	—	—	—		
853	437	7~9	I	須恵器	甕	7C前葉	美濃須衛	—	—	—	胴部最大径8.5	
854	516	7~9	I	須恵器	甕	7C後半～8C代	美濃須衛	—	—	14.0		外面平行叩き、内面同心円当て具
855	505	7~9	I	灰釉陶器	瓶類	—	—	—	—	15.0		
856	518	7~9	I	灰釉陶器	椀	百代寺併行	美濃	—	—	8.2		内底部・高台接地部使用痕
857	458	7~9	I	磁器(中国)	染付皿？	—	中国	—	—	—		
858	455	7~9	I	陶器(瀬戸美濃)	碗	古瀬戸後Ⅳ期新	瀬戸	—	—	—		内外面鉄釉
859	454	7~9	I	陶器(瀬戸美濃)	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅳ期古	瀬戸	—	—	—		口縁部内外面灰釉
860	528	7~9	I	陶器(瀬戸美濃)	茶入れ	大窯	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面鉄釉
861	450	7~9	I	陶器(瀬戸美濃)	香炉	古瀬戸後Ⅲ期	瀬戸	—	—	13.0		外面灰釉
862	527	7~9	I	陶器	蓋	—	美濃以外	—	—	—		
863	456	7~9	I	陶器	小杯	—	美濃以外	6.3	—	—		内外面灰釉
864	452	7~9	I	陶器(瀬戸美濃)	鉢	18C	瀬戸・美濃	—	—	—		内外面灰釉
865	530	7~9	I	陶器(瀬戸美濃)	向付	17C前半	瀬戸・美濃	—	—	—		外面銅緑釉・鉄絵
866	457	7~9	I	陶器(瀬戸美濃)	鉢	古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期	瀬戸	15.0	—	—		内外面鉄釉
867	512	7~9	I	陶器(瀬戸美濃)	蓋	18C	美濃	9.0	1.0	—		外面灰釉

報告番号	整理番号	地区	遺構	器種	法量	備考(石材)
868	506	7~9	I	未製品	長18.9 幅10.6 厚2.8 重543.9	ホルンフェルス
869	1014	5・6	Ⅲ	ピエスエスキーユ	長3.4 幅2.2 厚1.2 重7.4	チャート
870	459	7~9	Ⅱ	礫器	長13.6 幅9.0 厚5.0 重640	ホルンフェルス
871	694	7~9	I	—	長(2.6) 幅(1.5) 厚(0.5) 重2.8	緑色凝灰岩
872	1144		S3	石錘	長13.5 幅10.1 厚1.8 重373.4	流紋岩
873	419		SB03	—	長15.7 幅6.0 厚3.3 重465.8	砂岩
874	1130		SD07	敲石	長10.3 幅5.3 厚3.0 重234.7	流紋岩
875	345		SX01	敲石	長12.2 幅6.2 厚4.9 重619	砂岩
876	350		SX01	敲石	長11.4 幅8.4 厚5.0 重680	輝石角閃石安山岩
877	351		SX01	敲石	長11.4 幅5.6 厚3.1 重262.6	砂岩
878	352		SX02	敲石	長15.5 幅7.3 厚3.4 重507.7	砂岩
879	346		SX01	磨石	長23.6 幅8.8 厚4.9 重1595	砂岩
880	692		SX13W	敲石	長15.8 幅7.0 厚6.2 重957	砂岩
881	693		SX13	敲石	長14.4 幅7.0 厚4.3 重584	砂岩
882	1146		SR1	敲石	長(8.8) 幅(6.0) 厚(5.0) 重393.1	砂岩
883	631		SX09	敲石	長12.7 幅5.1 厚2.7 重274.2	砂岩
884	1136		SR1	敲石	長10.1 幅5.5 厚4.2 重323.6	砂岩
885	1135		SR1	敲石	長13.9 幅4.9 厚3.7 重405.0	砂岩
886	1145		SR1	敲石	長(14.4) 幅7.2 厚5.2 重730	砂岩
887	1150		SR1	敲石	長15.7 幅8.5 厚4.7 重960	ハンレイ岩
888	1151		SR1	敲石	長18.2 幅11.3 厚5.5 重1520	花崗岩
889	1137		SR1	敲石	長10.0 幅4.8 厚3.3 重264.9	輝石角閃石安山岩
890	1142		S3	敲・磨石	長10.2 幅5.2 厚2.9 重226.0	砂岩
891	1141		S3	敲石	長10.1 幅5.9 厚2.7 重240.2	流紋岩
892	1147		S3	敲・磨石	長11.8 幅6.5 厚3.4 重415.5	砂岩
893	1138		S3	敲石	長12.7 幅4.9 厚3.7 重327.7	砂岩
894	1149		S3	敲・磨石	長15.1 幅9.6 厚4.1 重904	砂岩
895	1148		S3	敲・磨石	長12.6 幅8.7 厚3.6 重527.3	砂岩
896	1139		S3	敲・磨石	長13.1 幅5.3 厚4.2 重436.6	砂岩
897	1152		S3	敲石	長9.6 幅10.3 厚4.2 重538.1	砂岩
898	1140		S3	敲石	長9.8 幅4.4 厚2.9 重175.1	砂岩
899	1143		S3	敲石	長11.0 幅3.0 厚2.6 重132.6	凝灰岩
900	353		SX01	磨石	長5.1 幅4.7 厚4.0 重136.3	凝灰岩
901	1126		SD07	砥石	長9.3 幅4.4 厚3.5 重95.3	凝灰岩
902	1127		SD07	砥石	長(8.9) 幅(9.1) 厚(2.3) 重121.0	砂岩
903	1129		SD07	砥石	長(5.9) 幅(5.8) 厚(2.3) 重87.3	砂岩
904	349		SX01	砥石	長10.0 幅9.0 厚3.5 重385.1	ホルンフェルス
905	348		SX01	砥石	長7.6 幅4.6 厚2.1 重96.1	凝灰岩
906	1131		SX19	砥石	長13.9 幅4.4 厚6.9 重473.2	砂岩
907	1134		S3	砥石	長(6.7) 幅(7.9) 厚(7.9) 重450.5	砂岩
908	1133		S3	砥石	長9.3 幅4.3 厚2.6 重152.2	砂岩
909	1132		S3	砥石	長10.3 幅4.8 厚2.2 重138.3	砂岩
910	1128	5・6	I	砥石	長(7.8) 幅(4.1) 厚(1.2) 重33.2	粘板岩
911	354		SX01	宝篋印塔	長20.4 幅20.6 厚15.5 重9000	砂岩
912	—		SD02	小刀	刃部長33.0 刃部最大幅2.6 厚0.9 重97.8	
913	1896		SX19	金銅製目貫	長4.3 最大幅1.2 最大厚0.2 重1.8	外面に花文(3つ)
914	688		SX13	簪?	長6.7 幅0.4 厚0.1 重1.9	
915	340		SD01	銭貨	銭厚0.13 重0.7	淳□□□
916	541		SX19	銭貨	外縁外径2.45 外縁内径2.1 銭厚0.18 重2.7	永楽通宝
917	1022		SD04	銭貨	外縁外径2.5 外縁内径2.15 銭厚0.1 重1.8	天聖元寶
918	341		SV01	銭貨	外縁外径2.5 外縁内径1.8 銭厚0.12 重2.2	至道元宝
919	342	1・2	Ⅲ	銭貨	外縁外径2.55 外縁内径2.15 銭厚0.18 重1.4	□楽通宝
920	—		SX13	分焔柱(瓦窯)	1辺40.0前後、残表51.0 心柱の瓦の1辺22.0前後	
921	—		SD06	金銅製銚子	本体径14.7 全長27.8 高9.0 注口長4.3 口縁端部厚0.5 重562	

第５章　自然科学的分析

第１節　城之内遺跡の火葬墓ＳＸ18から出土した炭化材の樹種

植田弥生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

当遺跡は岐阜市長良地区に所在し、長良川の右岸で岐阜扇状地の北縁に位置する。

この火葬墓のすぐ近くには直径20cm前後の河原石が集積しており周辺から出土したすり鉢や土師器皿から戦国時代（16世紀前半）の遺構と考えられている。炭化材は火葬墓の土壙の内側から２試料、土壙の周囲を取り巻く焼土と炭集中部から11試料、そして土壙の外側から４試料の計17試料を検討した。

火葬に際し用いられた樹種の報告例は少ない。中世の送葬儀礼跡である火葬墓から出土した樹種を明らかにすることは、単なる燃料材としての樹種選択を現在の我々が知るだけではなく、なぜそれらの樹種が使われたのか、強い樹種選択があったのか、当時の日本人の生死観とそれぞれの木に込めた思いなど民俗学的検討の資料にもなるはずである。

２．方法

樹種同定は炭化材の３方向の破断面を走査電子顕微鏡で観察し行った。横断面（木口）は炭化材を手で割り面を出し、接線断面（板目）と放射断面（柾目）は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあて弾くように割り新鮮な面を出す。この３断面の試料を直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察・写真撮影をした。

３．結果

試料の採取概略位置を第58図に、炭化材同定結果を第７表にまとめた。

同定された樹種の材組織記載を以下に記す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科　図版１ 1a.-1c.（№5 焼土と炭集中部１）

垂直・水平樹脂道がある針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかで晩材の量は多く、垂直樹脂道はおもに晩材部にある。分野壁孔は窓状で放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には鋸歯状の肥厚があることからマツ属の複維管束亜属であることが判る。放射仮道管内壁の肥厚の形状がアカマツは鋭利な鋸歯状であり、クロマツはそれが比較的ゆるやかである点で識別されるが、炭化材では壁基底部の肥厚しか確認できないので種は識別できない。

アカマツは荒れ地や崩壊地に成立する二次林の代表樹種であり、自然分布ではアカマツは内陸部に、クロマツは海岸部に多いといわれている。

マツ属単維管束亜属 *Pinus* subgen. *Haploxylon* マツ科　図版１ 2a.-2c.（№17 内側２）

放射柔細胞の壁は薄く、放射仮道管の内壁は平滑で肥厚が見られない。それ以外の形質は前記の複維管束亜属と同様である。保存状況はよく放射仮道管の内壁が平滑であることから単維管束亜属と同定した。ただし横断面の晩材量が多い点と、炭化材では高熱で内壁の肥厚が溶けるか壊れるかして平滑になることがあるのかなど疑問の点も残っている。

マツ属単維管束亜属には、高山帯に群生するハイマツ、関東以西の山地の生育するヒメコマツ（ゴヨウマツ）、本州中部と四国の山中にまれなチョウセンマツなどがある。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.　コウヤマキ科　図版１ 3a.-3c.（№8 焼土と炭集中部４）

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材である。晩材部の幅は極めて狭い。分野壁孔は窓状で、放射柔細胞の壁は薄い。

コウヤマキは日本特産の１属１種の常緑高木である。本州の福島県以南・四国・九州の宮崎県の暖帯上部から温帯の山地に分布し、特に長野県の木曽、和歌山県の高野山に多い。材は耐久性・耐水性・耐蟻性に優れ、古来より棺材として有名である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版２ 4a.-4c.（№5 焼土と炭集中部３）

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し除々に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材で、短接線状の柔組織が見られる。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。

クリは、北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木で、果実は食用になる。材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。遺跡からの出土例が多い樹種であり、建築・土木関連だけではなく燃料材としても報告例が多い。

モモまたはウメ *Prunus persica* Batsch. or *P. mume* Sieb. et Zucc. バラ科　図版２ 5a.-5c.（№13 焼土と炭集中部９）

年輪の始めに中型の管孔が密に分布し除々に径を減じてゆき、晩材ではおもに放射方向に複合した非常に小型の管孔が配列する半環孔材または散孔材である。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は異性、主に３細胞幅で細胞高は高い。

モモは中国北部、ウメは中国中部原産であり、日本への伝来の時期・伝播経路などは不明な栽培樹である。日本からは縄文時代の遺跡から散点的に材も出土例があり中世になると果実の核はもちろんのこと材の出土例も多くなる。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科　図版２ 6a.-6c.（№9 焼土と炭集中部５）

小型の管孔が単独または２～数個が複合し散在する散孔材で年輪界で径は減少する。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で層階状に配列し、道管の壁孔

はやや大きく円形で交互状に密在する。

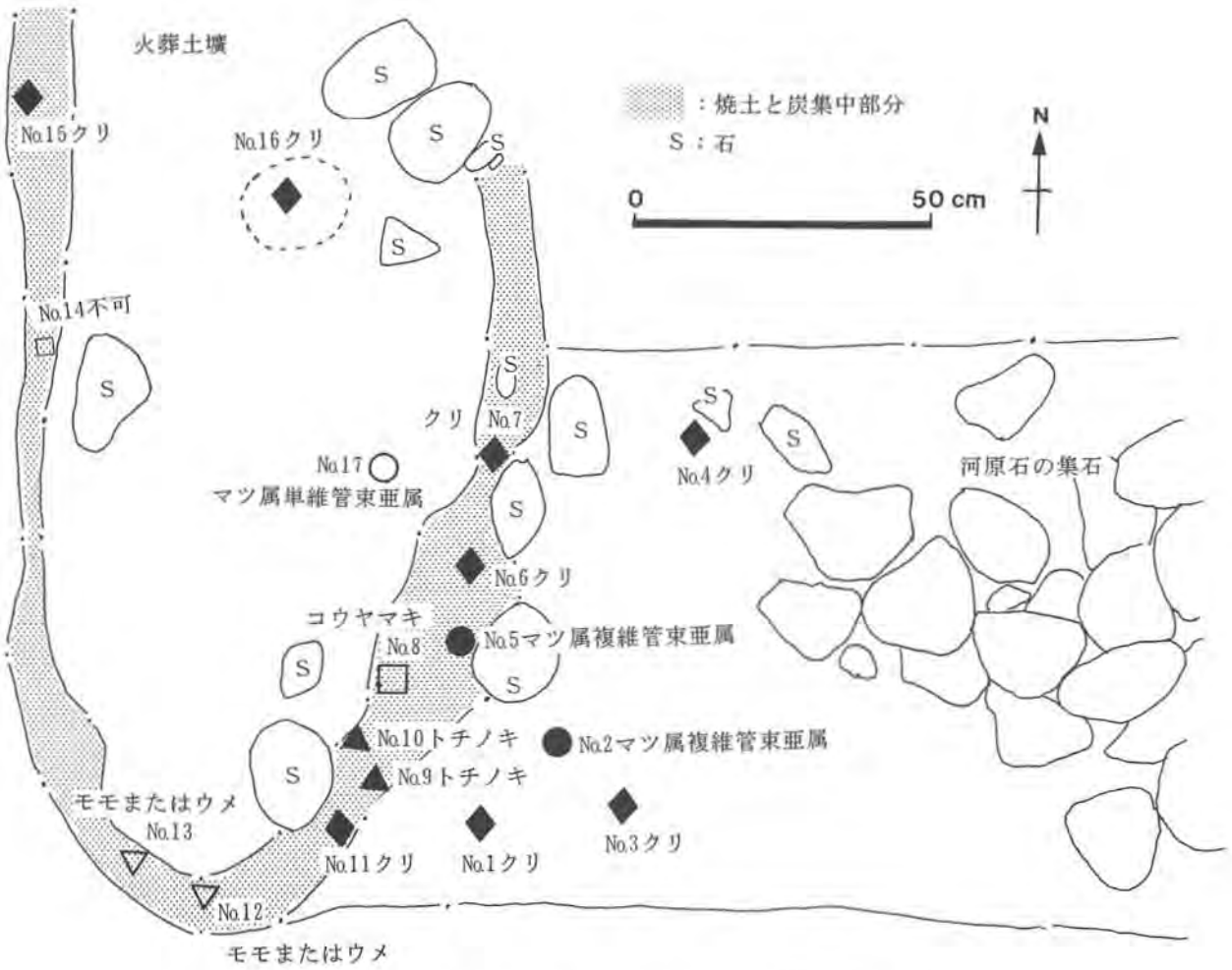
トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木である。種子はアク抜きが必要だが食用となり、材は軽軟で緻密で加工し易く、材面は絹系光沢がある。木理は不規則で耐久性は低く狂いがでやすい。容器などによく使われている。

4．まとめ

同定の結果は、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、コウヤマキ、クリ、モモまたはウメ、トチノキの6分類群であった。これらの炭化材は散在する破片状態であったため原形や用途は不明であるが、火葬のための薪や、遺体を納めるか載せた棺や台、たむけや魔よけのために供えた木々であったと考えられる。各分類群の産出状況は、土壙の内側からはマツ属単維管束亜属とクリが、土壙の外側からはマツ属複維管束亜属とクリが、土壙周囲の焼土と炭集中部からはマツ属複維管束亜属・コウヤマキ・クリ・モモまたはウメ・トチノキが検出された。マツ属複維管束亜属はアカマツとクロマツを含む分類群であり、両種には松脂が多く火力が高いので薪炭材としてよく使われる樹種である。クリも製鉄炉や窯跡、住居跡のカマド、火を使用した集石遺構などからの出土例も多く燃料材としても重要な材といえる。モモとウメも薪炭材に使われる樹種である。マツ属複維管束亜属・クリ・モモまたはウメは、人里近くに普通に生育または栽培されている樹種であり、薪材として入手はしやすいと考えられる。マツ属単維管束亜属の材は、組織記載で記したように同定にやや疑問が残るものの、当地域の植生分布からするとヒメコマツが候補として考えられ、材は仏壇に使われるそうであり、大阪府下の古墳後期の木棺の使用例もある。トチノキとヒメコマツは同様に材質がやわらかで削った面は光沢があり板材として利用される。コウヤマキは古来より木棺材として有名である。そして単維管束亜属やトチノキそしてコウヤマキは薪炭材としての利用はあまり聞かない樹種である。以上、材利用の面からの推測を記したが、クリ・モモまたはウメ・トチノキは古来より果実は食用となり人との付き合いが長いことから民俗的な取扱も考えられ、特にモモは呪術的な場で使われことが知られており、今後は民俗学的面からの検討も必要であろう。

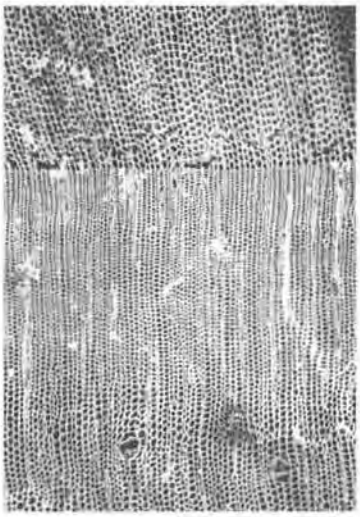
試料No.	採取位置	樹種
No.1	土壙外側1	クリ
No.2	土壙外側2	マツ属複維管束亜属
No.3	土壙外側3	クリ
No.4	土壙外側4	クリ
No.5	焼土と炭集中部1	マツ属複維管束亜属
No.6	焼土と炭集中部2	クリ
No.7	焼土と炭集中部3	クリ
No.8	焼土と炭集中部4	コウヤマキ
No.9	焼土と炭集中部5	トチノキ
No.10	焼土と炭集中部6	トチノキ
No.11	焼土と炭集中部7	クリ
No.12	焼土と炭集中部8	モモまたはウメ
No.13	焼土と炭集中部9	モモまたはウメ
No.14	焼土と炭集中部10	不可
No.15	焼土と炭集中部11	クリ
No.16	内側一括1	クリ
No.17	内側2	マツ属単維管束亜属

第7表　火葬墓ＳＸ18の炭化材樹種同定結果



第58図　火葬墓ＳＸ18の炭化材採取位置と樹種

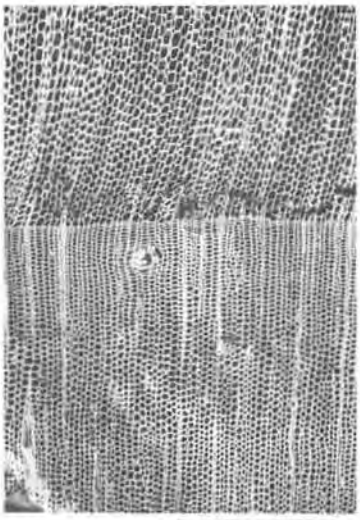
図版1　火葬墓ＳＸ18から出土した炭化材の電子顕微鏡写真(1)



1a.マツ属複維管束亜属（横断面）
№5　焼土と炭集中部1　bar:0.5mm

1b.同左（接線断面）　bar:0.1mm

1c.同左（放射断面）　bar:0.05mm



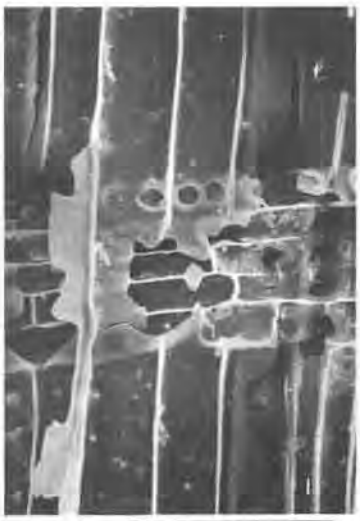
2a.マツ属単維管束亜属（横断面）
№17　内側2　bar:0.5mm

2b.同左（接線断面）　bar:0.1mm

2c.同左（放射断面）　bar:0.05mm

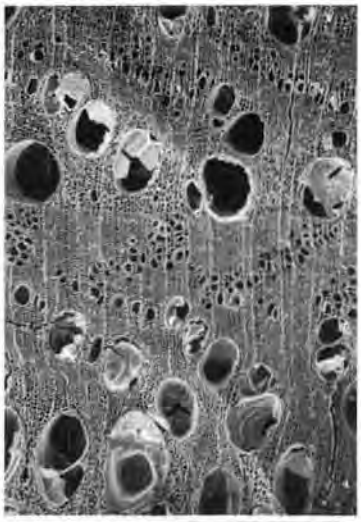
3a.コウヤマキ（横断面）
№8　焼土と炭集中部4　bar:0.5mm

3b.同左（接線断面）　bar:0.1mm

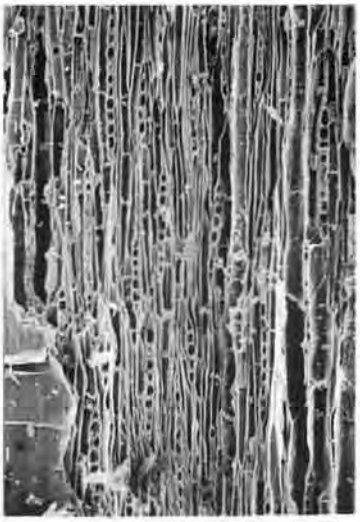


3c.同左（放射断面）　bar:0.1mm

図版２　火葬墓ＳＸ18から出土した炭化材の電子顕微鏡写真(2)

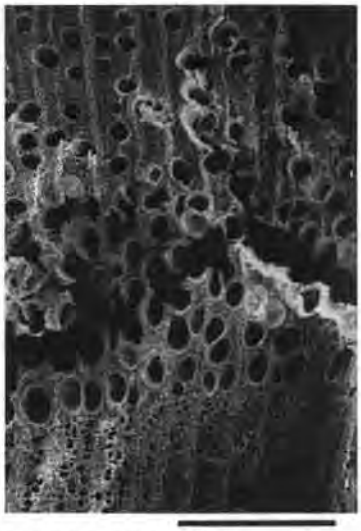


4a.クリ（横断面）
№5　焼土と炭集中部３　bar:0.5mm



4b.同左（接線断面）　bar:0.1mm

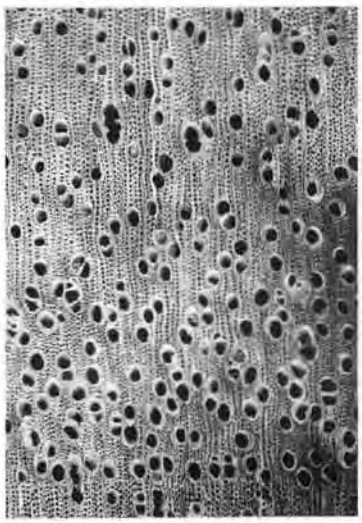
4c.同左（放射断面）　bar:0.1mm



5a.モモまたはウメ（横断面）
№13　焼土と炭集中部９　bar:0.5mm

5b.同左（接線断面）　bar:0.1mm

5c.同左（放射断面）　bar:0.1mm



6a.トチノキ（横断面）
№9　焼土と炭集中部５　bar:0.5mm

6b.同左（接線断面）　bar:0.1mm

6c.同左（放射断面）　bar:0.1mm

第２節　城之内遺跡出土の銚子の柄の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

岐阜市長良地区に所在する当遺跡から出土した16世紀前半の銚子の柄の樹種同定結果を報告いたします。

戦国時代の枝広館跡の近くから幅と深さがそれぞれ約1mの溝（ＳＤ６）が検出され、その溝を埋積する洪水性堆積層から青銅製で柄が木芯の銚子が発掘された。西暦1535年に長良川の決壊により大洪水が発生した記録があり、溝内の洪水性堆積層はこの時の可能性が高いと考えられている。

樹種同定は、直接銚子の柄から片刃の剃刀を用いて薄片を採取し、これをガムクロラールで封入して、光学顕微鏡で組織を観察した。柄は柾目取りの角棒状であり、上面から接線断面（板目）を、側方から放射断面（柾目）を薄くはぎ取った。しかし横断面（木口）の表面は腐食が激しくかなりそぎ取らねば薄片が採取出来ない状態であり製品を損なう恐れがあった為、横断面は採取できなかった。

銚子の柄は、仮道管と放射組織そして樹脂細胞からなる針葉樹材であった。軸方向要素の仮道管と水平方向に配列する放射柔細胞とが接する壁面の壁孔すなわち分野壁孔の型や数は、針葉樹材の同定に重要な形質である。当試料の分野壁孔は腐朽して充分な観察ができなかったが、ヒノキ型の壁孔が２個水平に配列し、上下端の分野壁孔では４個あるのが一部で観察された（図版３　１ｂ．１ｃ．）。また放射組織は５細胞高以上のものが多い（図版３　１ａ．）。以上の形質から、ヒノキ科のヒノキ属（*Chamaecyparis*）と同定した。

ヒノキ属の材は強靭で割裂性が高く、耐水・耐朽性がある有用材として知られ、建築材から器具材まで使用範囲は広い。そして中世以降は多方面において針葉樹材の使用が増えることが知られている。

図版３　銚子の柄の樹種同定

1a.ヒノキ属（接線断面）　bar:200μm　　1b.同左（放射断面）　bar:100μm　　1c.同左（放射断面）　bar:100μm

第３節　城之内遺跡Ｈ１・ＳＸ13・13Ｗ出土の種実花粉分析

新山雅広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

城之内遺跡は岐阜市長良に所在し、長良川の右岸側に位置する。本遺跡において畑地（幕末頃）と考えられる遺構（Ｈ１・２）が検出され、この遺構に隣接した溝状遺構（ＳＸ13・13Ｗ）も検出された。これらの遺構は洪水砂により埋積されており、ほぼ同時期のものと考えられている。今回は、畑地の耕作作物等の手がかりを得る目的で大型植物化石の検討を行い、また、当時の周辺植生を明らかにする目的で花粉化石群集の検討を行った。

２．大型植物化石

ａ．試料と方法

大型植物化石の検討に用いた試料は、畑地と考えられる遺構（Ｈ１・３区Ｌ）より採取された堆積物試料、１試料についてである。大型植物化石の採集は、堆積物試料約500ccを0.25mm目の篩を用いて水洗篩分けをすることにより行った。

ｂ．結果

産出した大型植物化石は、草本のザクロソウ（種子、20点）とナデシコ科（種子、１点）の２分類群であった。いずれも、畑地ないし路傍的環境などに生育する雑草と考えられる。

３．花粉化石

ａ．試料と方法

花粉化石群集の検討を行った試料は、ＳＸ13・３区Ｇより採取された試料１（灰色粘土）とＳＸ13Ｗ・３区Ｊより採取された試料２（灰色粘土）の計２試料であり、いずれも溝状遺構の堆積物より採取された。

花粉化石の抽出は、試料２～３ｇ程度を10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.15に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に撹拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、花粉化石の保存状態や産出個数が良好な試料については、樹木花粉総数が200個以上になるまで同定・計数した。その計数結果をもとにして各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉・シダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複

和名	学名	1	2
樹木			
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	103	4
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	5	1
スギ属	*Cryptomeria*	14	2
ノグルミ属	*Platycarya*	1	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	11	-
ハンノキ属	*Alnus*	7	1
ブナ属	*Fagus*	3	1
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	29	6
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	8	1
クリ属	*Castanea*	6	9
シイノキ属	*Castanopsis*	12	4
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	-
トチノキ属	*Aesculus*	3	-
ツツジ科	Ericaceae	1	-
草本			
ヒルムシロ属	*Potamogeton*	1	-
イネ科	Gramineae	127	89
カヤツリグサ科	Cyperaceae	4	9
クワ科	Moraceae	41	12
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	1
ソバ属	*Fagopyrum*	2	10
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	3
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	1
タケニグサ属	*Macleaya*	-	1
アブラナ科	Cruciferae	116	136
マメ科	Leguminosae	1	1
アリノトウグサ属	*Haloragis*	1	-
セリ科	Umbelliferae	1	1
オオバコ属	*Plantago*	2	-
ヨモギ属	*Artemisia*	4	2
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	2
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	3
シダ植物			
単条型胞子	Monolete spore	21	43
三条型胞子	Trilete spore	28	29
樹木花粉	Arboreal pollen	204	29
草本花粉	Nonarboreal pollen	305	271
シダ植物胞子	Spores	49	72
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	558	372
不明花粉	Unknown pollen	2	2

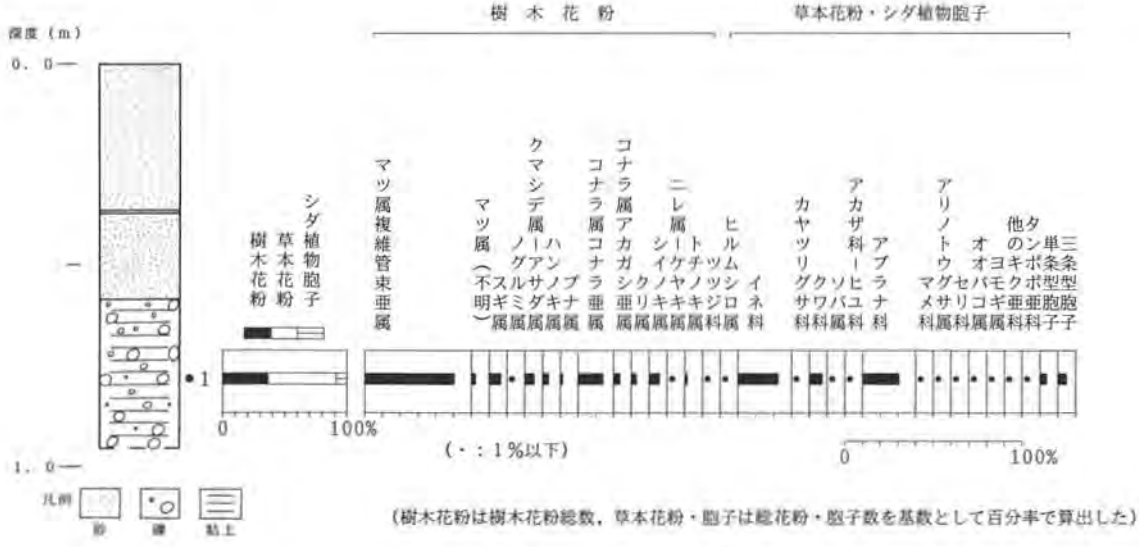
第8表　ＳＸ13・13W出土花粉化石一覧表

数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

b．結果

ＳＸ13・３Ｇの花粉化石群集：同定された分類群数は樹木花粉13、草本花粉14、形態分類で示したシダ植物胞子２である。樹木花粉の占める割合は、約37%とやや低率である。その中でマツ属複維管束亜属が約50%で最優占し、次いでコナラ属コナラ亜属が約14%で出現する。他に、スギ属、シイノキ属、クマシデ属ーアサダ属が５～７%程度、コナラ属アカガシ亜属、ハンノキ属、クリ属が３～４%程度で出現し、ブナ属、トチノキ属、ノグルミ属、ニレ属ーケヤキ属、ツツジ科が低率で出現する。草本花粉では、イネ科（約23%）、アブラナ科（約21%）、クワ科（約７%）が比較的多産し、ヒルムシロ属、ソバ属などが１%未満の低率で出現する。

ＳＸ13Ｗ・３Ｊの花粉化石群集：同定された分類群数は樹木花粉８、草本花粉14、形態分類で示したシダ植物胞子２である。ＳＸ13Ｗ・３Ｊの花粉化石群集は、樹木花粉総数が少ないため花粉化石分布図として示せなかった。樹木花粉では、クリ属が最も多産し、コナラ属コナラ亜属、マツ属複維管束亜属、シイノキ属も比較的多産する。他に、スギ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属が僅かに産出した。草本花粉ではアブラナ科、イネ科が多産し、クワ科、ソバ属なども目立った出現をする。



第59図　ＳＸ13の花粉化石分布図

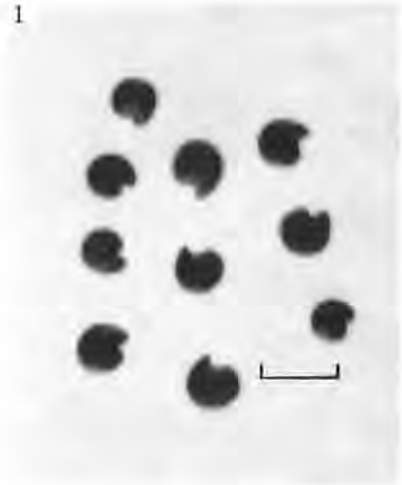
c．考察

幕末頃の遺跡周辺には、マツ属複維管束亜属（アカマツ、クロマツの類）を主とした森林が成立していたものと考えられる。そこには落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属、クマシデ属ーアサダ属、クリ属、針葉樹のスギ属、常緑広葉樹のシイノキ属、コナラ属アカガシ亜属なども混じっていた。一方、遺跡付近では溝付近などの幾分湿った所にはイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ

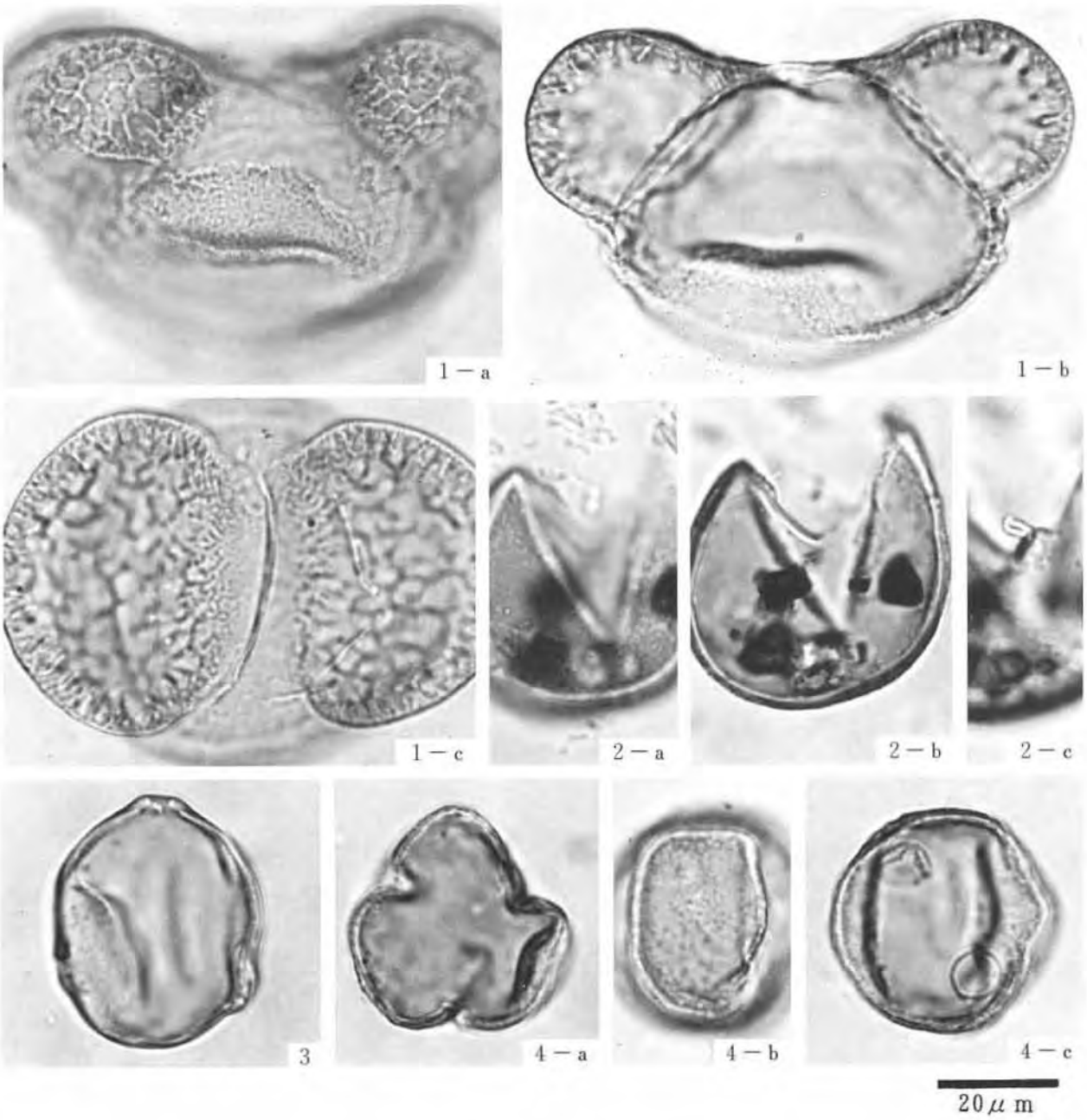
節、セリ科などが茂り、溝内には水生植物のヒルムシロ属が生育していたものと思われる。また、畑地ないし路傍的環境といった幾分乾き気味の所にはクワ科（クワクサ、カナムグラなど）、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、オオバコ属、ヨモギ属、タンポポ亜科などが生育していた。多産ないし目立った出現をするアブラナ科（アブラナなど）、ソバ属は付近で栽培されていた可能性がある。

4．おわりに

産出した大型植物化石からは、畑地での耕作作物の手がかりを得ることはできなかった。花粉化石では、アブラナ科、ソバ属などが多産ないし目立った出現をし、付近で栽培されていた可能性があるものと考えられた。これらアブラナ科、ソバ属は畑地で栽培されており、従って、隣接した溝内に多数のアブラナ科花粉、ソバ属花粉が供給されたという可能性も考えられる。遺跡周辺の植生は、花粉分析の結果からマツ属複維管束亜属を主とし、コナラ属コナラ亜属などを混じえた森林が成立していたことが予想された。

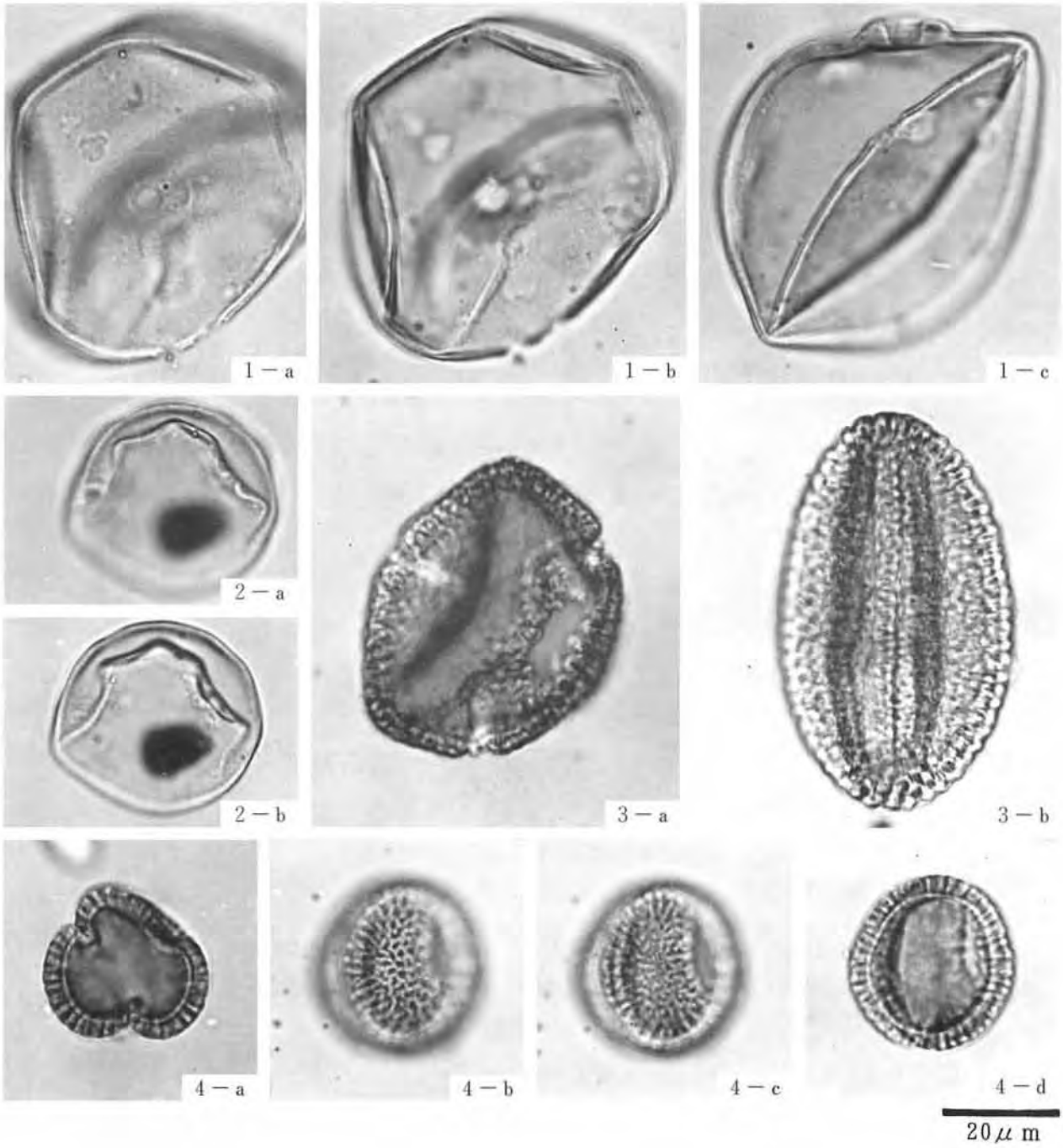


図版4　H1から出土した大型植物化石（スケールは1mm）
1．ザクロソウ、種子　2．ナデシコ科、種子



図版5　ＳＸ13から産出した花粉化石(1)

1：マツ属複維管束亜属、試料1、ＰＡＬ．ＭＮ　928
2：スギ属、試料1、ＰＡＬ．ＭＮ　934
3：クマシデ属－アサダ属、試料1、ＰＡＬ．ＭＮ　935
4：コナラ属コナラ亜属、試料1、ＰＡＬ．ＭＮ　931



図版6　ＳＸ13から産出した花粉化石(2)
1：イネ科、試料1、ＰＡＬ．ＭＮ　930
2：クワ科、試料1、ＰＡＬ．ＭＮ　933
3：ソバ科、試料1、ＰＡＬ．ＭＮ　929
4：アブラナ科、試料1、ＰＡＬ．ＭＮ　932

第４節　城之内遺跡ＳＤ２、ＳＫ１出土の花粉化石群集

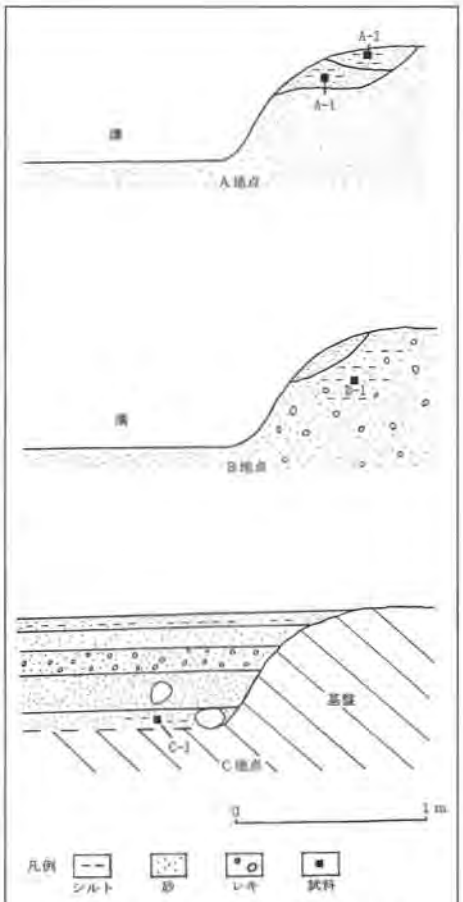
新山雅広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

城之内遺跡は岐阜市長良に所在し、長良川の右岸側に位置する。この遺跡において、東西方向の人工の溝（ＳＤ２、幅約２ｍ）が確認されており、溝の基盤となる堆積物は12世紀後半から13世紀前半と考えられている。また、この溝の上位には、現代と考えられるシルト質粘土層（ＳＫ１）が堆積している。今回は、溝の基盤となる堆積物と現代と考えられるシルト質粘土層から試料を採取し、当時の遺跡周辺の植生復元を試みた。

２．試料と方法

花粉化石群集の検討は、溝の基盤となる堆積物については３地点から４試料を、溝の上位に堆積するシルト質粘土層からは１地点から２試料を採取し、合計６試料について行った。溝は東西方向につくられており、西側から東側に向かって、順にＡ地点、Ｂ地点、Ｃ地点と便宜的に地点名を付け、Ａ地点から２試料（Ａ－１，Ａ－２）、Ｂ地点から１試料（Ｂ－１）、Ｃ地点から１試料（Ｃ－１）を採取した。なお，Ｃ地点は溝の東端（東壁）であり、試料採取位置が溝の基盤なのか、それよりも上位なのかは不明確である。試料は、Ａ－１、Ａ－２、Ｂ－１はオリーブ褐色シルト質砂、Ｃ－１は暗灰黄色シルト質砂である。溝の上位に堆積するシルト質粘土層は２層に分けられ、上層は青灰色シルト質粘土で下層よりも粘質である。下層は青灰色シルト質粘土で上層より色が明るい。上層より採取した試料を試料１、下層より採取した試料を試料２とした。



第60図　溝ＳＤ２の断面図

花粉化石の抽出は、試料３～６ｇ程度を10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.15に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に撹拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について、樹木花粉が200個以上になるまで同定・計数した。その計数結果をもとに、樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として、各分類群の出現

率を百分率で算出した。ただし、クワ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

3．花粉化石群集の記載

A－1：単条型胞子1点のみ産出した。

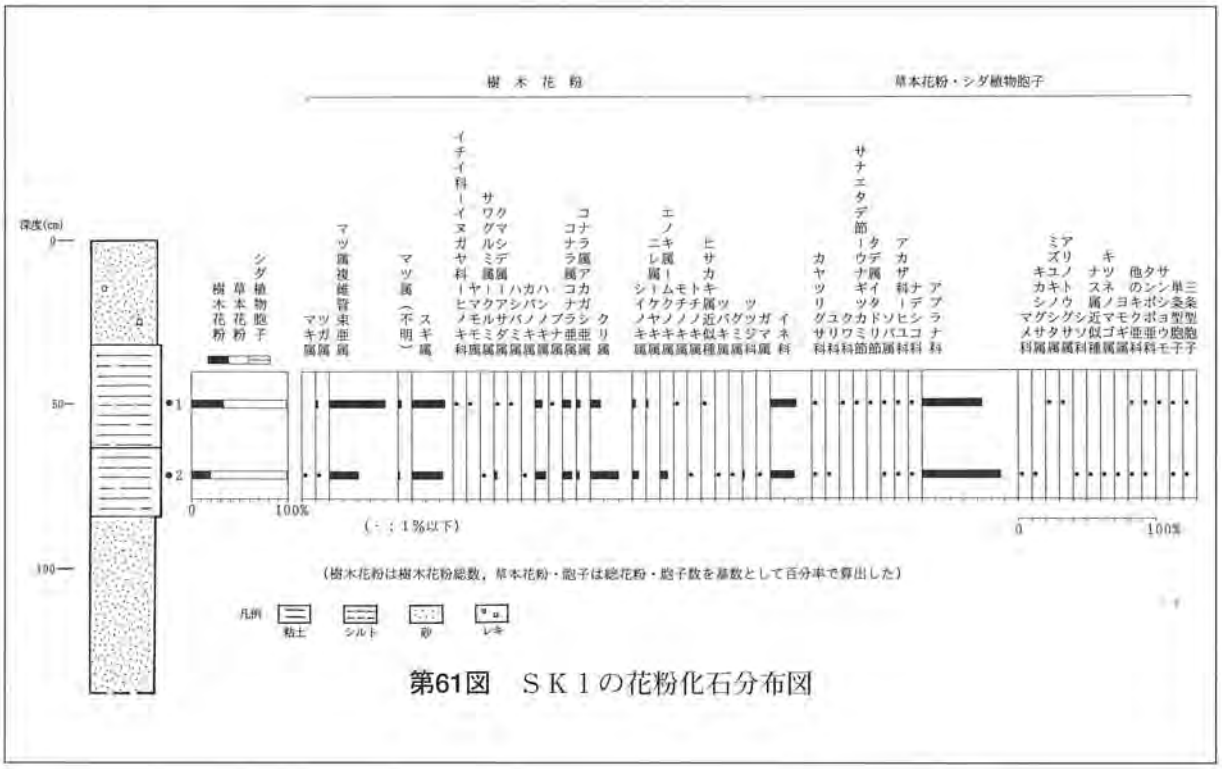
A－2：三条型胞子1点のみ産出した。

B－1：花粉・胞子化石は全く産出しなかった。

C－1：花粉・胞子化石は全く産出しなかった。

試料1：樹木花粉の占める割合は3％程度と低率である。その中で、マツ属複維管束亜属が約41％と高率を占める。スギ属も約24％と比較的高率を占める。他に、ツガ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属、シイノキ属、ニレ属－ケヤキ属といった分類群が10％未満で出現する。草本花粉では、アブラナ科が約44％と高率を占める。イネ科も約19％と比較的高率である。他に、ソバ属や水生シダ植物のサンショウモなども低率で出現する。

試料2：樹木花粉の占める割合は20％程度と低率である。その中で、マツ属複維管束亜属、スギ属、クリ属といった分類群が20％程度で比較的高率を占める。他に、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属、エノキ属－ムクノキ属、ツツジ科といった分類群が10％未満で出現する。草本花粉では、アブラナ科が約57％と高率を占め、イネ科も約17％と比較的高率である。他に、ガマ属、ソバ属、キカシグサ属といった分類群が低率で出現する。



第61図　ＳＫ１の花粉化石分布図

和名	学名	1	2	A-1	A-2	B-1	C-1
樹木							
マキ属	*Podocarpus*	-	1	-	-	-	-
ツガ属	*Tsuga*	4	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	84	46	-	-	-	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	5	3	-	-	-	-
スギ属	*Cryptomeria*	50	49	-	-	-	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	2	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	1	-	-	-	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	-	2	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	1	5	-	-	-	-
ハシバミ属	*Corylus*	1	-	-	-	-	-
カバノキ属	*Betula*	-	1	-	-	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	11	17	-	-	-	-
ブナ属	*Fagus*	1	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	13	15	-	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	6	5	-	-	-	-
クリ属	*Castanea*	16	43	-	-	-	-
シイノキ属	*Castanopsis*	5	10	-	-	-	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	3	-	-	-	-	-
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	12	-	-	-	-
モチノキ属	*Ilex*	2	-	-	-	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	1	-	-	-	-
ヒサカキ属近似種	cf. *Eurya*	1	-	-	-	-	-
ツバキ属	*Camellia*	-	1	-	-	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	1	-	-	-	-
ツツジ科	Ericaceae	-	3	-	-	-	-
草本							
ガマ属	*Typha*	-	1	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	116	190	-	-	-	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	2	-	-	-	-
ユリ科	Liliaceae	-	3	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	2	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	1	-	-	-	-	-
タデ属イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	2	-	-	-	-	-
ソバ属	*Fagopyrum*	2	3	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	3	6	-	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	8	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	271	630	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	7	-	-	-	-
キカシグサ属	*Rotala*	-	1	-	-	-	-
ミズユキノシタ属	*Ludwigia*	1	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	1	-	-	-	-	-
シソ科	Labiatae	-	1	-	-	-	-
ナス属近似種	cf. *Solanum*	-	1	-	-	-	-
キツネノマゴ属	*Justicia*	-	1	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	-	11	-	-	-	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	4	-	-	-	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	4	7	-	-	-	-
シダ植物							
サンショウモ	*Salvinia natans* (L.) All.	1	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	3	7	1	-	-	-
三条型胞子	Trilete spore	4	3	-	1	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	206	216	0	0	0	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	406	876	0	0	0	0
シダ植物胞子	Spores	8	10	1	1	0	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	620	1102	1	1	0	0
不明花粉	Unknown pollen	9	12	0	0	0	0

第9表　ＳＤ２、ＳＫ１産出花粉化石一覧表

4．考察

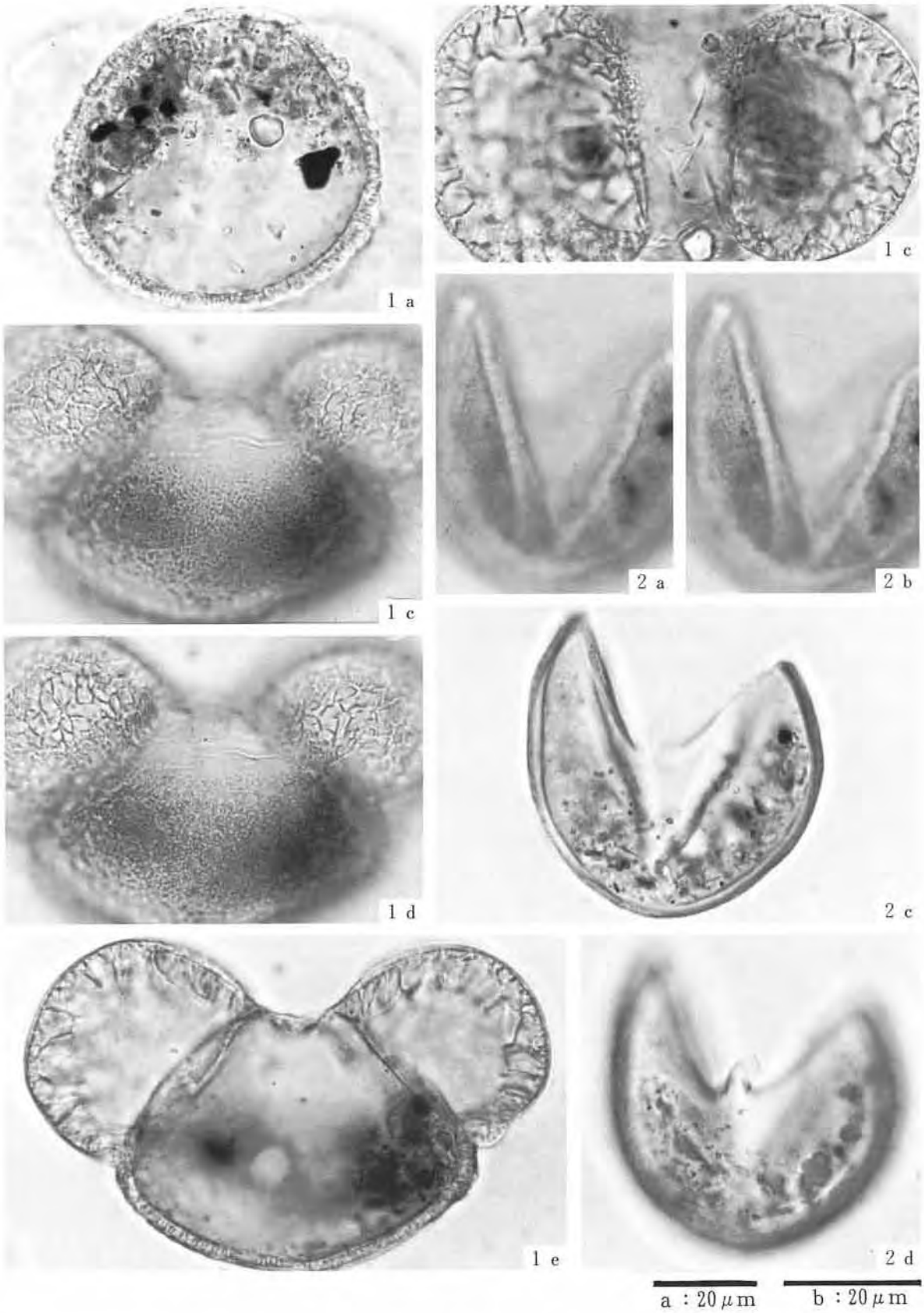
溝の基盤となる堆積物より採取した試料については、花粉・胞子化石は殆ど産出しなかったので周辺植生を復元することはできなかった。溝の上位に堆積するシルト質粘土層からは十分な花粉化石が得られた。当時、遺跡周辺の植生は、試料１の時期も試料２の時期も大勢としては変わらない。それは、マツ属複維管束亜属、スギ属といった針葉樹を主としたものであり、落葉広葉樹のハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属や常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属も若干混じえていたであろう。草本では、イネ科が比較的多産し、キカシグサ属などのいわゆる水田雑草も随伴するので、付近で水田稲作が行われていたものと思われる。また、アブラナ科が試料１、２共にかなり高率で安定した出現をしており、付近でアブラナ科（ダイコイン、カブ、アブラナなど）の栽培が行われていたものと思われる。他に、低率ではあるが、ソバ属も産出しており、栽培の可能性が考えられる。ソバの栽培は水田での裏作として行われることがあり（中村、1984）、そのようなソバ花粉が分析結果に表れたのかもしれない。

5．おわりに

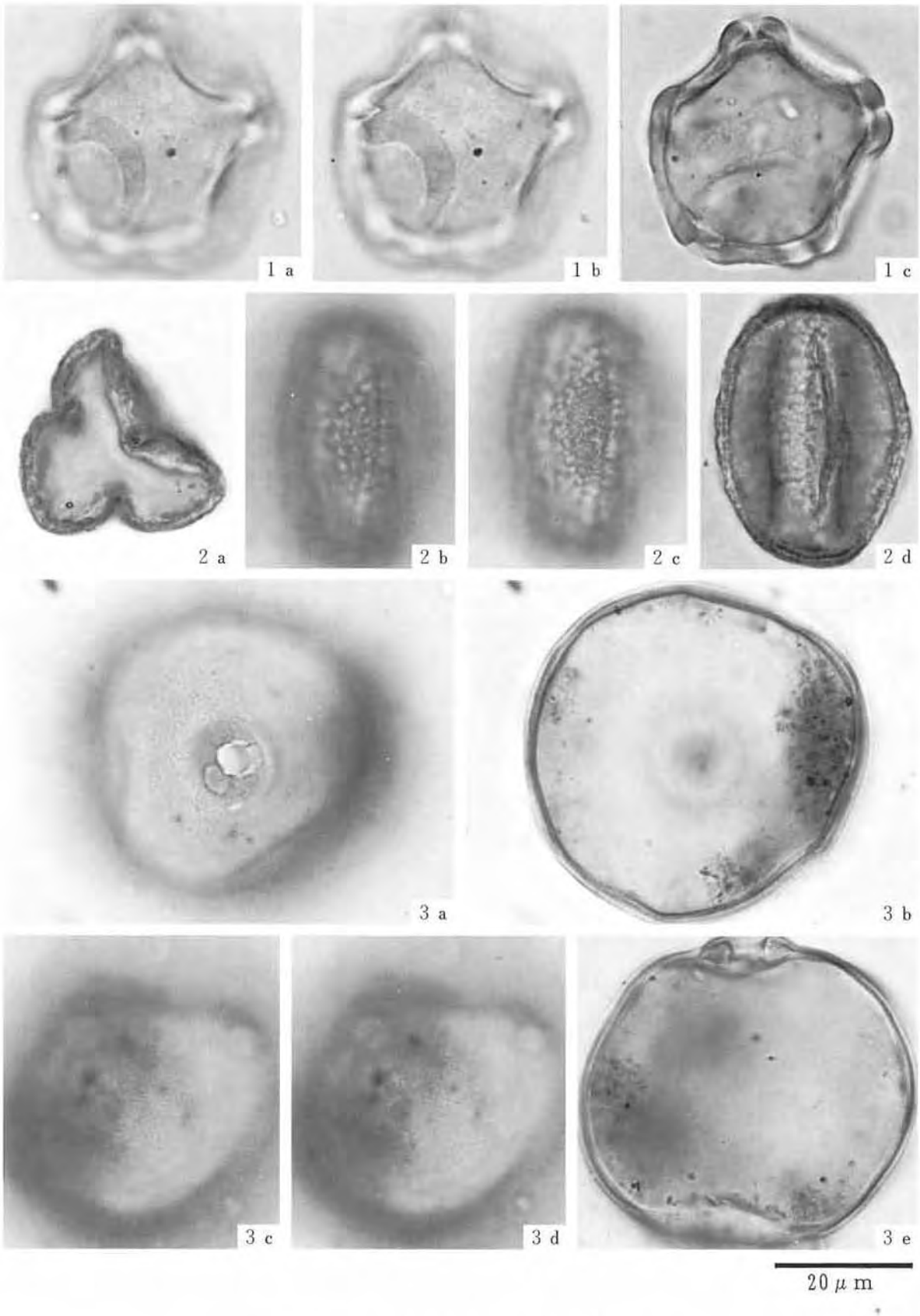
試料１、２から得られた花粉化石群集によれば、当時、城之内遺跡周辺の植生は、マツ属複維管束亜属、スギ属といった針葉樹を主としたものであったと思われる。また、付近では、イネ、ソバ、アブラナ科（ダイコン、カブ、アブラナなど）などが栽培されていたであろう。

引用文献

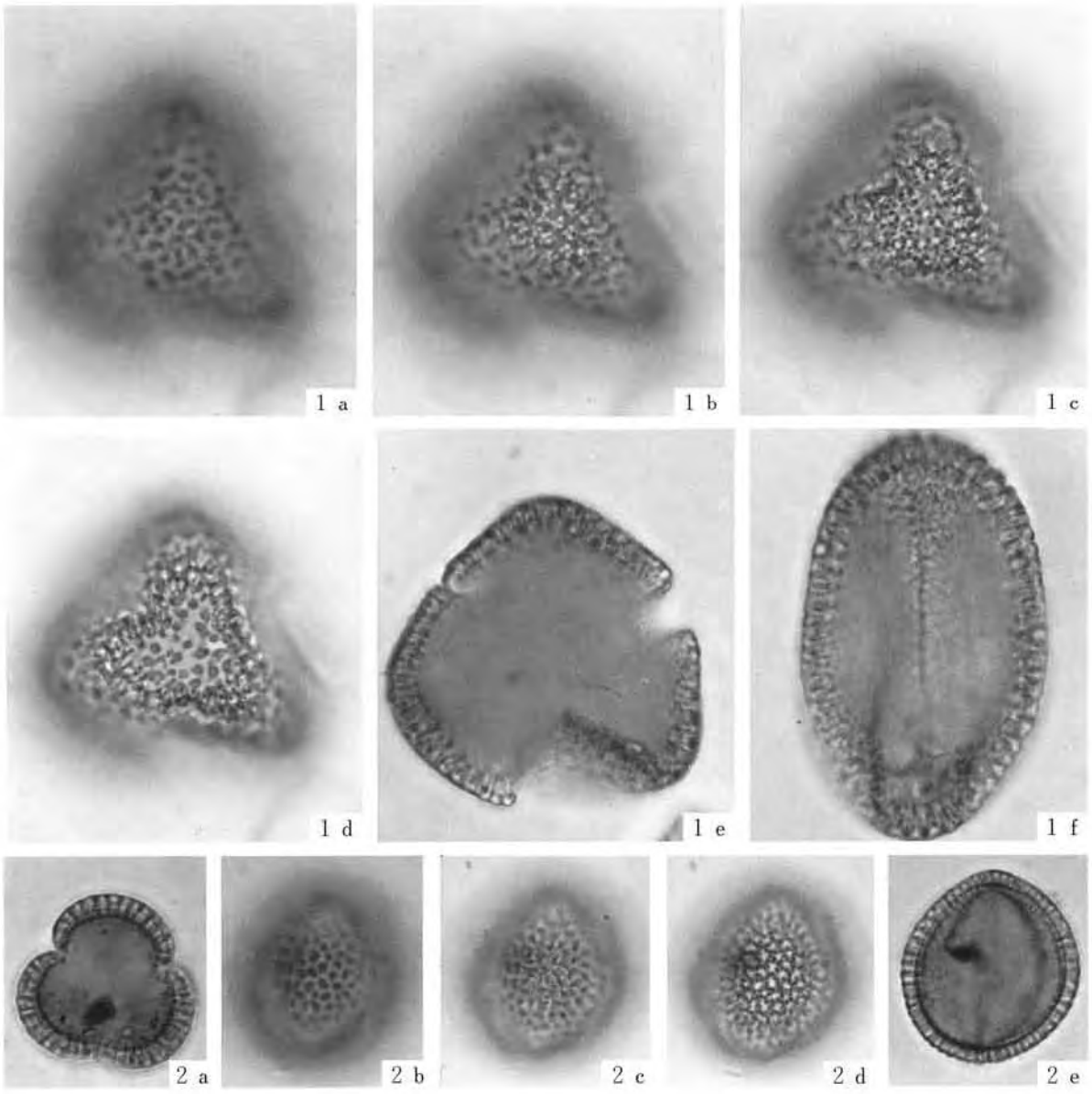
中村　純（1984）古代農耕とくに稲作の花粉分析学的研究．古文化財の自然科学的研究，古文化財編集委員会編，p.581-616.



図版7. ＳＫ１から産出した花粉化石(1)
1：マツ属複維管束亜属、試料１、ＰＡＬ．ＭＮ　705
2：スギ属、試料１、ＰＡＬ．ＭＮ　707
（スケール　a：1　b：2）



図版 8. ＳＫ１から産出した花粉化石(2)
1：ハンノキ属、試料２、ＰＡＬ．ＭＮ　703
2：コナラ属コナラ亜属、試料２、ＰＡＬ．ＭＮ　702
3：イネ科、試料２、ＰＡＬ．ＭＮ　706



図版 9. ＳＫ１から産出した花粉化石(3)
1：ソバ属、試料２、ＰＡＬ．ＭＮ　704
2：アブラナ科、試料２、ＰＡＬ．ＭＮ　701

第５節　城之内遺跡出土甕の胎土材料

藤根 久・古橋美智子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

土器は、日常的な道具として、また祭祀などの特別な行事に用いる道具として非常に重要であった。こうした土器の製作においては、土器形成に耐えうる良い粘土材料の獲得が必要であるほか、混和材の種類やその混入方法など十分熟知した経験が要求されたことは想像に難くない。一般的に土器の胎土分析は、土器を構成する胎土の岩石学的特徴あるいは化学的特徴から、その土器の製作地を推定する目的で行われているが、粘土材料あるいは混和物の種類や特徴についての検討はほとんど行われていない。

最近、弥生土器などの低温焼成された土器などについて、粘土の種類（起源）を指標する珪藻化石や骨針化石などの微化石類が残っていることが明らかになり、粘土の種類や混和材の特徴について次第に明らかになりつつある（車崎ほか、1996）。ここでは、城之内遺跡から出土した甕胎土について、その材料粘土や混和材などの特徴について調べた。

２．試料と方法

検討した試料は、城之内遺跡の数次にわたる調査から出土した甕60試料と粘土塊２試料である（第10表）。なお、出土地点の遺構番号のTS, HZS, US, YS2などは調査次数等の違いを示している。

ここでは、薄片を作成し偏光顕微鏡による観察による方法を行った。各土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。

⑴土器は、岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させ平面を作成した後、その平面にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。

⑵さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。

⑶その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で各分類群ごとに同定・計数した。同定・計数は、100μm格子目盛を用いて任意の位置における約50μm（0.5mm）以上の鉱物や岩石片あるいは微化石類（50μm前後）を対象とし、石英・長石類と微化石類以外の粒子が約100個以上になるまで同定・計数した。また、この計数とは別に、薄片全面について、微化石類や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。

３．分類群の記載

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数が少ないため、岩石名を正確に決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類した（菱田ほか、1993）。ここで採用した各分類群の記載とその特徴

などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略した。

[放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（海水種）・珪藻化石（汽水種）・珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（？）とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50μm前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[胞子化石]

胞子化石は、珪酸質と思われる直径10～30μm程度の小型の無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO_2%の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以

外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などのSiO_2%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO_2%が少ない深成岩、SiO_2%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO_2%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO_2%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO_2%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[ガラス]

透明の非結晶の物質で、電球のガラスの破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

[複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする。

[凝灰岩質]

非晶質でモザイックな文様構造を示し、石英・長石類やガラスなどが含まれるものをいう。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と

考える。

[片理複合鉱物類]

複合石英類で、個々の石英あるいは長石類が一定方向に配列しているものをいう。なお、これら石英などの粒子の隙間に黄色などの二次的な鉱物（主に雲母類）が見られるものを片理複合鉱物類（含雲母類）とする。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

4．各胎土の特徴および計数の結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した（第11表）。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No.1：50～230μm前後が多い（最大粒径3.4mm）。ガラス＞石英･長石類＞複合石英類（微細）＞砂岩質、複合雲母類、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biarefera*、*Eunotia* 属多産、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石多産、植物遺体

No.2：50～350μmが多い（最大粒径2.0mm）。ガラス＞石英･長石類＞複合石英類（微細）、斑晶質、斜長石（双晶）、砂岩質、ジルコン、珪藻化石（汽水種 *Navicula yarrensis*、湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata*、淡水種 *Eunotia biarefera*、*Eunotia* 属多産、不明種）、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

No.3：50μm前後が多い（最大粒径1.6mm）。複合石英類＞石英・長石類、複合鉱物類（含角閃石類）、複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、雲母類、ガラス、ジルコン、ザクロ石類、放散虫化石（4個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属）、骨針化石多い、胞子化石、植物珪酸体化石

No.4：50μm前後と200μm前後が多い（最大粒径1.7mm）。石英・長石類＞複合石英類＞角閃石類＞雲母類、斜長石（双晶）、複合石英類（微細）、複合鉱物類（含雲母類）、複合鉱物類（含角閃石類）、ザクロ石類、ジルコン、放散虫化石（18個体）、凝灰岩質、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、*Stephanodiscus* 属、不明種）、骨針化石多産、植物珪酸体化石

No.5：50μm前後と200～500μmが多い（最大粒径1.4mm）。複合石英類＞石英・長石類＞複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、複合鉱物類（含雲母類）、雲母類、角閃石類、砂岩質、植物珪酸体化石、植物遺体

No.6：50μm前後と500μm前後が多い（最大粒径2.7mm）。片理複合石英類 ＞ 複合石英類（微細）＞

石英・長石類〉複合石英類、複合鉱物類（含雲母類）、砂岩質、雲母類、複合鉱物類（含角閃石類）、複合鉱物類（含雲母類）、斜長石（双晶）、ガラス、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、珪藻化石（淡水種 *Pinularia* 属、*Cymbella* 属？）、骨針化石（1個体）、植物珪酸体化石、植物遺体

No.7：50～200μmが多く密度が高い（最大粒径1.3mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、雲母類、ザクロ石類、ジルコン、珪藻化石（不明種 *Pinnularia* 属？）、胞子化石、植物珪酸体化石

No.8：50～100μmが多い（最大粒径1.4mm）。石英・長石類〉複合石英類〉複合鉱物類（含雲母類）、斜長石（双晶）、角閃石類、雲母類、複合石英類（微細）、複合鉱物類（含角閃石類）、ジルコン、単斜輝石、凝灰岩質、ザクロ石類、植物珪酸体化石

No.9：50～150μmが多い（最大粒径1.4mm）。複合石英類〉石英・長石類〉斜長石（双晶）、複合鉱物類（含雲母類）、複合鉱物類（含角閃石類）、複合石英類（微細）、角閃石類、ジルコン、ザクロ石類、ガラス極少、放散虫化石（２個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属多い、不明種）、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No.10：30～50μmが多い（最大粒径1.2mm）。複合石英類（微細）〉砂岩質〉石英・長石類〉斑晶質、完晶質、複合鉱物類（含雲母類）、ガラス、単斜輝石、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（含ヨシ属）、植物遺体

No.11：30～50μmが多い（最大粒径850μm）。複合石英類（微細）〉砂岩質〉ガラス〉斑晶質、石英・長石類、複合石英類、角閃石類、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属多い、*Pinnularia* 属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石多産、植物遺体

No.12：20～100μmが多い（最大粒径2.0mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合石英類、ガラス、複合鉱物類（含雲母類）、斜長石（双晶）、雲母類、ジルコン、角閃石類、ザクロ石類、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No.13：20～100μmが多い（最大粒径1.4mm）。石英・長石類》複合石英類（微細）〉複合石英類、斜長石（双晶）、雲母類、角閃石類、ジルコン、ガラス、ザクロ石類、骨針化石、植物珪酸体化石

No.14：50～150μmが多い（最大粒径2.2mm）。石英・長石類〉複合石英類、複合石英類（微細）、複合鉱物類（含雲母類）、斜長石（双晶）、雲母類、角閃石類、凝灰岩質、ジルコン、ザクロ石類、植物珪酸体化石

No.15：50～200μmが多い（最大粒径1.6mm）。石英・長石類〉複合石英類〉複合鉱物類（含雲母類）、複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、雲母類、角閃石類、ジルコン、ザクロ石類、凝灰岩質、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No.16：20～100μmが多く粒子密度高い（最大粒径1.2mm）。石英・長石類》複合石英類、複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、雲母類、ガラス、ジルコン、ザクロ石類、放散虫化石？（１個体）、珪藻化石（不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No.17：50～100μmが多く粒子密度高い（最大粒径950μm）。石英・長石類》複合石英類（微細）、複合石英類、雲母類、角閃石類、ジルコン、ガラス、植物珪酸体化石

No.18：50～100μmが多い（最大粒径1.8mm）。石英・長石類》複合石英類（微細）、複合石英類、雲母

類、角閃石類、ジルコン、斜長石（双晶）、ガラス、珪藻化石（淡水種 *Melosira* 属）、植物珪酸体化石

№19：30～40：μmが多い（最大粒径1.5mm）。砂岩質〉泥岩質〉石英・長石類〉ガラス、斑晶質、複合石英類（微細）、雲母類、角閃石類、ジルコン、単斜輝石、珪藻化石（淡水種 *Melosira distans*、*Eunotia* 属、*Epithemia* 属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石

№20：90～700μmが多い（最大粒径2.9mm）。複合石英類〉石英·長石類〉ガラス、片理複合石英類、角閃石類、単斜輝石、ジルコン、植物珪酸体化石、黒褐色微細粒子高密度

№21：60～400μmが多い（最大粒径2.6mm）。石英·長石類〉ガラス〉複合石英類（微細）〉複合石英類、斑晶質、砂岩質、角閃石類、雲母類、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biarefera*、*Eunotia* 属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

№22：200～700μmが多い（最大粒径1.7mm）。石英·長石類〉複合石英類、雲母類、複合鉱物類（含角閃石類）、複合鉱物類（含輝石類）、ガラス、斜方輝石、凝灰岩質、珪藻化石（*Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属）、植物珪酸体化石

№23：80～700μmが多い（最大粒径1.4mm）。複合石英類（微細）〉石英·長石類〉ガラス〉砂岩質、複合石英類、完晶質、凝灰岩質、複合鉱物類（含雲母類）、ジルコン、凝灰岩質、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biarefera*、*Eunotia* 属、*Pinnularia* 属、不明種）、植物珪酸体化石多産

№24：10～50μmが多く粒径揃う（最大粒径1.7mm）。石英・長石類〉ガラス〉複合石英類、複合石英類（微細）、角閃石類、斜長石（双晶）、雲母類、ジルコン、ザクロ石類、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石

№25：50μm前後と300μm前後が多い（最大粒径1.8mm）。複合石英類〉石英・長石類〉複合鉱物類（含角閃石類）〉複合石英類（微細）、雲母類、角閃石類、斜長石（双晶）、ジルコン、ザクロ石類、ガラス、珪藻化石（陸生指標種群 *Hantzschia amphioxys*）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№26：50～100μmが多い（最大粒径2.0mm）。石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細）、角閃石類、斜長石（双晶）、雲母類、複合鉱物類（含雲母類）、ザクロ石類、ジルコン、珪藻化石（陸生指標種群 *Hantzschia amphioxys*）、骨針化石、植物珪酸体化石

№27：30～100μmが多い（最大粒径1.0mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合石英類、雲母類、複合鉱物類（含雲母類）、複合鉱物類（含角閃石類）、斜長石（双晶）、ジルコン、ザクロ石類、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Pinnularia* 属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

№28：50～100μmが多い（最大粒径2.1mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）、複合石英類、斜長石（双晶）、雲母類、ジルコン、ザクロ石類、カリ長石（パーサイト）、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属、*Neidium* 属、*Pinnularia* 属、海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属1個体）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№29：50～100μmが多い（最大粒径1.0mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合石英類、斜長石（双晶）、複合鉱物類（含雲母類）、複合鉱物類（含角閃石）、角閃石類、雲母類、ジルコン、ザクロ石類、ガラス、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属）、胞子化石、植物珪酸体化石

№30：100～900μmが多い（最大粒径1.8mm）。複合石英類（微細）〉砂岩質〉ガラス〉石英・長石類、

複合石英類、斑晶質、複合鉱物類（含雲母類）、凝灰岩質、完晶質、カリ長石（パーサイト）、単斜輝石、紋象岩、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石

No.31：200～800μm前後が多い（最大粒径2.8mm）。石英･長石類＞砂岩質＞ガラス＞複合石英類（微細）、斑晶質、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属）、骨針化石多い、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No.32：190～700μm前後が多い（最大粒径1.4mm）。複合石英類（微細）＞石英･長石類＞複合石英類、砂岩質、ジルコン、植物珪酸体化石少ない

No.33：50～150μmが多い（最大粒径1.4mm）。複合石英類（微細）＞石英･長石類＞砂岩質、複合石英類、ガラス、完晶質、角閃石類、ジルコン、複合雲母類、珪藻化石（不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石

No.34：200～900μmが多い（最大粒径1.7mm）。複合石英類（微細）＞石英･長石類、砂岩質、完晶質、斑晶質、凝灰岩質、単斜輝石、角閃石類、ガラス、斜長石（双晶）、胞子化石、植物珪酸体化石

No.35：100～700μmが多い（最大粒径1.6mm）。複合石英類（微細）＞石英･長石類＞カリ長石（パーサイト）、雲母類、斑晶質、凝灰岩質、砂岩質、ガラス少、胞子化石、植物珪酸体化石

No.36：320～900μmが多い（最大粒径1.4mm）。複合石英類（微細）＞砂岩質＞石英･長石類、複合石英類、ガラス（含軽石型ガラス）、斜長石（双晶）、凝灰岩質、斑晶質、単斜輝石、角閃石類、ジルコン、カリ長石（パーサイト）、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属）、骨針化石多い、胞子化石、植物珪酸体化石

No.37：130μm～1.2mm前後が多い（最大粒径2.5mm）。複合石英類（微細）＞砂岩質＞ガラス＞石英･長石類、複合石英類、斑晶質、複合鉱物類（含輝石類）、凝灰岩質、角閃石類、雲母類、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属）、植物珪酸体化石

No.38：30～150μmが多い（最大粒径2.2mm）。複合石英類＞石英・長石類＞雲母類、角閃石類、斜長石（双晶）、ジルコン多い、ザクロ石類、複合石英類（微細）、植物珪酸体化石

No.39：50～100μmが多い（最大粒径2.0mm）。石英・長石類＞雲母類＞複合石英類、角閃石類、複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、ジルコン、ザクロ石類、珪藻化石（陸生指標種群 *Pinnularia borealis*、淡水種 *Pinnularia* 属）、骨針化石、植物珪酸体化石

No.40：50～100μmが多い（最大粒径2.5mm），石英・長石類＞複合石英類＞複合石英類（微細）、複合鉱物類（含雲母類）、雲母類、角閃石類、斜長石（双晶）、ザクロ石類、ジルコン、単斜輝石、ガラス、珪藻化石（淡水種 *Cymbella* 属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石（塊）、植物遺体

No.41：50～150μmが多い（最大粒径1.7mm）。複合石英類＞石英・長石類＞雲母類、複合鉱物類（含雲母類）、複合石英類（微細）、角閃石類、斜長石（双晶）、ザクロ石類、ジルコン、単斜輝石、骨針化石、植物珪酸体化石

No.42：50～150μmが多い（最大粒径1.4mm）。石英・長石類＞複合石英類（微細）＞複合石英類、雲母類、角閃石類、斜長石（双晶）、紋象岩質、ガラス（塊）、ジルコン、ザクロ石類、単斜輝石、放散虫化石（1個体）、珪藻化石（淡水種 *Melosira* 属）、骨針化石、植物珪酸体化石

No.43：50～100μmが多い（最大粒径3.2mm）。複合石英類＞石英・長石類＞複合石英類（微細）、ガラス、雲母類、角閃石類、斜長石（双晶）、ザクロ石類、ジルコン、凝灰岩質、珪藻化石（陸域指標

種群 *Pinnularia borealis*、淡水種 *Pinnularia* 属)、骨針化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No.44：50～100μmが多い（最大粒径1.6mm)。石英・長石類〉複合石英類〉ガラス〉複合石英類（微細)、角閃石類、雲母類、ザクロ石類、ジルコン、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石（塊)、植物遺体

No.45：30～150μmが多い（最大粒径600μm)。石英·長石類〉角閃石類〉ガラス〉複合石英類（微細)、斜長石（双晶)、斑晶質、単斜輝石、ジルコン、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属)、胞子化石、植物珪酸体化石

No.46：70～400μmが多い（最大粒径600μm)。石英·長石類〉複合石英類（微細)、ガラス、斜長石（双晶)、単斜輝石、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産、粘土部分暗い

No.47：110～800μmが多い（最大粒径1.5mm)。複合石英類（微細)〉砂岩質〉石英·長石類〉ガラス〉複合石英類、凝灰岩質、斑晶質、角閃石類、複合雲母類、紋象岩、珪藻化石（砂粒付着種 *Cocconeis placentula*)、骨針化石、植物珪酸体化石多い、粘土部分暗い

No.48：110～550μmが多い（最大粒径1.8mm)。石英·長石類》小型雲母類〉複合石英類（微細)〉複合石英類、斜長石（双晶)、ガラス、角閃石類、斜方輝石、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体、黒色粒子高密度

No.49：50～300μmが多い（最大粒径1.4mm)。石英·長石類》小型雲母類〉複合石英類（微細)〉角閃石類〉複合石英類、複合鉱物類（含雲母類)、ガラス、凝灰岩質、単斜輝石、斜長石（双晶)、ジルコン、植物珪酸体化石、黒色粒子多い

No.50：90～500μmが多い（最大粒径1.6mm)。石英·長石類》小型雲母類〉複合石英類（微細)、複合鉱物類（含雲母類)、ガラス、凝灰岩質、斑晶質、角閃石類、ジルコン、ザクロ石類、珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata*、淡水種 *Eunotia biarefera*、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No.51：60～220μmが多い（最大粒径1.6mm)。石英·長石類〉複合石英類（微細)〉複合石英類〉角閃石類、雲母類、ガラス、ザクロ石類、ジルコン、泥岩質、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biarefera*、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No.52：80～120μmが多い（最大粒径2.4mm)。石英·長石類》複合石英類（微細)〉複合石英類、雲母類、角閃石類、斜長石（双晶)、カリ長石（ﾊﾟｰｻｲﾄ)、複合鉱物類（含雲母類)、ガラス、ザクロ石類、ジルコン、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Melosira* 属、*Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、粘土部分暗い

No.53：80～700μmが多い（最大粒径1.7mm)。石英・長石類》角閃石類〉複合石英類（微細)〉ガラス（含軽石型ガラス)、凝灰岩質、複合石英類、ジルコン、ザクロ石類、斜長石（双晶)、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産、植物遺体、植物珪酸体塊、粘土部分暗い

No.54：100～240μmが多い（最大粒径2.2mm)。石英·長石類》複合石英類（微細)〉複合石英類〉ガラス、凝灰岩質、ザクロ石類、斜長石（双晶)、角閃石類、ジルコン、骨針化石、胞子化石、植物珪

酸体化石

No.55：100～700μm前後が多い（最大粒径2.0mm）。石英･長石類》複合石英類〉ガラス〉角閃石類〉複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、ジルコン、珪藻化石（不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石多産、粘土部分暗い

No.56：120～600μmが多い（最大粒径2.1mm）。石英･長石類》複合石英類、複合石英類（微細）、ガラス、ザクロ石類、雲母類、角閃石類、凝灰岩質、植物珪酸体化石、粘土部分暗い

No.57：80～700μmが多い（最大粒径2.5mm）。石英･長石類〉小型雲母類〉複合石英類〉複合石英類（微細）、角閃石類、ザクロ石類、複合鉱物類（含雲母類）、斜長石（双晶）、複合雲母類、ガラス、単斜輝石、放散虫化石（2固体）、珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata* 密集、淡水種 *Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No.58：50～500μmが多い（最大粒径1.5mm）。石英・長石類》複合石英類、ガラス、雲母類、ジルコン、角閃石類、斜長石（双晶）、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属）、胞子化石、植物珪酸体化石

No.59：40～300μmが多い（最大粒径850μm）。複合石英類（微細）〉石英･長石類〉複合石英類、雲母類、ガラス、珪藻化石（不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No.60：160μm～1.7mmが多い（最大粒径2.3mm）。複合石英類（微細）〉砂岩質〉斑晶質〉複合鉱物類（含雲母類）、凝灰岩質、ガラス、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属、*Eunotia biarefera*、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No.61：130～400μmが多い（最大粒径1.0mm）。複合石英類（微細）〉石英・長石類〉砂岩質、雲母類、斑晶質、植物珪酸体化石

No.62：80～700μmが多い（最大粒径1.3mm）。複合石英類（微細）〉石英・長石類〉砂岩質、複合石英類、斑晶質、植物珪酸体化石

5．微化石類による粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、放散虫化石や珪藻化石あるいは骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、放散虫化石が数百μm、珪藻化石が10～数100μm（実際観察される珪藻化石は大きいもので150μm程度）、骨針化石が10～100μm前後である（植物珪酸体化石が10～50μm前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～2mmである（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981）。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は、胎土材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の種類（起源）を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

胎土は、微化石類により、a_1）海成粘土（外洋成）を用いた胎土、a_2）海成粘土を用いた胎土、b）淡水成粘土を用いた胎土、c）水成粘土を用いた胎土、d）その他の粘土を用いた胎土、に分類される。以下では、分類される胎土についてその特徴を述べる。

a_1）海成（外洋成）粘土を用いた胎土（No.3、No.4、No.9、No.42；4胎土）

これらの胎土中には、放散虫化石が特徴的に含まれる。No.1ではこの放散虫化石が高率で出現している。また、これら胎土中には海水種珪藻化石や骨針化石が含まれ、海水種珪藻化石の*Coscinodiscus*属/*Thalassiosira*属や*Stephanopyxis*属などが出現する。

東海地域では、放散虫化石を含むような外洋性堆積物は、瀬戸内区の中新世の地層が知られている。これら瀬戸内区中新世（約2,300万年前～520万年前）の地層は、三重県の伊勢地域の阿波層群・一志層群、知多先端部地域の師崎層群、三河地域の設楽層群・岡崎層群などである（第63図の新第三紀中新統）。ただし、土岐市や瑞浪市の周辺に分布する中新統の地層は、淡水性堆積物である。なお、現在のところ、放散虫化石は阿波層群槙野含礫泥岩層中において記載されている（吉田ほか、1995）。

a_2）海成粘土を用いた胎土（No.22、No.24、No.27、No.46；4胎土）

これらの胎土中には、放散虫化石は見られないものの、海水種珪藻化石や骨針化石などが含まれる。海水種珪藻化石は、*Coscinodiscus*属/*Thalassiosira*属などである。

b）淡水成粘土を用いた胎土（No.1、No.2、No.6、No.10、No.11、No.19、No.21、No.23、No.28～No.31、No.37、No.40、No.43、No.44、No.50～No.53、No.57、No.58、No.60；23胎土）

これらの胎土中は、淡水種珪藻化石などが含まれる。淡水種珪藻化石は、*Eunotia biareofera*や*Eunotia*属、*Pinnularia*属や*Melosira distans*などである。なお、No.11やNo.28の胎土中には、沼沢地などで見られる*Eunotia biareofera*が特徴的に含まれる。

これらの珪藻化石を伴う泥質堆積物は、沖積低地の堆積物など一般的に広く分布する堆積物と考えられる。

c）水成粘土を用いた胎土（No.7、No.12、No.13、No.15、No.16、No.18、No.25、No.26、No.33、No.36、No.39、No.41、No.45、No.47、No.48、No.54、No.59；17胎土）

これらの胎土中には、水成堆積物中でみられる珪藻化石や骨針化石が含まれる。ただし、珪藻化石は、破片であるためその堆積環境を推定することはできない。

伊勢湾周辺に分布する東海層群（最後期中新世～前期更新世；約520万年前頃～73万年前）は、古東海湖と呼ばれる粘土質堆積物であるが、珪藻化石などの微化石類は希薄であることから、こうした東海層群の粘土質堆積物の可能性がある。

d）その他の粘土を用いた胎土（No.5、No.8、No.14、No.17、No.20、No.32、No.34、No.35、No.38、No.49、No.55、No.56、No.61、No.62；12胎土、2粘土塊）

これらの胎土中からは、水成環境を指標する微化石類は含まれていない。これらの粘土は、前述の東海層群の粘土層とも考えられる。

6．砂粒の概略組成による分類

胎土中の大型砂粒は、正確に岩石を決定することが出来ないものの、ある程度起源岩石を推定することは可能である。ここでは、泥岩質や砂岩質あるいは複合石英類（微細）を示す砂粒を堆積岩類、斑晶質や完晶質を示す砂粒を火山岩類、複合石英類（大型）や複合鉱物類を示す砂粒を深成岩類、片理複合鉱物類や片理複合鉱物類（含雲母類）を示す砂粒を片岩類、凝灰岩質を凝灰岩類、ガラスをテフラとしてそれぞれ推定した。

その結果、対象とした甕胎土中の砂粒は、大きく５群に分類された（第14表）。Ⅰ群は、片岩類が特徴的多く堆積岩類あるいは深成岩類などを伴う。Ⅱ群は、深成岩類を主体として堆積岩類あるいは凝灰岩類などを伴う。Ⅲ群は、堆積岩類を主体として火山岩類を特徴的に含み、深成岩類や凝灰岩類などを伴う。Ⅳ群は、堆積岩類を主体として深成岩類を特徴的に多く含む。Ⅴ群は、堆積岩類のみから構成される。

Ⅰ群の組成をもつ胎土は、№6の胎土のみである。Ⅱ群の組成をもつ胎土は、22胎土からなる。Ⅲ群の組成をもつ胎土は、17胎土である。Ⅳ群の組成をもつ胎土は、18胎土である。Ⅴ群の組成をもつ胎土は、２胎土と２粘土塊である。Ⅱ群やⅣ群に属する多くの胎土中には、深成岩類に普遍的に見られるジルコンやザクロ石類を含むことが理解される。

７．その他の特徴

全体的に量比にバラツキがあるものの、テフラ起源のガラスが含まれる胎土が多い。№24や№1など５胎土中には、ガラスが高密度に含まれ、№42の胎土中にはガラスの密集した塊が見い出された。

№10や№11など11胎土中には、粒子全体の約30～50%の割合でイネ科の葉身で形成される植物珪酸体化石（ﾌﾟﾗﾝﾄ･ｵﾊﾟｰﾙ）が検出された。また、№40や№44の胎土中には、この植物珪酸体化石が密集した塊が見い出された。

№20や№48の胎土中には、5～30ミクロン程度の黒褐色粒子が高密度で含まれ、顕微鏡下において胎土全体が汚れたような感じを受ける特徴的な胎土である。これらは、東海層群の粘土層中に赤味の強い粘土がしばしば見られるが、これら粘土を焼成して顕微鏡で観察すると同様に観察されることから、こうした赤味の強い粘土が利用されたものと推定される（藤根、1999）。なお、これら黒褐色粒子あるいは肉眼的に赤味のある粘土は、褐鉄鉱の微細粒子が多く含まれるためと考えられる。これら胎土の肉眼的な色調は、やや薄い赤色またはピンク系の胎土である。

８．考察

ａ.材料について

ここでは、土器胎土について粘土の種類と砂粒の組成に分けて検討した。その結果、材料粘土では、海成粘土（外洋成およびその他）、淡水成粘土、水成粘土、その他の粘土が識別された。このうち、放散虫化石を含む外洋成粘土を用いた胎土は、東海地域に限定した場合、伊勢地域や知多半島先端部あるいは三河地域などに分布する新第三紀中新世の地層が候補として挙げられる（第63図）。これは、材料粘土の採取地を推定する場合の有力な根拠となり得る。なお、これらの中新世の泥質堆積物は、ハンマーでないと採取できないほど硬質の堆積物であるが、２～３日ほど水漬けにすると泥化する堆

積物である。

一方、大型砂粒の概略組成では大きく５群が識別され、主に深成岩類や堆積岩類などからなるⅡ群およびⅣ群、主に堆積岩類からなり火山岩類を特徴的に含むⅢ群に属する胎土が多いことが分かった。

このうち、Ⅱ群やⅣ群の組成は、現河川砂との比較では三重県に位置する鈴鹿川や員弁川あるいは愛知県の矢作川などの組成と類似している。また、Ⅰ群の組成は、櫛田川あるいは宮川などに類似している。また、Ⅲ群の組成は、岐阜県の長良川や木曽川あるいは愛知県の庄内川などに類似している。こうした状況は、直ちに製作地を特定できるものではないが、粘土材料が外洋成粘土を用い、大型砂粒がⅡ群に属するNo.3やNo.4あるいはNo.9、Ⅳ群に属するNo.42の胎土は、三重県伊勢地域周辺部の可能性が高いと考えられる。矢作ほか（1997）は、東海地域の遺跡から出土するＳ字状口縁台付甕０類あるいはＡ類の胎土中には、角閃石類のほかこのザクロ石類が例外なく含まれ、三重県一志郡から津市にかけて流域をもつ雲出川の砂粒中の鉱物組成と類似していることから、このＳ字状口縁台付甕の有力な生産地と推定している。

多くの甕胎土中には、テフラ起源のガラスが含まれている。これは、採取あるいは製作された地域においてテフラ層が分布すると言った地質学的状況を反映している。特にNo.11やNo.19などでは、砂粒以上にガラスが含まれる胎土が検出される。東海地域では、ガラスを多く含む土器として弥生時代後期のパレススタイル土器があり、砂粒以上に多量のガラスを含むことから（永草、1992；菱田、1993）、ガラスが混和材して意図的に混入された可能性が考えられる（藤根、1997）。このパレススタイル土器は、太陽光などにかざして見るとガラス片がキラキラと輝く特徴的な土器である。Ｓ字甕などはパレススタイル土器のように祭祀的要素をもつ土器ではなく日常的な土器類であるが、これら甕類においてもガラスを意図的に混入している可能性を考えてみる必要がある。東海地域においてテフラ層は、第四紀更新世～新第三紀鮮新世の東海層群中に多く挟在し、岐阜県養老郡上石津町から三重県北部にかけての地域で少なくとも25層に達し、その層厚も最大８ｍ弱の厚さからなる（吉川ほか、1991）。

その他の特徴として、イネ科植物の葉身で形成される植物珪酸体の化石を多く含む胎土が見られる。東京都新宿区下戸塚遺跡から出土した弥生後期高坏や愛知県廻間遺跡から出土したパレススタイル壷などでは、この植物珪酸体化石が高い濃度で検出される同時に、灰質様の灰色基質をもつ密集した塊が検出されている。こうしたことは、イネ科植物を焼いた際に出来る灰質を、土器製作時に混入した可能性を示すものと考えられる（車崎ほか、1996）。佐原（1970）は、アフリカにおける土器製作の民俗学事例から、上部エジプトのロクロ陶工がナイルの泥に除粘剤として灰を混ぜている例を紹介している（ケネーでは、粘土１に対し1/4の灰を混ぜている）。ここで検討した土器製作においても除粘剤して灰質を混入していた可能性が予想される。No.27やNo.30の胎土中には、先に述べたような植物珪酸体化石が密集した灰質様塊が見られた。

各器種・分類ごとに見ると、受口台付甕は、２試料ともⅢ群およびⅤ群の砂粒組成をもつ淡水成粘土からなる。くの字甕は、Ⅲ群およびⅤ群の砂粒組成をもつ海成粘土、淡水成粘土、水成粘土およびその他粘土からなる。Ｓ字甕Ａ類は、１試料のみであるがⅡ群の砂粒組成をもつ外洋成粘土からなる。その他のＳ字甕では、Ｂ～Ｃ類の２試料にⅡ群の砂粒組成をもつ外洋成粘土からなる胎土がみられ、他にⅠ群～Ⅴ群の砂粒組成をもつ海成粘土、淡水成粘土、水成粘土およびその他粘土からなる。宇田

甕は、1試料がⅣ群の砂粒組成をもつ外洋成粘土からなり、Ⅱ群～Ⅳ群の砂粒組成をもつ淡水成粘土、水成粘土からなる。なお、No.57の胎土中には、淡水成粘土と判断したが放散虫化石を2個体含むことから、外洋成粘土が分布する地域と考えられる。丸底甕および平底甕では、Ⅱ群～Ⅳ群の砂粒組成をもつ海成粘土、淡水成粘土、水成粘土、その他粘土からなる（第13表）。

b．胎土材料が示す意味

ここでは、土器材料の特徴が示す意味について若干述べる。ここで検討したS字甕No.3・No.4・No.9および宇田甕No.42の材料粘土は、放散虫化石を含むような外洋成粘土が利用されていることが分かった。一方、大型砂粒の組成は、深成岩類や堆積岩類起源の砂粒から構成されていることが分かった。この胎土の材料粘土および砂粒の特徴は、一志層群の分布する安芸郡芸濃町から松坂市北西部に至る伊勢北部地域、阿波層群の分布する阿山郡大山田村の阿波地域、などの地質学的状況と調和的であるように思われる。なお、これらの胎土中には、ザクロ石類やジルコンあるいは角閃石類などの重鉱物が共通して含まれている。

さらに、砂粒組成が類似する甕胎土は、材料粘土が淡水成粘土や水成粘土あるいはその他粘土が利用されている。これは、製作地の岩石学的特徴が概ね同様であるにも係わらず、利用した粘土が異なることを意味する。こうした事情は、S字甕A類を対象とした胎土材料の検討においても見られる（S字甕胎土研究会、1998）。同一層群中であっても層準（層位）によっては放散虫化石を含む層と含まない層があることが考えられるため詳細な調査が必要であるが、S字甕などが特定の集団により製作されたことが考古学的に予想されることから、粘土の違いが製作集団の違いを反映しているなどを考えてみる必要がある。

材料粘土の検討は、微化石類の記載により数種類の水成粘土が利用されたことが明らかになりつつあるが、如何なる地域に分布する地層（堆積物）を利用したかは今後詳細に調査する必要がある。放散虫化石を含むような外洋成粘土を利用した胎土は、その材料の地質学的状況を把握することにより、採取地の候補などについてより詳細に検討できるものと考えている。

引用・参考文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理、42、2、73-88.

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』、平凡社、1612p.

S字甕胎土研究会（1998）S字甕の混和材を考える．考古学フォーラム9．22-47.

藤根　久（1997）パレススタイル壺胎土の材質分析．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集「西上面遺跡」．48-58.

藤根　久（1999）第5次調査出土土器および粘土採掘坑粘土の材料分析．

「三王山遺跡」．名古屋市教育委員会、199-207.

菱田　量（1993）尾崎遺跡出土土器の岩石学的検討．岐阜県文化財保護センター調査報告書第10集、125-134.

菱田　量・車崎正彦・松本　完・藤根　久（1993）岩石学的方法に基づく胎土分析について－弥生時代後期の土器を例にして－．日本文化財科学会第１０回大会研究発表要旨集、34-35.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究、27、1-20.
車崎正彦・松本　完・藤根　久・菱田　量・古橋美智子（1996）土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－．日本考古学協会第62回総会研究発表要旨、153-156
永草康次（1992）朝日遺跡の土器胎土．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡Ⅱ」（自然科学編）．299-312.
佐原　真（1970）土器の話（１）．「考古学研究」．16-4、107-124.
矢作健二・服部俊之・赤塚次郎（1997）東海地域におけるＳ次口縁台付甕の産地について－胎土分析による考察－．第14回日本文化財科学会研究発表要旨集．126-127.
吉川周作・吉田史朗・須川栄司（1991）東海層群の火山灰とその対比．「地球科学」45-6.453-467.
吉田史朗・高橋裕平・西岡芳晴（1995）津西部地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）、地質調査所、136p.

第10表　材料の検討を行った甕および粘土塊

No.	出土地点	遺物No.	器種の分類	No.	出土地点	遺物No.	器種の分類
1	TS-SK356	277	受口台付甕	32	US-SD32下	239	受口甕
2	TS-SB71	127	くの字台付甕	33	US-SD32	5	くの字甕
3	TS-SB32	76	S字A類	34	US-SD32下	19	くの字台付甕
4	TS-SK44	216	S字甕B～C類	35	US-SD32下	31	くの字台付甕
5	TS-SK44	218	S字甕B～C類	36	US-SD32下	127	くの字台付甕
6	TS-SK44	219	S字甕B～C類	37	US-SD32上	209	くの字台付甕
7	TS-SK44	223	S字甕B～C類	38	US-SD32	1	S字甕D類(新)
8	TS-SK44	224	S字甕B～C類	39	US-SD32下	2	S字甕D類(新)
9	TS-SK44	225	S字甕B～C類	40	US-SD32下	7	S字甕D類(新)
10	TS-SB82	150	S字甕B～C類	41	US-SD32下	10	S字甕D類(新)
11	TS-SB82	152	S字甕B～C類	42	US-SD32上	6	宇田甕
12	TS-SB32	77	S字C～D類(古)	43	US-SD32上	12	宇田甕
13	TS-SB32	78	S字C～D類(古)	44	US-SD32上	13	宇田甕
14	TS-SB32	79	S字C～D類(古)	45	US-SB13	1843	丸底甕(北野系１類)
15	TS-SB32	80	S字C～D類(古)	46	YS2-SK408	125	くの字台付甕
16	TS-SB5	3	S字C類(C類(新)含)	47	YS2-SB165	103	くの字台付甕
17	TS-SB5	4	S字C類(C類(新)含)	48	YS2-SB165	102	Ｓ字甕Ｄ２類
18	TS-SB5	5	S字C類(C類(新)含)	49	YS2-SB163	40	Ｓ字甕Ｄ３類
19	TS-SB82	153	S字もどき	50	YS2-SB159	7	宇田甕
20	TS-SB11	26	丸底甕(北野系１類)	51	YS2-SB159	8	宇田甕
21	TS-SB11	24	平底甕(東濃系)	52	YS2-SB159	9	宇田甕
22	TS-SD26	324	平底甕(東濃系)	53	YS2-SB163	41	宇田甕
23	TS-SB121	384	平底甕(濃尾型)	54	YS2-SB163	44	宇田甕
24	HZS-SB03	409	S字C～D類	55	YS2-SB160	16	丸底甕(北野系１類)
25	HZS-SB03	410	S字C～D類	56	OF-D区表土	仮1	Ｓ字甕Ｄ２類
26	HZS-SB03	414	S字C～D類	57	OF-F区表土	仮1	宇田甕
27	HZS-SB03	415	S字C～D類	58	OF-107号墳	仮74	丸底甕(北野系１類)
28	HZS-SB03	416	S字C～D類	59	NG-SK9	仮1	丸底甕(北野系２類)
29	HZS-SB03	418	S字C～D類	60	NG-SK20	仮1	平底甕(濃尾型)
30	HZS-SD02	313	平底甕	61	US-SD32	1179	粘土塊
31	US-SD26	129	受口台付甕	62	US-SD32E	1180	粘土塊

TS　：城之内遺跡市調査会
HZS：城之内遺跡市事業団２次
US　：城之内遺跡市教委２次
YS2：城之内遺跡市教委３次
OF　：船来山古墳群市事業団調査
NG　：長山遺跡市教委調査

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
微化石類																															
放散虫化石	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
骨針化石	2	9	−	3	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	4
珪藻化石（海水種）	−	−	−	1	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪藻化石（淡水種）	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	−	−	−	−	−	−
珪藻化石（？）	−	1	2	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−
胞子化石	1	5	1	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	2	2	−	6	1
植物珪酸体化石	41	31	30	32	8	38	31	2	51	183	106	27	42	33	26	29	28	17	82	26	40	−	118	103	6	13	50	53	62	117	27
鉱物類																															
石英・長石類	55	28	150	135	111	208	277	98	296	76	63	194	202	275	171	149	136	179	55	287	52	205	45	260	123	193	217	137	208	97	77
石英・長石類（含雲母類）	15	16	21	19	8	7	26	20	20	5	2	18	6	22	17	27	23	23	16	14	2	27	11	27	21	23	27	25	20	10	13
斜長石（双晶）	−	2	3	7	8	1	10	6	4	5	2	3	3	6	4	−	1	1	3	3	2	9	4	8	5	7	9	2	5	2	1
カリ長石（パーサイト）	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−
カリ長石（微斜長石）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	2	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	−
雲母類	1	1	12	17	14	12	10	15	7	4	4	2	2	35	8	3	7	5	6	5	2	53	5	9	14	7	3	13	12	9	3
単斜輝石	−	−	−	1	−	3	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	1	2	1	−	1	−	−	−	−	1	−	−	−	−
斜方輝石	−	−	1	1	−	1	1	−	4	3	−	1	3	4	−	2	−	2	1	1	−	−	1	6	1	2	1	−	3	2	−
角閃石類	−	−	5	11	3	11	1	4	1	1	−	2	1	−	−	4	3	2	−	4	1	−	1	7	4	3	1	2	3	−	−
ざくろ石	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
ジルコン	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ガラス	53	62	1	1	1	13	−	−	3	17	89	4	2	−	−	5	1	2	54	1	77	−	73	38	−	1	−	−	−	50	62
濁ガラス	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
複合鉱物類																															
軽石質ガラス	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
斑晶質	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	1	−	−	−	−	−	−	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
完晶質	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−
複合雲母類	1	1	5	1	−	1	−	1	−	−	−	−	−	1	1	1	−	−	1	1	2	2	−	2	−	−	−	−	−	2	−
複合鉱物類（含雲母類）	−	−	2	3	5	−	1	6	−	9	−	1	−	2	1	−	−	−	1	−	−	4	−	−	5	−	−	−	−	2	−
複合鉱物類（含輝石類）	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−
複合鉱物類（含角閃石類）	−	−	1	1	3	1	−	1	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−
複合石英類（大型）	−	−	4	2	2	3	1	5	3	−	1	1	1	−	1	1	1	3	−	9	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	1
複合石英類（中型）	3	−	−	1	2	2	3	4	1	1	2	1	2	2	1	2	3	2	−	8	−	−	−	1	−	2	3	3	5	2	−
複合石英類（小型）	12	11	15	20	22	14	23	17	31	8	7	30	41	17	35	14	18	17	9	54	20	17	8	13	20	30	19	19	18	19	14
複合石英類（微細）	4	−	6	1	16	1	32	12	33	10	2	15	25	2	12	4	8	7	9	−	5	−	2	−	2	11	5	3	4	−	−
複合石英類（等粒）	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
片理複合石英類	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
片理複合石英類（含雲母類）	−	−	1	−	−	8	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
砂岩質	3	5	7	4	5	14	2	4	−	19	11	4	2	2	5	8	16	6	3	−	2	2	3	2	22	3	4	7	6	8	10
泥岩質	24	17	25	22	19	13	2	14	2	24	14	24	21	23	30	36	30	45	11	2	12	3	14	4	23	22	43	35	35	14	15
凝灰岩質	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
その他																															
不透明	−	−	1	−	−	1	1	1	1	−	−	−	−	1	1	1	1	−	2	−	−	−	−	2	−	1	−	−	−	−	−
不　明	2	2	3	3	9	7	4	2	7	2	2	3	4	2	1	8	7	2	−	13	1	2	1	1	9	3	3	4	4	2	−
総ポイント数	218	192	297	287	236	360	428	213	469	375	309	333	358	427	316	295	284	316	259	430	218	327	294	484	257	323	389	307	387	344	229

第11表(1)　甕胎土および粘土塊の粒子計数結果一覧表その１

分類群	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62
微化石類																															
放散虫化石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
骨針化石	−	−	−	−	3	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
珪藻化石（海水種）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪藻化石（淡水種）	−	−	−	−	2	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	1	6	2	−	−	−	−	−	−	13	−	−
珪藻化石（？）	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	2	2	−	−	−	−	−	−	2	−	−
胞子化石	−	−	−	3	1	−	−	−	−	−	−	−	2	−	1	−	−	−	1	2	12	1	−	3	−	3	5	1	12	−	−
植物珪酸体化石	4	35	35	11	58	23	8	1	19	8	36	79	82	53	161	62	3	11	102	140	91	156	67	346	81	11	35	66	467	9	5
鉱物類																															
石英・長石類	134	73	91	81	100	36	137	93	211	109	273	180	164	316	174	55	120	94	188	208	232	234	180	194	309	156	193	103	30	81	79
石英・長石類（含雲母類）	49	37	30	18	30	17	12	18	14	11	21	5	9	13	−	2	45	19	29	28	17	10	39	11	28	11	25	40	10	28	37
斜長石（双晶）	2	2	2	1	1	−	3	6	9	12	5	9	2	11	4	1	9	12	3	7	10	6	8	2	3	6	8	1	3	−	4
カリ長石（パーサイト）	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−
カリ長石（微斜長石）	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
雲母類	10	3	1	9	6	1	70	74	35	66	7	21	10	17	4	1	17	45	22	28	14	5	23	7	26	61	61	8	3	35	23
単斜輝石	−	−	−	−	−	−	1	1	1	2	−	1	−	−	−	1	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
斜方輝石	−	−	2	−	2	−	8	2	14	13	5	6	7	2	1	−	−	2	6	−	1	−	3	2	1	3	1	−	−	−	1
角閃石類	1	−	3	1	−	1	2	14	7	4	6	1	−	33	−	−	6	15	1	7	9	19	1	19	5	10	1	−	−	−	−
ざくろ石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	2	−	−	−	−	−	−	−	−
ジルコン	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ガラス	−	7	3	1	5	69	−	−	1	−	22	37	60	13	30	46	−	−	3	16	4	23	4	49	1	−	−	22	62	−	−
濁ガラス	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
複合鉱物類																															
軽石質ガラス	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
斑晶質	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
完晶質	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
複合雲母類	1	2	−	3	−	−	2	1	−	1	2	1	−	1	−	1	−	−	2	−	−	2	2	−	1	1	7	1	−	12	11
複合鉱物類（含雲母類）	2	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	5	1	2	1	−	−	1	3	1	−	−	1	−	−
複合鉱物類（含輝石類）	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
複合鉱物類（含角閃石類）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
複合石英類（大型）	−	−	−	−	−	−	−	1	3	2	−	2	−	−	1	−	2	−	2	1	1	1	1	4	1	−	2	1	−	−	−
複合石英類（中型）	2	1	−	1	−	−	1	1	1	2	1	−	2	5	2	1	3	1	4	3	3	2	−	1	5	1	−	3	−	−	1
複合石英類（小型）	22	17	29	17	12	11	18	3	13	−	15	13	11	14	67	34	8	9	20	12	34	33	20	19	30	12	9	33	9	19	17
複合石英類（微細）	−	1	2	1	−	−	1	1	2	2	2	1	−	−	4	13	2	1	−	−	2	−	−	1	1	−	−	−	−	1	−
複合石英類（等粒）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
片理複合石英類	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
片理複合石英類（含雲母類）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
砂岩質	15	9	10	15	11	9	1	1	1	1	4	−	4	2	1	1	1	2	5	1	3	2	−	1	1	−	1	6	14	5	6
泥岩質	26	40	30	33	52	15	1	2	4	4	14	7	10	5	4	12	17	2	13	15	6	11	12	−	18	8	5	11	14	11	23
凝灰岩質	−	−	−	3	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
その他																															
不透明	−	−	−	−	−	−	2	−	2	5	2	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3	2	−	−	1	2	−	−	−
不　明	1	3	4	10	1	3	−	2	6	2	5	10	2	4	−	2	4	2	3	3	10	9	2	1	2	6	1	4	2	−	3
総ポイント数	269	232	242	209	288	187	268	221	344	244	422	378	366	489	456	232	238	223	409	475	458	521	369	663	517	290	356	303	643	203	212

第11表(2)　甕胎土および粘土塊の粒子計数結果一覧表その２

登録番号	河川名	推定岩石(頻度順、≫は極端に多い場合、[]内は少量を示す)	砂粒の分類	分類の目安
PS-155	宮　川	堆積岩類、片岩類≫緑褐色火成岩類	A	堆積岩類・片岩類主体
PS-156	櫛田川	片岩類、堆積岩類≫緑褐色火成岩類、［深成岩類］		
PS-308	雲出川	深成岩類、緑褐色火成岩類、［堆積岩類］	B	深成岩類・緑褐色火成岩類主体
PS-113	鈴鹿川	深成岩類、堆積岩類、［片岩類］	C	堆積岩類・深成岩類主体
PS-111	員弁川	堆積岩類、深成岩類		
PS-15	揖斐川	堆積岩類≫緑褐色火成岩類、黒褐色火山岩類	D	堆積岩類主体
PS-20	長良川	堆積岩類≫緑褐色火成岩類、黒褐色火山岩類、［火山岩類］		
PS-17	木曽川	堆積岩類≫緑褐色火成岩類、火山岩類、［深成岩類］		
PS-18	庄内川	堆積岩類、深成岩類、［火山岩類］	E	堆積岩類・深成岩類主体
PS-75	天白川	堆積岩類、深成岩類、［火山岩類、片岩類］		
PS-71	矢作川	深成岩類、［堆積岩類、片岩類］	F	深成岩類主体
PS-72	豊　川	深成岩類、褐色火成岩類、堆積岩類、片岩類、火山岩類	G	複数種岩石混在

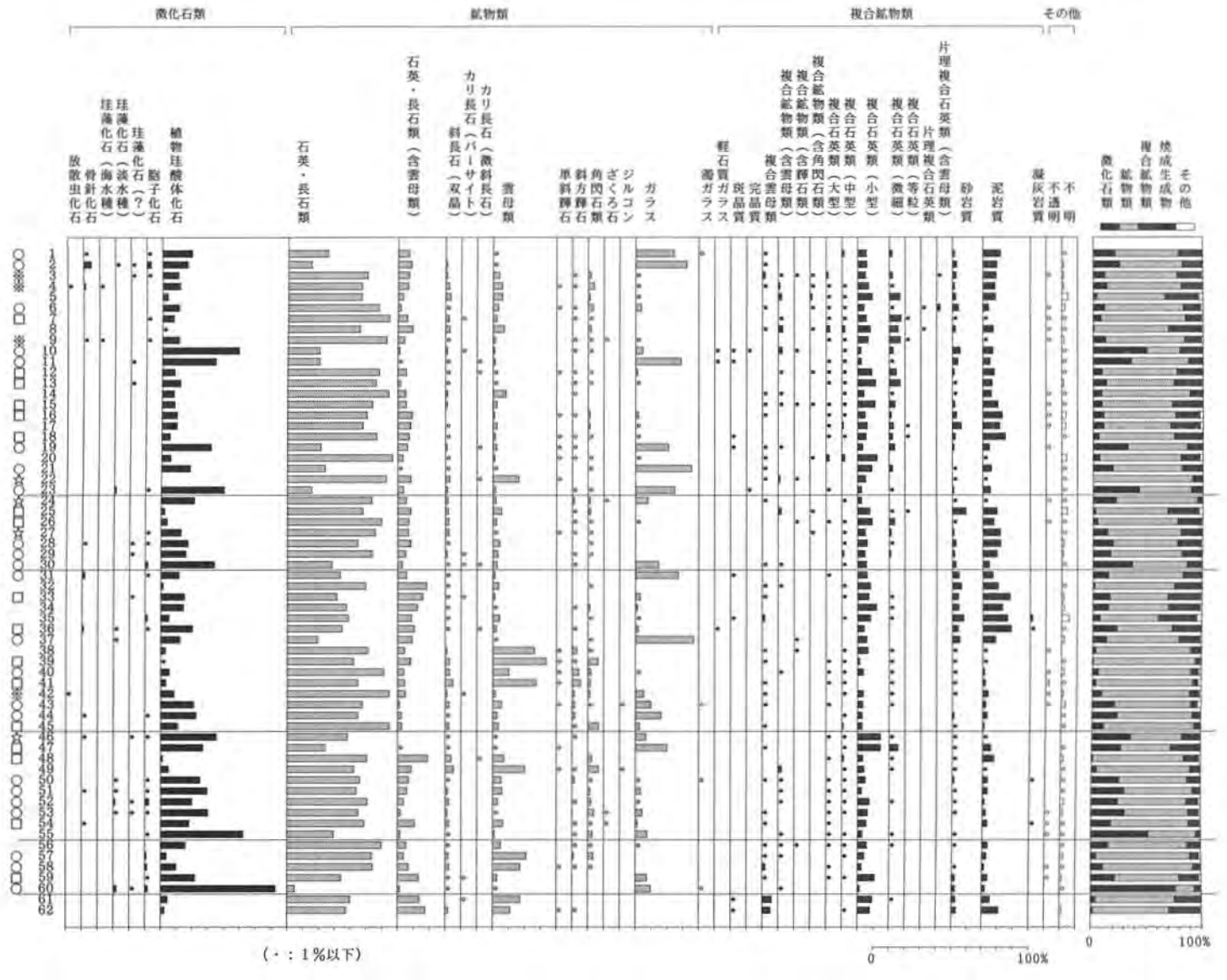
第12表　伊勢－三河湾周辺現河川砂の概略組成（藤根、1998）

器種・分類		粘土の種類						砂粒組成					
		外洋成	海　成	淡水成	水　成	その他	合　計	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ群	Ⅴ群	合　計
受口台付甕				2		1	3			1	1	1	3
くの字台付甕			1	2	3	2	8			7		1	8
平底甕			1	4			5		1	4			5
S字甕	A類	1					1		1				1
	B～C類	2		3	1	2	8	1	4	2	1		8
	C類				2	1	3		1		2		3
	C～D類(古)				3	1	4		2		2		4
	C～D類		2	2	2		6		3		3		6
	D類			1	3	3	7		4		3		7
	その他			1			1			1			1
宇田甕		1		7	1		9		3	1	5		9
丸底甕				1	2	2	5		3	1	1		5
粘土塊						2	2					2	2
合　計		4	4	23	17	14	62	1	22	17	18	4	62

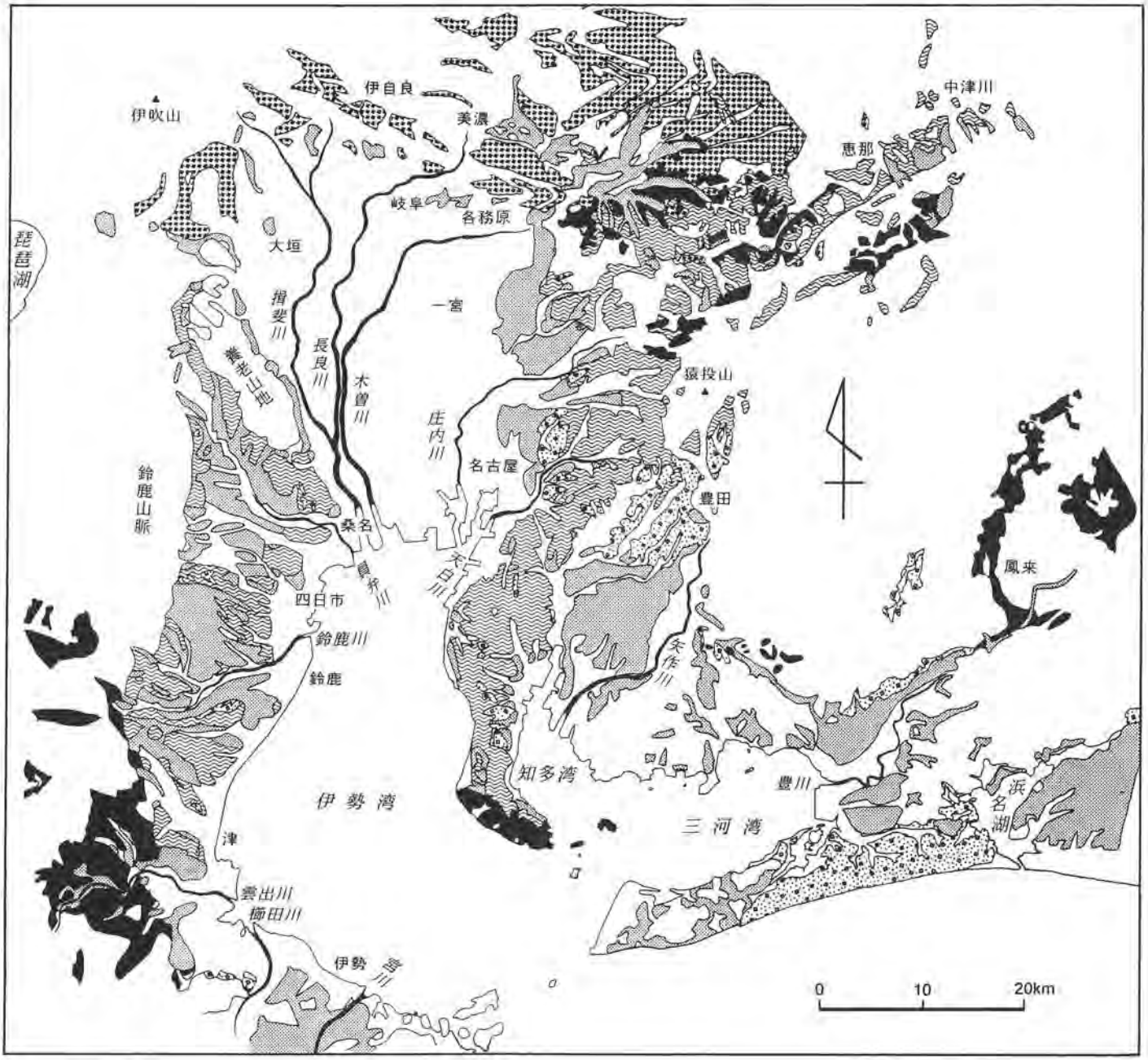
第13表　各器種・分類ごとの粘土種類と砂粒組成

No.	出土地点	遺物No.	器種・分類	粘土の特徴				砂粒の特徴		その他の特徴	
				記号	分類	環　境	随伴化石	分類	概略砂粒組成（頻度順，[]内は低頻度）	特徴１	特徴２
1	TS-SK356	277	受口台付甕	○	淡水成	沼沢地類		Ⅴ	テフラ，堆積岩類		植物珪酸体多産
2	TS-SB71	127	くの字台付甕	○	淡水成	湖沼+沼沢地類	汽水種珪藻化石	Ⅲ	テフラ，堆積岩類，火山岩類	ｼﾞﾙｺﾝ	骨針化石多産
3	TS-SB32	76	S字甕A類	※	海　成	外洋成	放散虫化石	Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，［テフラ］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
4	TS-SK44	216	S字甕B～C類	※	海　成	外洋成	放散虫化石	Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，［凝灰岩類］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
5	TS-SK44	218	S字甕B～C類		その他			Ⅱ	深成岩類，堆積岩類	ｻﾞｸﾛ石類	
6	TS-SK44	219	S字甕B～C類	○	淡水成			Ⅰ	片岩類，堆積岩類，深成岩類，テフラ		
7	TS-SK44	223	S字甕B～C類	□	水　成			Ⅳ	堆積岩類，深成岩類	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
8	TS-SK44	224	S字甕B～C類		その他			Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，［凝灰岩類］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
9	TS-SK44	225	S字甕B～C類	※	海　成	外洋成	放散虫化石	Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，［テフラ］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
10	TS-SB82	150	S字甕B～C類	○	淡水成	沼沢地類		Ⅲ	堆積岩類，火山岩類，テフラ，［深成岩類］		植物珪酸体多産
11	TS-SB82	152	S字甕B～C類	○	淡水成	沼沢地類		Ⅲ	堆積岩類，テフラ，火山岩類，［深成岩類］		植物珪酸体多産
12	TS-SB32	77	S字甕C～D類(古)	□	水　成			Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，テフラ	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
13	TS-SB32	78	S字甕C～D類(古)	□	水　成			Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，テフラ	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
14	TS-SB32	79	S字甕C～D類(古)		その他			Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，［凝灰岩類］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
15	TS-SB32	80	S字甕C～D類(古)	□	水　成			Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，［凝灰岩質］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
16	TS-SB5	3	S字甕C類（C類(新)含）	□	水　成			Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，テフラ	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
17	TS-SB5	4	S字甕C類（C類(新)含）		その他			Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，［テフラ］	ｼﾞﾙｺﾝ	
18	TS-SB5	5	S字甕C類（C類(新)含）	□	水　成			Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，［テフラ］	ｼﾞﾙｺﾝ	
19	TS-SB82	153	S字甕もどき	○	淡水成	沼沢地類		Ⅲ	堆積岩類，テフラ，火山岩類	ｼﾞﾙｺﾝ	植物珪酸体多産
20	TS-SB11	26	丸底甕(北野系１類)		その他			Ⅱ	深成岩類，テフラ，［片岩類］	ｼﾞﾙｺﾝ	黒色粒子高密度
21	TS-SB11	24	平底甕(東濃系)	○	淡水成	沼沢地類		Ⅲ	テフラ，堆積岩類，深成岩類，［火山岩類］		
22	TS-SD26	324	平底甕(東濃系)	☆	海　成			Ⅱ	深成岩類，凝灰岩類	ｼﾞﾙｺﾝ	含粘土塊
23	TS-SB121	384	平底甕(濃尾型)	○	淡水成	沼沢地類		Ⅲ	堆積岩類，テフラ，深成岩類，火山岩類，凝灰岩類	ｼﾞﾙｺﾝ	植物珪酸体多産
24	HZS-SB03	409	S字甕C～D類	☆	海　成			Ⅱ	テフラ，深成岩類，堆積岩類	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
25	HZS-SB03	410	S字甕C～D類	□	水　成			Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，［テフラ］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
26	HZS-SB03	414	S字甕C～D類	□	水　成			Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，［テフラ］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
27	HZS-SB03	415	S字甕C～D類	☆	海　成		淡水種珪藻化石	Ⅳ	堆積岩類，深成岩類	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
28	HZS-SB03	416	S字甕C～D類	○	淡水成	沼沢地類	海水種珪藻化石	Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，［テフラ］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
29	HZS-SB03	418	S字甕C～D類	○	淡水成	沼沢地類		Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，テフラ	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
30	HZS-SD02	313	平底甕	○	淡水成	沼沢地類		Ⅲ	堆積岩類，火山岩類，テフラ，深成岩類，凝灰岩類		
31	US-SD26	129	受口台付甕	○	淡水成	沼沢地類		Ⅲ	堆積岩類，火山岩類，テフラ		
32	US-SD32下	239	受口甕		その他			Ⅳ	堆積岩類，深成岩類	ｼﾞﾙｺﾝ	
33	US-SD32	5	くの字台付甕	□	水　成			Ⅲ	堆積岩類，火山岩類，深成岩類，テフラ	ｼﾞﾙｺﾝ	
34	US-SD32下	19	くの字台付甕		その他			Ⅲ	堆積岩類，火山岩類，テフラ，凝灰岩類		
35	US-SD32下	31	くの字台付甕		その他			Ⅲ	堆積岩類，火山岩類，凝灰岩類，［テフラ］		
36	US-SD32下	127	くの字台付甕	□	水　成			Ⅲ	堆積岩類，深成岩類，火山岩類，テフラ，［凝灰岩類］	ｼﾞﾙｺﾝ	
37	US-SD32上	209	くの字台付甕	○	淡水成	沼沢地類		Ⅲ	堆積岩類，テフラ，火山岩類，深成岩類，凝灰岩類		
38	US-SD32	1	S字甕D類(新)		その他			Ⅱ	深成岩類，［堆積岩類］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
39	US-SD32下	2	S字甕D類(新)	□	水　成			Ⅱ	深成岩類，［堆積岩類］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
40	US-SD32下	7	S字甕D類(新)	○	淡水成			Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，テフラ	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	植物珪酸体多産
41	US-SD32下	10	S字甕D類(新)	□	水　成			Ⅱ	深成岩類，堆積岩類	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
42	US-SD32上	6	宇田甕	※	海　成	外洋成	放散虫化石	Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，テフラ	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	ガラス密集塊
43	US-SD32上	12	宇田甕	○	淡水成			Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，テフラ，［凝灰岩類］	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
44	US-SD32上	13	宇田甕	○	淡水成	沼沢地類		Ⅱ	深成岩類，テフラ，堆積岩類	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	植物珪酸体多産
45	US-SB13	1843	丸底甕(北野系１類)	□	水　成			Ⅲ	テフラ，堆積岩類，火山岩類	ｼﾞﾙｺﾝ	
46	YS2-SK408	125	くの字台付甕	☆	海　成			Ⅴ	堆積岩類，テフラ		植物珪酸体多産
47	YS2-SB165	103	くの字台付甕	□	水　成			Ⅲ	堆積岩類，深成岩類，火山岩類，テフラ，凝灰岩類		砂粒表面付着河川種
48	YS2-SB165	102	S字甕D２類	□	水　成			Ⅳ	堆積岩類，深成岩類		黒色粒子高密度
49	YS2-SB163	40	S字甕D３類		その他			Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，凝灰岩類，テフラ	ｼﾞﾙｺﾝ	黒色粒子多い
50	YS2-SB159	7	宇田甕	○	淡水成	湖沼+沼沢地類		Ⅲ	堆積岩類，深成岩類，火山岩類，テフラ	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
51	YS2-SB159	8	宇田甕	○	淡水成	沼沢地類		Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，テフラ	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
52	YS2-SB159	9	宇田甕	○	淡水成	沼沢地類		Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，テフラ	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	
53	YS2-SB163	41	宇田甕	○	淡水成	沼沢地類		Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，凝灰岩類，テフラ	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	植物珪酸体多産
54	YS2-SB163	44	宇田甕	□	水　成			Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，凝灰岩類，テフラ	ｻﾞｸﾛ石類,ｼﾞﾙｺﾝ	黒色粒子多い
55	YS2-SB160	16	丸底甕(北野系１類)		その他			Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，テフラ	ｼﾞﾙｺﾝ	植物珪酸体多産
56	OF-D区表土	仮1	S字甕D２類		その他			Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，凝灰岩類，［テフラ］	ｻﾞｸﾛ石類	
57	OF-F区表土	仮1	宇田甕	○	淡水成	湖沼+沼沢地類	放散虫化石	Ⅱ	深成岩類，堆積岩類，［テフラ］	ｻﾞｸﾛ石類	
58	OF-107号墳	仮74	丸底甕(北野系１類)	○	淡水成	沼沢地類		Ⅱ	［深成岩類，テフラ］	ｼﾞﾙｺﾝ	
59	NG-SK9	仮1	丸底甕(北野系２類)	□	水　成			Ⅳ	堆積岩類，深成岩類，テフラ		
60	NG-SK20	仮1	平底甕(濃尾型)	○	淡水成	沼沢地類		Ⅲ	堆積岩類，火山岩類，凝灰岩類，テフラ		植物珪酸体多産
61	US-SD32	1179	粘土塊		その他			Ⅴ	堆積岩類		
62	US-SD32E	1180	粘土塊		その他			Ⅴ	堆積岩類		

第14表　甕胎土および粘土塊中の粘土起源および砂粒等の特徴



第62図　甕胎土および粘土塊中の粒子組成図（全分類群を基数とした百分率で表示）
［粘土の区分（試料番号左）］
※：外洋成（放散虫化石などの出現）、　☆：海　成（海水種珪藻化石などの出現）
□：水　成（不明種珪藻化石などの出現）、無記号：その他（微化石類を含まない）



古生代那比ユニット

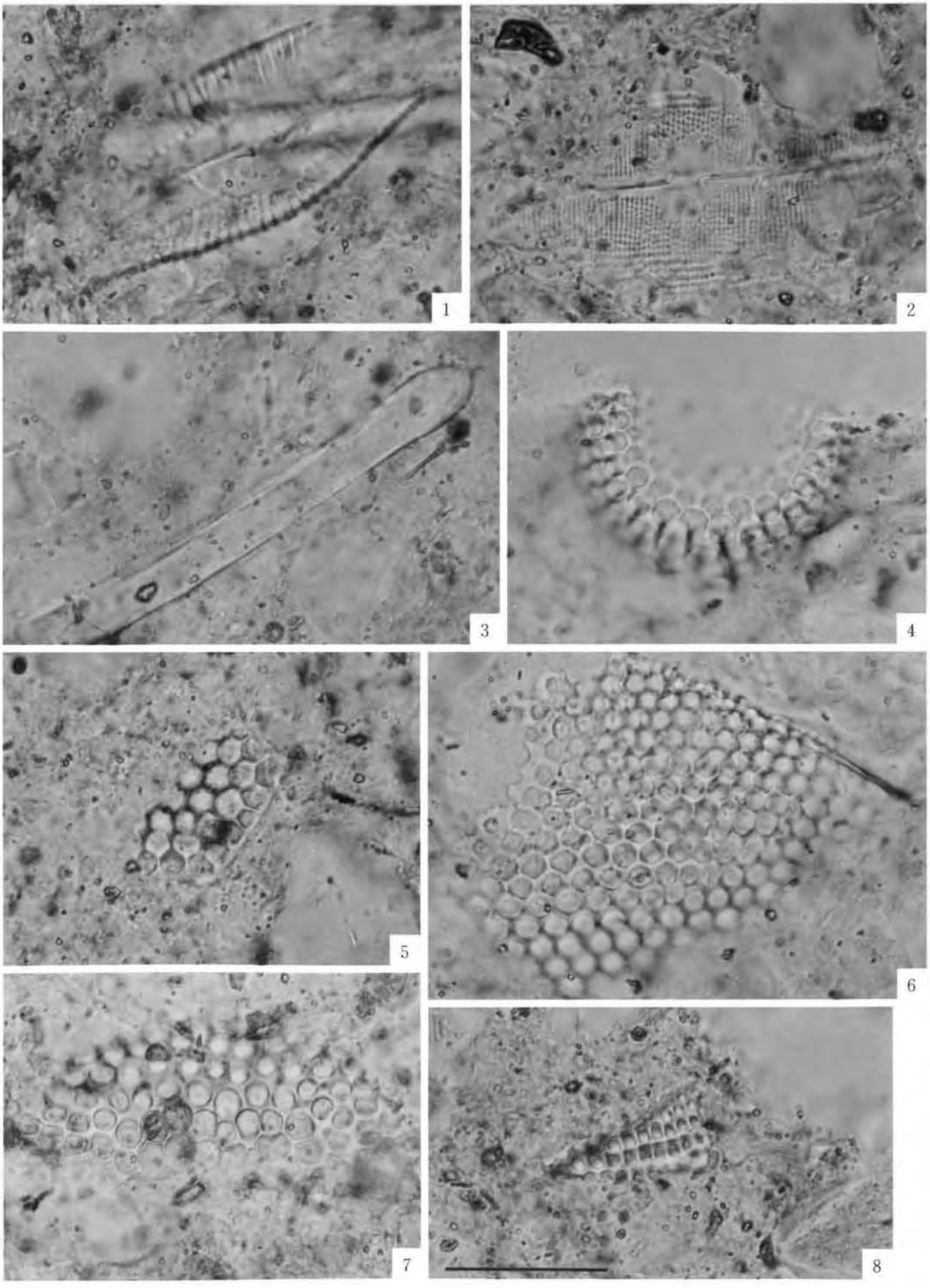
新第三紀中新統

新第三紀後期中新統～鮮新統（東海層群）

第四紀中部更新統（高位段丘堆積物）

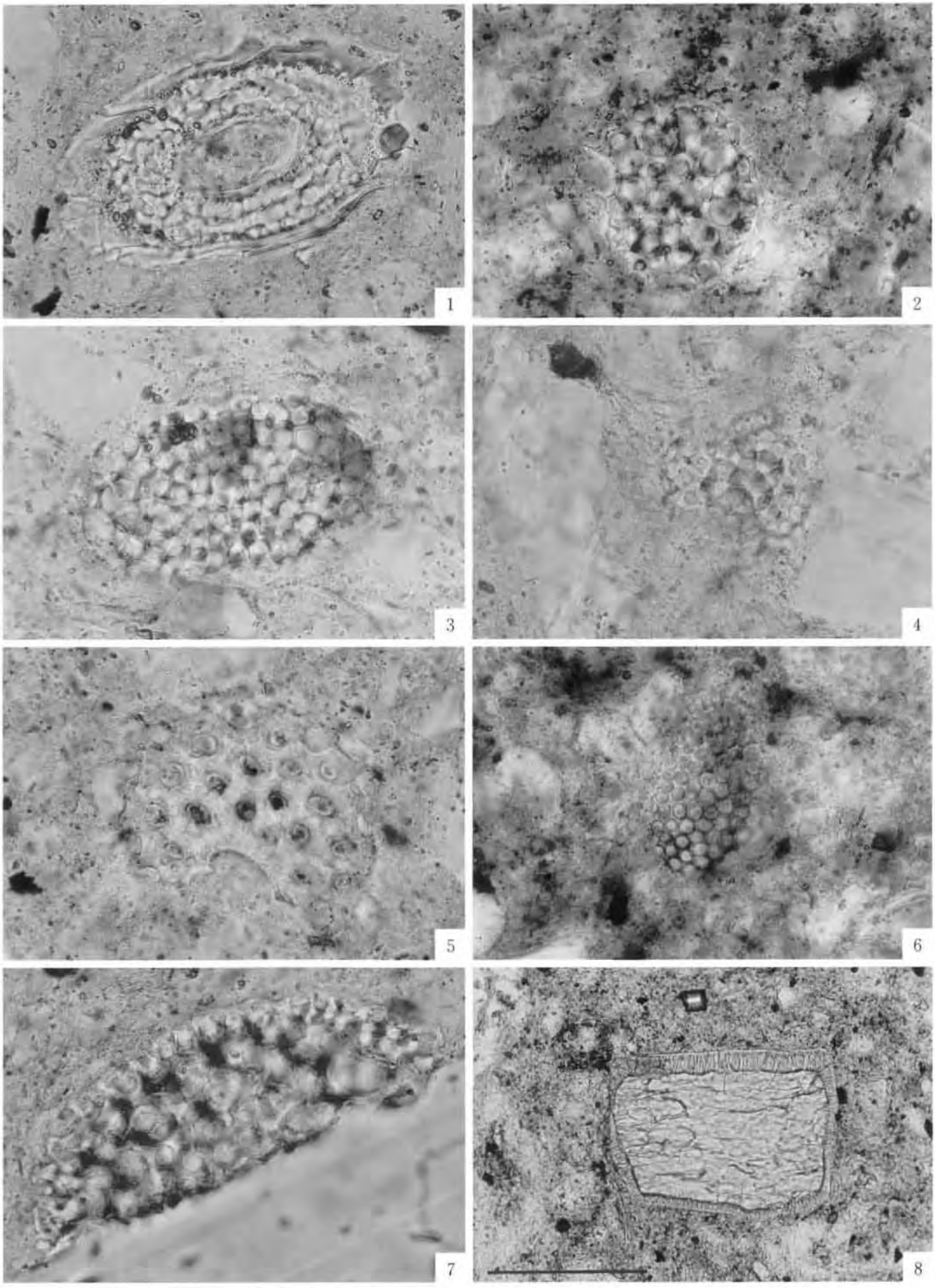
第四紀後期更新統（熱田層および相当層など）

第63図　伊勢－三河湾周辺地層分布図（藤根、1998）



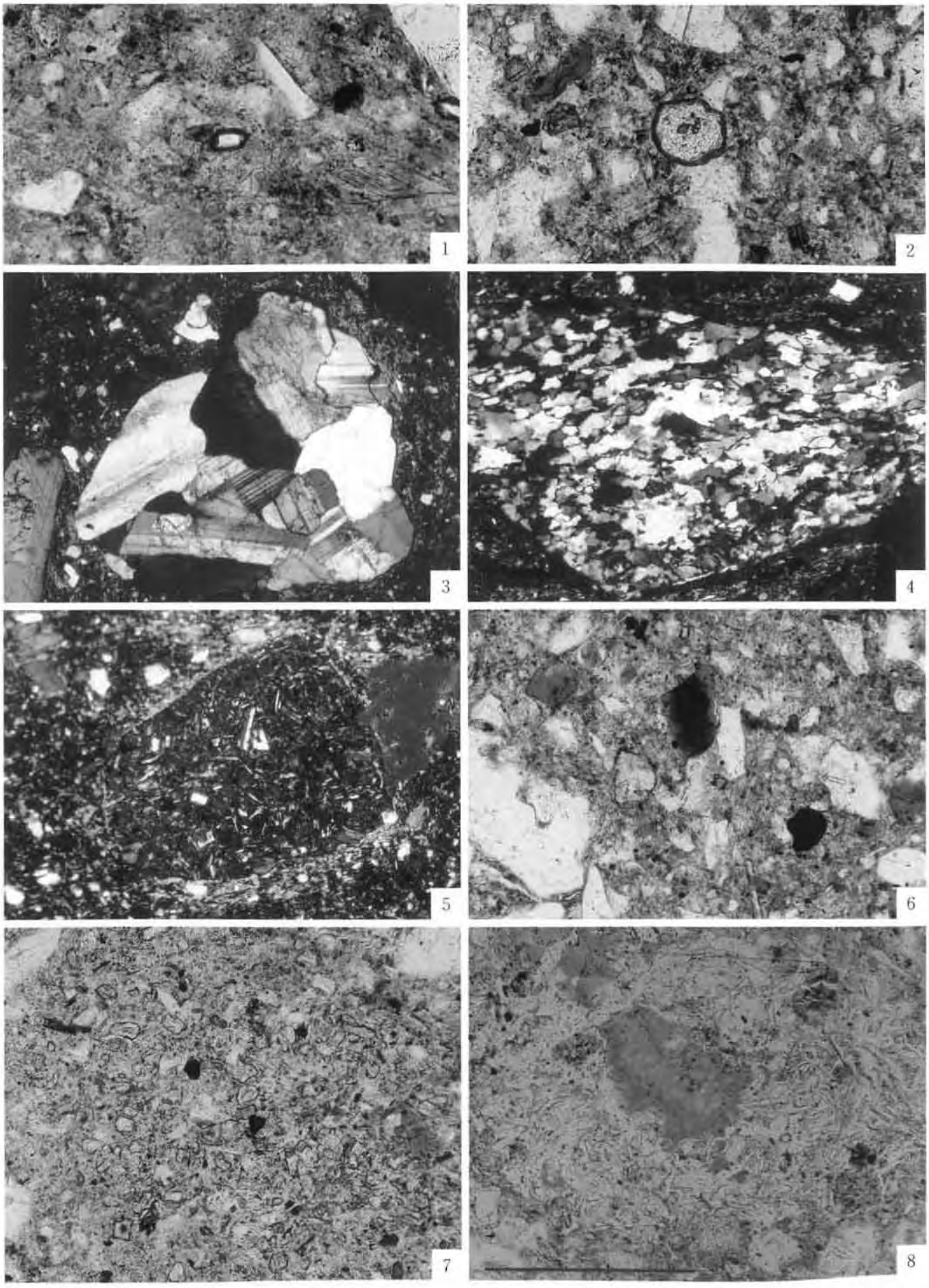
図版10　土器胎土中の粒子顕微鏡写真(1)（スケール；1～7：50μm，8：200μm）

1.珪藻化石(*Pinnularia* 属) No.22　2.珪藻化石(*Neidium* 属) No.22　3.珪藻化石(*Eunotia biareofera*) No.22
4.珪藻化石(*Stephanopyxis* 属) No.1　5.珪藻化石(*Stephanopyxis* 属？) No.1　6.珪藻化石(*Stephanopyxis* 属？) No.1
7.珪藻化石(*Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属) No.1



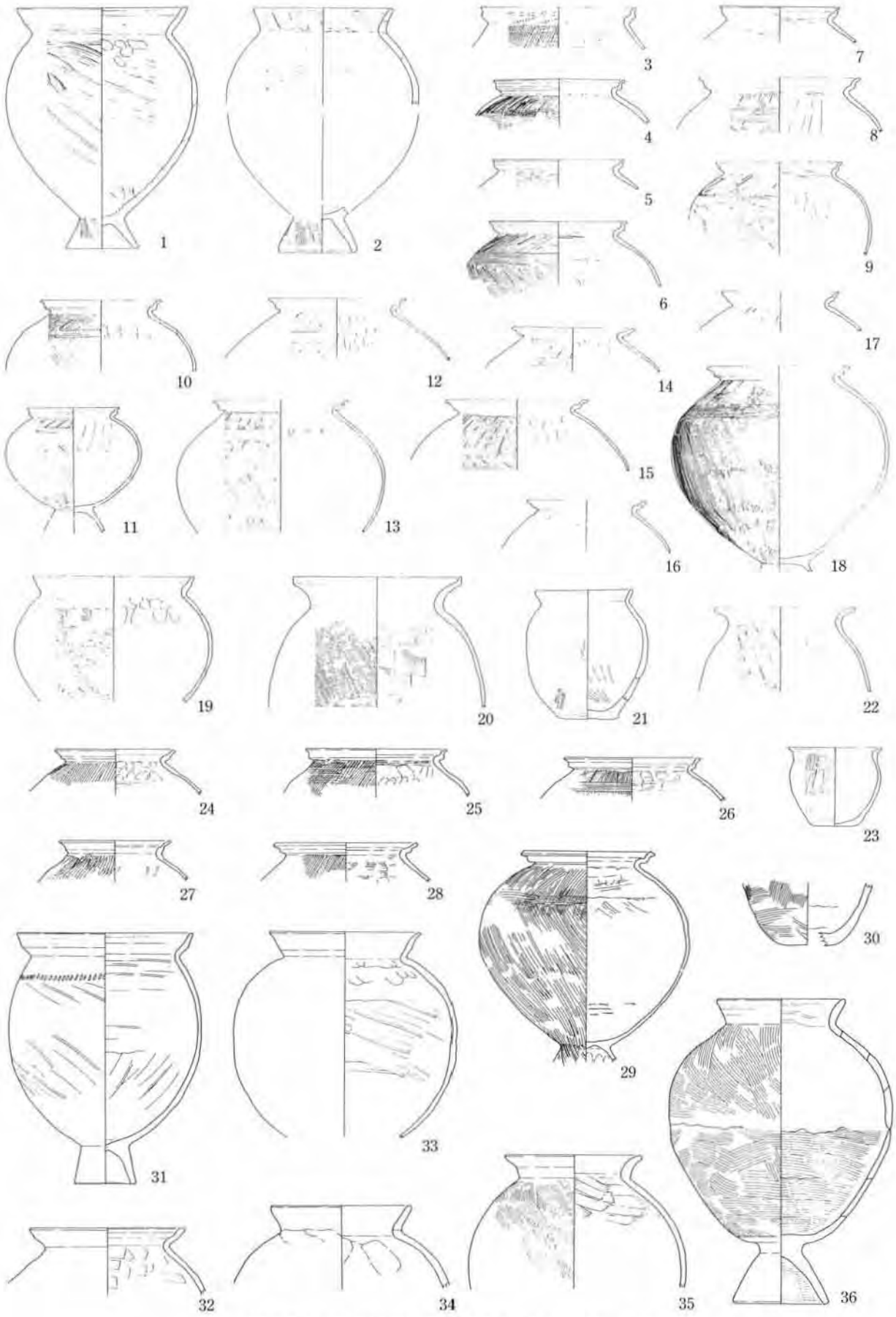
図版11　土器胎土中の粒子顕微鏡写真(2)（スケール；1～8：50μm）

1．骨針化石　No.26　　2．放散虫化石　No.6　　3．放散虫化石　No.1
4．放散虫化石　No.1　　5．放散虫化石　No.26　　6．珪藻化石（*Stephanopyxis*属？）　No.6
7．放散虫化石　No.1　　8．斜方輝石　No.15

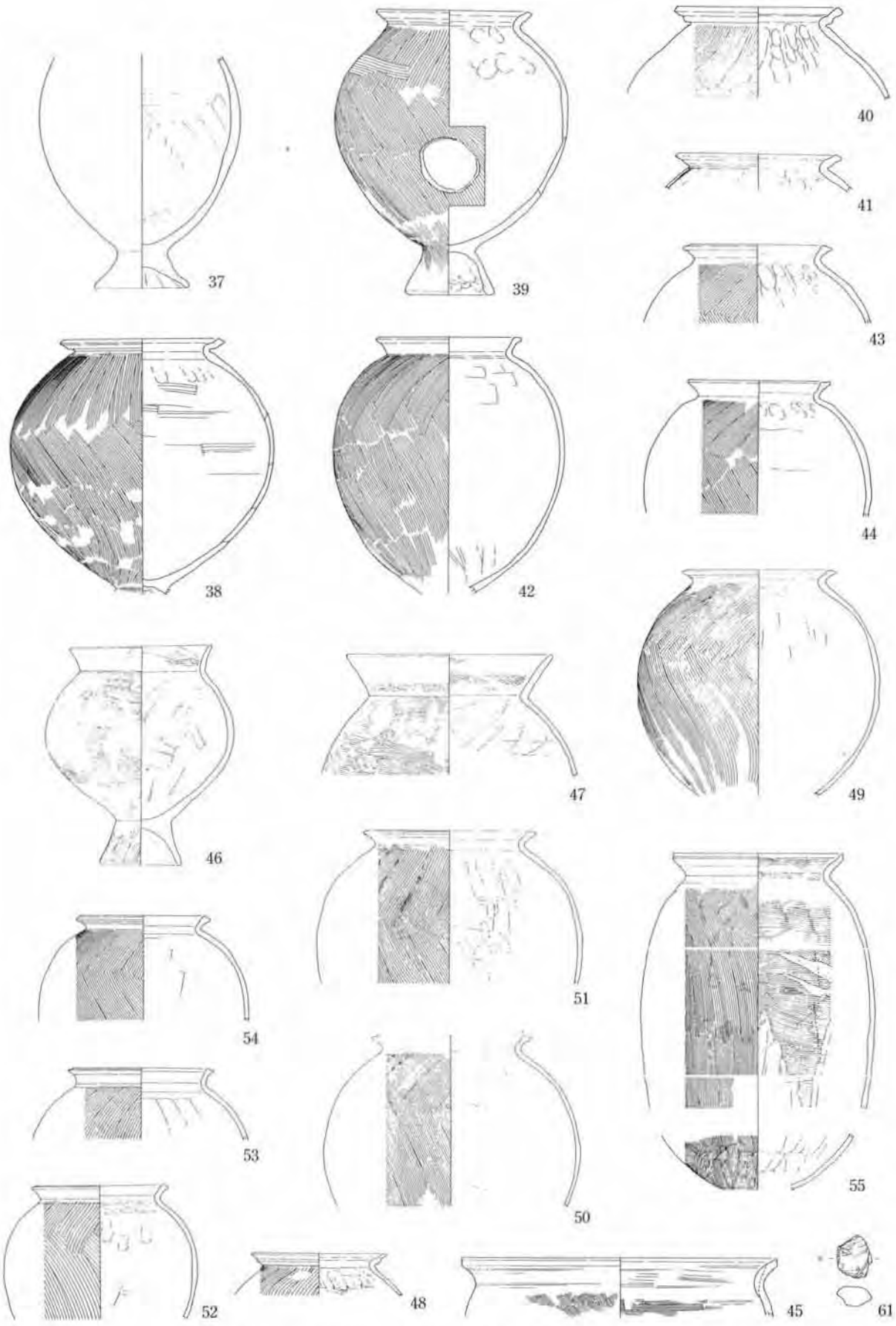


図版12　土器胎土中の粒子顕微鏡写真(3)（スケール；1・2：100μm、3：1mm、4～8：200μm）

1．ジルコン　No.24　　2．ザクロ石類　No.24　　3．複合石英類　No.1
4．片理複合石英類　No.3　　5．斑晶質　No.7　　6．状況　No.24
7．植物珪酸体化石魂　No.27　　8．ガラス魂　No.26



第64図　胎土材料検討遺物実測図(1)　S＝1/6



第65図　胎土材料検討遺物実測図(2)　S＝1/6

付　章

第１節　土器胎土材料とその見方

藤根　久（パレオ・ラボ）

１．はじめに

土器は、その形態やその製作技法上の特徴など考古学的な記載が行われ、土器が持つ地域性はもとより、土器の編年や他地域の土器との関係などが盛んに論じられている。一方、材料についての考古学的記載は、土器の粘土部分の色調や混和材の入り方などについての記載がなされているに留まっている。ここでは、土器を形成する胎土に関する自然科学的分析の問題点や現状について触れ、肉眼的な胎土記載の重要性や着目点などについて述べたい。

２．材料に関する問題と現状

土器を形作る粘土や混和材などは一般的に胎土と呼ばれている。自然科学的な分析として土器の胎土分析が行われているが、混和する砂粒の特徴を調べる鉱物・岩石学的な方法と化学組成を調べる地球化学的方法などがある。これらの分析は、土器の胎土材料の特徴を調べると言うよりは、これらの特徴が示す地域性を言い当てると言った感が強く、土器の生産地推定を目的とした内容が大半である。しかしながら、土器胎土の鉱物・岩石学特徴あるいは化学的特徴から、如何に地域を特定するかについては、方法論も含め実に曖昧であると言わざる得ない。それどころか、土器胎土自体の特徴ですらが十分調べられることがなく、すなわち利用した粘土の種類、混和材の種類やその量などは不明のままである。

最近、土器薄片を顕微鏡観察すると言った初歩的な方法により、使用した材料の特徴について明らかになりつつある（車崎ほか、1996；藤根、1997など）。こうした調査・分析から、弥生土器あるいは古墳土師器などの材料として、海成粘土や淡水成粘土と言った水成起源の粘土材料が多く利用され、概ね８割近い土器に見られることが分かってきた（藤根ほか、1998など）。また、この水成粘土以外では断層破砕帯に形成される断層粘土を用いた縄文時代後期生駒西麓産土器が知られている（藤根・小坂、1997）。この生駒西麓産土器（河内の土器とも呼ばれている）は、チョコレート色を呈する胎土をもち、他の土器と肉眼的に容易に識別できる土器である。この生駒西麓産土器胎土中には砂粒が特徴的に多く含まれているにもかかわらず、この時代の土器としてはかなり薄手の土器であることから、この断層粘土が接着性に優れた材料であることが理解される。なお、この生駒西麓産土器胎土中には多量の砂粒が含まれているが、破壊構造をもつ粒子が多いことから混和材としてではなく、破砕帯において形成された砂粒物そのものを含む粘土質材料が利用されたことが考えられる。

このように、材料あるいは材質面からのアプローチは、材料の選定や製作技法と言った本来土器形成に係わる重要事項と考えられ、考古学上記述されている製作技法と密接な関係にあるものと考える。胎土材料についての特徴記載は、土器研究における新たな展開を担うことが期待される。

3．土器材料の重要性

須恵器などの穴窯を用いた窯業地を眺めると、必ずと言っていいほど良質の粘土が分布する地域であることが容易に理解できる（中村、1992など）。例えば、東海地域の猿投窯や常滑窯では新第三紀鮮新統東海層群矢田川層（約520～164万年前）の粘土層が利用され、瀬戸窯や美濃窯では新第三紀後期中新統～鮮新統東海層群の瀬戸陶土層あるいは土岐口陶土層の粘土層が利用されている。一方、美濃須衛窯では中生代ジュラ紀（約２億年～１億4,500万年前）那比ユニットの硬質砂岩層分布域に成立するが、小谷内の低地部の泥化堆積物を利用していることが理解される（藤根、1998）。こうした古墳時代以降の比較的新しい時代の大規模生産地における焼き物材料は、資源として限定された材料を利用していることが理解できる。

こうした事情は、須恵器生産以前の比較的規模の大きいとされる土器作り、例えば土師器生産などについて重要な示唆を与えてくれる。東海地域では、煮炊きの道具として非常に薄手作りのＳ字状口縁台付甕が知られている（赤塚、1996）。このＳ字状口縁台付甕（多くがＡ類に分類）の胎土材料は、放散虫化石を特徴的に含む外洋成粘土を用いた胎土が全体の約30%、淡水成粘土を利用した胎土が全体の約56%などであり、水成起源の粘土を用いた胎土は、実に全体の約87%に達することが分かってきた（藤根、1998）。一方、５種類の起源の異なる粘土を用いた胎土が識別されるものの、含まれる砂粒はかなり類似した組成であることから、製作地の特定は別問題としてもかなり限定された地域で採取あるいは製作されたことを示す可能性が高い。なお、放散虫化石を含む胎土が関連していることから、外洋成粘土を用いた胎土以外のＳ字状口縁台付甕胎土もこうした特徴的な粘土が分布する地域あるいは隣接域における粘土を利用していたことが予想される。

さらに、この放散虫化石を含む粘土層は、地史的に新第三紀中新世（約2,300～520万年前）の地層であることが推定されるが、現地調査においてかなり硬質堆積物であることが分かっている。これらの堆積物は、ハンマーを用いないと採取できないほどの硬い堆積物であることから、土器製作において直接こうした堆積物を利用したとは考え難い。実は、美濃須衛窯は中生代の硬質砂岩分布域に成立するが、小谷内の低地部に泥質堆積物が見られることから、焼き物材料として利用された可能性が高い（平成10年度（財）岐阜県文化財保護センターによる砂行遺跡の調査）。こうした状況から、Ｓ字状口縁台付甕の製作も、この新第三紀中新世泥質堆積物が分布する谷内において、低地部の泥化した堆積物が採取された可能性が考えられる。

なお、土器に利用された材料粘土が特定の地層に対比された場合、製作地ではなく採取地として推定されるが、該当する地層分布域が粘土材料の採取地と定義される。

4．肉眼観察による材料識別の一例

高温焼成された須恵器などは、穴窯を用いて還元焼成されるため青灰色の硬質焼き物となる場合が多いが、比較的低温で焼成れた土師器も焼成温度により色調に違いがあることが予想される。すなわち、同様の外洋性粘土を用いた土器であっても断面は灰色系や褐色系あるいは黒色系の胎土など色調の違いが見られる。ただし、使用した粘土材料の特徴による違い（鉄分が多いなど）も関係することが考えられる。例えば、赤色系あるいはピンク系土器の中には、薄片による顕微鏡観察において、胎

土全体を汚すような黒褐色微細粒子が高密度で入る胎土があるが、これらは赤味の強い粘土を焼いた場合に同様に見られることから、こうした赤色粘土を利用していることが推定される（藤根、1999）。

ところで古墳時代の甕類の断面を観察すると（藤根・古橋、1998）、中黒のサンドイッチ構造が見られる場合がある。材料粘土を調べた結果と照合すると、淡水成粘土を用いた胎土は、黒味の強い中黒サンドイッチ構造が顕著である場合が多い（図版13-1·2）。また、外洋成粘土を用いた胎土も、淡水成粘土ほどではないが中黒サンドイッチ構造が見られる（図版13-3·4）。一方、干潟成粘土を用いた胎土は、この中黒サンドイッチ構造は例外なく見られない（図版13-5·6）。さらに、外洋成粘土や淡水成粘土を用いた胎土の断面では、肉眼的に容易に確認できる大きさの空洞が見られるが、干潟成粘土を用いた胎土においては、こうした空洞は認められずむしろ緻密で木目が細かい。こうした中黒サンドイッチ構造は、元の材料粘土に含まれる有機質分が十分熱せられないために炭質層として現れるものと考えられる。ただし、野焼き実験において確認される黒斑現象と同様の原因により形成される可能性も考えられる。なお、干潟成粘土を用いた胎土は木目が細かく緻密であることから、黒斑現象が胎土内部まで及ばないためとも考えられる。この黒斑現象と材料との関係も興味深いテーマの一つである。

東海地域には、赤彩を施したパレススタイル土器がある（安城市歴史博物館、1994）。このパレススタイル土器は、その胎土材料を調べると、大きく砂粒分が少なく木目が細かな胎土と砂粒を比較的多く含む胎土に分類される（例えば藤根、1997）。このうち砂粒分の少ない胎土は、干潟成粘土を用いている場合が多く、かつガラスが多量に含まれると言った特徴が普遍的に見られる（古橋・藤根、1998など）。このタイプのパレススタイル土器は、太陽光に翳すと雲母の輝きに比べやや鈍いもののキラキラと輝く独特の雰囲気をもつ土器である。ガラスが多量に含まれることと干潟成粘土であることとがかなり相関が高いことから、材料について間接的に知ることができる。このタイプのパレススタイル土器は、砂粒が非常に少なくそれ以上にガラスを多量に含むことから、ガラスが混和材として混和された可能性が考えられる。

なお、同様に弥生時代後期の方形周溝墓に付随して出土する加飾壺もこのパレススタイル土器胎土の特徴に良く似ている（たとえば古橋・藤根、1998）。両者の土器は、材料的に類似することから、製作地が同じである可能性が高いと考えられる。

5．おわりに

土器胎土の材料についての検討は、ここで述べたように今後の土器の製作技法を考える上で重要な検討事項と考えている。ここで示した中黒サンドイッチ構造による材料の手がかりは、ほんの一例にすぎないものと考えており、材料のみならず技法についての手がかりを知るためにも、今後検討しなければならない事柄と考えている。土器を形成する材料である粘土や混和材などは、製作する際の技法に大きく関係したことは間違いない。

なお、ここで示した断面観察のほか、より完形に近い土器の全断面観察を行うことより、例えば粘土のつなぎ部分の確認や混和材の混和状態の観察など、技法に関する有益な情報が得られるものと考えている。

引用文献

赤塚次郎（1996）濃尾平野低地部における古墳時代の甕.第４回東海考古学フォーラム「鍋と甕そのデザイン」、114-125.

安城市歴史博物館（1994）企画展弥生の華パレススタイル土器、46p.

車崎正彦・松本　完・藤根　久・菱田　量・古橋美智子（1996）（39）土器胎土の材料ー粘土の起源を中心にー．日本考古学協会第62回総会研究発表要旨、153-156

藤根　久（1997）パレススタイル壷胎土の材質分析．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集「西上面遺跡」．48-58.

藤根　久・小阪和夫（1997）生駒西麓（東大阪市）産の縄文土器の胎土材料.第四紀研究、36（１）、55-62.

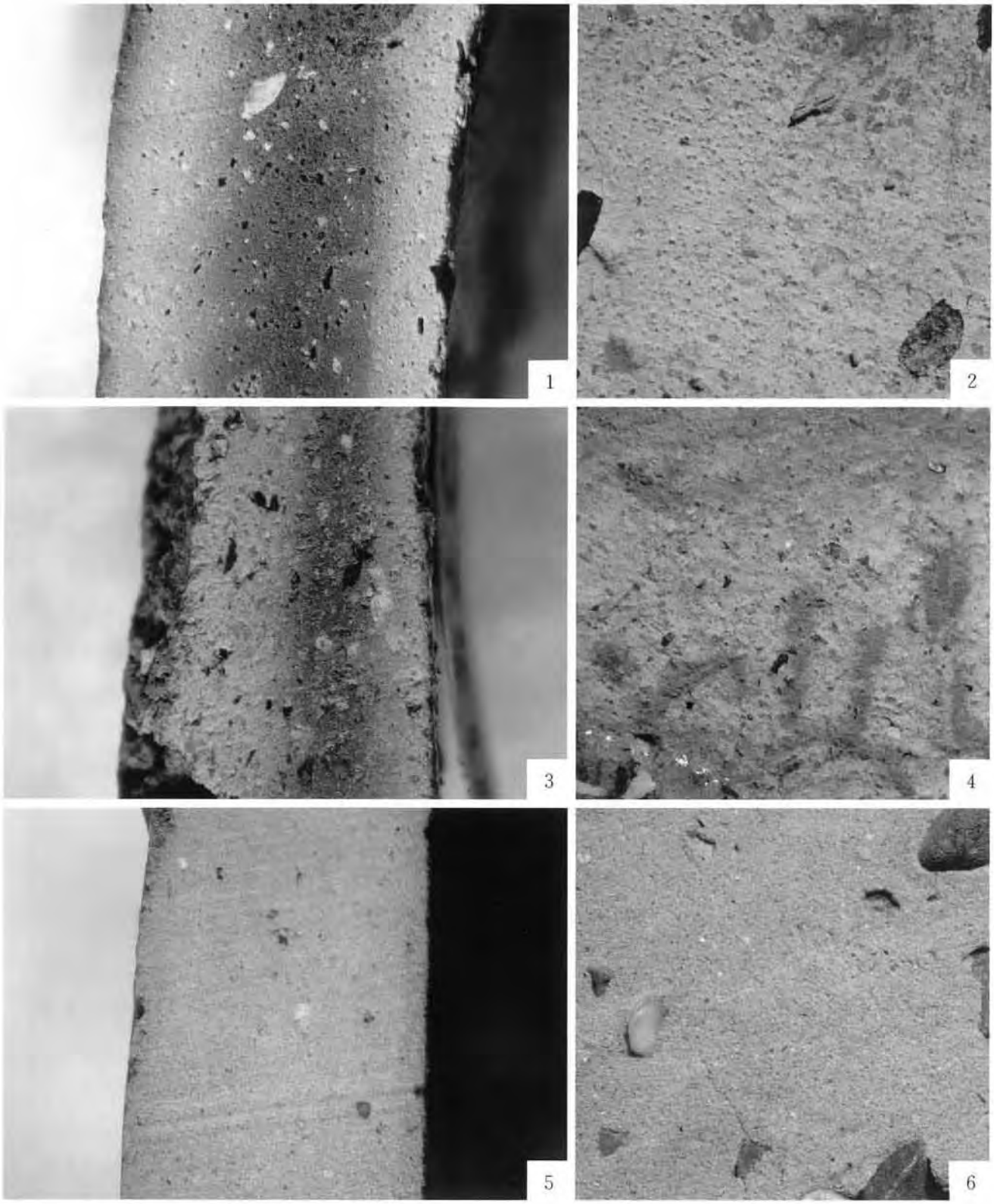
藤根　久（1998）東海地域（伊勢ー三河周辺）の弥生および古墳土器の材料．第６回東海考古学フォーラム岐阜大会「土器・墓が語る」、108-117.

藤根　久・古橋美智子（1998）古墳時代甕・鉢の胎土材料．「今宿遺跡（第２分冊）」岐阜県文化財保護センター調査報告書第37集．38-70

藤根　久（1999）第５次調査出土土器および粘土採掘坑粘土の材料分析．「三王山遺跡」名古屋教育委員会．199-207

古橋美智子・藤根　久（1998）第８節荒尾南遺跡出土弥生土器および古墳時代土器の胎土材料．「荒尾南遺跡」岐阜県文化財保護センター調査報告書第26集、98-104.

中村　浩（1992）須恵器窯跡の分布と変遷.雄山閣出版、238p.



図版13　起源の異なる粘土を用いた胎土断面および表面の実体顕微鏡写真

1．沼沢成粘土を用いた胎土断面（今宿遺跡207甕A2）　2．沼沢成粘土を用いた胎土断面（今宿遺跡207甕A2）
3．外洋成粘土を用いた胎土断面（今宿遺跡350甕C2）　4．外洋成粘土を用いた胎土断面（今宿遺跡350甕C2）
5．干潟成粘土を用いた胎土断面（今宿遺跡415甕A4）　6．干潟成粘土を用いた胎土断面（今宿遺跡415甕A4）

第２節　城之内遺跡試掘調査出土遺物

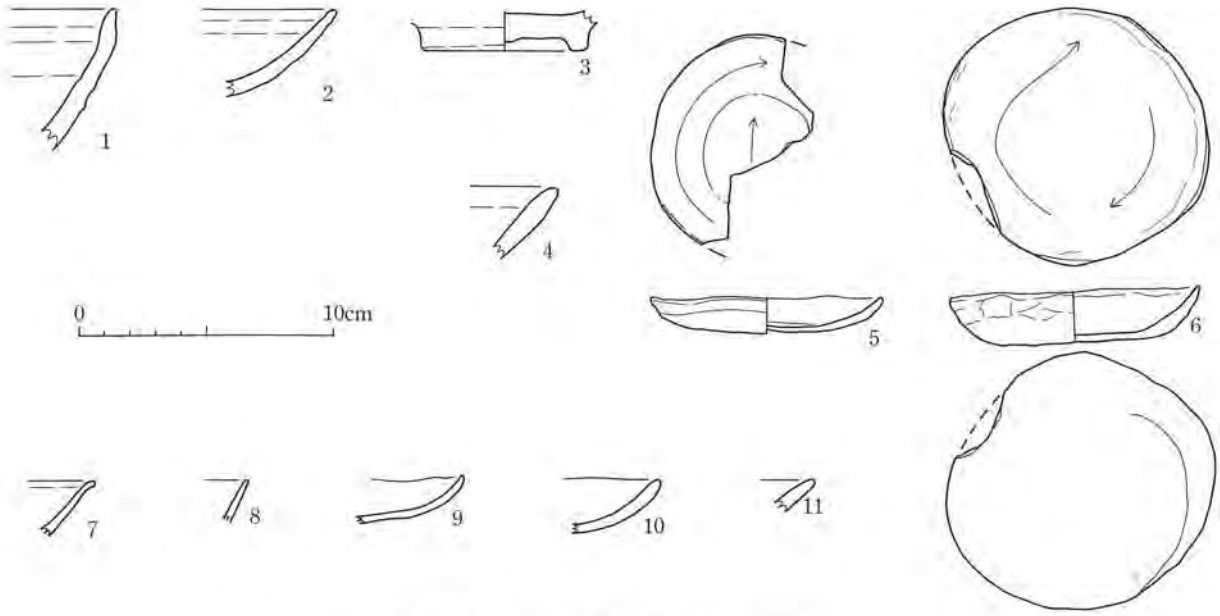
ここで紹介する遺物は、（財）岐阜県文化財保護センターが平成７年度に行った試掘調査で出土したものである（試掘調査地点は第１図を参照）。

１～６は試掘坑Ｂの粘土混じり砂層から出土したものである。１は天目茶碗で内外面に鉄釉を施す。古瀬戸の後Ⅲ期の時期が与えられる。２は山茶碗で器高が低く、脇之島３号窯式段階の時期が与えられる。３は中国の青磁碗の底部で台径6.6cmをはかる。４～６はかわらけで、５は中世前期のものである。内底部に一方向ナデを施し体部を横ナデするＭ４類である。器高は低く、器壁は薄い。体部外面の横ナデは丁寧ではない。法量は口径が9.1cm、器高は1.5cmをはかる。６は内面一方向ナデ、外面は無調整で指頭圧痕などによる凹凸のあるＣ１類である。外面には接合痕が見られる。法量は口径が9.6cm～10.5cm、器高が2.1cmをはかる。４は中世後期のかわらけで、皿形を呈するＢ２類である。器壁は厚く、横ナデは口縁部の外面にも施している。

７～11は試掘坑Ａの褐色砂質土層から出土した。７は山茶碗、８は中国の青磁、９～11はかわらけである。９は６と同様Ｃ１類である。10･11はＢ２類である。外面には横ナデは見られない。

現在のところＭ４類は山茶碗編年の大畑大洞４号窯式新段階以前で、Ｃ１類は大畑大洞４号窯式新段階から脇之島３号窯式段階、生田２号窯式段階に存在が確認できる。Ｍ４類のかわらけの出土数は少なく、岐阜市内では城之内遺跡のほかは岐阜城千畳敷遺跡で出土しているだけである。

最後に、試掘調査を担当され、資料を提供していただいた千藤克彦氏に記して謝意を表します。



第66図　試堀調査出土遺物実測図

図版14

1～3区発掘前風景（東から）

4区発掘前風景（東から）

5～6区発掘前風景（東から）

9～8区発掘前風景（北から）

1区上層発掘後全景（空撮）

1区下層発掘後全景（空撮）

2区上層発掘後全景（空撮）

2区下層発掘後全景（東から）

図版16

2区J・3区A～G上層発掘後全景（東から）

3区E～N上下層発掘後全景（空撮）

4区A～G発掘後全景（東から）

4区H～K発掘後全景（東から）

5区A～H発掘後全景（東から）

5区J～N発掘後全景（東から）

5区M～P発掘後全景（東から）

6区A～N発掘後全景（東から）

図版18

8区B～I.発掘後全景（北から）

9区A～F発掘後全景（南から）

7区試掘風景（南から）

1区矢板打ち込み作業（西から）

岐阜師範学校記念樹（つぶら椎）移植（西から）

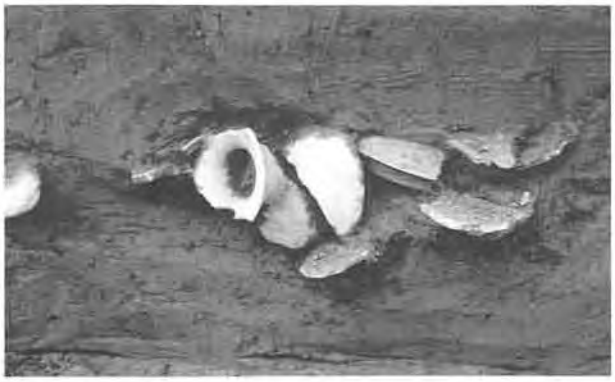
ＳＫ２半截（西から）

９区西壁土層（南から）

９区Ⅱ層遺物出土状況（西から）

ＳＢ１完堀（北から）

ＳＢ２完堀（南から）



ＳＢ２西壁埋土中の遺物出土状況（東から）

ＳＢ３完堀（南から）

図版20

ＳＢ３南側盛土中の土器出土状況（東から）

ＳＢ３遺物出土状況

ＳＢ４焼土面の断面（東から）

Ｐ20半截途中（東から）

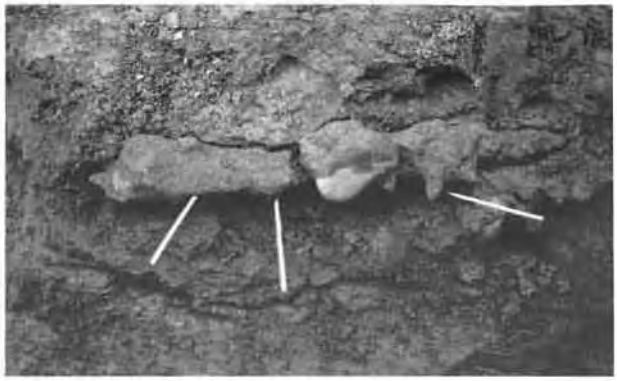
Ｐ21半截途中（南から）

ＳＸ20検出状況

ＳＢ３に伴う石組４検出状況（西から）

ＳＤ２・ＳＸ６（２区Ｆ～Ｈ）完堀（西から）

ＳＤ２断面（東から）



ＳＤ２遺物出土状況（短刀）

２区Ｍ～Ｆ下層発掘後全景（西から）

ＳＸ25付近の遺構完堀（西から）

６区Ａ発掘後全景（西から）

ＳＫ46礫検出状況

ＳＲ３検出状況（南から）

ＳＤ１完堀（南から）

図版22

ＳＤ４（４区Ｍ～Ｐ）完堀（東から）

ＳＤ４断面

ＳＤ６西端部分（東から）

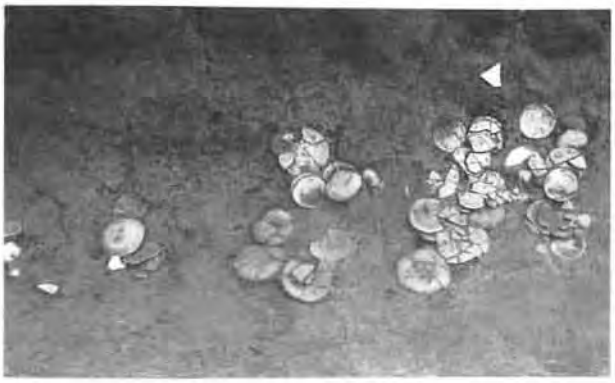
ＳＤ６（４区Ａ）断面（西から）

ＳＤ６溝底より金銅製銚子出土状況（近景）

ＳＤ６溝底より金銅製銚子出土状況（西から）

ＳＤ７下層遺物出土状況

ＳＤ７下層遺物出土状況（西から）

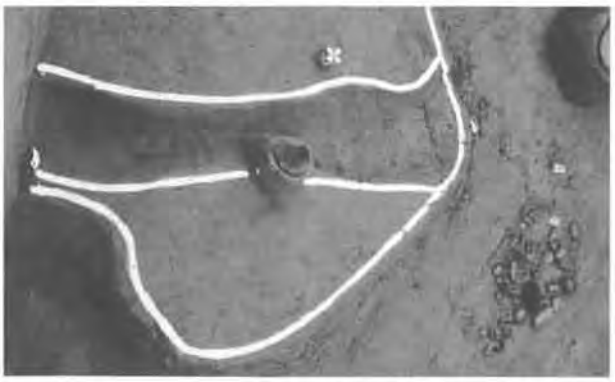


ＳＤ７下層遺物出土状況

ＳＤ７上層遺物出土状況（完形かわらけに墨書）

ＳＤ７下層遺物出土状況

ＳＤ10完堀（ＳＤ７に切られる）（東から）



ＳＤ11完堀

ＳＸ１礎の検出状況（北から）

ＳＸ１付近の完堀（東から）

ＳＸ18・ＳＲ８検出状況（南から）

図版24

ＳＸ18火葬墓第２次検出状況（南から）

ＳＸ18火葬墓内の大腿骨？出土状況

ＳＸ18火葬墓第３次検出状況（南から）

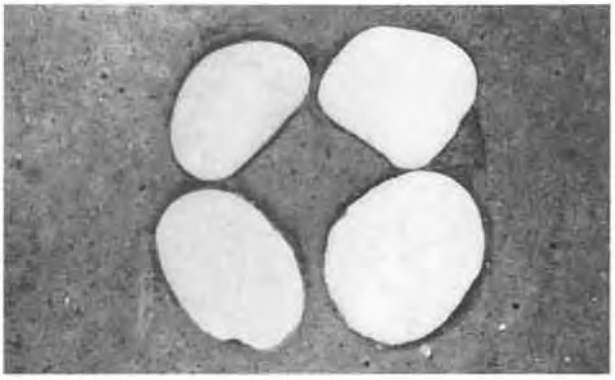
ＳＸ18火葬墓の炭化材サンプル採取（西から）

ＳＸ19遺物出土状況（東から）

ＳＸ19南北トレンチ（断ち割り土層）（東から）

ＳＸ19（石組４の北側）遺物出土状況（南から）

ＳＸ28検出状況（中央をＳＤ４が貫く）（西から）



石組１検出状況

石組２検出状況

石組５検出状況（南から）

Ｓ１検出状況

Ｓ２検出状況

図版26

Ｓ３検出状況（西から）

Ｓ３半截状況（北東から）

Ｓ４検出状況（南から）

ＳＲ１（１次）検出状況（南から）

ＳＲ１（２次）検出状況（西から）

ＳＲ８検出状況（南から）

ＳＸ13完堀（東から）

ＳＸ13W完堀（西から）

ＳＸ13W遺物出土状況（東から）

Ｈ１耕作面（西から）

Ｈ２南側耕作面（東から）

Ｈ２北側耕作面（東から）

ＳＶ１検出状況（東から）

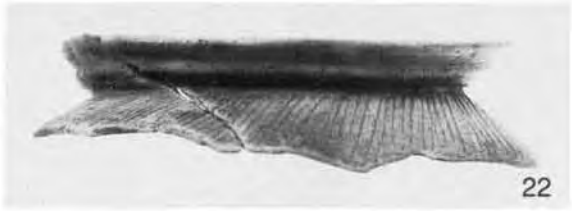
ＳＥ１検出状況（平成７年度）（西から）

ＳＥ１半截状況（平成７年度）（北から）

ＳＥ１発掘途中（平成８年度）（西から）

図版28

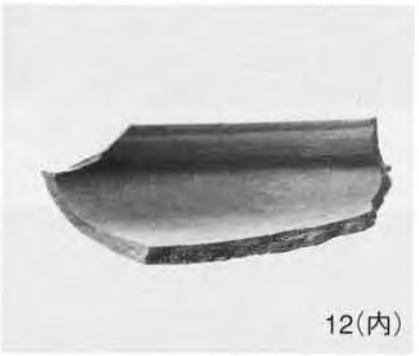
25


22

28

34

13


12(内)

32

14

38

53

70

93

72

87

97

65

109

135

134

109

135

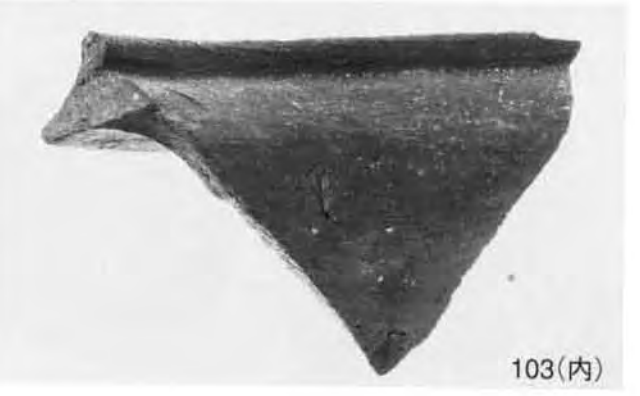
136

109

135

136

101


103(内)

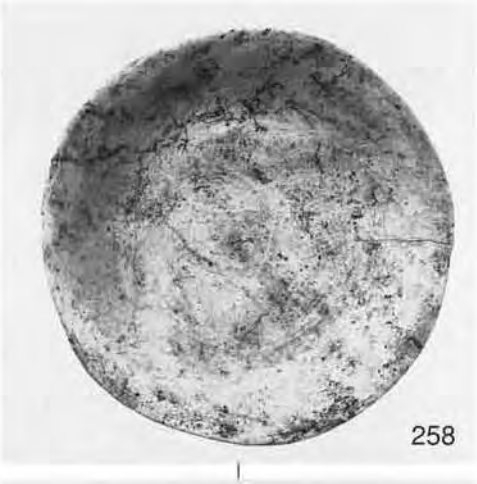
図版30

240

240

253

253


258

258

263

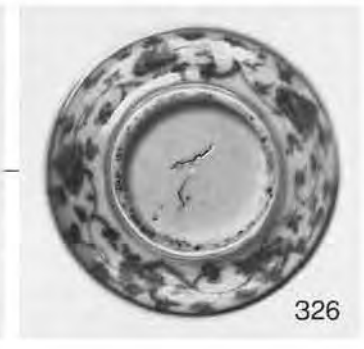
263

208

209

347

326


326

324(内)

911

803

425

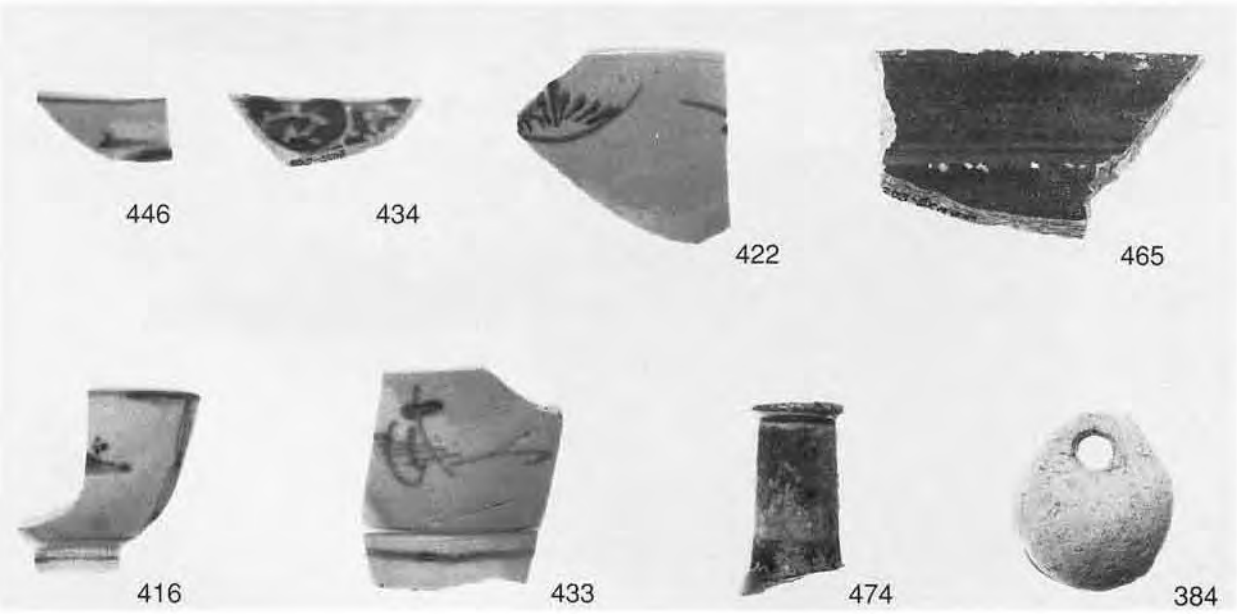
364

354

425

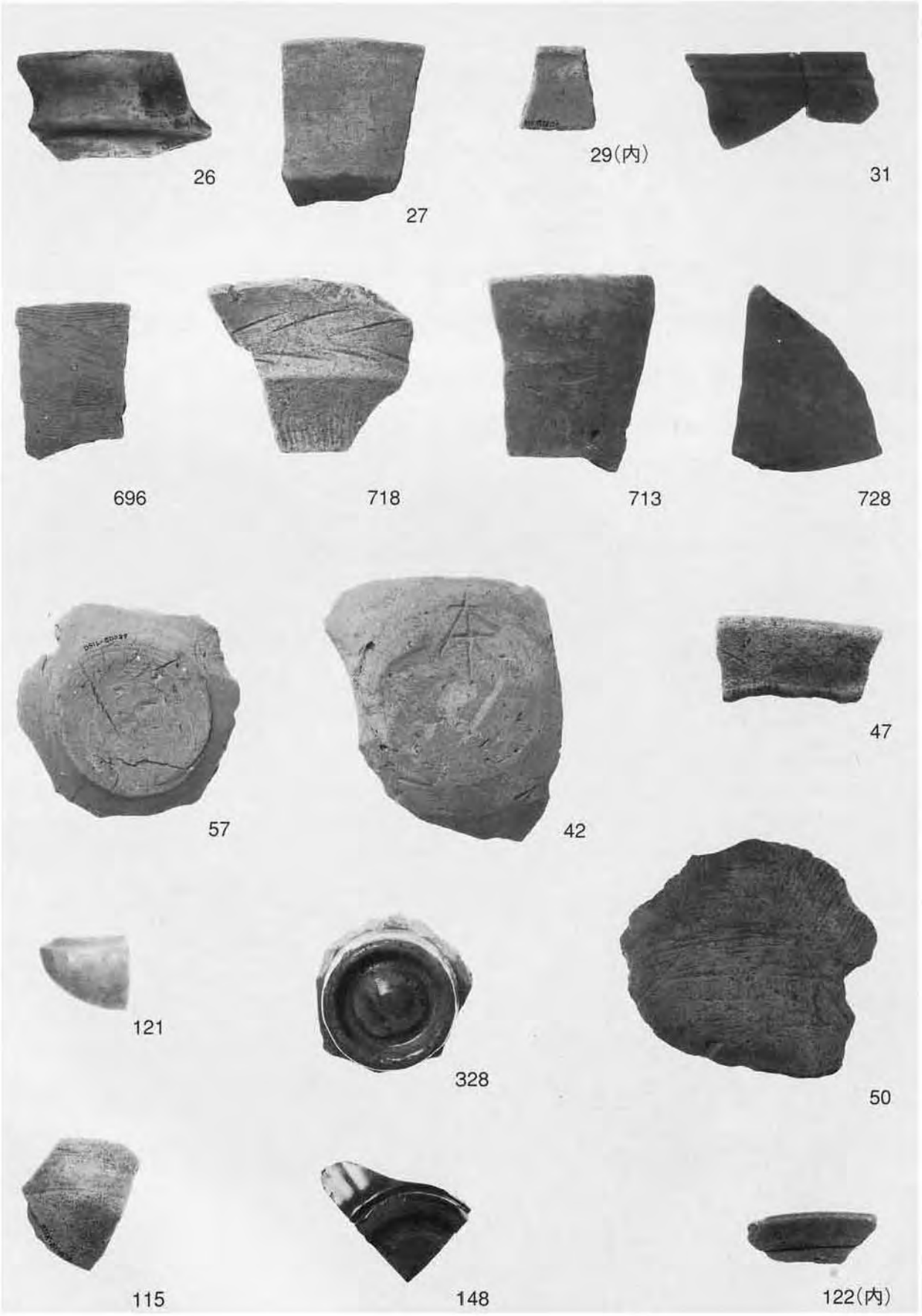
349

439


446
434
422
465
416
433
474
384

図版32

全て921


26
27
29(内)
31
696
718
713
728
57
42
47
121
328
50
115
148
122(内)

図版34

268

269

273

271

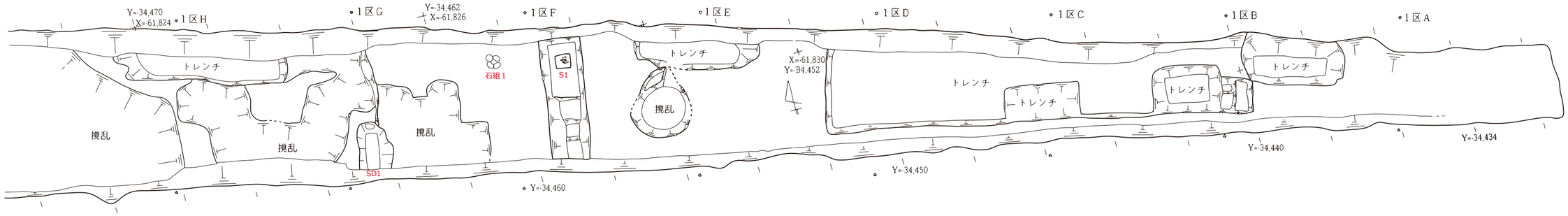
270

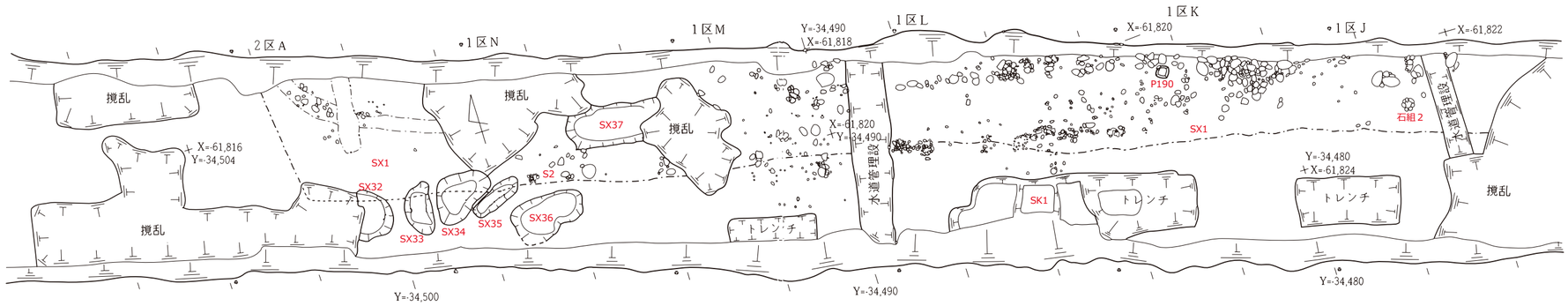
275

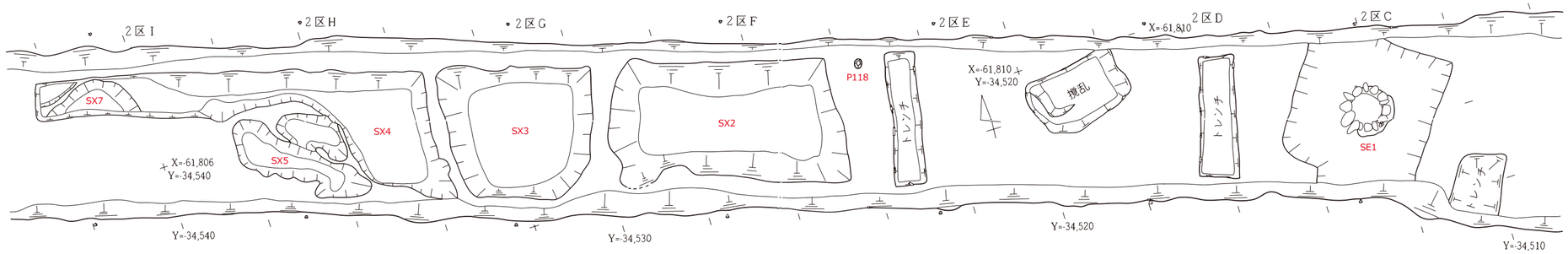
278

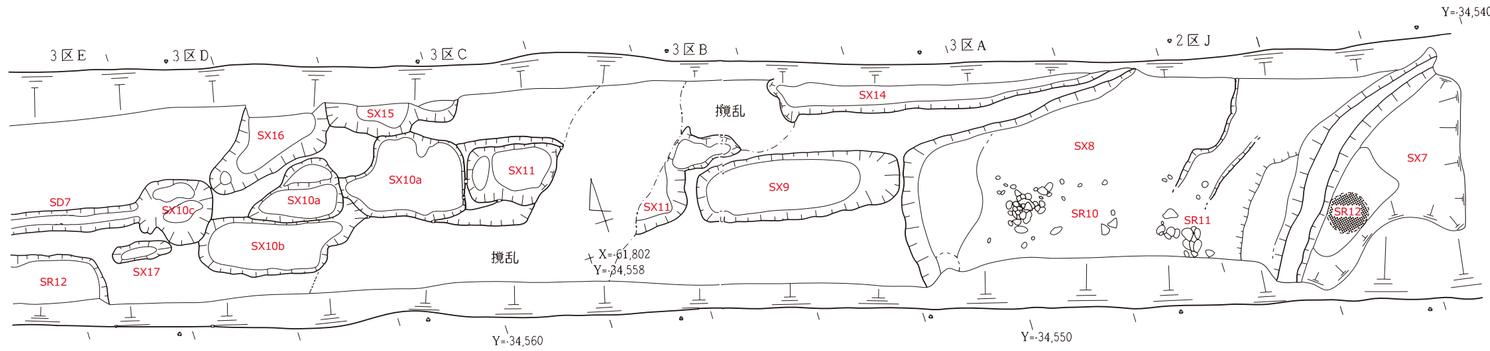
277

城之内遺跡
―北町堀田線・宮口町高見線街路事業に伴う緊急発掘調査―
平成11年３月
発行　岐阜市教育委員会
岐阜市今沢町18番地
印刷　株式会社岐阜文芸社
岐阜市三輪ぷりんとぴあ13番地



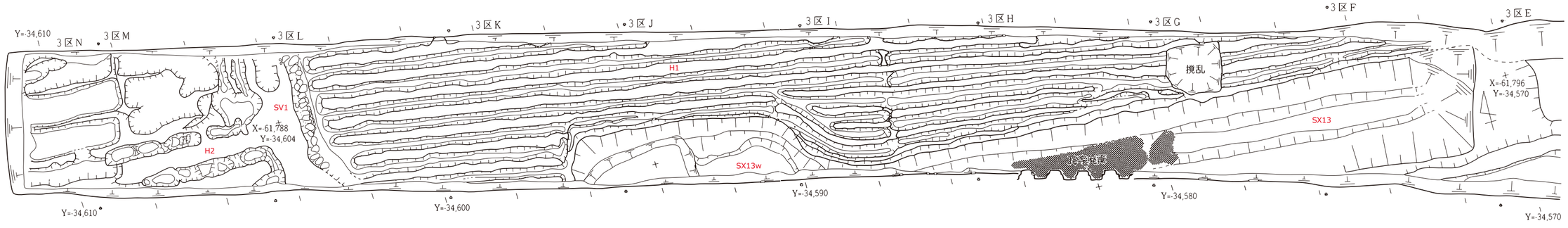


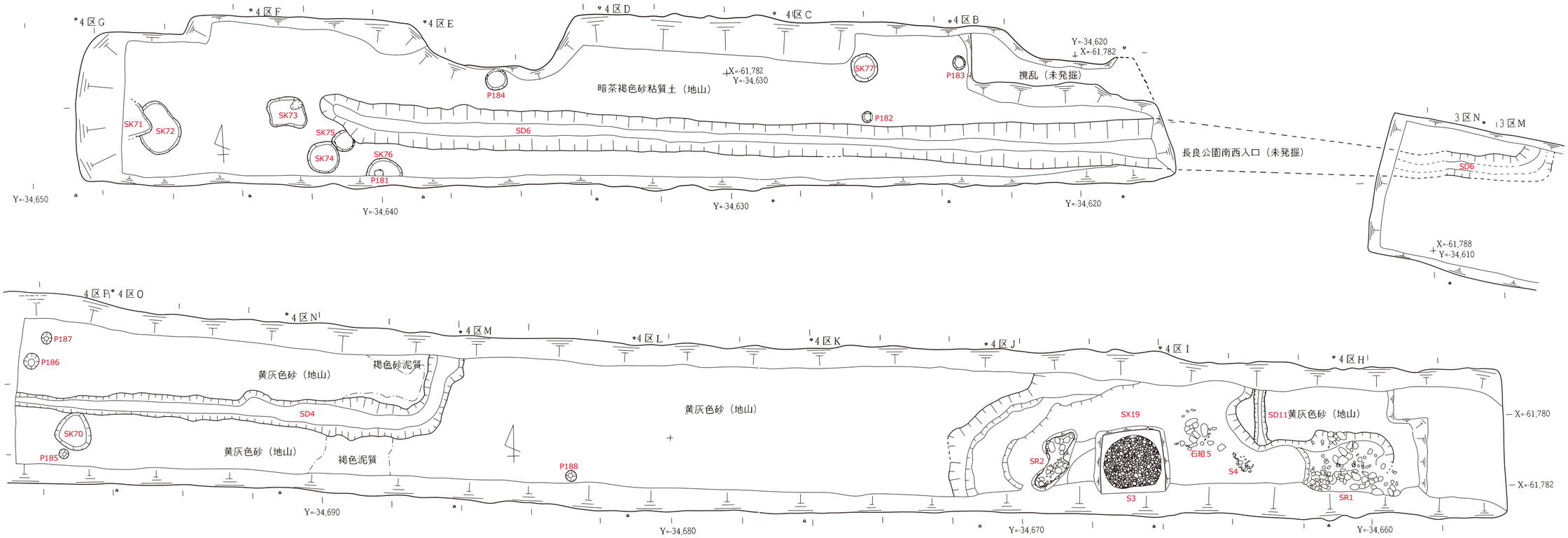


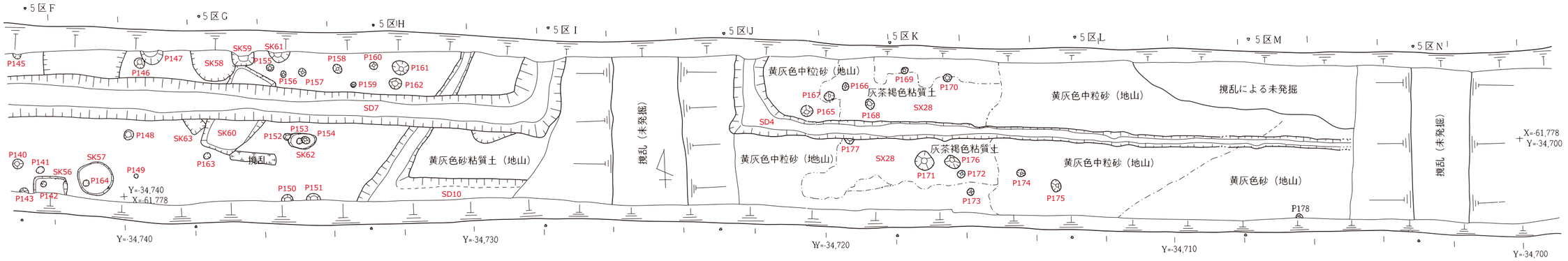


別添第１図
１～３区上層遺構

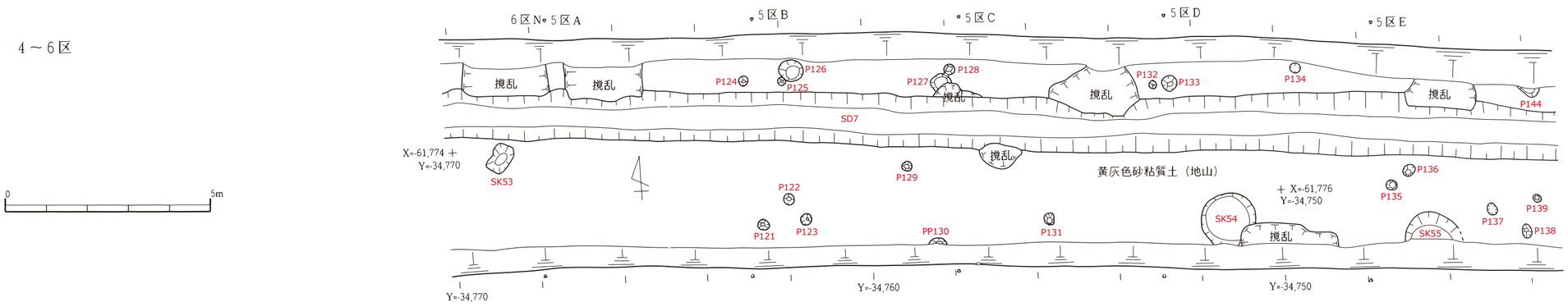
0 5m




4区G
4区F
4区E
4区D
4区C
4区B
Y=-34,620
X=-61,782
SK71
SK72
SK73
SK75
SK74
SK76
P181
P184
暗茶褐色砂粘質土（地山）
X=-61,782
Y=-34,630
SK77
P183
攪乱（未発掘）
P182
SD6
長良公園南西入口（未発掘）
3区N
3区M
SD6
X=-61,788
Y=-34,610
Y=-34,650
Y=-34,640
Y=-34,630
Y=-34,620
4区P
4区O
4区N
4区M
4区L
4区K
4区J
4区I
4区H
P187
P186
黄灰色砂（地山）
褐色砂泥質
SD4
SK70
P185
黄灰色砂（地山）
褐色泥質
黄灰色砂（地山）
P188
SX19
SD11黄灰色砂（地山）
SR2
石組5
S4
S3
SR1
X=-61,780
X=-61,782
Y=-34,690
Y=-34,680
Y=-34,670
Y=-34,660


5区F
5区G
5区H
5区I
5区J
5区K
5区L
5区M
5区N
P145
P146
P147
SK58
SK59
SK61
P155
P156
P157
P158
P159
P160
P161
P162
SD7
P148
SK63
SK60
P153
P152
P154
SK62
P163
攪乱
黄灰色砂粘質土（地山）
攪乱（未発掘）
P140
P141
SK56
SK57
P164
P149
P143
P142
Y=-34,740
X=-61,778
P150
P151
SD10
黄灰色中粒砂（地山）
P166
P167
P165
P169
P170
灰茶褐色粘質土
P168
SX28
SD4
P177
黄灰色中粒砂（地山）
SX28
灰茶褐色粘質土
P176
P171
P172
P173
P174
P175
黄灰色中粒砂（地山）
攪乱による未発掘
黄灰色中粒砂（地山）
黄灰色砂（地山）
P178
攪乱（未発掘）
X=-61,778
Y=-34,700
Y=-34,740
Y=-34,730
Y=-34,720
Y=-34,710
Y=-34,700

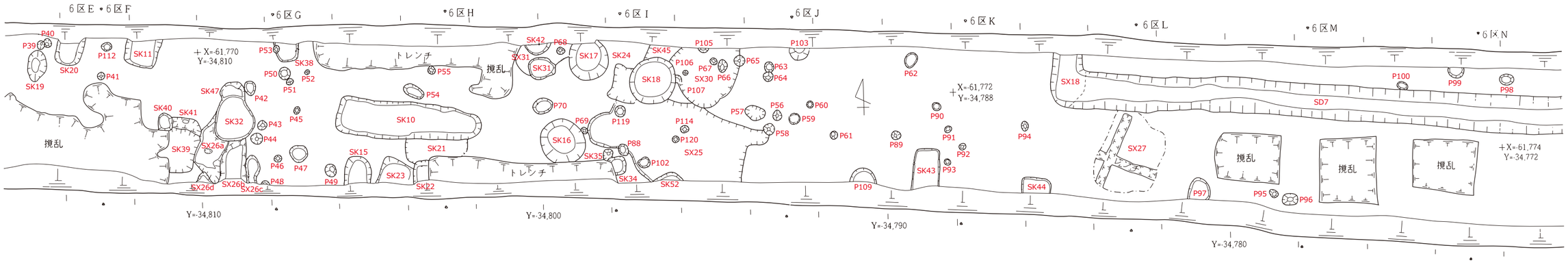
別添第２図　４～６区

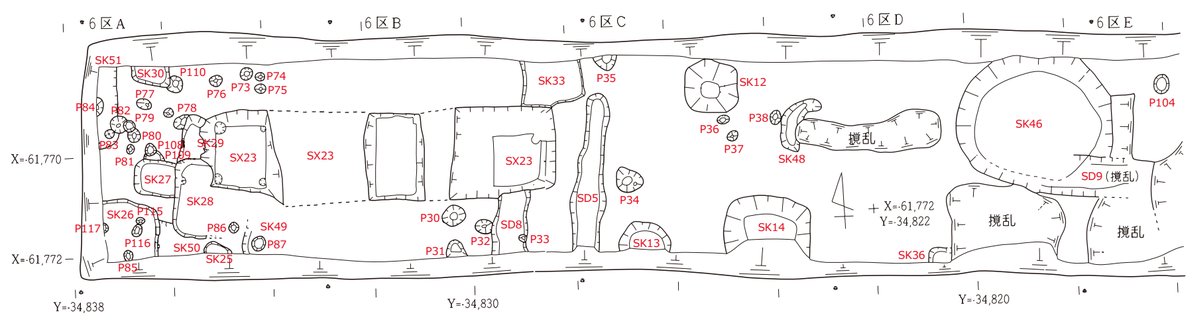

6区N
5区A
5区B
5区C
5区D
5区E
攪乱
攪乱
P124
P126
P125
P127
P128
攪乱
攪乱
P132
P133
P134
攪乱
P144
SD7
X=-61,774
Y=-34,770
SK53
攪乱
黄灰色砂粘質土（地山）
P129
P136
P122
P135
X=-61,776
Y=-34,750
P121
P123
PP130
P131
SK54
攪乱
SK55
P137
P139
P138
Y=-34,770
Y=-34,760
Y=-34,750

0
5m

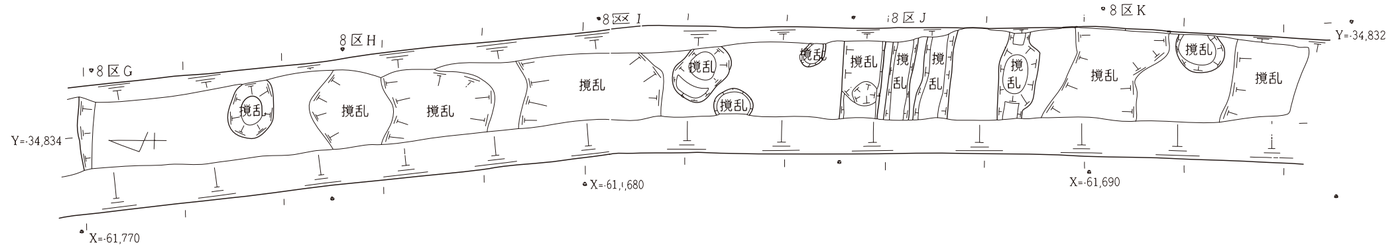
別添第３図

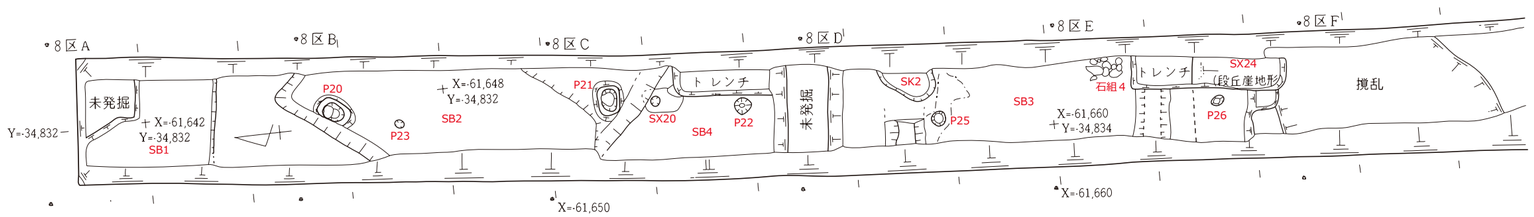
６・８・９区遺構

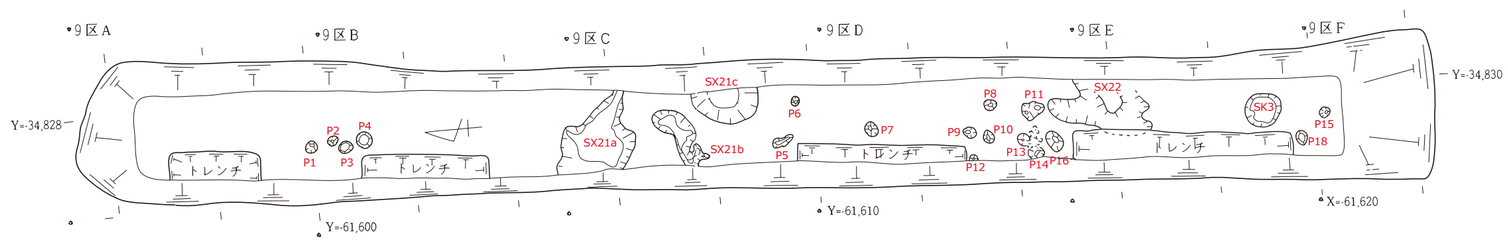


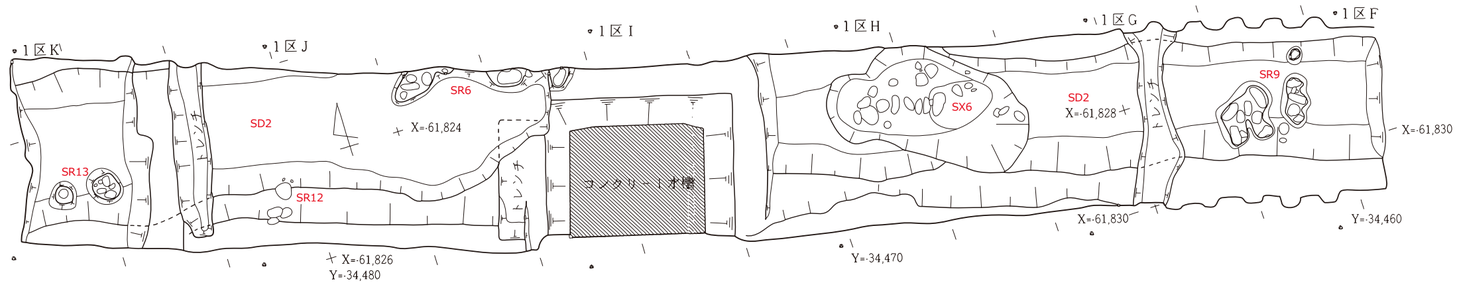


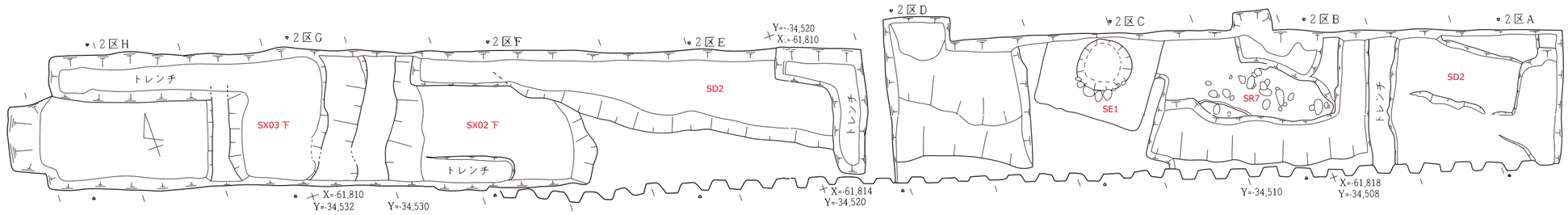
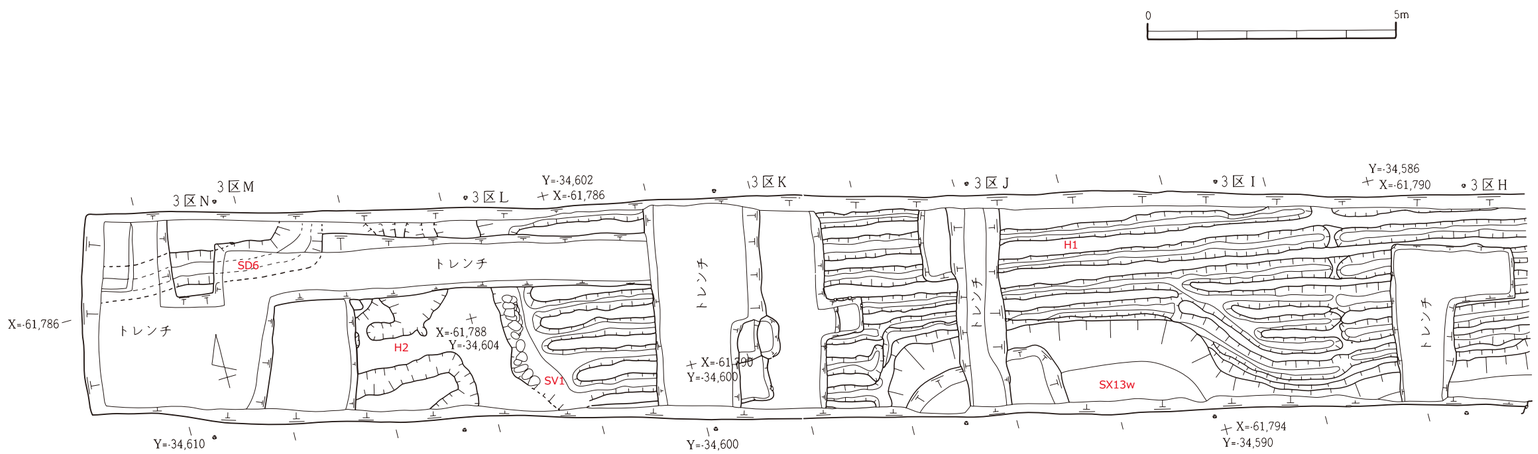
0 5m











別添第４図　１～３Ⅱ区下層遺構